

きみにとどくまで

と

Гласіле

&

Фелтаа

笹竹颯夜

――ちりん。

窓辺に下げてある風鈴が夜風に揺られ涼しげな音を鳴らした。自然に吹く風に揺れて鳴る音を聴くのはずいぶん久しぶりかもしれない。

窓を開けたのが1週間ぶりだったから――。

颯土は開け放った窓の縁に座り、缶ビールを開けて霞んだ星空を見上げてからゆっくりとその視線を向かいの窓に向けた。

見慣れた薄いピンク色のカーテンが引かれ明かりはもちろんない。1週間前に見た時と同じ、窓ガラスの向こうは静まり返り人の気配もあるはずがない。

あの窓に再び明かりが灯る頃にはもう熱帯夜の時期も終わり、秋の匂いを含んだ風が吹いているのだろう。それはもうじきのような気もするし、果てしなく遠い未来のようにも思う。

「...ボストン...か」

颯土は掠れた声で呟いた。

海の向こうの見知らぬその街で、響とふたりの時間を生きるヒカルに想いが飛んで全身が熱くなった。1週間前の自分に引き戻される危険を察知し、慌てて缶の中身で喉から身体全体を湿らせ、その勢いのまま空いたアルミ缶は手のひらでクシャと潰した。

手の中で小さく潰れた缶。

それが意思に反して忘れたい記憶を蘇らせる。

――はっ...、まったくしょうがねえ...。

苦笑いと共に深いため息をついた時、頭の上でまた風鈴が鳴った。颯土は潰れた缶をあの日と同じようにゴミ箱に投げ入れた。

ありったけの想いを手の中の小さな弾に込めてあの窓にぶつけたのは1週間前のこと。

泣いて、泣いて、これでもかというくらい泣いた時によりやく自分で認め繋がった本当の想い。

ここに、いて欲しい。

俺の、ヒカルでいて欲しい――。

それはもう百パーセント叶うことはない夢。

その現実を本心が受け入れられず、4年前に出会った麻希に救いを求めて茅ヶ崎の国道沿いの喫茶店まで車を走らせたのも1週間前。

――全部が無くなった、今の颯土はどんな写真を撮るのかな？それを知ってみるのもええのと違う？

夢も希望も全部無くなって、初めてレンズを向けた被写体は麻希だった。

『麻希さん、写真撮らせてください』

『ええけど、うちなんか撮ってどないするん？』

麻希の問いには答えられなかった。

どうして麻希を撮ろうと思ったのか、とっさに出た言葉に自分自身が驚いたぐらいだ。

だが、オートフォーカスカメラを麻希に向け、4年前の沖縄と同じように夢中になってシャッターを押しているうちにひとつの答えを見つけた。

4年前はファインダーごしの麻希の中に見えたヒカルを無意識に追いかけたが、あの日は同じように麻希の中に見えるであろうヒカルを追い出そうとしていた。太陽の光を受けて笑う麻希にヒカルと同じ輝きを重ねないように意識していた自分がいた。

ポーズのない自然な麻希を何枚写したのだろう。フィルムが終わり自動的に巻き戻る音が聞こえるまでシャッターを押し続けた。

それがあの時の自分に出来る精一杯だったのは確かなこと。

『あんたさ？少しの間遠くに行ってみてもええんやないの？』

カメラ目線の麻希が言った。

『遠くって...？』

『うーん、そうやねえ、またあの秘密の海岸とか』

『秘密の海岸...か』

『あ、でもオオカミが出るからあかん！』

麻希はケラケラと笑った。

『えっ！オオカミ？！って、あん時のあんた、本気でビビっとったもんなあ』

『あの時はガキだったから...！』

『あの時は？今だって十分ガキやあらへんの？女の子のことでウジウジしよって、オレの夢はもう写真やない～なんて言うて』

.....確かに言われるとおり。

思わず絶句した。

ちょうどフィルムが終わり、手の中でジーと巻き戻る音がしていた。

『もしかして、ぜーんぶうちを撮ったの？』

『...そうらしい』

『その写真が出来たらまた持ってきてな』

『麻希さんさえよければ...』

『楽しみや！どんなうちが写ってるんやろ？今の颯土はプロやもんね！』

プロ.....。

『ありのままの自分に向き合いや。苦しい時はそれを隠さんでええねん。迷い道は迷えばええ。でも、必ず出口はあるんやから。だから写真は撮り続けるんやで』

写真を撮る仕事をしているから確かにプロだ。

だが、今後も今までどおり、例えば水月の珈琲ショップに飾ってもらえるような写真を自ら進んで撮っていく気にはやはりなれない。

でも、諦めるために。

精一杯の中で、ヒカルに伝える自分のコトバを探すために。

『苦しいですね...』

『それでええんよ。がんばりや、颯土！』

麻希に背中をポンと叩かれたあとには笑っていた。

苦しくて潰れてしまいそうだったというのに、4年ぶりに会った麻希はそんな自分を一時的でも確実に救ってくれた。

夏は本番を乗り越え笑ってしまうほどの暑さが続く毎日の中で、朝は早く夜は遅い相変わらずの忙しい生活を送り、そのおかげで今日まで余計なことを考える暇もなかった。暑くて忙しくて目が回るぐらいなのにそれが何故か穏やかで、この状態のまま1年でも2年でも過ぎてしまえばいい、とさえ思う。

自ら泳がずに流されて運ばれている。忙しさの流れに任せてる自分がある。それはやはりひとつの現実逃避かもしれない。

だが、それが今のありのまま。

このまま少しずつでもゆっくりと自分を取り戻すことが出来たら、隣の部屋に明かりが点く頃にはまた、窓越しに笑える自分に戻っていたら、

よかったな、ヒカルー。

そう言える自分でいられたら。

たとえ、それが本心ではなかったとしても――。

机の上には1週間前の麻希を写した未現像のフィルムがあった。明日からは少し時間もとれそうだから会社の暗室で現像してみるつもりでいる。どんな麻希を撮ったのかはもう覚えていないが、出来上がった写真の中に何かを見つけることが出来るかもしれない。

ちりりん...

消え入るぐらいの微かな音を響かせたのを最後に窓辺の風鈴は沈黙した。

風が止み、本当の熱帯夜の訪れ――。

窓を閉める前にもう一度、颯土は向かいの窓を見つめた。そして、少しためらってから思い切ったように呟いた言葉は、

「.....ヒカル」

もう口には出来ないと思っていたその名をあえて呼んだ。やっぱりまだすんなりとは言葉に出せない名。

今、聞こえた自分の声が心臓の奥まで響いて鈍い痛みが走った。

だが....、

「.....ヒカル」

もう一度真っ暗な窓に向かって名を呼び、颯土は窓を閉めた。

◇

熱帯夜――。

シャワーを浴びたばかりの肌に汗が滲む。

エアコンのスイッチを入れてから部屋が涼むまでの間、颯土は机の横のマガジンラックの中から古い雑誌を探した。

昔、穴があくほど毎日眺めていたその雑誌はラックの忘れられた奥側の棚に、高校時代の教科書たちと一緒に並べられていた。

もう何年も開いていなかったというのに、そのページの跡はまだ残っていたようで、開いたと同時に勝手に姿を現したのは`Photo by Junpey Yuino、`という著作権表示のある写真が広がるページだ。

澄み渡る青空から降り注ぐ光のシャワー。

キラキラと輝くグリーンの海。

真っ白な砂浜の上に点々と残るひとつの足跡。

雑誌は光創社が出版しているティーンエイジャー向けの月刊情報誌だった。たまたま書店の軒先で開いたその企画ページの光溢れる風景に琴線を刺激され、その月刊誌を買ったのは後にも先にもこれ一冊だけだった。毎日飽きもせず眺めては、いつかこの風景を自分の目で見、乾いた風を肌で感じてみたいと思っていた、高校生だったあの頃。

「秘密の海岸...か」

ベッドに転がった颯土は目を閉じ、記憶の糸をたぐるように4年前に見たその風景を頭の中に再現しようとした。

その時だ。

「...群竹ちゃん、群竹ちゃん...っ！」

押し殺したように呼ぶ声が窓の下から聞こえ、颯土は起き上がった。

「誰だ？」

さっき閉めたばかりの窓を再び開けて下を見る。

「ボク、ボク...」

「大久保？こんな夜中にどうしたんだよ...？」

勇斗は下で大きく手を振りながら、どこか様子がおかしい。

「助けてくれよ、群竹ちゃん...。ボクの部屋に出たんだよお」

わけのわからないことを口走りながら、勇斗はこの暑い中でぶるぶる震えている。

「今、下を開けるからそっちに回れよ」

颯土は窓をしめて階下に降りた。

玄関のドアを開けると、全身汗だくになった勇斗が転がるようにして飛び込んで来た。

「大久保...?!」

「助かったあ...」

胸をなでおろし、そのまま腰が抜けたように脱力して勇斗は座り込んだ。

「大丈夫か？」

いやいや、と勇斗は首を横に振る。

「...とにかく、」

颯土は玄関にへたり込んでいる勇斗の腕を引っ張って立ち上がらせた。

「先に部屋に行ってるよ。今、気付け薬持ってってやるから...」

うんうん、と何度も頷く勇斗は、ふらふらした足取りで壁に何度かぶつかりながら二階に上って行った。

そして、

颯士が`気付け薬、を手にして部屋に戻ると、勇斗は座布団を頭にかぶって丸くなっていた。部屋に亡霊が出たから今夜はここに泊めてくれ、と勇斗は訴える。

「はぁ？亡霊？」

何言ってるんだよ...、と、颯士は鼻で笑った。

「それ、寝ぼけてたんじゃねえの？」

「絶対間違いないんだって！」

暑くて眠れなかったから夢じゃないことは確かだ、亡霊が部屋の中に確かにいたんだ、と勇斗はますます小さく縮こまった。

勇斗の話はとても信じられない颯士だったが、やれやれ、とため息を吐きながら、

「...しょうがねえなあ。まあ、お前には借りがあるからな...」

と、言うと、勇斗は「何か貸したっけ？」と、どんぐりのような丸い目を向ける。

あかねの結婚パーティーの後、水月の珈琲ショップで失意のどん底にいた自分をさりげなく部屋に誘ってくれたことを勇斗はもう忘れていたようだ。

「いや...」

颯士は苦笑いを浮かべ、気付け薬の缶ビールを一本勇斗に手渡した。

「さんきゅ。ビールなんてあかねちゃんの結婚パーティー以来だあ。う...、あかねちゃんの結婚パーティーの後...、」

勇斗は思い出したように、はぁ...とため息をついてガクンとうつむいた。

「...どうかしたのか？」

自分はさっき既に一本を空けている颯士は、とりあえず持ってきていたもう一本をあけようかどうか躊躇しながら訊いた。

「...あのあとさ、やっぱり麻耶ちゃんとゆうちゃん、まとまったらしい...」

――え...？

颯士は手を止めて勇斗を見た。

あかねの結婚パーティーのあの日、ヒカルが響と街の雑踏に消えたあと、どうしようもない脱力感に襲われた自分を勇斗が追いかけてきたあの時に、ふたりきりになった祐輔と麻耶が...？

――知らないぜ、伊藤と結野がいい雰囲気になっちまってもさ。

――大丈夫さ。

水月の珈琲ショップで話したこと。

それが現実に.....？

「...そうか」

颯土は呟いてやっぱり二本目の缶ビールを開けた。プシュッと小さく泡が飛んだ。

「別にいいんだけど、さ...」

この世の終わり、のような顔をしながら勇斗は呟く。

「...よくないくせに、無理すんなよ」

あの日の勇斗の言葉をそっくり返しながら颯土は笑った。

「...しょーがないじゃん。無理してでも何でも諦めるしかないだろ？」

沈みきった声はまったくいつもの勇斗じゃない。

「...そう。諦めるしかないんだよ」

颯土は手の中の缶をじっと見つめながら呟いた。

「うん...。実際その時を目の前にすると、なかなか...だけどね」

「...確かに、な」

覚悟は決めていたはずだったのにあんなにも取り乱し自分を見失った1週間前...、と、颯土は窓の向こうに目を向けた。

その颯土の視線を追い、勇斗は、

「...そっか。ヒカルちゃん、行っちゃったしな...」

と、呟く。

「ああ。行っちゃった...」

「群竹ちゃんも、ボクと同じか...」

勇斗は颯土の目を覗き込んだ。

「...同じ、だな」

もう隠したって仕方ない。勇斗には既にバレてしまっているようだし、今はもうありのままにしかねれない、と颯土は思う。

勇斗は歯を見せてニッと笑い、

「痛いねえ...」

自分の胸をぎゅっと押さえた。

「痛いなあ...」

颯土も同じポーズで呟いた。

「群竹ちゃんはどうやって諦める...？」

「...わからないな。本当に諦められるのかもわからない。けど...、」

颯土はまた窓の外に目を向ける。

今こうやって自分の想いを勇斗に話すことが出来るのは...、

「泣いた。これでもかってぐらいに」

と、颯土は笑った。

「群竹ちゃんが...泣いたか」

勇斗も笑った。

「泣いてすっきり...ってわけにはいってないけど、覚悟は決めようって思う。俺は...、」

颯土はフーッと息を吐き、

「...写真を撮っていく。己を伝えてあいつを本当に諦めるために」

今、自分の心に言い聞かせるようにして颯土は言った。

「...伝えるのか？ヒカルちゃんに...？」

颯土はゆっくり頷き、

「...今はそう思ってる。いつどうやってなんてことは全然わかんないけど...、でも、それが俺の区切りだから」

――俺の精一杯を、俺のコトバで伝えて諦める。

「今の俺には、写真を撮ること以外何もないから」

「...そっか。そういう諦め方もあるかもな...」

颯土は小さく頷いて、残ったビールを喉の奥に流し込み、

「そろそろ寝るぞ。明日も仕事あるしな」

と、明かりを消した。

「ああ、そうだね」

床の上の座布団に転がった勇斗に颯土はタオルケットを投げて、自分もベッドに転がった。

すぐに訪れた静寂の中、しばらくの間天井を見上げていた颯土だったが、ビール二本のおかげでやがてすんなりと眠りに落ちることが出来た。

◇

翌朝勇斗は早くに颯土の部屋を出た。

「群竹ちゃん、ありがとね～！また今夜も出たら宜しく頼むよお」

と、笑いながら走って行った勇斗。

「出ないって...。今まで何もなかったんだから...」

きっと昨夜の勇斗の精神状態が見せた幻覚だろう、と颯土は思ったがそれは口にしなかった。自分で意識している以上に、麻耶が祐輔とまとまってしまったことに勇斗はダメージを受けている。それが、颯土にはよくわかる。

自分じゃ大丈夫だと思っけていてもダメージを隠していると身体のどこかがおかしくなると、いつか瑠璃も言っていた。勇斗が見た亡霊もきっとそういうことだろう。

「あいつ、結野にプロポーズまでしてたんだしな...」

いいかげんでおちゃらけているようで、実は一途で真面目な勇斗だということは、勇斗が颯土をわかっているように颯土にもよくわかっていた。だからこそ今、笑いながら走って行った勇斗がツライ。

「顔で笑って心で泣いて...、か」

ぼそっと呟いて、颯土は苦笑した。

——俺も....

「...やべっ、のんびりしてらんねえ」

颯土は未現像のフィルムをバックに放り込んで家を出た。

頭の上でセミの鳴き声がする。

今日も暑くなりそうな東京の8月だった。

ガラス張りの自動ドアをくぐり抜け、ひんやりとした空気に触れた颯土はほっと一息をついた。

ジーンズの後ろポケットからハンカチを取り出し、首筋を流れる汗を拭いながら11階から降りてくるエレベータを待つ。ふと視線を感じて振り返るとロビーの受付嬢が自分を見つめながら微笑んでいた。

「おはようございます、群竹さん。今日も暑いですね」

「...あ、おはようございます」

顔は知っていても喋ったことなどない女子社員から気さくに声をかけられ、颯土は少し戸惑った。

「汗、しっかり拭いておかないと風邪ひきますよ」

「...そうですね」

颯土は片手のハンカチをまた首筋に当てた。

受付嬢は颯土の不器用な受け応えにくすっと笑う。

その仕草がどこかあかねに似ているからか、ずいぶん昔に覚えた安堵のスペースに潜り込んだような気がした。

光創社東京本社一。

ここに通いはじめて1年半が過ぎたが、考えてみれば今まで社内に目を向けたことなどなかった。毎日ガラスの自動ドアからエレベーターに真っ直ぐ、そして11階の部署に直行。帰りはその逆。1階玄関ロビーには喫茶室があるが利用したことはない。休憩はいつも11階の首都高速を望む喫煙所で自動販売機の紙コップ珈琲をすするのが常。受付に毎日座っている女子社員と会話をしたのも今が初めてだ。

颯土はぐるっとロビーを見渡した。

大きなガラス扉からはまばゆいほどの夏の光が射し込みピカピカの床をいっそう輝かせている。

明るい一。

初めてそう思った。

毎日通っている職場なのに、いつもと違う場所に見えるのは何故だろう？忙しさがひと段落したからなのか、それとも心のどこかが吹っ切れたのか一。

「エレベーター、着いてますよ？」

受付嬢に言われて颯土は我に返った。

「あ...」

「お仕事頑張ってください」

「どうも...」

ぼそぼそと呟いて空っぽの箱の中に入り込む。

ゆっくりとドアが閉まる向こう側で、あかね似の受付嬢はいつまでもこっちを見つめて微笑んでいた。

「あれ、群竹くん、何かいつもと違う？」

エレベーターの扉が開いたところで日向瑠璃と出会った。瑠璃はこれから取材に出かけるらしく、ひとりのカメラマンを伴っている。

「違い...ますか？」

颯土と入れ替えにエレベーターに乗り込んだ瑠璃は、

「顔が晴れ晴れしてるよ。この間までは、この世の終わり、みたいにくら一かったのに」と、笑った。

「今日はどこ？」

「俺は内勤です」

「そう。たまには涼しいところでのんびり仕事してもいいよね！」

もう閉めていいかと、『開』ボタンをずっと押させられている同伴のカメラマンが言うと、瑠璃は、いいよ、と返事をしてから、

「あ、珍しい人が来てるよ！」

と、扉が完全に閉まる直前に言った。

「珍しい人...？」

閉まった扉に向かって呟いて、颯土は部署に続く長い廊下を歩く。

「おはようさん」

「おはようございます」

「群竹くん、おはよう」

行き違う同僚や女子社員が声をかけてくる。

それは毎日繰り返されていたはずの風景なのに、今日はやっぱり切り取った一部のように鮮やかに感じた。「おはようございます」と、ひとつずつ挨拶を返す自分。だが、昨日までの自分がどんな風にこの日常をやり過ごしてきたのかが思い出せない。それだけ心の中身を何処かに飛ばしたまま、何もかもをただぼんやりと見ていただけだったということだ。

どうしてだろう――？

今、こんなに穏やかな気持ちでいられる自分が不思議でならない。

昨夜、その名を口にしたからか、それとも勇斗に語ったからなのか――。

部署の扉を開いた途端、

「群竹くん！」

フロア中に響き渡るような大声で名前を呼ばれ、颯土はビクリと肩を震わし声の出所を探した。

窓際の大テーブルの前に見たこともない髭面の男が立っていた。むさくるしい真っ黒な顔の中で子どものような澄んだ瞳だけを明るく輝かせて手を振っている。

「僕だよ、僕！わからない？」

男は前髪をキュッと上に上げて顔を出した。

「...純平さん？」

扉の前に突っ立ったまま颯土は男をじっと見つめながら呟いた。

「そうそう！僕！」

「純平さんっ？！マジ？！」

颯土は弾かれたように男に駆け寄り、間近で顔を確認する。男は決まらないウィンクを颯土に投げた。

「本当に純平さんだよ！いつ帰って来たんですか？！」

確かに珍しい人だ。

純平は光創社を退社して世界へ、自分は大学を辞めて東京へ、師弟がそれぞれの道に行くために大阪支社で別れたのが1年半前だ。

「帰って来たのは1週間前なんだけどいろいろやるのがあさってさ、挨拶に来るのが遅くなっちゃった」

純平は変わらない笑顔でぼさぼさの髪をぼりぼりとかく。

「群竹くんもあれからずいぶんいい仕事をしてるみたいじゃない？シンガポールに行って来たんだって？瑠璃っぺから聞いたよ」

「あれは...、ピンチヒッターで行っただけです」

「麻耶が言ってたけど、どこかの店が群竹くんのギャラリーになってるそうじゃない？」

「それも...たまたま...」

颯土は照れくさそうに笑う。

「あの日の選択は間違いじゃなかったみたいだね！ほら、ガリコのおまけ」

純平は黒ずんだ飛行機のおもちゃをポケットから出して颯土に見せた。

「あ、それ！まだ持ってたんですか？」

――写真あつての僕たちになろうぜ？ガリコになろうよ！

大阪支社で純平と話したひとつひとつが颯土の頭に蘇った。

自らのテーマを撮るために安定した生活を捨てて世界に飛び出す決意をした純平のそばで、自分の未来を初めて考えたあの日。

――俺も一緒について行ったらダメですか？純平さんと一緒に世界に。

――それはダメだ。これは僕のライフワークであって、群竹くんには群竹くんが決めるべきワークがあるはずだからね。

あるのだろうか？自分にも純平のように全てを捨てても賭けたいと思えるワークがどこかに。だとしたら探したい。自分のテーマを見つけたい。

たどりついた決意が東京に戻ることだった。

東京こそが自分の本当の居場所なんだと目覚めたあの日――。

「そろそろ個展をやりたいって思ってさ」

こぼれそうな笑顔のまま純平が言った。

「え...？」

「ギャラリーの審査を受けようと思ってるんだ。だから帰って来たの」

「純平さんが追ってたテーマの写真、集まったんですね」

「...まだまだだけどね。でも、挑戦してみようかな、と思ってさ。これからプレゼン資料を作ったりが大変なんだけどね。そうだ、あとで群竹くんのギャラリーに案内してよ」

と、純平はニッコリと笑う。

バツが悪そうに頭をかき、颯土も笑った。

◇

午後になって暗室が空くと、颯土は麻希を撮影したフィルムの現像にとりかかった。まったくの私用だから瑠璃がいたら「会社の経費を使って現像するんだあ〜、と突っ込まれるだろう。だが、幸いまだ取材から戻っていない。

どんな麻希が撮影されているのか、期待と不安が入り混じるなんともいえない気持ち。自分にとっての何かのきっかけが見えればいいのだが、と現像液の中で徐々に見えてくる影を見つめながら颯土は考える。

けれど――。

浮かび上がってきた最初の写真を見て思わず息を飲み込んだ。

真っ白なTシャツとジーンズ、それはまるでパールックのようにバランスのとれたふたり...、自分とヒカルの姿だったからだ。

そして、あとに続く写真もヒカル、ヒカル、ヒカル...

「参ったな...」

思わず呟いて苦笑した。

あかねの結婚パーティーの日、助手席にヒカルを乗せて横浜の亮太の家までドライブに行った。車に積んであったカメラに途中のコンビニで買ったフィルムを挿入し、亮太の家の前で撮影した写真たちだ。

麻希を撮ったのは同じカメラ。あまっていたフィルムを使ったということを颯土は今までもすっかり忘れていたのだ。

写真は7枚あった。亮太が撮影したヒカルと自分、そして亮太とヒカル、あとの5枚は全てヒカル。

笑ったヒカル。

うつむくヒカル。

喋っているヒカル。

振り向くヒカル。

それから、

——いつまで撮ってんのよお～！

膨れたヒカル——。

カメラを手にしたとき、気がつくといつもヒカルに焦点を合わせていた自分だった、ということをおんなとこで再認識するなんて——と、颯土は頭を抱えた。

そして——。

「...ほんと、参った...」

全ての現像が終わったあと、今度は床に座り込んだ。

おかしい笑いが込み上げる。

笑った麻希。

うつむく麻希。

喋る麻希。

振り向く麻希。

それから、

——もう、ええかげんにしたらあ？

呆れる麻希——。

麻希を写した写真のほとんどが、ヒカルのそれと同じアングルだったり光の角度だったり、レンズの向こうにいつも見ているものがそこに現われていた。

あの時、確かに自分は麻希を通して見えるであろうヒカルを追い出そうと意識していたはずなのに、意識の中の無意識はこれほどにもヒカルを追いかけていた。ふたつの写真を並べればそれは一目瞭然。被写体が麻希だったからなのか、それとも他の誰かでも同じだったのか…。

出来上がった写真の中に何かを見つけることが出来るかもしれないと思ったけれど…、

——確かに見つけられたな…。

諦めよう、覚悟を決めようと意識しても無意識の中はヒカルの面影でいっぱいだ、ということ。

——俺……。

暗い暗室で颯土はまた闇の向こうが見えるような気がした。このままうつむいていたら向こう側に歩いていってしまいそうだ。忘れようとしていた痛みがじわじわと込み上げてくる。

——やば…。

颯土は勢いよく立ち上がり、暗室を飛び出して光の下に躍り出た。
窓の下まで走り大きく深呼吸をする。

——ひょっとして俺……。

考えたくない思いが頭の中を駆け巡っている。

それを必死に打ち消そうと、開かない窓から空を見上げ全身に光を注ぎ込もうとまた息を吸い込んだ。

「これ、落ちましたけど？」

後ろから声をかけられて振り返ると、今朝の受付嬢が立っていた。受付嬢は片手に一枚の写真を手にしてそれを颯土に差し出す。

「どうも...」

受け取った写真は今現像したばかりの自分とヒカルの写真だった。

「群竹さんの彼女ですか？」

受付嬢は今朝と同じ微笑みを浮かべて言った。

「...いや」

颯土は曖昧に答えてうつむいた。

受付嬢はふんわり笑うと、

「じゃ、これで」

と、会釈をして立ち去ろうとする。ナフキンに包んだランチボックスを持っているから廊下の先の休憩室に向かうようだ。

「あ、あの...っ！」

颯土が手を伸ばして引き止めると、受付嬢は振り向いて、

「はい...？」

と、首をかしげた。

その仕草はやはり昔のあかねを思い出す。ふわっとした温かさと優しさが懐かしい安らぎの感触を連れてくる。

「いきなりで申し訳ないんですけど、ちょっとお願いが...」

「なんですか？」

「...写真を撮らせてもらえませんか？」

「...私を...ですか？」

受付嬢は驚いたように目を丸くした。

「すみません。時間はとらせません。休憩中を勝手に撮らせてもらいますので...」

もう決めている自分がおかしかった。いきなりこんなことを頼む奴なんて社内にだっていやしないだろう。しかも、初めて口を利いたばかりの相手に、だ。

――断られて当然だな。これじゃ、まるで変態男だ...。

我に返って颯土は失笑した。

「いや...、あの...、やっぱり...、」

前言を撤回しようとした時、

「私は普通にお昼にできていいんですね？」

受付嬢はふんわりと微笑み、柔らかな視線で自分を見る。

「え...、あ...はい。自然にしていってもらいたいです...けど」

「じゃ、いいですよ。ポーズをとってけれなんて言われたら出来ませんが」

受付嬢はくすくす笑った。

「あ、ありがとう！じゃあ、今カメラ持ってきますので！」

受付嬢はそのまま休憩室に入り、颯土は部署にカメラを取りに戻った。

馬鹿なことを頼んだものだ、とカメラにフィルムを入れながら改めて思った。受付嬢を撮りたいと思ったのはあかねに似ているから、ただ、それだけだ。

麻希の中にヒカルを感じるのには仕方がない、と、さっき出来上がった写真を正当化したいだけ

。ヒカルとは雰囲気はまったく違う、いわば正反対の性質を持つ被写体の、そのありのままの姿を当たり前前に撮影したいだけ。

確かめたいだけ…。

けれど――。

ファインダーを覗いた段階でもうわかった。

レンズの向こうに探しているものの姿。

無意識。

己の癖。

ヒカルのはずがない、麻希でもない、ふたりとはまったく正反対の雰囲気を持つ受付嬢なのに、四角いスクエアに見えるビジョンは今までずっと見てきたものと同じ――。

――俺、あいつしか撮れないカメラマンだ…。

考えたくもなかったこと。

だが、それが答え。

現実を受け入れるため、コトバを探すために写真を撮り続けるしかない今の自分。

なのに、これが現実。

吹っ切れたと思ったのも、穏やかな日々も全ては都合のいいまやかし。

――さあ、どうする、これからの俺――。

休憩中の受付嬢にカメラを向け、シャッターを押しながら颯土は自問するしかなかった。

「私、群竹さんのお役に立てましたか？」

カメラを持つ手を力なく下ろし、呆然としたように休憩室の壁を見つめて立つ颯土に受付嬢は言った。

「あ、はい。どうもありがとうございました。突然変なお願いをして...申し訳なかったです」

思考が定まらないままの颯土は、ただ見ていただけの壁から受付嬢に視線を移して言った。

「いえ、お役に立てたのなら嬉しいです。写真が出来たら見せてくださいね」

「それはもちろん...」

「いつ、出来ますか？」

「明日にはたぶん...」

そう言っただけのもう答えは出ていた。

あいつしか撮れないカメラマン――。

どんな被写体にもヒカルの面影を重ねて撮ろうとする自分の中の癖を、今いやというほどに思い知ったから。

フィルムを現像した時に写っているであろう受付嬢は、たぶんありのままの彼女ではない。自分が無意識の中で求めている人、時間、空間が受付嬢を媒体にした歪んだ形でそこに反映されているはずだ。

それを見るのは...つらい――。

ヒカルしか撮りたいと思えないカメラマン――。

――これが俺の真実。

「...それじゃ、明日はお食事に誘ってくださいね」

「...え？」

目ではじっと受付嬢を見ていながら心では別のものを見ていた颯土は、迷子になっていた心を引き戻して聞き返した。

「待ってますから」

今やっと、ちゃんと見た受付嬢にファインダー越しに見えていたヒカルの面影などまったく。目の前で笑う彼女はどこかノスタルジックな心の安らぎを感じさせてくれる...、

「あの...、名前を聞いてなかった」

「松永美登里です」

...松永美登里という名の受付嬢。

「群竹さんの都合がよかったら、ですけど...」

美登里は小首を傾げ少し心配気な目を向ける。

——彼女を食事に誘うのか？俺が？

ぼんやりしたままの頭はまだうまく回路が繋がっていないけれど、

「...それじゃ、とりあえず明日...」

と、颯土は言った。

「楽しみにしてますね」

美登里はにっこりと微笑んで休憩室を出て行った。

「...暗室、まだ空いてるかな？」

手の中のカメラを見つめ、二度目の確認をするしかないのかと颯土は深いため息をもらした。

◇

午後8時。

今日現像した全ての写真を茶封筒に入れて颯土は部署を出た。これから地元の駅で純平と落ち合い水月の店に案内をする約束をしている。

エレベーターを降りて1階の玄関フロアまで来た時、いつものように真っ直ぐに自動ドアに向かおうとして、ふと思い出したように受付を振り返ってみた。が、もう美登里の姿はなかった。定時は5時半だから当たり前だ。明日食事をするとしたらかなり待ってもらうことになるんじゃないかと、頭の片隅で考えながら颯土は玄関を出る。

できれば写真を渡すだけで済ませたいと、現像をしながら思った。写っていたのは美登里であって美登里じゃない、思っていた通りの写真だった。

歩きながらまたため息が出る。

出来た写真に対してあれこれ聞かれたり説明をしたりするのはストレスになりそうだ。だが、いきなり頼んだ撮影に快く応じてくれた美登里に礼儀を尽くさなければならないのは社会人としての常識ということもわかっている。

——しょうがないよな。頼んだのは俺なんだから。

わかってはいても気は重い。

重くて仕方がない。

1日間の気分の逆転が自分でもおかしい。

今朝、瑠璃には、いつもと違う、晴れ晴れとしている、と言われたばかりだというのに、もしも今またここで瑠璃に会ったら、

「あらやだ！またこの世の終わり、って顔になってるよ、」

と、言われるだろう。久しぶりに乗る早い時間の地下鉄はちょうど夜のラッシュ。つり革を持ち人の波に潰されている、窓に映る自分の顔を見て颯土は瑠璃の声が聞こえるような気がした。

――どうすればいいんだ、俺。何をすれば...、何がしたいのか。

「やあ、群竹くん」

満員電車から解放され、改札をくぐったところで純平が待っていた。

「純平さん」

「懐かしいね、この駅。群竹くと初めて会った日に入った喫茶店もまだあるよ」

と、純平は構内のドトール珈琲を指差した。

「ああ...、そういえばあの二階でしたね」

「俺、写真の勉強をする気はありませんから、って開口一番に言ったあの時の群竹くんの顔、まだ覚えてるよ」

純平はニヤニヤと笑った。

「忘れてくださいって、もう...」

「いや、あの時の群竹くんのことはずーっと覚えておきたいね」

笑いながら先を歩く純平の背中を見つめながら颯土は5年前を思い出す。

あの日、同じ道を逆から歩いて来る間中ひとりで喋りまくる純平の後ろで、自分はどうやって断ろうかとそればかりを考えていた。自分と関わりたいという純平に、人と関わるのは面倒だと思っていたことが第一の理由。第二の理由は写真に興味があったわけじゃなかったからだ。

それは今も変わらない。写真が好きだとか何かのテーマを追うとかそういう理由でカメラマンをやってはいない。

あの日、どんなことを話したかはもうほとんど忘れてしまったが、ひとつだけ覚えている純平の言葉がある。

――ここに全部つまっているよ、キミの言葉。

写真を撮ってみようと思ったのは声に出すことが出来ないものを込める唯一の手段だったから。そこに込められた自分の言葉を知りたかったから。それをずっと探しながら今まで来た。そしてこれからは伝えるべきコトバを見つけるためにと決めたところだった。

けれど....

――ほんと、どーすりゃ....

胸に重い塊が持ち上がってくる。

嫌な気分になが沈む。

イライラが募る――。

「だぁぁ――っ！」

絡まった思考をクリアするかのようになり、突然颯土は声を出して叫んだ。

驚いた純平が立ち止まって振り返った。もともと丸い目がさらに真ん丸くなっている。

「どうしたの、いきなり…。大丈夫かい？」

颯土はグラウンドをマラソンで十周した後のように肩で息をしながら、

「すみません…」

と、呟いた。

「なんか、ムカムカして…」

立ち止まって颯土を見ていた人たちが怪訝な顔をしながらまた動き出した。

「…大声を出すってことはいいことさ。時と場所さえわきまえればね」

と、純平は苦笑した。

◇

『Deja-vu』のドアを開けるのはあかねの結婚パーティー以来だった。あの日、ずいぶんとみっともない姿を水月にさらけ出してしまった颯土は少しバツが悪い。だが水月は、

「おやおや群竹さん、お久しぶりです」

と、半月ぶりの颯土を変わらない微笑みで迎えた。

「ご無沙汰してました…」

「いえいえ、群竹さんもお忙しそうで、毎日暑いのに大変でしょう」

「ええ、まあ…」

「ヒカルさんはお元気ですか？最近お見かけしません」

「…あいつは今、ボストンですよ」

颯土は苦笑した。

「これはまた遠いところにお出かけですね」

「…遠いですね」

ふう、と息を吐いてうつむく颯土を見つめ、水月は、

「少しお痩せになりました？」

と、訊いた。

「…そうかもしれません」

颯土はまた苦笑した。

カウンターを挟んで会話をする颯土と水月の背で、純平はフロアの真ん中に立ち、壁に飾られた写真をぐるりと見回している。

「こちらの方は？」

「結野純平さん。俺の師匠です」

颯土がそう紹介すると、純平はハッとしたように飛び上がり、

「師匠だなんてとんでもない！友人ですよ、友人！」

と、慌てたように訂正した。

「俺に写真を教えてくれた人です」

「それはそれは、水月と申します」

水月はカウンターからフロアに出、純平の目の前まで来てお辞儀をする。純平はカチカチに恐縮したあとに、水月と同じようにして頭を下げてから、

「いやあ～参ったねえ、師匠！」

と、颯土の背中を叩いた。

「あれが一番最初に撮った写真だね？」

純平は『モノクロの教室』を指す。それから、

「あれは神戸で撮った写真だね？僕も見せてもらったことがあるけど…」

腕を組み歩く若いカップルの写真を見ていた目を順番に流して窓際のヒカルと猫でとめ、それをしばらくじっと見てからまた元のカップルに戻ってきた。

「『ふたり』か。いいタイトルをつけたね。素朴だけどピッタリ。これ以上のものはないね」

「タイトルをつけたのは俺じゃないんです。ここにある写真の全て、選んだのも俺じゃない…」

と、颯土はうつむいた。

「うん。それはわかったよ」

「え？」

颯土は顔を上げて純平を見る。

「僕はキミが高校生の頃から撮る写真を見てるしね。写真の中にあるキミの言葉は理解してるつもりだし、伝わってくるよ」

そのまま純平は窓際に移動する。

「この子、麻耶の友達の子だね？群竹くんが写真を撮るキッカケになった子」

「キッカケ…？」

「この子だね？ピクチャーライフに投稿した写真の被写体」

「あ…」

颯土はその場に立ち尽くした。

決してそれを忘れていたわけじゃないが、今、改めて何かが自分の琴線に触れたような気がした。

「ピクチャーライフの写真もそうだけど、群竹くんはありのままを写し出す天才だね」

純平の言葉に颯土はうつむいた。

「モノクロの教室から始まってここまでの写真を撮る男、群竹颯土の言葉の歴史を感じるよ。こりゃあ負けちゃいらんないなあ。参ったよ」

「…俺の言葉の歴史…？」

純平の後ろに立ち、颯土は呟いた。

水月がじっと颯土を見る。

純平は振り返りうつむいた颯土を見た。真っ黒な顔の中の真ん丸い目がくりくりと動く。

「...しかし、この笑顔最高だね。弾けすぎてない自然の微笑みが素敵だよ。芸能人やモデルには絶対に出来ない笑顔。惚れちゃいそうだよ」

と、純平は半ば真顔で言う。

「私もこの写真が一番好きなんですよ。写っているのはヒカルさんなんですけどその向こうに遠い昔の人が見えたりして懐かしさが込み上げてくる...、何とも言えない、いい写真です」

水月もにこやかに言った。

「群竹さんしかいないですね。こんなヒカルさんを撮れるカメラマンは」

——俺しか撮れない。

そうじゃない。

俺が、ヒカルしか撮れないんだ.....。

颯土はまた叫びたくなった。

それをぐっと抑え、

「...純平さん、これ、見てもらえますか？」

茶封筒の中のヒカルと麻希の写真を取り出してそれを純平に渡した。

「あれ、麻希ちゃん？懐かしいな！」

純平は手渡された写真の1枚1枚を見ていった。

「なるほどね」

黙って二人の写真を見比べていた純平がしばらくしてから口を開いた。

「わかりますか？」

「わかるよ。というか、わかってたよ、と言うのが正しいかな」

写真を丁寧に元に戻してから純平は煙草に火をつけた。

「群竹くんはやっと自覚したってことだね」

「...わかってたんなら教えて欲しかった」

うつむきながら文句を言う颯土に、純平はいたずらな眼差しを向けて笑った。

「自分で気がつかないやダメでしょ？これはこうなんだよ、って他人がその人の中身について話したって観念で理解させることしかできないよ。真実は実感して初めて真実になるわけだからね」

はあ...、と颯土はため息を吐く。それから、

「ついでにこれも見てください」

今日撮影した受付嬢の写真を差し出した。

「これが俺の真実。もうこれ以上何もない。これからどうしたらいいのかを考えるしかない...」

「この人は会社の人？」

純平が不思議そうな顔を向けるので、颯土は受付嬢を撮影したいきさつを話した。

「俺はありのままを写せる天才なんかじゃないですよ。その写真は嘘だらけです。被写体をまったく見ずに心の中にいる人に焦点を合わせてるわけだから…。自覚してるのに無意識がそうしてしまう。それを自分じゃどうすることも出来なくて嘘が出来上がる…。これから俺が撮っていく写真はきっとみんなそうだ。俺はもうありのままには写せない…」

颯土はやや投げやりになってポケットから煙草を取り出した。

「…群竹くんは最初から変わってないよな？高校の時も神戸にいる時もずっとキミが見ていたものはひとつだったはずだよ」

颯土は無言で煙草に火をつける。

「言葉の歴史ってさっき言ったけど、キミが写真に込めてきた言葉が段々変化してきて、それがわかるから `歴史、`って言ったんだ」

颯土は純平を見た。

「あえて言いはしないけれど、あの笑顔の写真から感じる言葉は…」

「言わないでください…」

颯土はうつむき、まだ半分も吸っていない煙草を灰皿に押し付けた。

純平はニヤリと笑った。

「今、こうやって僕にキミの全部をさらけ出しているのも、この受付の子に撮影を頼んだのも、昔の群竹くんにはない、今のキミのありのまま、だよな」

「…俺の、ありのまま…？」

また、何かが琴線に触れた気がした。それが何なのか、形が見えないのがもどかしい。

「今までの群竹くんの写真は高校の時からずっと `ふたり、`だった。あえて言わせてもらえば、ずっとヒカルちゃんと一緒だったということ」

もう分かってはいるが、ずきん、と心に鈍い痛みが走る。

「ふたりでひとつのバロムワン、ね」

は？と颯土は首をかしげた。

「いやいや、昔そういうTVがあったのさ。ヒーローものでさ、ふたりの人間が合体してひとりのヒーローになるってやつ」

「…はあ」

「ふたりでひとつってのは、どちらかひとりでなれるもんじゃないんだぜ？」

「…そりゃそうでしょ」

颯土は呆れた調子で言う。マジメな話からこうやって脱線するのは純平の昔からの癖だ。

「群竹くんが撮った写真にこれ以上ないタイトルをつけたのはヒカルちゃんだろ？」

「…そうですよ」

うんうん、と純平はひとりで納得したように頷いた。

颯土はまたため息をついた。

「…まあ、それはそれとして、これからの群竹くんがどうすればいいのか、それは君自身が決め

ていかなきゃいけないことだけど、ひとつ提案するとすれば人と触れ合い対話するということかな」

と、純平は話を戻して笑った。

「...対話？」

「そう。出会いを自ら求めていくということ。たとえ心が反していてもとりあえず姿勢を変えてみる。人と関わっていくこと」

同じようなことを麻希にも言われた。

——全部が無くなった、今の颯土はどんな写真を撮るのかな。それを知ってみるのもええのと違う？違う出会いを見つけられるかもしれへんよ。

違う出会いなんて欲しいとは思えない。

出会いを求めて写真を撮ることも出来ない。

でも、あえてそうしていくことが、次の自分を拓くキッカケになるのだろうか。

テーマもなく夢があったわけでもない中で、ヒカルを追いかけることで感じるまま、ありのまま心に触れたものをレンズの向こうに見て、それを感覚で捕らえてひとつの形にしてきたこれまでだったけれど...

「同じ群竹くんじゃ同じものしか見えないし撮れない。僕はそれが悪いこととは決して思わないけれど、でもそれがキミの叫びの原因になってるわけだろ？」

と、純平は笑う。

確かに純平の言うとおりの。

同じ自分のままでは同じところに戻って堂々巡りを繰り返すだけだ。

「僕の場合はキミの逆。撮るべきものが見えなくなったときは孤独に浸る」

純平は腕を組んでわざとつむく姿勢をとる。どうやら孤独を現すジェスチャーのようだ。

「それで純平さんは拓かれるんですか？」

「それはあえて答えないでおこうかな。キミが見つかるありのままがキミにとってのベストだと思うから」

また純平のお得意だ、と颯土は思った。軽快なお喋りで輪郭ばかりをたくさん話してはくれるが、一番知りたい核心は言わずに自分で探せと突き放される。

1年半前の大阪でもそうだった。

大学を辞め純平の傍で写真だけを撮り続けようと決意した途端、純平の方はいきなり世界に出ると言い出し突き放された。

あの時も、

——これからの俺はどうすればいいのかと途方に暮れたんだったな...

今のように――。

――互いが砥石になりながら磨かれていくのが人間。

あの時の純平の言葉が聴こえた。

人間だよ、と力強く言った純平の声が今、颯土の胸に迫って来る。

「人と触れ合っていく...んですね。自分の砥石を自ら求めていくってことなんですね」

そうだよ、と純平。

あの大阪で、あの時に求めた砥石がヒカルだった。ヒカルの傍で、ヒカルがいる東京で写真を撮っていくと、そう決めて戻って来たのだ。

そして、確かに磨かれた。

――俺の生命（いのち）を。

颯土は壁に飾られている自分の写真たちを見回す。

写真の中に生命があるとヒカルは言うが、それはヒカルを想う自分の生命（いのち）だ。

ヒカルがいなければ磨かれなかった生命。

ここにある、全て――。

大阪での選択で出てきた答えが今この真実。

ここから自分が変化していく方法は――。

「...違う出会い、か...」

颯土は窓辺のヒカルを見つめた。

笑顔が心に染みて、心と身体の中に風が通った気がした。

今日は珍しく雨。

盆も過ぎたというのに毎日35℃を越える暑さだった東京は久しぶりに涼しい朝だった。

街を歩く人々も暑さから解放されてか、雨に足を取られているのにも関わらずいつもより軽やかに感じる。颯土も例外ではなく、ジーンズの裾を微妙に濡らしながらもどこかでほっとしている自分がいた。

だが、それは会社の玄関をくぐるまでの話。

入り口で傘を閉じながら自動ドアの向こうにいる受付嬢が見えた颯土は、今日、彼女を食事に誘う約束をしていたことを思い出して急に気持ちが重くなった。

――どーやって誘えばいいんだよ…。

まずはこの問題。

女性を食事に誘うやり方がわからない。

それから昨日撮った写真について、やはりあれこれ聞かれるだろうということが一番面倒だ。

人と関わるのは面倒。

新たな出会いはいらぬ。

だが、そう思う気持ちに反してもあえて姿勢を変えていかなければ己の次が見えてこない、ということは昨夜の純平との対話で気づかされたことだ。想いの堂々巡りからはやはりもう解放されたい。

――対話…か。

女性を誘うことが次を拓くことになるとは思えないが、今出来るひとつの材料であることは確かなこと。

思い切って自動ドアを開き、颯土はそのまま真っ直ぐ美登里のいる受付に向かった。

「おはようございます。群竹さん」

昨日と同じようにふんわりと微笑む美登里がここにいる。

「…おはようございます」

颯土は鞆から昨日のままの茶封筒を取り出し、中からヒカルと麻希の写真を除いて美登里に差し出した。

「これ、昨日の写真です。ありがとうございました」

「…え？私にくださるんですか？」

美登里は一瞬間を置き、差し出された封筒を手にして言った。

「え？」

美登里の言葉の意味が飲み込めずに颯土は返答につまり、

「あ、どうぞ...？」

と、言う。

「...そうですか。じゃ、遠慮なくいただきますね」

心なしかガッカリしたように美登里はうつむく。

それが何故なのか颯土は分からなかったが余計なことを考える前に次の言葉を出した。

「それで、今夜だけ...、俺の仕事が片付くのが8時過ぎになると思うんです。時間の都合がよければその後...どうですか？」

美登里は茶封筒を見つめたままだった顔を上げた。

「...食事に誘ってくださいなんて図々しいこと言って、群竹さんは迷惑じゃなかったですか...？」

さっきまでの優しい微笑みが消え、どこか寂しげな目で美登里は言う。その目は颯土がよく知っている色をしていた。

——こんな目でよく俺を見ていたのは...

あかねだ。

一緒にいた高校時代から雨の神戸で別れるまで、ふと気がつくときあかねは少し寂しげな目で自分を見ていた。

——群竹くん、迷惑そう...

——いや、そんなことはないよ...

何度こんな会話をしただろう。

今、目の前にいる美登里の顔とあの頃のあかねが重なる。

「...いや、迷惑なんて思っていないですよ」

——思ってた、さっきまで。面倒だと。

自分の本心に良心が痛んだ。

「よかった。じゃあ待っていますね」

美登里はほっとしたように笑った。

「でも、待ってるって...」

「買い物でもしてます。8時にどこに行けばいいですか？」

日比谷シャンテに午後8時。

そう約束して、颯土はエレベーターに乗り込んだ。

◇

朝からの雨は止むこともなく未だに降り続き、見慣れた昨日までの乾いた夜の街に水滴の衣を着せていた。

ふと、既視感が颯土の脳裏を掠めた。

夜の街で、建物と道路と道路を走る車に輝く雨の粒をじっと見つめたのはいつどこでだったろう――。

シャンテの前は待ち合わせをしているであろう多数の人間がそれぞれ傘を手にして立っていた。

颯土は美登里の姿を探すが、雨と傘に邪魔されて見つけることが出来なかった。しばらく同じ場所から周囲を見回していた颯土だが、やがてそれも諦めてくるりと向きを変えた。

はぁ...とひとつのため息がこぼれた時、

「群竹さん」

後ろから声をかけられて振り向くと、水色の傘の中で美登里が微笑んで立っていた。

「あ、どうも...」

とりあえず待ち合わせの相手が見つかって颯土はほっとした。

「ずっと、群竹さんの目の前にいたのにわからないみたいで」

美登里はくすくすと笑う。

そういえば、美登里がさしている水色の傘はずっと視界の中にあっただ覚えがある。会社の制服を脱ぎ社外で会う美登里は雰囲気も違いどこか幼く見えた。

「雨の中待たせて...すみませんでした...」

「いえ。雨は好きだし待つのに慣れてますから」

「...そうですか」

待つのに慣れているとは、どういうことだろう？と、一瞬思ったが、

「じゃ、行きましょう...」

と、颯土は一步を出した。

だが、すぐに何処に行こうか決めていなかったことに気がついた。女性を連れて行くような店など知らない。まさかファーストフードや牛丼屋というわけにもいかないだろう。

不自然に立ち止まって固まる颯土の仕草で察したのか、美登里は、

「この先に美味しいカレー屋さんがあるんです。群竹さんはカレーは好きですか？」

と、言った。

「俺は何でも...」

「じゃ、そこにしましょう」

これじゃ誘ってるのだから誘われてるのだからわからないな、と苦笑しながらも颯土は美登里がさ

した方向に足を向けて歩き出した。

◇

明るいが落ち着いた雰囲気漂うカレー屋。

レモンイエローのシンプルなテーブルクロスをかぶせたテーブルに美登里と向かい合って座ったのはいいが、颯土の戸惑いは続く。

話題が見つからない。

何を話していいのかわからない。

あまりもの居心地の悪さに、効きすぎているほどの冷房の中でじんわりと汗が滲む。

美登里はというと、両手を膝の上にそろえた指の先に視線を落としてじっとしている。颯土からのアクションを待っているかのようだ。

こんな時、気の利いた男なら相手を楽しませる会話のひとつも出来るだろうに、自分にはそんなスキルもなければそのスキルをアップさせようという気力さえもない、何の面白みもない男だということを颯土は今更ながらに実感する。

とにかく早く食事を済ませてしまおう。

そして明日からはまた普通に、社内の受付嬢とただのカメラマンに戻りたい。

そう思う颯土が無言で煙草に火を点けようとした時だ。

「...群竹先輩」

今までうつむいていた美登里が顔を上げて呟いた言葉に、ライターの火を点けようとしていた颯土の指が止まった。

「...先輩って...？」

「...私、本城高校の出身なんです。群竹さんの一つ下。高校の時から先輩を知ってました」

美登里は思い切ったように言ってスッキリしたように笑った。

本城高校――。

懐かしい名前を聞いて戸惑い強張っていた颯土の表情も心なしか緩んだ。

「...そうだったのか。だったらもっと早く言ってくればよかったのに」

煙草に火を点けるのを止めて颯土は言った。

「ずっと言おうと思っていたんですけど...、群竹先輩は私のことを知らないようだったし、それにいつも受付を通る先輩は何だか話かけにくい雰囲気があって、もう1年半ぐらい前からずっと見ているだけでした」

確かに、言われる通りの自分だったかもしれないと颯土は思った。

時間に追われる毎日の中で社の玄関はただの通り道にすぎなく、受付にいる美登里をまともに見たのは昨日がはじめてだったのだから。

「昨日の群竹先輩は...ふと話しかけられる `穴、が空いてました」

と、美登里は笑った。

「穴、か...」

と、颯土も笑う。

「やっと群竹先輩と話せたって、私結構舞い上がってたんですよ。高校の時から話したいなあって思ってたんで」

肩を上げて美登里はまたふんわりと笑った。

「俺と？俺そんなに目立ってなかったけど...」

「いえ！群竹先輩は目立ってましたよ！女子の間では人気が高かったんです！」

「...え？」

颯土は絶句する。そんなこと、今の今まで知らなかった。

「...へえ。それは...光栄な話だな」

「空手部のランニング、いつも女の子が見て応援していたの気がつきませんでした？」

そう言えばいたかもしれない、というぐらいの認識しか颯土にはない。あの頃の自分も今と同じ、自分の周囲をまったく見ないで過ごしていたのだろう。

「その中に、私もいたんです」

と、美登里はまた笑った。

ついさっきまで喉に詰まってひとも出てこなかった言葉たちが、本城高校という魔法ひとつで解禁されたようだ。それからは高校時代の話題を中心に会話が弾む時間が過ぎていった。

美登里は昨日の写真撮影に関しては一切何も言わない。

それがまた颯土にはありがたかった。

このまま昔話だけをして今日が終わればそれでいい。

カレー屋を出たあとは、シャンテの中の珈琲ショップに場所を移した。大きなガラス窓から外の噴水がよく見えるテーブルに着き、話はまた高校時代に戻る。

1年と3年で担任だった千田先生は美登里の進路相談にも乗ってくれたらしい。しばらく千田先生の話で盛り上がっている最中に、

「...群竹先輩はまだ水沢先輩とお付き合いしているんですか？」

と、美登里は言った。

それがあまりにも唐突だったので、颯土は一瞬返答に詰まり手にしていた珈琲を喉の変なところで飲み込んでしまったぐらいだ。

げぼげほと咳き込む颯土に、美登里は慌てたようにおしぼりを渡した。

「すみません。変なこと訊いちゃって」

「いや...」

変なことというよりも、突然だったから...、と颯土は思う。

「昨日、暗室の前で拾った写真には別の人写っていたから、あれ？って思ったんです。あの人

も本城の先輩ですよ？」

「...ああ」

颯土はぶっきらぼうに答えた。

「私、水沢先輩にも憧れていたんです。群竹先輩と水沢先輩、凄くお似合いのカップルで...」

「...そうかな」

忘れていた昔の想いに、颯土は少し胸が痛む。

「部活をやってる群竹先輩を待つ水沢先輩の後ろで、私はふたりを見てました」

「...どうして？」

颯土の問いには答えずに美登里はただ首を傾げて笑っただけだ。その仕草がまたあかねを思い起こさせた。

「...あかねはついこの間結婚したよ」

「...え？」

美登里は瞳がこぼれ落ちそうなくらいに目を見開いた。

「じゃあ、先輩と水沢先輩は...」

颯土は苦笑する。

「群竹先輩は神戸の大学に行ったんですよ」

「よく知ってるな」

驚いて目を開く颯土に美登里は、知ってますよ、と笑った。

「もしかして、それが原因で...？」

「...まあ、いろいろあって」

「...それは.....、」

と、詰まる美登里の後に続く言葉を予想し、颯土は、

「最初に決めたのはあかね。それを言わせたのは俺...だな」

と、答えて今度は煙草に火を点けた。

今更こんな話をこんなところするなんて思ってもいなかった。

自分の届かない想いへの痛みと苦しみにおしつぶされるばかりでいたが、同じ想いをかつての恋人にさせていたことはどこかに追いやってしまっていた。

あの時、雨の神戸からひとりで帰って行ったあかねは、どれほどの想いをかみしめていたのだろうか...

「でも、水沢先輩は今幸せなんですか？」

そう。

あかねは今幸せでいる。

不幸のどん底に落としてしまった自分だが、田村がそれをすくい上げてくれた。失った想いに止まることをせず別の出会いの中からあかねは自分の幸せを勝ち取った。

時間の薬――。

今、ふと脳裏に過ぎった。

あかねに似た雰囲気を持つ美登里と今ここで出会ったことも何か意味があることだったのかもしれない。自分をもう一度見つめ直すキッカケを与えられたのかもしれない。でなければきっと、自分は己の苦しみのことしか考えられずにこれからもいただろうから――。

颯士がまだ全部吸い終わっていない煙草を灰皿に押し付けた時、

「私、先輩の恋人に立候補してもいいですか...？」

美登里は小さく、それでもハッキリと言った。

「...俺の？」

灰皿の煙草に手を置いたまま颯士は聞き返した。

「...高校の時から先輩に憧れていました。でも...、先輩と水沢先輩が素敵すぎるから、私は群竹先輩と水沢先輩のような恋人同士にいつか自分も誰かとなれたら...って、そう思いながらふたりを見ていたんです」

「...俺とあかね？」

あの頃の自分たちは本当の意味での恋人だったとは言えないだろう。

自分はずっとあかねを通り越した先を見ていて、あかねはずっと不安を抱きながらいて...

「私、群竹先輩を見ている水沢先輩が好きだったんです。いつも待ちぼうけをしているってこと、水沢先輩を見ていてわかったけれど、それでもずっと群竹先輩を待っている水沢先輩は素敵でした」

――いつも待ちぼうけ...

「...あかねが聞いたら喜ぶだろうな」

待たせていた。いつも、いつも。

それは下校時だけじゃない。

「...私も受付の席で1年半、先輩と話が出来る日を待っていたから、だから待ちぼうけには慣れてます。群竹先輩の隣が空いているのなら、そこに私を入れてくれませんか...？」

美登里は真っ赤になってうつむいた。

「...でも、俺は...」

颯士は再び戸惑う。

「いきなりこんなこと言うなんてはしたないって思います。でも、今言わなければもう、先輩とこうやって話が出来る次はないような気がして...」

次はない――。

確かにそうかもしれない。

このまま昔話だけをして今日が終わればそれでいいと思っていたから――。

「――私、群竹先輩のことが好きなんです」

午後10時の時報代わりに窓の外の噴水が一斉に舞い上がった。赤や青のライトに照らされた中で白い水しぶきが音楽に合わせて踊る。

突然の噴水のダンスに驚いた美登里が窓の外を見る横顔を見つめて颯土は思う。

これも自分に与えられたひとつのキッカケなのだろうか――？

美登里と出会ったこともあかねを思い出したことも今美登里からの告白も、何か見えないものの力によって仕組まれたことなのだろうか――？

今、ヒカルを諦めようとしているこの時に――。

「今すぐ返事なんていりません…。考えてください。待ってますから」

噴水から目を颯土に戻した美登里は言った。

「…すまない」

今は混乱する自分の心と対峙し、そう答えるのが精一杯の颯土だった。

電車を降りた後、改札の横に設置されている喫煙所で煙草に火を点けた。今夜は同僚たちに付き合わされ久々の最終電車だった。

だが、目の前の道路を走る車をぼんやりと見つめる間に構内の明かりが消えた。

――早くここをどけて、か…。

まだ半分も吸い終わっていない煙草だったが、それを灰皿の水の中に沈め颯土は家路に向かって歩き出す。

雨の日比谷で松永美登里からまったく突然に胸の内を明かされてから、受付を通るたびに向けられる美登里のすがりつくような眼差しに後ろめたさを感じながらも答えを出せないままの数日間を悶々と過ごした。

『今すぐ私を好きになって欲しいなんて思ってるわけじゃないんです。群竹先輩の隣にいてふさわしい女になれるチャンスをください』

高校の時から自分を見てきたという美登里の想いはわかった。

――何を迷うことがある？もう覚悟は決めているはずだ。

美登里の想いを受け入れることによって新たな何かが見えてくるかもしれないし、それが自分には必要だってこともわかっている。

己の中に染み付いている癖と無意識を取り払うには、現状から抜け出して別の世界に自ら飛び込んでいかなくては変わることなんて出来ない。届かないものへの執着を捨て、堂々巡りに決着をつけようとしている今の自分に舞い込んできた、これもひとつのチャンスのはずだ。断る理由なんてどこにもない。今すぐにでもOKの返事は出来る…。

――だが。

どこかで強烈なブレーキをかけられている。前に出ようとする意識を後ろに引っ張られている。これはいったい何故なのか。

でも、今ある迷いはどこかで振り切らなければ、ずっと出口は見えてこないものだ。

――だから…、

無理にでも振り切らなくてははいけない。

それが、今の俺がすべきこと――。

もう走る車もほとんどなくなった国道6号線の歩道を真っ直ぐ北に向かって歩けば自宅はもうすぐそこだ。

足早に歩きながらその歩調に合わせてなのか、さっきからずっと心が騒いでいる。それは心の隙間を通っていく風の音のようにも感じる。

ふと、思い立って颯土は肩に提げていたカメラを手にした。

レンズの向こうに見えたのは、明かりの消えた水月の店とその横に通る言問橋とその向こうにある浅草の街明かり。

昼間の色は幾度となく見ていたその風景も、レンズに写る夜の色はまた別の表情をしている。

人気のない言問橋の上で語り合う恋人同士。明かりがなくなり静まり返っていても格子の窓が優しい水月の珈琲ショップ。霞んだ空気の中でぼんやりと揺れる街の明かり。

太陽の下で見るそれらがよそいきの顔だとしたら、今見えているものが真実なのかもしれない。

色のない我が街を、颯土は心のままに撮りはじめた。

言問橋から墨田公園、そして隅田川へ――。

向こう側の明るい街も川を北に下るうちに段々と輝きを落としていく。やがては、いつか粉雪の舞う冬の日にヒカルと語り合ったベンチを通り過ぎ、猫に語りかけるヒカルを撮った場所も越し、気がつくやうに遠くに本城高校の屋根が見えるところまで来ていた。

ひとつ息を吐いてからそのまま真っすぐ学校へと続く道を歩く。それは毎日自転車で通学していた道だ。そして、長い間ここに住んでいて歩いたことなどほとんどない道でもある。

昼間はひっそりとしていてその存在すら知らなかった芸者置屋や料亭などが、夏の終わりの闇の中に明かりを灯し、侘びた風情を醸し出していた。高校時代は3年間この道を通いながら、そんな街の情緒に気がつかないでいた自分が滑稽に思えて仕方がない。

――急ぐのも哲学ではあるがのんびりいくのもこれまた哲学。待つ時、そこに急ぐ間に見落とししたものが見えるもの。

と、格好のつかない台詞を吐いたのは確か純平だった。

それは直接本人から聞いた言葉じゃなかったが、純平が言いそうな言葉だと頷ける。

――時にはゆっくりと行くのもええことかもしれんね。あのオッサン、ええかげんに見えて、ほんまはすごく真面目な人なんやね。

4年前の沖縄が脳裏に浮かんだ。

あの時は純平を真面目だなんてこれっぽっちも思えなかった。

あの頃も、そして今も自分は見落としているものが多すぎる。こぼれているものやこぼしてしまっているものがどれだけ自分にはあるかわからない。

見慣れたはずで見失っていた風景をかみしめながら、颯土は校門の前までやって来た。卒業式以来の真っ暗なその門の中を見た時、目を閉じなくても浮かんできたのは仲間たちの顔だった。

——群竹くんっ！

いつも自分の前から走って来たのはヒカルだった。そして、

——群竹くん…。

自分の後ろに立っていたのはあかねだ。

振り向けばいつもふんわりと微笑みをくれたが、振り向くまではきっと、自分の背中を寂しげな目で見つめていたのだろう、と今は思う。

校門の前に繋がる道をずっと向こうまで見渡してみた。

あかねを自転車の後ろに乗せて送っていた駅はこの道の先だ。空手部がランニングをしていたのもこの道で、そしてギャラリーが立っていたのは…、

「ここだったな…」

颯土はひとり呟き、校門から少し離れた歩道の植え込みまで歩いた。

校庭を走る時は花壇の前、外周ランニングの時はこの植え込みの中に下級生たちが数人いたことは覚えている。そう言えば勇斗が『また群竹ちゃんギャラリーかよっ』と、よく文句を言っていた。それがどうしてなのかあの頃は考えもしなかったことだが、先日の美登里の話を聞いてたつた今納得した。

この場所に美登里もいた。ここでずっと、自分を見ていたのか。

今は静寂の中にあり、あの頃とは少し様子も変わった植え込みだが、おぼろげに覚えている下級生たちの姿の中に美登里がいるということだ。

——でも、俺を見ていたのは下級生だけじゃなかった。

いつもあかねがいたのだ。

校庭の花壇の前で座った制服のスカートが土の上に広がる姿が目には浮かぶ。

『あの子たち、みんな群竹くんのファンみたいよ…？』

『あの子たちって…？』

『全然見てないんだね、群竹くん…』

『あ？』

『あなたはいつも何をみているんですか？』

『...は？』

そんな話をあかねとしたこともあった、ということをも今思い出した。
あの頃の自分は、本当に何をみていたのだろう。

そこまで考えて颯土はハッと声を出して笑った。
また分かりきっていることを考えている自分に腹が立ち、再びレンズを覗く。

色のない学校。
色のない道。

それらを次々とカメラにおさめる。
どうして今ここでこんな真夜中に写真を撮っているのか自分でもわからない。
こんなふうになんかに突き動かされるように写真を撮るのは久しぶりだった。ずっと消えないま
までいる心のざわめきが自分にそうさせているのかもしれない。
さっきから何をどんなふうにしたのかなんて覚えていない。ただ心が捕らえたものを感じる
ままにシャッターを切っている。ファインダーから覗く向こうは色のない闇の形だが、現像され
た写真にはどんな色がついているのだろうか。それを知るのは少し怖いような気がする。

学校の外周を道なりに歩いていくと、部活の帰りに毎日寄っていた牛乳屋が見えた。もちろん
今はシャッターは閉まっている。

だが、歩道に置かれている赤いベンチはあの頃のままだ。きっと昼間見ればずいぶん色も褪せ
ているのだろう。そして、この道を渡れば勇斗のアパートがある。

——そういえばあいつ、亡霊騒ぎはどうなっただろう？

あれっきり勇斗は何も言っていないけれど...

——ここまで来たんだから寄ってみるか。

最後のフィルムはベンチを撮影した。
それから颯土はいつか稲葉トメを助け、さんざんな目にあつた横断歩道を渡った。

◇

コンビニで適当なお土産を買って勇斗のアパート『ときわ荘』の前まで来ると、明かりが灯っているのは既に勇斗の部屋だけになっていた。薄っぺらな扉は叩くとアパート中に響きそうで颯土は少しのためらいを感じた。

「大久保、起きてるか？」

小さく声をかけながら軽くノックをすると、

「開いてるよ！」

勇斗の元気な声が返って来た。

——こんな夜中に鍵開けっ放しかよ…。

ドアノブを回すといきなり強烈な風にあおられて颯土の髪が逆立った。

「な、なんだ？」

颯土は風をよけるように手を顔の前にかざした。

「あれ、群竹ちゃんがオレんちにやってくるなんて珍しいこともあるもんだ！」

トランク一枚の勇斗が、玄関のすぐ前で全開強の扇風機にあたっていた。

「風呂上り？」

「そう。オレもさっき帰って来たところだから」

「じゃ、ちょうどいいな。ほら、土産だぜ」

颯土は冷えたビールが数本入っているコンビニの袋を勇斗の腹に押し付けた。

「きゃ〜っ！冷たいっ！嬉しいっ！群竹ちゃん、好き！」

勇斗はいつものように颯土にぎゅ〜っ！と抱きついた。

その手をさり気なく解いて颯土は部屋の中に上がりこみ、

「例の亡霊が出たのはどの辺だ？」

と、冗談交じりに訊いた。

「ああ、そこだよ？今群竹ちゃんがいるところ」

うえ？！

と、思わず飛びのいた颯土に、勇斗は、

「あれ？もしかして心配してくれてた？」

と、訊く。

「まあな。あの時の大久保、なんか普通じゃなかったし…」

颯土はどこに座ればいいのか安全な場所を探すようにして部屋の中をウロウロと歩き回る。勇斗はコンビニの袋と扇風機を持って玄関前から六畳間に移動して来た。

「あれはやっぱオレの幻想だったみたい」

その一言で、颯土はほっとしたように息をついてやっとその場に座った。

「そうだろ？」

「ん。でも、幻想だったけど現実だったし、摩訶不思議な体験をしたよ」

「幻想で現実…？」

「うん…。ひとことで言えば、オレが見た亡霊は心の中にいた麻耶ちゃん…これが幻想」

え…？と、颯土は聞き返した。

「結野…？」

「オレ、自分で思っているよりも相当麻耶ちゃんに惚れてたみたい…。群竹ちゃんも言っていたけど、本当に涙って出るもんだな。情けないけどオレもあの後これでもかかってくらいに泣いた。

ははは…」

汗が引かない身体を扇風機にくっつけながら勇斗は照れくさそうに言った。

「でも…、ずっとオレを見てくれてた想いに気がつかないでいた…それが現実の姿になって見えたのもあの亡霊、いや、妖精…だな」

「お前を見てた想い…？」

「うん。オレ、麻耶ちゃんのこと諦めた。たぶんもう大丈夫」

この間、自分の家に転がり込んできた勇斗とは明らかに違う、本当にふっ切れたような顔をしている。

「オレ、彼女できちゃった」

と、勇斗はVサインを颯土の目の前に出した。

「な?!」

缶ビールを開けようとしていた颯土は、言葉と同時に力が入りすぎてプルトップを引きちぎってしまった。

「やべ…」

「そんなに驚くこと？」

「かなり驚いた…。だって…」

勇斗が麻耶を想っていた気持ちは本物だったはずだ。

つい先日まで確かに自分と同じところにいた勇斗なのに…。

――そうか…。

コイツも俺と同じということか。

届かないものへの執着を捨て、堂々巡りに決着をつけよう…。

ずっと勇斗を見ていたという彼女。

勇斗はその想いを受け入れることで、決して手に入らないものへの諦めをつけたのだろうか。

「俺…、」

自分のことを勇斗に語るのに抵抗がないわけじゃなかった。だが、今夜ここに足を向けた時からどこかでそのつもりでいたのも事実だ。

勇斗だから話せる。

言葉を選ぶこともなく、颯土はヒカルがボストンに発ってからの自分を語った。



「ヒカルちゃんしか撮れないカメラマンか。強烈だな、それ...」

そうだろ...?と颯土は呟いて5本目の煙草に火を点けた。

「この間、ヒカルちゃんを諦めるために写真を撮り続けるって言ってたのにな」

颯土は無言で頷く。

「で、群竹ちゃんはどうなの?そういう自分」

「...つらいな」

「どうするの?伝えるって言ってたよな?伝えて諦めるんだって」

「そう思っていた。それが俺の区切りなんだって。けど...、」

今はわからなくなった。写真の中にそのコトバはもう見つけることは出来ないし、第一....、

「松永美登里ちゃん、オレは知ってたよ。下級生ギャラリーの中で一番可愛い子だったから」

そうか、お前ならそうだろうな、と呟いて颯土はまた煙草に手を伸ばす。

それを、勇斗は制し、

「吸いすぎ」

と、颯土の手から煙草の箱を取り上げた。

「付き合ってみればいいと思うよ、美登里ちゃんと」

取り上げられた煙草を取り返そうとしていた颯土は、顔を勇斗に向けて固まった。

「群竹ちゃんが自分で言ってる通り、別の世界に自ら飛び込まない限り抜け出せないんじゃないか?」

「お前も...?」

「オレの場合はちょっと違うけど、違う場所に目を向けたことで見えなかったものが見えるようになったのは確か。ほんのささいなものにも満たされる気持ちっていうのかなあ、ちょっと言葉じゃ言えないけど」

ささいなものに満たされる気持ち....。

それは今、一番欲しいものかもしれない、と颯土は思う。

「違うとは?」

「オレは彼女のこと、本当に愛しいって思ったから。自分でも信じられないけど、その時はもう麻耶ちゃんのことにはなかった」

そう言って勇斗はまた照れくさそうに笑った。

「オレのこと想ってくれる気持ちが真っ直ぐ伝わって来て、あったかくて嬉しくて、麻耶ちゃんを好きだったと同じぐらいその娘のことを好きだと思ったんだ」

「...信じられないけど、大久保がそう言うのなら本当なんだろうな」

と、颯土。

不思議だけどそれは本当、と勇斗はまた照れ笑いをしてから、

「あかねちゃんと付き合ってた群竹ちゃんも、ヒカルちゃんに惚れた群竹ちゃんも嘘じゃないと思う。変わってるんだよね、少しずつ。これから美登里ちゃんと付き合ったら、それを本

当の群竹ちゃんにすればいいことでしょ？だって、今のままだってどうにもならないだし、ヒカルちゃんがボストンから帰って来て、あの部屋に明かりがついたときには少しでも現状から抜け出した群竹ちゃんていなきゃ...、」

勇斗は一旦言葉を切り、

「格好つかないだろ？」

と、両目を瞑った変なウィンクを投げた。

「...ああ、そうだな」

と、颯土は勇斗の顔が可笑しくて笑う。

「現実を素直に受け入れるのも勇気なんだよな」

「ああ、わかってる...」

「高校を卒業してさ、みんな色々と変わったじゃん？あかねちゃんはお嫁さんになっちゃったし、ヒカルちゃんはボストンに行っちゃったし...ゆうちゃん麻耶ちゃんそれぞれさ」

「...ああ。ずいぶん変わったな」

さっき、本城高校の前で真っ暗な校門の中にあの頃みんなの幻を見てきたことはさすがに言えない颯土だった。仲間と何かを共有することをあんなに拒んでいた自分だったのに、やっぱり心の中に強烈に染み付いている仲間たち。

「いつまでもあの頃みんなとは笑って会いたいね。それぞれいろんなことを抱えていてもさ」

勇斗は颯土の肩をポンと叩く。

「群竹ちゃんだってずいぶん変わったぜ？オレにこんなこと話してんだからさ」

「確かに、そうだな」

と、颯土は苦笑する。

以前の自分からすれば考えられないことだ。それも、ほんの少し前までの自分からすれば――

。

――対話って、こういうことなのか...。

頭で分かっていたことが、今少し生命の中に浸透した気がする。

自ら心を開いて人の中に飛び込んでゆく。

言葉を交わすことによって互いが砥石になりあい、磨かれていく。そして、拓かれる――。

「お前も変わったよな。いつの間にか、オレ、だし」

「そういえばそうだね。守るべきものが出来たからちっとは男らしく、なんて思ってたのかもしれないな！」

守るべきもの...、と颯土は心で呟いた。

「ヒカルちゃんとはさ、きっといつかまたあの頃のように自然に会える時がくるよ。そのためにはやっぱり群竹ちゃんが変わっていなきゃ、だろ？」

颯土は答えずにうつむいた。

「それに、群竹ちゃんには写真を撮らなきゃならない使命だってあるんだぜ」

「...そうだな」

使命だなんて思っていない。

ただそれしか出来ないだけ。

でも、ヒカル色一色に染まっていた今までの写真を、別の色に変えていくためにも....

「明日、彼女には返事をする」

と、颯土は言った。

「もちろん、OKの返事、だよな？」

という勇斗に、

「ああ」

と頷いた颯土だった。

◇

そして翌日――。

受付には美登里が座っている。

はじめて見た時と同じ、遠くから見る美登里はやはりあかねの姿に重なる。それは美登里自身が言っていたように、あかねに対する憧れの想いが自然と身に染み込んだからなのかもしれない。

そう思った時、颯土はまた何かに後ろを引っ張られる気がした。

けれど、

――もう考える必要はない。今はこのままあの場所に行って、OKとひとこと言えばいいだけだ。

そう腹を決め、美登里のもとへ一歩を踏み出した時だ。

「...!？」

ふと、視界に飛び込んだ見たことのある風景に颯土は立ち止まった。そして、一瞬のそれが何処にあるものなのか、そのままあたりを見回す。

ロビー、玄関、受付...違う。

ゆっくりと自分がたどった視線を思い出しながら見ていくと、喫茶室に飾られている一枚のパネルにいきついた。

受付に向かおうとしていた足が自然に方向を変え、颯土は初めて喫茶室に入った。ロビーとはガラスの仕切りで隔てられただけのオープンな喫茶室だ。パネルはその入り口にあるレジの横に

飾られていた。昨日まではなかったはずのその風景パネルは、昔、穴が空くほど毎日毎日見つめていた、純平が撮影した沖縄の砂浜だったのだ。喫茶室の中は所々に風景の写真が飾られていた。それら全てが社で撮影したものらしく見たことがある写真が何枚かあった。

もう一度純平撮影のパネルを見ると、もうずいぶん古いものらしくところどころ傷んでいる。だが、颯土を沖縄に強烈な憧れを抱いていたあの頃にタイムスリップさせるのには十分だった。

――あんたさ？少しの間遠くに気分転換に行ってみてもええんやないの？

――遠くって...？

――うーん、そうやねえ、またあの秘密の海岸とか。

「秘密の海岸...」

4年前に見たその風景が、今頭の中で完全に再現された。

砂浜も海の色も穏やかな波の音さえも――。

4年前の自分は、何もないあの場所で麻希とふたりきりの時間の中から抱えていた闇を追い払いひとつの答えを出した。もしも今、たったひとりであの場所に行ったら、何が見え、何を感じるのだろうか？

――知りたい。今、どうしても...！

喫茶室を飛び出した颯土はそのまま受付を素通りしてエレベーターに乗り込んだ。

――遅い夏の休暇、今ならきっと取れるはずだ。

ゆっくりと昇るエレベーターの中、颯土の頭ではもう、沖縄への旅支度が始まっていた。

1996年8月26日。

ひとつの旅立ちとひとつの旅の終わりが交差した。

颯土は羽田から東京を離れ石垣島へ。

そして――。

◇

石垣空港に到着した颯土はしばらくの間、乾いた空気と匂いの中で4年前の感覚を取り戻すようにして佇んだ。

透明な風はあの頃と変わらずに穏やかに流れている。東京では感じることの出来ないその感覚に思わずカメラを向けてシャッターを押してから、ふと、昔の会話を思い出した。

『何を撮ったんですか？』

4年前の那覇で、心に止まるものは何もないような風景を撮影した純平に訊くと、

『風』

と、すまし顔で答えた純平。

――そんなもの写真に撮れるのか？大丈夫か、このオッサン…。

あの時は真剣にそう思った。

でも、今ならわかる。

言葉では言えないもの目には見えないものの背景にある様を、シャッターを切る瞬間はありのままに写すだけ。

あとになって、自分がそれを撮った理由を見つめてはじめて発見する何かがある。

この旅はそれが目的。

ここで自分が撮っていく写真の中から答えを見つけたい。

4年前のあの時のように――。

地面に下ろしてあった荷物を背負い、颯土は迷わずレンタサイクルショップを目指して歩き出した。たった3日しか取れなかった休暇だから車を使った方が何に対しても効率がいいことは確かなことだが、

――急ぐのも哲学ではあるがのんびりいくのもこれまた哲学。待つ時、そこに急ぐ間に見落とししたのが見えるもの。

見落としてこぼれ落ちてしまっている何かを拾いながら行くためにもひとつの行動に時間をかけようと最初から決めて来た。

簡単なビバーク用品と着替えだけを詰めたナップザックは4年前の旅立ちの前に用意したものだ。

高校2年だったあの当時、5ヶ月の間朝刊を配ってまで来たかった沖縄だったが、あんなに憧れていたのはどうしてだったのだろうか？昨日会社のロビーで見たものと同じ、雑誌に掲載されていた写真を見ただけで、どうしてもこの風景と風と降り注ぐ光とを自分で感じたいと思った、その理由を考えているうちにレンタサイクルショップに到着していた。

3日分のレンタル料を先払いして自転車を借り、そのあとは昔、麻希が花束を買った花屋の前を通り過ぎ、3日分の食料を求めて商店街へ。秘密の海岸の周囲には自動販売機ひとつない。冷たい飲料を買いにいくだけで自転車を1時間ぐらい走らせなければならないだろう。でも、その時はそれをするまで...、と、颯土はあえて余分に揃えることはやめた。いきあたりばったりでいい...

荷台に荷物をくくりつけ出発――。

しばらくして街は突然途切れ目の前には何処までも続く一本道と海だけの景色が広がる。すれ違う車も人もなければ後ろから追ってくるものもない緩やかな勾配を繰り返す、4年前と同じ道。この道を延々と突き当りまで行き、その後は左に曲がってまた延々と、秘密の海岸までは確か3、4時間程走った記憶だ。あの時と同じようにきっと陽が沈んでいく様子をこの道の先でリアルタイムに見ることができるだろう。

まだまだ先が見えない長い海沿いの道をゆっくりと走る間、颯土は昨日からの自分の移ろいを思い返していた。

美登里に返事をしようとしていた寸前になって突然決めたこの旅行――。

『群竹さん』

美登里の方から声をかけてきたのは外出しようと受付の前を横切った時だった。

『明日から休暇を取られたって本当ですか...？』

『...ああ。出かけるところが出来て...』

『...そうですか。気をつけて行ってきてくださいね』

『ああ...。ありがとう』

『群竹先輩』

『...ん？』

『...寂しいです』

突如感じた既視感。

美登里はそれ以上は何も言わなかった。

きっと、自分がする返事を待っているはずの美登里の目は、おびえる幼子のように潤んでいた。その瞳の中に吸い込まれていきそうな感覚を覚えたのは確かだ。そこにどこかに置き去りにしてしまったものを思い出そうとする何かがあるような気がして、だがそれが見えそうで見えなくて…。

はっきりしていることはひとつだけ。

少なくとも今、自分が美登里を苦しめているということ。

『…松永、すまない。帰ってきたらちゃんと返事をする』

『待ってます…』

もう既に心は決まっていたはずだ。もう何も考える必要もなかったはずだ。それなのに言えなかった答え――。

突然決めた旅行のため準備には時間がかけられなかった。部屋の物入れの奥に無造作に押し込められていた4年前の道具たちをひっぱり出し、それらをナップザックに詰めながら思い出したことがある。

4年前の出発の前夜も同じようにしてこのザックに荷物を詰めていた。

コトン、と窓ガラスに当たった消しゴムと飛んできた原色使いのトランク스가あって、

――あかねちゃんに心配かけないようにね！

ヒカルが言った言葉に心が痛んだこと。あの時に心の中にあった痛みと同じものが今ここにある。それがさっき感じた既視感だとわかった。

――気をつけて行ってきてね。

聴こえたのはさっきの美登里じゃなく4年前のあかねの声だった。

――ああ…。

――しばらく会えなくなっちゃうね…。

――ああ…。

――群竹くん…。

――ああ…。

――寂しい…。

渋谷の喫茶店であかねの必死な想いをただぼんやり聴いていただけの自分。

――群竹くんが好き。

あかねが自分を想う気持ちをずいぶん前からわかっていながらそれに深入りしようとせずに、それでいて居心地のいいスペースは確保しておきたかったズルイ自分。

その罪悪感に潰れそうになった時にあかねから言われた一言は、

――群竹くんは変わったよね。でも、群竹くんが変わったのはヒカルちゃんがいる時だけ…。

ほんの一瞬、見抜かれた、と、心のどこかで慌てた。それを認めたくなかったから一瞬を一瞬で心の底に沈めた時、喫茶店を飛び出したあかねだった。ぽろぽろとこぼれていたあかねの涙と `カラン、と鳴ったグラスの中の氷の音は今でも覚えている。

あかねを傷つけた罪の意識と自己嫌悪にさいなまれたまま、その翌日沖縄に出発をした4年前だった――。

なだらかな一本道の突き当たりが彼方に見えてきた。

あの突き当たりを左に曲がるともう秘密の海岸まで海は見えなくなる。

颯土は一旦自転車を止め、左側に広がる海を眺めながら煙草に火をつけた。目的地まであと2時間ぐらいだろうか。

波のない静かなグリーンの海。

照りつける明るい太陽と乾いた風――。

考えてみれば、あの頃の自分がこんな風景に憧れていたというのも滑稽だ。ネクラで無愛想で素直じゃなくて、身の回りにあたり近寄ってくる温もりや優しさをあえて遠ざけようとしていたのに、こんなに明るくて穏やかな風景に強烈な憧れを持っていたのだから。

「ガキもいいとこだったな…」

颯土は苦笑いとともにはいた。

いつも憧れていたのは光だったのだ。ただ、闇からの抜け出し方がわからなくて努力をしなかつただけ。来るものを拒み去るものを追わないことで自分を保っているつもりでいたただのガキ…。

もしもあの日、出発前にあかねと会っていなかったら、

あの涙を見ていなかったら――。

煙草を消して再びスタートをする。

ずっと置き去りにしていたものが、今ようやく見えてきた。

◇

海が姿を消した道をひたすら真っ直ぐに自転車を走らせて、そのこんもりとした林の前にたどり着いた時、4年前は気がつかなかったサラサラと揺れる波と風の音が微かに聴こえた。

もう日暮れは近いはずだが、林の木々を見上げると重なった葉の間から柔らかな光が漏れている。音はまるでその中を通して聴こえてくるようだった。

しばらくの間、その音を心の中に染み渡らせるようにして目を閉じていた颯土の手が首に提げたカメラを取った。

4年ぶりの秘密の海岸――。

誰もいない。足跡もない。

いにしえからずっと変わらず穢れない時間を流しているように静かな波が寄せては返す。

麻希が花束を投げた波打ち際もテントを張った砂浜も等浅で透き通った海の色も4年前のそのままの姿でここにあった。

心の中のサトルと一緒に旅をしながら、伝えられなかった想いを伝えるためにここにやって来たあの時の麻希の想いは、その白い花束と共に海に沈んでいった。それが自分の区切りだったと言っていた麻希。

――俺はどうしてここに来たのだろうか？

微かにそよぐ風がサラサラと葉を揺らし、透き通った海面を揺らしている。

麻希が花束を投げ入れた波打ち際に焦点を当てて颯土はファインダーを覗いた。するとあの日の麻希の姿が目浮かぶ。そしてそれはやっぱり見慣れたヒカルの面影に重なっていく。颯土はその思いのままにシャッターを切った。

何枚も、何枚も――。

あっという間にフィルムはなくなった。

それをきっかけにして颯土はようやくビバークのための準備に取り掛かった。日が暮れてしまったらここはもう真っ暗な闇になってしまう場所だ。

そして、テントを張り終えた頃、風が止んでいることに気がついた。

「夕凧...」

海風が陸風に替わる無風時間。

やはり、4年前の旅では気がつかなかった一瞬だった。

ひとつひとつ、見落としていたものを拾うつもりで颯土はまたシャッターを切る。

オレンジ色から蒼へと風景の色は流れ、やがて目の前には闇が訪れた。だが、上を見上げれば満天の星空が広がり輝いている。

颯土はひとりきりの砂浜に仰向けに転がった。

こぼれ落ちてきそうなほど、上の世界では星屑たちがひしめき合っている。

なのに見上げなければその光は見えないし届かない。

——見上げなければ…。

それが闇から抜け出すひとつの方法だということを、あの頃の自分は知らなかった。

目の前の暗闇に閉ざされるばかりで、上を見てみようと思いつくことが出来なかった。あそこにはあんなにたくさんの光が輝いていたというのに。

届かないものへの憧ればかりが募り、見上げる前から諦めてしまっていた。

輝くものには決して手が届かないと決め付けてしまっていた。

だから——。

——あの日、あかねと会ってあかねの涙を見ていなかったら、俺がここで出した答えはきっと別のものだった…。

ずっとあかねのことが好きだった、と、あの時ここで答えを出した自分。

でも、それは違う……。

自分への想いから涙したあかねの想いに応えようと思ったことで導かれてしまった答えだったと今ならわかる。

あかねと付き合いながら、それ以前からずっと心のファインダーで見ていたのはヒカルだった。もうひとつの輝きであった風間響を一途に想い、その側で目が眩むほどの光を発散して輝いていた、`決して手の届かない光、——。

心の奥底で焦点はいつもそこに合っていて、あかねという現実の数々をたくさん見逃していた。

あかねが自分を見る目も、あかねが言う言葉も、見て聞いているようでいてぼんやりと流していたから…。

——あなたはいつも何をみているんですか？

そう、あかねにはよく言われた。

そして、そう言いながらのあかねはきっと、目の前で一緒にいる人が何を見ているのかに気がついていたのだ。考えることも言うこともヒカルのそれに似てきた時はずいぶん強くなったと思ったけれど、それもあかねのひたむきな思いからだだったとしたら。

――ヒカルちゃんにずっとついていてあげてたんだね…。

ヒカルが部舎の手すりから転落した期末試験の前日は、学校隣の公民館であかねに数学を教える約束をしていた。でもその約束を思い出したのは翌日になってからだった。

――優しいね、群竹くん。だから好きだよ…。

そう笑っていたあかねだったけれど…。

――群竹くんは私のこと本当に好き…？

初めて素肌のあかねを抱きしめた高校3年の夏、腕の中で自分を見上げてあかねは言った。

――あたりまえだろ？

どうしてそんなことを訊くのかと思った。好きだから一緒にいるし好きだから抱きしめた。その想いに嘘はない。付き合っていた時は確かにあかねを愛していた。意識の上で限りなく愛していたつもりだった。

その一方で求めていたものにあの頃は自分で気づいていなかったから。

でも、あかねは知っていた。

だからあんなことを言った。

言わずにはいられなかったあかねの不安だったのだ。

――ずっとここにいるよね？

何言ってんだよ、と軽く流して、そんな言葉をあかねに言わせてしまう理由を考えたこともなかった。いつだって優先していたのは自分の心だけ。雨の神戸もそうだった――。

結婚パーティーの時ですえ突然の風間響の登場に揺れて、あの時の自分の目にはヒカルしか入っていなかった…。

それでもあかねは、

――...これで、いいの？

真剣な眼差しで訊いてきた。

「こんな俺のことなんかを思いやって...」

今までずっと置き去りにして忘れてしまっていたのはあかねへの想いやりだ。あかねに対してあまりにも不誠実だったということを忘れ去ってしまっていた。

仰向けの身体を横にして、颯土は星空から目を離した。

あかねへの4年分の想いが込み上げてくる――。

「あかね、ごめん...。俺、最低だったな...」

今更過ぎることだけ言葉に出さずにはいられなかった。

たよりなくていじらしいあかねを守ってやりたいと思うことで、絶対に手が届かない真実に求める光を、4年前の自分はここで諦めた。結果的にあかねを傷つけるだけ傷つけて、そのことを今まで都合よく忘れていた。

そして今――。

「松永...」

同じことをしようとした。

手が届かない光を諦めるために、またそのひたむきな想いを利用してしまおうところだった。

――俺の光は...、

颯土は再び星空を見上げた。

闇の中にいて無意識に求めるものはまばゆい光。たとえ手が届かない遠い場所にあったとしても、そこにあって輝いていればそれが全て――。

「ヒカルしかいない」

――過去も現在も、そして未来も。

はっきりと言葉に出した自分の声が耳元で大きく響いた。

今、この空から星の輝きがひとつもなくなってしまうとしたら、真っ暗な永遠の闇の中でそれを諦めることが出来ないように...、

――俺の唯一の光を諦めてしまうことは不可能。

ひとつの答えが出た時、星がひとつ横に大きく流れた。その瞬間、颯土は胸の上にあったカメラのシャッターを押した。

閃光が闇の中を走りしばらくの間明るい残像を残す。

やがてシュルシュルとしぼんでいく光の中に、ヒカルの笑顔が見えたような気がした。

8月28日の午後、颯土は東京に戻ってきた。

4年前の同じ頃、純平と羽田で別れて自分が向かった場所はあかねのもとだった。うろ覚えの住所を頼りに電話帳をめくり、駅にあかねを呼び出して――。

通りの角を曲がって走ってくるであろうあかねを待っていた時の心の躍動。

変わらなければ、と自分に言い聞かせながら最大の勇気を出して言った、`好きだ、`という言葉。闇を恐れるそれまでの自分は沖縄に捨ててきたから、そのままの自分のまま、すぐにでも言ってしまいたかった。あの躍動も勇気も、あの時の群竹颯土の精一杯。それが全部だと思っていた。

4年前の自分の心と向き合うように颯土はあの頃を振り返る。

こぼれ落ちていたものを拾いながら終わった3日間の石垣島。

ひとつ拾って写真を写し、また拾ってまた写して...、使ったフィルムはたった3日で20本を越えた。そこに映し出されている風景はどんな言葉で喋っているだろうか。あの日の純平と同じように羽田からそのまま会社に向かい、そして今、全ての現像を終えた。

◇

現像した写真を持って颯土はロビーに下りた。

とっくに定時は過ぎたから受付にはもう誰もいない。だが、羽田から真っ直ぐここに着いた時に一番にしたことは受付の美登里のもとに自ら行ったことだ。

「定時が過ぎたらあの喫茶室で待っててくれないか？」

颯土がロビー横の喫茶室を指差して言うと、美登里はずいぶん驚いたような、そしてそのあとにガッカリしたような目を颯土に向け、

「...わかりました」

と、ほんの小さな声で返事を返した。

喫茶室を覗くと美登里は一番奥の、外の通りに面したテーブルに座っていた。他には打ち合わせをしているらしい社員が数名、それぞれ適度な空間をとったテーブルにいるだけだった。

「遅くなってごめん」

一番奥まで行き声をかけると、表通りをぼんやり見ていた美登里が一瞬肩を震わせて振り向いた。

「...いえ。おかえりなさい、群竹さん」

「ああ」

「休暇は今日までだったんですよね...？お仕事でも思い出したんですか？」

「いや...」

と、颯土は首を振る。

「...私、ですか？」

「帰ったら返事をするって約束したから、な...」

颯土の言葉に、美登里は両目を固く瞑って小さな息をひとつ吐いた。

それは昔あかねがよくしていた仕草だ。何かを期待して、でもそれが裏切られることをどこかで予感している、そんな時に。

——俺ってそんなに信用ないか...？

——そんなことないよ。群竹くんのこととは一番信じてる。

高校時代の自分とあかねがフラッシュバックする。石垣から何度同じ感覚があっただろう。

「...沖縄で写真を撮ってきたんだ」

美登里は顔を上げて颯土を見た。

「休暇はそのため？」

ああ、と頷き颯土はさっき現像したばかりの写真たちをテーブルの上に出して並べた。

「綺麗な...海ですね」

美登里は一枚一枚を手に取りながら写真に見入った。

「俺は...、その写真の数だけ見落としていたものがあった」

いきなりの颯土の言葉に美登里は、

「...え？」

と、首を傾げた。

「それを一個一個拾い集めた時にシャッターを押した、それがこの写真たち」

美登里はもう一度写真を見る。

海、空、木漏れ日や夕焼けなど、どれも優しくて穏やかな写真ばかりだった。

「俺、松永を傷つけてしまうかもしれない。でも、ごめん...」

颯土は美登里を見た。

「俺ずっと...、高校の時からずっと好きなやつがいる」

そう言ってからどこかに違和感を覚えた颯土だ。

「...水沢先輩、ですよ？」

「...いや」

颯土は首を振る。

「だって、好きな人って...」

「好き、という言葉そのものの意味で言えばあかねはそれにあてはまるだろう。でも、今ここで自分が言いたいことはその意味じゃない。

「水沢先輩と付き合ってたのは...」

美登里の目に不安な色が映った。

何と言って今の想いを言葉にしたらいいのか颯士にはわからない。何を話して何を話さない、なんていう器用なことは出来ないから…、

「俺はあかねと付き合いながら、本当に自分の底から求める人を諦めてた」

と、ありのままを口にした。

「…そんな。だって先輩たちはあんなに…」

「あんなにどうだった？俺はあいつのことちっとも見てやしなかった…。そしてあかねは…」

颯士は次の言葉を促すようにして美登里を見た。

「…いつも待ちぼうけ」

美登里の言葉に、うん、と颯士は頷く。

「あかねと付き合いながら俺が本当に見ていたのはもうひとりの人…。そいつのことをいのちの底から…」

颯士はテーブルの上の写真を一枚手に取った。

砂浜から水平線を見渡した風景。

風いだ海に柔らかな陽射しが注がれ青空にかかる薄雲が綿菓子のように広がっている。

「…いつも穏やかにそいつを見ていたから自分でも気がつかなかった。傍にいるあかねのことは何も見ていなくて、別の人の傍にいたそいつのことは何でも見ていた。その風景は俺の記憶にひとつひとつ刻まれている。そいつの表情や言葉や何もかも俺の命に焼きついていて…、引き出しを開ければすぐに出せる。開けなくても勝手に出てくる時だってある。でも、あかねのことは…」

颯士は目を堅く閉じ、

「…ついこの間まで全て置き去りにしていたんだ。松永にロビーではじめて声をかけられるまで」

ゆっくりと閉じた目を開いて颯士は、ふるふるとさっきから小刻みに震えている美登里の肩を見つめた。

「…水沢先輩」

美登里は呟いた。

「あかねは…、そんな俺のこと全てわかってたと思う。わかっていながら俺の傍にいてくれた」

「それは…、それでも群竹先輩のことが好きだったからだと思います！」

美登里は顔を上げ、颯士を真っ直ぐに見つめて言った。

一瞬の間を置いてから颯士は言った。

「…俺は、あかねのその想いを利用していたんだ」

自分の届かない想いを誤魔化すために――。

「そして、松永…」

「はい…」

「俺はキミへOKと返事しようとした。あかねと同じ…、キミの想いを利用してしようとした。ずっ

と俺の中にいる人を諦めるために...」

「...その人って、この間一緒に写っていた人ですか？」

「ああ」

「諦めるってどういうことですか...？あの写真の中であんなに仲良さそうに...」

確かに並んで笑ってた。

それが、自分とヒカルの日常だったから。

ふたりの間で恋愛という言葉を一っさい使わずにいればいつまでも続くはずのあの光景だ。

「あいつには高校の時からずっと強く結ばれてる人がいた。手を伸ばせば届くところにいたこともあるけれど...」

ヒカルが響を待っていた3年の間にそれをしなかったのは、あの写真にあるままのふたりを続けたかったからだ。響を想っているそのままのヒカルを見つめることで自分とヒカルの時間を永遠にしていたかったからだ。それがその時の群竹颯土だった。

「この間、もう手が届かないところに行っちゃった」

「手が届かないところ...？」

「ああ...」

そして、冬になって響が帰国した時にはおそらく、向かい側の部屋からもいなくなってしまうだろう。

美登里はふう...と小さく息を吐いて肩を落とした。

「私、それでもいいです...。先輩の気持ちを今すぐ欲しいなんて思っていません。先輩がその人のことを諦められるまでずっと待ちます...」

颯土は首を振った。

「群竹先輩...！」

美登里のすがるような眼差しを受け、そこにまたあかねの面影が見えて心が痛む。頼りなく儂いあかねを守りたいと思うことで真実を諦めた4年前の自分が今ここに同座している。

「...諦めようとしていた。忘れたいと思ってた。じゃないと俺はこれから写真も撮っていけないと思った。それに何よりも自分が苦しくて仕方なかったから、何とか俺の中からあいつを追い出そうとしていた。松永に写真を撮らせてくれって頼んだのもそのためだった」

「あ.....」

美登里はバッグの中から、以前颯土から手渡された写真の入った封筒を取り出してテーブルに置いた。

「...その写真を撮る時、レンズを通して見えていたのはあいつの顔だった。その写真だけじゃない。俺が撮る時はいつもあいつが俺のどこかにいる。ここにある全ての写真がそうなんだ」

テーブルに並んでいる写真はどれも光に溢れている。

明るくて穏やかで....

「まるで、この風景たちが言葉を喋っているようです…。明るくてきららかだけどこかほっとする、そんな言葉」

と、美登里は呟いた。

「明るくきららか…か」

「私を撮ってくれたこの写真を見た時は感動しました。自分じゃないみたいで…」

写真の中に昼下がりの休憩室でランチボックスを広げる美登里がいる。たったひとりの休憩時間だったにもかかわらず、視線の先にいる誰かと話をしているような光景。背景から射し込んでいる午後の光が赤いGINGAMチェックのナフキンをよりいっそう鮮やかに引き立たせ、美登里の表情を明るく写していた。

「さすがプロのカメラマンだなんて思っていたけれど…」

「…あいつ…ヒカルがいつもする表情や仕草をどのアングルで写すのが一番効果的かってこと、俺の無意識が知っている。焦点がいつもあいつに合ってる…。被写体がヒカルじゃなくても俺はそこにあいつを重ねて見てしまう…。俺が見ているのは常にあいつで…、」

本当のあかねや美登里の姿を見ていなかった。

「それをあの時に自覚して、これから俺はどうしたらいいのか考えていた。そんな時に松永の…、」

颯土は言葉を切って美登里を見た。

美登里は真っ直ぐ自分を見ていた。

「…自分を変えるためにOKしようと思ってた。キミへの気持ちやキミの想いはどこかに置き去りにして…」

美登里は無言でうつむいた。

「…それでもいいです。先輩が変りたいのなら私は…」

小さく言う美登里に、颯土はまた首を振る。

「誰かを傷つけてそれがわかっていながら自分は変わらないよ…」

――もう…そういう自分でいてはいけない。

「…今までそうやって置き去りにして忘れていたものをひとつひとつ拾って思い返しながらいの旅をして、ありのままの想いで撮ってきた写真…」

颯土はまたテーブルの上の一枚を手にとった。

「諦められないんだ、俺はやっぱり…」

「でも、だってその人は…！それじゃ群竹先輩はいつまでも幸せになれないじゃないですか…！」

泣き出しそうに、声を喉に詰まらせながら美登里は言った。

「幸せ…か…」

颯土は呟いて笑った。

——抱きしめることだけが幸せなのだろうか？

「...例えば、あいつと付き合えたら俺は幸せなんだろうか？今のままの俺がキミにOKしたらキミは幸せなのか？」

「それは...」

と、美登里は絶句した。

「でも...、今はそれでもいつか変わるかもしれない。実らない想いを抱き続けるなんて傷つくだけです...！」

「それでも...、俺はヒカルを想い続けていたいんだって、どんなに苦しくても痛くても、俺の一番大切なものなんだってことが...わかったんだ。自分を傷つけても誰かに傷つけられてもこの場所から動くことはできない。それが、俺のありのまま...」

「...それで先輩はどうするんですか？その人は先輩を見てはくれないんでしょう？」

そう言って美登里はハッとした。

「...あいつが俺を見ることはないだろう。その痛みを...これからも受け入れていこう思う。あかねにさせていた想いを俺もずっと...、そう覚悟を決めたんだ」

「群竹先輩...！」

美登里はわっと泣き出した。

「...ごめん、松永...。キミの想いに応えられなくて...」

美登里は首を激しく振る。

「違うんです...。そうじゃないんです...」

言葉を詰まらせながら美登里は言う。

「...群竹先輩の全部の想いを...こんな私なんかに話してくれて...。私は勝手に先輩に憧れて、先輩の隣が空いているならそこに入れてもらいたいだなんて...都合のいいことを言って先輩を困らせてしまったのに...」

と、美登里は顔を覆う。

「...俺の全部の想いか...。確かにそうだな」

——よくもこんなに喋ったな。一から全部を...

自分で自分に呆れる颯土だ。

だが、美登里にひとつひとつ話しながら、言う言葉を自分に刻み付けていた。

驚くほど穏やかに——。

諦めるための覚悟を決めるつもりでいた。写真を撮りながらその方法とコトバを探すつもりでいた。

でも今は、レンズの向こうに見えるもの全てがヒカル色だとしても、そう感じる自分のありのままを絵にしていきたい。

—いや...、そうじゃない。

現実を受け入れた上でここでヒカルを見つめ続けたい。ヒカルに焦点を合わせていきたい。今までと何ら変わらずに。

—それが、今の群竹颯土。

「この写真は...？」

美登里が一枚の写真を手にして首を傾げた。

「あ...、それは...、」

欠けたガラスの破片がコンクリートの上に散らばった、ただそれだけの写真。

四角の隅に見えるのはゴミ籠の中に捨てられている空き缶たちだ。秘密の海岸から1時間かけて自動販売機に飲み物を買に行った時に撮った写真だった。

「なんだろな、それ...」

と、颯土は思わず吹き出す。

昨日、2日目の朝だった。

喉が乾いて目が覚めたが飲み物のストックがなかったことを思い出し愕然とした。

自動販売機までの1時間の自転車走行はかなりキツかった。たかが飲み物一本のために朝っぴらから1時間もせっせと自転車を走らせ、走っているうちに喉の渇きだけでなく腹の虫も鳴り出し、それが可笑しくて仕方なかった。

「だあ〜っ！喉渴いた〜！腹減ったあ〜っ！」

大きな声で叫んだところで周りに誰がいるわけでもない。自分の声は朝の澄んだ空気の中に浸透し、青空へと上っていくだけだ。黙々と自転車を走らせるより声を上げていた方が気分的に楽な気がして、何か別の言葉を叫んでみようと思ったが、いざ声をあげようとしたらなかなか思いつかない。こんな時、昔の勇斗だったら知ってる女の子の名を片っ端から叫ぶのだろう、という考えが頭を掠めた。

—麻耶ちゃん、ヒカルちゃん、あかねちゃん！とかいってな...

どうせ誰も聞いてやしないんだ...

叫んじまおう...

そう思い、ひとつの深呼吸の後に飛び出した言葉は。

「あかね——っ！幸せになれよ——っ！」

自転車を漕ぎながら空に向かって言う言葉じゃなかったが、そのあと自分の中に失くしてた何かが戻って来て、それがどこかにピタッとハマったような感覚を覚えた。だからなのかどうなのか、次に出てきた言葉は――。

やっとの思いで自動販売機に到着した時、慌てて買ったボトル瓶入りのスポーツ飲料を誤ってコンクリートの上に落としてしまった。ガラスは割れて飛び散り、中身はコンクリートに吸い込まれ、

「あ～あ...」

という嘆きと共に写した一枚だ。

「どうしてこんな写真撮ったんだろ、俺...」

理由など考えて撮ったわけじゃない。でも、理由がないわけでもない。

きっと、あの時に叫んだ言葉のひとつひとつが、この散らばったガラスの欠片たちなのだ。自分の中の無意識がまたひとつこういう絵の形で現れたのだろう。そこに繋がった想いと言葉をあとで思い返すために――。

ここに並んでいる写真はそんなものばかりだ。

撮った瞬間は無意識。

けれど、今見れば全てに理由がある。

その理由は全部ヒカルに繋がっている――。

「なんか...いいですよ、この写真...。ガラスの欠片に青空が写ってます...」

「あ、本当だ...」

美登里に指摘されるまで気がつかなかった。

「さっき先輩から聞いた想いのひとつひとつが全部、この一枚にあるような気がする」

ハッと颯土は笑った。

そんなたいそうな写真じゃない。

でも――。

――4年前からの、いやもっと前から散らばっていた欠片を集めて歩いた石垣の旅だったからあるいはそうなのかも、な...。

「群竹先輩...」

美登里は揃えた両手を膝の上にスッと下ろして颯土を見た。

「ん？」

「私、なぜ水沢先輩がそれでも群竹先輩が好きだったかがわかります...」

「.....」

「私、本当はもっとお洒落な場所で先輩とお話がしたいと思ってた。こんな会社の喫茶室なんかじゃなくて...」

と、美登里は笑った。

「あ...。気がつかなかった。ごめん...」

確かに女性と待ち合わせをするのに色気もそっけもない場所だ。

「いいんです。先輩のそういう不器用で正直な...そのままのところが好きです」

ありのまま、そのまま――。

「...ほんと不器用だな、俺」

「先輩のこと、今までよりも好きになっちゃいました...」

美登里は微笑んだ。

「...え？」

「未来はわからないから...、私は私なりに自分を素敵に磨く努力をします。だって、私も諦められないから」

颯土は苦笑するしかなかった。

今ヒカルに想いをぶつけたとしたら、きっと今の自分と同じような顔をするだろう...。

「でも、案外すぐ忘れてお嫁に行っちゃうかもしれませんけど...ね」

と、美登里は笑った。

◇

いつもの駅に降りて颯土は早速煙草に火を点けた。そう言えば会社の喫茶室では一本も吸わなかった。

ふう...と煙を吐いてぼんやりと道路を歩き交う車を見つめる。覚えているさっきまでの沖縄の風景が、騒音とめまぐるしい時間の流れに無理やり上書きされそうで思わず苦い笑いをこぼした。だが、ここが自分の現実だ。

早朝、秘密の海岸から空港まで自転車を4時間走らせたり飛行機の乗り継ぎがあったり20本以上のフィルムを現像したりでさすがに疲れた。水月の店によって珈琲を一杯飲みたい気もするけれど、今夜はこのまま帰って早めに寝よう。明日からはまた忙しい毎日が待っている。

どうする、これからの俺――？と自問したことに対しての答えは以前と何も変わらないものだった。ぐるぐる歩き回って同じ場所に帰って来た。だが歩き回りながら、こぼしていたものを拾い集め、気持ちの中身は随分ふくらんだ――。

同じ場所。

隅田川のほとりの家――。

3日ぶりの我が家の前に立ったとき、身体の中に何かが走ったような気がして颯土は上を見上げた。

――？！

3日前までくすんでいた薄いピンク色のカーテンが鮮やかに発色している。

――ヒカル...？！

帰ってくるのはもう少し後だと聞いていた。

きっと家族の誰か、久美子あたりがヒカルの部屋にいるだけだ。

――でも、感じる。あいつの波長...

上を見上げながら家の中に駆け込み、荷物は玄関に投げたまま颯土は自室に飛び込んだ。

2週間以上の間見なかった風景だ。閉まったカーテンの向こうが明るい。

部屋の明かりをつけカーテンと窓を同時に開いた時、同じようにして向かい側のカーテンが開いた。

窓の奥にヒカルが立っていた。

Tシャツとジーンズ。

あの、写真を撮った日と同じ格好で――。

「ヒカル...」

カラカラ...と窓が開き、

「颯土くん」

と、ヒカルが言った。

颯土は言葉も出せずにただ向かい側を見つめた。

「どうしたの？」

「.....お前こそ、どうしたんだよ...？」

やっと出した言葉はそんな言葉だった。

「私？」

ヒカルは首を傾げる。

「帰ってくるの、早くないか？」

「あ、うん。ヒビク...、色々と忙しくて邪魔にならないように早めに帰って来たんだ...」

そう言ってヒカルは笑った。

――ヒビク、か...。先輩、がなくなったんだな...。

キュッと胸が痛む。

だがもう覚悟が出来ている。

「沖縄に行ってたんだって？おばちゃんから聞いた」

「...ああ」

「おかえり」

「ただいま...。ってというか、逆だろ」

「え？」

ヒカルはまた首を傾げた。

颯土はスッと小さく息を吸って、

「...おかえり、ヒカル」

と、笑った。

「ただいま」

ヒカルも笑った。

いつもと同じその笑顔を見たとき、沖縄での風景と撮ってきた写真と、そしてある言葉がヒカルに繋がった。

自転車をこぎながら大声で叫んだ言葉だ。

今、ヒカルを目の前にしてその言葉はあまりにも重いということを颯土は実感する。

どこを見ていいのかわからずに、ふと視線を机の上にもっていくと、見慣れない風景写真を上にした一枚のポストカードが置かれていた。

そっと手に取り裏返してみる――。

――颯土くんと、またたくさん話がしたいよ。秋になったら――。

たったそれだけの言葉と「浅倉ヒカル、という署名だけがしたためられていた。

「ヒカル.....」

「ん？」

——愛してる。

心の中で呟いた時、昨日叫んだ自分の声が聞こえたような気がした。

『ヒカル——！あいしてるぞ——っ！』

遠い青空に向かって、その向こうまで届くような大声で…。

「…いや、なんでもない」

と、颯土は笑う。

——今までも、そしてこれからもここが俺の居場所（ポジション）。

そう思った時、秘密の海岸で感じた夕凧を思い出した颯土だった。

1996年8月26日。

ひとつの旅の終わりとひとつの旅立ちが交差した。

◇

8月の東京はまだ夏の真っ盛り。

もう陽は沈みかけている夕刻だというのに気温と湿度の方は一向に和らぐ様子がないようだ。

たった3週間足らず日本から離れていただけなのに身体はボストンの空気に馴染んでいた。体感するものの違和感からそれを実感したヒカルは、今ここにいる現実を改めて思い知った気がした。

ぐっと込み上げてくるものを深呼吸で沈め、次の感情に支配される前に空港ロビーを胸を張って歩き出す。そして玄関出口に並ぶ公衆電話の受話器を取った。

「お母さん？あたしだけど」

普段と変わらない声でヒカルは言った。

「ヒカル？今どこ？ボストンからなの？」

母の少し驚いた声が返って来た。

久しぶりに聞く母の声が心の中、体中に染み渡り、さっき沈めたものが再び込み上げて来たが、それもごくんと飲み込んで、

「今成田なの」

と、答えた。

え...？と、受話器の向こうで一瞬、母が息を飲み込む様子が伝わってきた。今、何故娘が成田にいるのか、その理由を母はきつものすごい勢いで考えているに違いない。

「あのさ、今日の夕飯、冷麦と茄子のてんぷらが食べたいんだ！」

「え？」

「お願い！まだスーパーあいてるでしょ？今から帰るから用意しておいて～！」

「わかったわよ。じゃあ、気をつけて帰ってらっしゃいね」

「ありがとう。すぐに帰るね！」

ゆっくりと受話器を戻し、しばらくの間その場に佇む。

予定より1週間も早い帰国――。

ボストンに発つ前にあんなに心配をかけてしまった母に今はその理由を言えない。だから、そして自分の為にもこれから少しだけ演技をしなきゃならない。

浅倉ヒカル、を自分自身で――。

明るく笑って普段どおりにしていく中で、きっといつかはこの痛みも薄れていくはずだから。

◇

浅草始発の東武電車がゆっくりと隅田川を渡っていく。

そのドアの窓から、下を穏やかに流れる川と川べりに続く長い墨田公園をヒカルは眺めた。見慣れたはずの景色を通して心の中で見ているのは昨日まで身近にあったチャイルズ運河だ。

遊歩道を散歩していた人々、ジョギングマンたち、河に浮かんでいたヨットたち…。

次々と目の前に浮かんでくるそれらが苦しくて、ヒカルはドアに背中を向ける。

駅を降り、自宅までの道を言問橋のたもとまで来た時、水月の珈琲ショップの前でヒカルは立ち止まった。

格子の窓からはカウンターで珈琲を淹れる水月と壁に飾られている颯土の写真が見えた。穏やかな水月の顔と懐かしい写真、そして外まで漂ってくる珈琲の香りに癒され、そのまま扉を開けようと手を取っ手にかけたが、それは途中で止まって再びゆっくりと引き戻された。

――やっぱり今日は水月さんには会わないで帰ろう。

今、水月に響のことを何か訊かれたら、何もかも全部話してしまいそうだから…。

そう思いなおしてヒカルはその場を後にする。

そして、自宅の門の前に立った時、ふと見上げたのは颯土の部屋だった。だが、3週間前と同じ、カーテンが閉まったままの窓。

――3週間前の颯土くんはシンガポールに行っちゃってたんだよね…。

あかねの結婚式があった翌日から、颯土とはもうひと月近くも会っていないことになる。

あの時から少しずつ変わってしまった自分と颯土。

もう、以前のようなふたりには戻れないのかもしれない…、と、頭を掠めたことをどこかに追いやって、今までのように窓を開ければそこにいるふたりでいたいと願っていた。

今度颯土に会えるのはいつだろう。そして、その時はどんなふたりで会うのだろう。

門の前で大きく息を吸って、ヒカルは3週間ぶりのドアを開いた。

「ただいまっ！」

ヒーねえだっ！と、リビングから哲平が飛んできた。

「おかえりっ！ヒーねえ！」

哲平はいきなりヒカルに抱きついた。その後ろから母と久美子もバタバタと出迎えにやって来た。

「おかえり、ヒカル」

母の笑顔を見た途端、涙が溢れた。

ヒカルはひと呼吸置いてからぐすん、と鼻をすすり、

「...やっと帰ってきたよお～。遠かった...っ！梅干食べたかった。日本語聞きたかった...っ！」

と、哲平に抱きつかれたまま母に抱きつく。

「大きな成りしてなによ、ヒカル」

「だってえ～...」

ヒカルはまた鼻をすする。

「さあ、いつまでもそんなとこにいないでこっちに入りなさいよ」

狭い玄関に固まっていた姉弟三人は母の言葉に従いリビングに戻る。

その時哲平がさり気なく手にしていた荷物を持ってくれた。そんな紳士な哲平の仕草から、ヒカルはチャイルズ河での別れの日に涙を拭いてくれたジョーイを思い出した。

食卓の上にはヒカルのリクエスト通りのてんぷらが用意されていた。

サーッと部屋の中を見回すと、隣の和室ではテレビに繋いだままのゲームがつけっぱなしになっているし、ソファの上には英語の参考書が開いたまま投げ出されていた。ヒカルが帰ってくる直前まで哲平がそこでゲームをして久美子はソファに寝転がりながら復習でもしていたのだろう。

何も変わっていない我が家。

いつもとまったく同じ日常がここにあることに涙が出るほどほっとする。

「ねえねえ、ボストンでヒーねえは英語で喋ってたの～？」

「うん。そうだよ！哲平とおんなじ年のジョーイくんってお友達が出来たんだ」

「オレと同じ？そいつも英語で喋ってたの？」

あたりまえじゃない、バカじゃないの？と久美子が冷めた調子で哲平の頭をはたくと、いてえなこのやろう！と哲平は久美子にくっつかかった。バタバタと騒ぐ二人の間に入り、

「ジョーイも哲平と同じゲーム持っていたよ？」

と、ヒカルが言うと、

「ヒーねえはそいつとずっと一緒に遊んでたんだ？」

哲平はややムツとしたように口を尖らせた。

「毎日会ってお話してた。とっても可愛くていい子だったんだあ。帰ってくる時はふたりで泣いちゃった」

「ふーん...。男のくせに泣くなんてダッセェ！」

「男のくせにヤキモチ妬くなんてダッサーイ！」

久美子がまたいらぬことを言い、哲平はむきになってくっつかかる。

このドタバタが浅倉家の日常だ。

「あ、久美子にいいものあげるよ！」

ヒカルは仲裁代わりにバックをごそごととあさりだした。

「なにになに？お土産？」

「これは凄いよ！驚くよ！じゃ～ん！」

ヒカルがバックから出したのはボストンで酷使した電子辞書だ。なーんだ、とガッカリする久美子の前で単語を入力してあげると、久美子は目玉を丸くして驚いた。

「ヒーねえ、こんなの使って会話してたの？！根性ある～」

と、そっちの方に。

「...せいぜいしっかり勉強しときなさい。これからの時代は英語が出来なくっちゃダメだってこと実感したから...」

「苦労したようだねえ、ヒーねえ。ヒビク先輩が傍にいてもダメだったわけ？」

「だって、ヒビク...は日中ほとんどアパートにいなかったもん...」

チクツとした胸の痛みでその名を口にするのに少しだけためらう時間があった。だが、

「え～？何で～？ずっと一緒にいたんじゃないの～？」

久美子は気にしない様子で話を繋げる。

「ヒビクは学校もあるしライブもあるしね」

「そっか。忙しいんだね、ヒビク先輩。あ、それでヒーねえは早く帰されちゃったってわけ？邪魔だから帰れよ！とか言われて」

ずきん、と胸が痛んだ。

「...相変わらず歯に衣を着せないキツイこと言う女だねえ、あんたは...」

「...え？まさか凶星、とか？」

茹で上がった冷麦を食卓に運んできた母がチラリとヒカルを見て、

「そうなの？」

と、訊いた。その目が心配そうに見つめている。

「違うよ～」

ヒカルは呆れたように言い返した。

「ヒビクは学校もライブも凄く忙しくて大変なの。学校は11月の卒業に向けていろいろあるし、ボストンじゃすごく人気者だからライブも休んでられないしね。なのに私にとっても気を使ってくれるから...だから邪魔にならないように早めに帰って来たの。本当は私だって新学期の準備をいろいろやらなきゃならなかったし、12月になったらヒビクは帰ってくるんだもん」

口から勝手に飛び出してくる言葉が自分のものじゃないような気がした。こんなに冷静に嘘が言える自分が不思議だった。だが、今はまだ本当のことは言えない。

一言いたくない。

「まあ、そうよね」

母は食事の用意をしながら言った。

「ヒビクさんも今はきっと自分のことで精一杯よね」

「うん」

「なんにしても、お母さんはヒカルが無事に帰って来てくれたのが一番！間違っただ飛行機に乗りやしないかと冷や冷やしてたのよ？アフリカとか南極なんかに行っちゃったって迎えに行けないからねえ」

母はヒカルに箸を手渡ししながら安心したように笑った。

受験生の久美子は、夏期講習と模擬試験で忙しい8月だった、ヒーねえはボストンなんかで遊んで来ていいなあと文句を言い、哲平は冷麦のつゆをテーブルのあちこちに飛ばしながらサッカー大会で優勝したことや、そのご褒美に新しく買ってもらったゲームのことなどを得意げに話してくれた。

「でも、そのゲームがめっちゃめちゃムズイんだよ～。だから全然進めらんないんだ」

哲平は妙な今時の言葉を使いながら言った。

「颯土くんにも進めてもらえばいいじゃん」

久美子が冷麦をツルツルとすすりながら言う。

「だって、ここんところソージには全然会わないよ。もう3ヶ月ぐらい会ってないよ」

時間の概念はまだ曖昧な哲平のようだ。

だが、随分長い間哲平も颯土には会えていないらしい、ということだけはわかった。

「颯土くんだっていつまでも哲平の相手はしてらんないでしょ。もう働いてる大人なのよ？」

と、母。

「...颯土くん、ずっといないの？」

ヒカルはてんぷらに箸をつけながらさり気なく訊いた。

「そういえばこのところ全然見ないわね？仕事が忙しいんじゃないの？あっちこっちに行ってるみたいだし」

「ふーん...」

シンガポールからは帰って来たのだろうか。そしてまたどこかに行ってしまったのだろうか。

気になったけれど、それ以上はあえて訊かなかった。

◇

にぎやかな食事を終えたあと、ヒカルはひとりになった部屋の真ん中に座り込んだまま明かりもつけられなかった。

短い間にいろいろなことがありすぎて心も身体も疲れていた。

――ヒカルッ！

24時間前のボストン空港で自分を呼んだ響の音が耳の中にこだまする。

――ヒビク...、私ひとりで帰ってこられたよ...。

最後にあなたに会ってしまったら、あなたに触れてしまったらガタガタに崩れてしまいそうで怖かったけれど...。

抱き合った温もりと触れ合った唇の感触がまだ残っている。

ぎゅーっと自分の両腕を抱きしめて、ヒカルはそのまま丸くうずくまった。すると1日前の出来事がじわじわと浮かび上がってくる。

――さよなら、ヒビク。

――さよなら、ヒカル。

飛行機が離陸した途端、ずっと我慢していた涙が溢れた。

近代都市と煉瓦の家並み、淳子のボストン案内所があるダウントウン、そしてチャイルズ運河――。

その上空を飛行機はゆっくりと旋回しボストンを後にする。

もう後戻りはできない。どうすることもできない。響に触れることも語り合うこともできない。

彼方に往くボストンの街を振り返り、涙はあとからあとから頬を伝い流れた。別れを決断した時の自分と今ひとりで泣いている自分は別人じゃないかと思えた。

――あそこで泣いていたヒカルが本当のヒカル...。

心臓の鼓動とは別のところで脈打つひとつの感覚はずっと消えないで今もある。

一定の強弱の中、深い海の中で抱き合いながら泳いでいるような感覚を覚える旋律――。

この感覚を抱きしめて、あの時は振り返らずに搭乗ゲートをくぐった自分だった。

でも、そのほんの一瞬後には、前に出る足と後ろに下がる想いが自分の中で交差し合い、響の元に駆け戻りたい衝動に駆られた。

――それでも、私は帰って来た...。

約束よりも、それぞれの居場所で今を生きるって...決めたから――。

ヒカルはゆっくりと立ち上がりそっとカーテンを開いた。明かりのついていない向かい側の窓はどこか遠い場所のように思える。

部舎の二階から落ちた時、亮太に想いをぶつけられた時、そして響のスキャンダルが報道された時、ひとりじゃどうすることも出来ない想いを抱えて潰れてしまいそうな時にはいつも傍にいてくれた颯土だった。いつもそこにいてくれたから当たり前のように頼ってきた自分だった。

――でも、きつともう颯土くんに甘えてばかりじゃダメなんだね…。

閉ざされた窓を見つめながら心でそう呟いた時、成田に到着した時から必死になって沈めていた響への想いが涙になって溢れた。

――今、颯土くんがそこにいてくれたら…！

今、颯土の温もりが欲しかった。いつか、粉雪が舞う墨田公園でブルゾンの中に包んでくれた、あの温かさが欲しかった。頼ってる。甘えてる。それじゃいけないってわかっているのに、今はただ、この潰されてしまいそうな想いだけを受け止めて欲しかった。

――自分で決めたことなのに…！

ぽろぽろと頬を伝う涙はそのまま床の上に雫を落とす。

――ヒビク、ヒビク、ヒビク……！

寂しいよ。

今すぐにでも会いたいよ…！

でも、

だからこそこの想いのまま…！

身体が感じているままの想いをヒカルはぎゅっと抱きしめる。

――私とヒビクにしかわからないふたりの旋律。

これがずっとここにあれば、私はきっと大丈夫…。

今日涙を全部落としたら、もう明日からはヒビクのことでは泣かないよ。

いつか、あなたのことを穏やかに思い出せる時がくるまで――。

昨夜はずっと声を殺したまま泣き通しだったから目覚めた時に鈍い頭痛がしたヒカルだ。きっと、目も赤く腫れているだろう。

ベッドから出てカーテンを開くと、もう太陽は高いところまで昇っている。時計を確認すると午前11時を過ぎたところだった。そしてドレッサーの鏡を覗くとやっぱり瞼が腫れている。

「あ〜あ…。ヒカルちゃんのキュートな二重瞼が…」

これは氷か何かで冷やさないことには人に見せられない。まして母になど絶対に見せられない顔だ。泣いていたことが一発でバレてしまい、きっと母は余計な心配をする。

――あんなに泣かなければよかった…。

ヒカルは鏡の中の自分の顔を見てため息をついた。

階下はずいぶん静かだ。うるさいはずの哲平の声もしない。

そっと部屋を出て階下に下りていくと、リビングには誰もいなかった。テーブルの上に母からの書置きがあり、哲平のサッカーの仲間たちとプールに行ってくる、帰りは夕方になる、とあった。

ヒカルはほっと胸を撫で下ろした。とりあえず腫れた目を母に見られなくてすむ。

冷凍庫から出した氷をビニールの袋に入れ、瞼に当てると今度は頭がキンとなった。頭痛を取るか瞼の腫れを取るか迷ったが、氷をそのまま瞼に当てヒカルはソファに座り膝を抱えた。

――これぞまさしく自業ジゴクよね…。

あんなに泣いたのは、きっと今まで生きてきた21年間ではじめてだったろう。人はこんなにも涙が出るものなのかと泣きながら別のところで思っていた。そして、何度も隣の窓を見て明かりがつくののを待っていた。明かりがついたらすぐにビービー弾を投げ颯土の名を呼ぶつもりでいた。ぶつける場所のない想いを、いつもと変わらない優しいまなざしで受け止めてもらいたかった。

でも、

――颯土くんに甘えたいなんてずいぶん虫がいい話…。

自分で決めてボストンに行って自分で決めて響と別れてきたのに、その行動の責任をどこかに飛ばして何も関係のない颯土に甘えようとしていた自分に今になって腹が立つ。そんな勝手な想いをぶつけられた颯土はただただ困るだけだというのに、そんなことも考えられないでいた昨夜の自分だった。あのままのわがままで颯土にぶつかっていたら…、と思うとぞっとする。

でも、ひとりで泣くだけ泣いた後は気分は少しだけ落ち着いたようだ。ボストンから引きずってきた重たい荷物と悲しみは涙と共に落とせたような気がする。

あとはこの頭痛と瞼の腫れが引けばその跡は消えるはず――。

「さて、と...」

ヒカルはソファから立ち上がった。

キッチンに用意されていたサラダをその場でパリパリと食べながら、まだ重い頭を押さえる。本当なら今日はこのまま家の中にとじこもっていたいところだけど...

――外に出なきゃ...また色々考えちゃう。

自分の中の自分に語るように心で呟き、空いた皿を簡単にすすいでからヒカルは外出の支度に取り掛かった。

瞼はまだ少し腫れているが、それは普段はあまりつけないブルーのアイシャドーを引いて誤魔化した。すると今度はその顔に違和感あった。鮮やかな化粧が似合わない自分だということを改めて思い知る。

外は陽射しが強いようだから日焼け止めをしっかりと塗って帽子も用意して、

「行ってきま〜す！」

誰もいない空間に元気よく声を出してみた。

行く当ては特になくからとりあえず目の前の墨田公園を歩いてみたが、流れる隅田川と川沿いの公園に、どうしてもチャイルズ遊歩道を連想してしまっていけない。

――景色が全然違うのに...！

そんな自分に半ば腹が立ちヒカルは足早に歩いた。すると、重たい頭がズキズキと痛む。

――もう...！

真っ直ぐ歩いた先には水月の珈琲ショップがある。あの優しい空間で颯士の写真と水月の笑顔に癒されよう...、と、痛む頭を押さえながら水月の店まで来た時、何の前触れもなく突然降ってきたイメージは響と共に来た朝のことだった。

学校の梅の木の下で夜を明かし、無精ひげを散らばせたあの日の響の顔が鮮やかに浮かんで、また胸がぎゅっと締め付けられる。

――ここもダメだ...！もう、いや...！

泣きたくなる心をあえてキツイ言葉で覆い、ヒカルは水月の店を後にして先を歩き出した。だが、余計なことをひとりで考えないために痛む頭を押さえながらあえて外に出てきたというのに、どこもかしこも街の何を見ても響を連想してしまう。

――あのコンビニでは毎日あんまんを買っていた。`ヒカルちゃん、最近太ったんじゃない？`、と言った`ヒビク先輩、`の言葉をいつも頭のどこかで気にしながら...

――あのポストからは毎年`ヒビク先輩、`に年賀状を送った。投函する時にはちょっとドキドキしながら...

――あの本屋さんでお菓子作りの本を買った。バレンタインに手作りチョコを`ヒビク先輩、`に作ってあげたかったから...

通り過ぎてきたささやかな時間とその時々のがれがコンビニやポストや本屋を見ただけで押し寄せてくる。この街に住んだ高校1年の時からずっと`ヒビク先輩、`を想いながら生きてきたからそれは当たり前かもしれない。毎日ここで息を吸いながら`ヒビク先輩、`に恋をしていた浅倉ヒカルだったから.....。

――こんなにも...

振り返りたくない心とは裏腹なところで、響の面影を探している自分がここにいる...

追われるものから逃げるようにして、ヒカルはとうとう駅まで来てしまった。そして、目の前にある公衆電話に目が留まり思いついたように受話器を取った。

――ひとりでいるからだよね...。誰かと喋んなきゃ...

そんなことを考えながら、ふと聞きたくなかった声の相手のナンバーを押すと、相手はすぐに出てくれた。

『はい、田村です』

ふわっとした優しい声が耳の中に広がった。

それは、少し前までいつも電話で話していた声とは違い、どこか落ち着きが加わったあかねの声だった。

「あかねちゃん、あたし。ヒカル...」

懐かしさとせつなさが入り交じったような、説明のできない感情にとらわれて胸を詰まらせながらヒカルは言った。

「...ヒカルちゃん！」

嬉しそうに名を呼んでくれただけで心がスーッと落ち着いていく。あかねの声には昔からそんな癒しの効果がある。

結婚式以来ひと月ぶりだし新居に電話をかけたのは初めてのことだったので公衆電話からだというのにずいぶんと長話をし、さらにそのあとで、

『暇なら今から遊びに来てよ！』

と、あかねは言う。

「いいの？本当に行っちゃうよ？」

『いいに決まってるじゃない！待ってるからね！すぐ来てね！』

さんざん長電話をしたあとに遊びに行くなんて...、と、受話器を戻した後は何となく笑えた。

あかねの新居は独身時代の田村が一人暮らしをしていたアパートで、ここからは電車に乗ってほんの30分ほどで行ける場所だ。道順は今簡単に教えてもらった。

—あかねちゃん、どんな奥さんをやってるのかな？

駅の構内にある洋菓子店でシュークリームを買い、ヒカルはそのまま電車に乗った。さっきまでと違い心が軽い。気がつくとう頭痛も治まっていた。

◇

山吹色の二階建てのアパート、『パンプキンハウス』の前に立った時、ヒカルはそのあまりにもキュートな外観と名前をかみしめてしばしの間唖然とした。あかねと田村の新居としてはもちろんピッタリなそのたたずまいだが、独身の田村がひとりで2年間住んでいたとも聞いている。

赤メッシュのレコーディングエンジニアが『パンプキンハウス』か...、と込み上げてくる温かな笑いを抑え、『たむらゆうさく あかね』と切抜き文字を木製の板に貼り付けた玄関プレートが下がるドアのチャイムを鳴らすと、飛び出してきたのは、

「よお、ヒカル！よく来たなあ！」

Tシャツに短パンというラフなスタイルで少し乱れたメッシュヘアの旦那の方だった。

「あれ？田村先輩！今日はお休みだったんですか？！」

乱れた髪は寝癖のようで、さっきまで寝ていたらしい田村の姿だ。

「いや、これから仕事」

田村は頭をポリポリとかく。

すぐにあかねも玄関まで出迎えに来て、

「優作さん、自分が出るんだ～って飛んで行っちゃったんだよ」

と、笑った。

2DKの小さな部屋だがスッキリと片付いているせいか狭くは感じない。

六帖の居間にあかねの電子ピアノと田村のアコースティックギターが仲良く並んでいた。他は必要最低限のものが控えめに配置されているだけで、若い夫婦がつつましく、でも幸せいっぱい暮らしている空気が漂ったあかねと田村の新居だった。

やはり田村はさっきまで寝ていたらしく、これから出勤ということですぐにシャワーを浴びに行った。ヒカルを居間に案内したあとのあかねは、田村の遅い朝食とヒカルのお茶を一緒に用意しはじめた。

ひと月前の結婚パーティーとは違い、あかねはもうすっかりマタニティードレスがよく似合う妊婦になっている。キッチンに立つマタニティなあかねは以前にも増して可愛らしい。ヒカルはそんなあかねの姿を見ているだけで自然と笑みがこぼれてきた。

「ずいぶん膨らんできたね？もうつわりは大丈夫なの？」

居間で座ったままあかねを見つめ、ヒカルは訊いた。結婚パーティーの頃はつわりがひどいとあかねは言っていたからだ。

「うーん…。実はまだ治まってくれないの。本当に安定期にはなってないから」

あかねはヒカルの紅茶を先にテーブルに持ってきた。それからまたキッチンに戻り、田村の為にサラダを刻む。

「キツイ匂いとかはダメ。だから作るものもあっさりなものばかりになっちゃって、優作さんは可哀想かも…」

確かにサラダはレタスとトマトだけのあっさりなものだった。

「ずっと続くわけじゃないからしばらくの間は仕方ないよね？でも、田村先輩ならそんなこと全然気にしないんじゃない？」

「毎日レタスとトマトだけでも文句言われません…」

と、あかねは笑った。

「田村先輩、優しいなあ。旦那さんの鏡だね」

ふふ、とあかねは首をかしげて幸せそうに笑う。

「でも、そんな時にあたし来ちゃってよかったの？」

「当たり前じゃない！ヒカルちゃんの顔を見たらつわりなんて、ぴゅーんって飛んで行っちゃうよ！」

朝食の支度を終えたあかねが、レタス&トマトサラダを居間に運んで来た時、

「ヒカルの笑顔は魔よけのバスターだってヒビクも言ってたしな！」

着替えを終えて洗面室から出てきた田村が口を出した。

田村の口から出たヒビク、という言葉に心がチクリと反応したが、
「...やだ！ヒビク...ったらそんなこと言ってたの？ちょっとショック...」
と、ヒカルは笑った。

――ヒカルの笑顔は魔よけのバスター...か...

颯士が桜の下で撮ってくれた写真を、魔よけになりますから、のメッセージと共に響の元へ送ったのはほんの4ヶ月前のこと...

響の部屋のピアノの上には写真立てにおさめられたその「魔よけ」が飾られていた。

また、胸がキュッと詰まる。

田村はあかねが用意した朝食をやや急いで口に入れながら、
「せっかくヒカルが来てくれたのに仕事なんてなあ...！」
と、ぼやいた。

「最近、優作さんの仕事、午後から明け方までのサイクルが多いの」
と、あかね。

今、田村が携わっているレコーディングスケジュールの関係だそう。

「田村先輩の仕事も時間が不規則だからあかねちゃんも大変だね？」

「今は家にはほとんど仮眠しに帰ってくるような感じだよ」

「...まあその辺、悪いと思ってるけどしょうがねえよな、仕事だし...」

最後の紅茶を喉に流し込み田村は、さてと、と立ち上がった。

「んじゃ、悪いなヒカル！俺は行くからゆっくりしてけよ？」

「ありがとうございます～す。今度また田村先輩ともゆっくり！」

「ああ、そうだな！ヒビクが帰って来たらみんなで集まってもいいよな」

――ヒビクが帰って来たら...

「そうですね...！」

あかねが玄関まで田村を送り、田村は無理すんなよ、と声をかけてアパートを出て行った。

「田村先輩、毎日夜いないんじゃない心配だね」

「うん。でもいつもああやって気遣ってくれるから大丈夫。一時的なことだしね」

あかねは相変わらずの天然おのろけをかまし、

「ヒカルちゃんたちはどう？風間先輩とあれからどうなったの？」

と、訊いて来た。

訊かれるとは思っていた。

いや、訊かれないはずはないと思っていたから、あかねには真実を話すつもりでいた。だが、まだつわりも治まらず安定期にも入っていないあかねに余計な心労はかけられないと、ここに来て考え直したヒカルは、

「うん。おかげさまで」

とだけ答えて笑った。

「そっかあ。よかったね！今度はヒカルちゃんたちの番かもね！」

あかねはマタニティドレスの襟をつまんで笑う。

「...そしたらそのマタニティ貸してね？」

「いいよ～！他のも全部貸してあげる！」

ボストンに行っていたことも、そこであったことも何も話していない。

話を偽るのは良心が痛んだし、それ以上に響の話題をすることが痛かったけれど、今はまだ...、と、ヒカルは耐える。

「そういえば、群竹くんは元気？」

あかねが響のことから話題を変えてくれたのでヒカルはほっとした。

「それが...、あかねちゃんの結婚パーティー以来会ってないの...」

「...え？会ってないって？だってヒカルちゃんたちって...」

窓と窓でビービー弾の飛ばしっこをしている、とヒカルは以前あかねに話したことがあった。

「あかねちゃんの結婚パーティーのあと、颯土くんは仕事でシンガポールに行っちゃって、そのあとは...」

自分がボストンに行ったことはとりあえずは話さずに、

「仕事が忙しいみたいですね違っちゃってて...」

と言いながら、ごくんとお茶を飲んだ。

「そうなんだ。カメラマンも大変な仕事なんだね」

「うん。田村先輩と同じだね」

と、ヒカルは笑った。

近所に買い物に出たり、クリーニングを取りに行ったりと主婦のあかねに付き合っているうちにいつの間にか暗くなり、夜を一人で過ごさなければならないあかねをひとり残して帰るに帰れなくなったヒカルは、このまま泊まって行くことにした。

高校を卒業してから、こんなにあかねと過ごしたのは初めてかもしれない。

懐かしくて嬉しくて、ふたりはあの頃のままにはしゃいだ時間を過ごしていた。

居間の隣の寝室に布団を敷き終えると、

「ヒカルちゃんにパジャマを出さなきゃね！」

と、あかねがワードローブの扉を開けた。

「わっ！結婚パーティーの時のウェディングドレス！見ていい？」

ヒカルはワードローブの中にかかっていた白いドレスを手にした。

下段の引き出しからヒカル用のパジャマを探したあかねは、それも一緒にヒカルに手渡し、どうぞと言った。

「このドレスはお洒落だったね。スラッと細身であかねちゃんによく似合っていたよ」

「ありがとう。膨らんだドレスも着たかったんだけど...それは文化祭の時に着たしね」

と、あかねは首を傾げて笑う。

「文化祭か...、懐かしいね...」

ドレスを見つめながら、言葉と一緒に出てきたイメージがあり、ヒカルはまた胸が締め付けられた。

「風間先輩のドラキュラ伯爵、かっこよかったよね！」

無邪気に笑うあかねにヒカルは微笑んで頷いた。

高校2年の文化祭――。

白いウェディングドレスを着た自分とドラキュラ伯爵の響と一緒に写真を撮った。

カメラマンは、本城高校が誇る写真家、の群竹颯士で、2年C組が催した『ときめき写真館』でのこと。

あの時のポラロイド写真はその後颯士が、色褪せしないようにとコーティング処理をしてくれて今も大切にしまっている。

あかねはドレスをワードローブにしまい、その隣の小引き出しから一枚の写真を取り出してヒカルに見せた。

「あ、これ...！」

『ときめき写真館』であかねがウェディングドレスを着て撮ったポラロイド写真だった。ふわっと膨らんだレースのドレスはヒカルも着た同じものだ。

「このドレスを着た時は群竹くんを想って着たから」

「そうだったね...」

田村の目の前で颯士を想いこれを着て、そして颯士に撮ってもらったポラロイド...

「この時田村先輩はずっとあかねちゃんを想ってたわけだから...、どんな気持ちだったろうね？」

と、ヒカルは笑った。

あかねはポラロイド写真を元の引き出しにしまい、

「群竹のための衣装か...、ってため息吐いてたって」

と、首をすくめて笑った。

田村先輩らしいね、と言いながらヒカルが布団に入るとあかねは明かりを消して自分も隣に敷いた布団に入った。

しばらくの間、ふたりは無言で天井を見詰めていたが、

「群竹くん...」

と、あかねがぼつりと呟いた。

「...どうしたの？」

ヒカルが身体をあかねに向けると、あかねは何かを考えているように上を見たままだったが、心を決めたように顔をヒカルに向け、

「ヒカルちゃんは群竹くんの想い...感じたことない？」

と、微笑んだ。

「...颯土くんの想い？」

「1年の時の文化祭で群竹くんが写したヒカルちゃんと風間先輩の写真も、2年の時のドラキュラと花嫁も、それ以外の時だっていつも群竹くんはヒカルちゃんと風間先輩を心の目で見ていた」

「心の目...？」

「憧れ...かな。輝いてるものへの憧れ...」

「あたしとヒビク...を...？」

「うん。でもそれは、あの頃のヒカルちゃんがいつも風間先輩といっしょにいたからで、本当は...」

薄暗い部屋にあかねの透き通った優しい声が響く――。

「群竹くん...、高校のときからずっと...ヒカルちゃんを想ってるよ」

――...え？

ヒカルは目を大きく見開いてあかねを見つめた。

「...やめてよ、あかねちゃん。高校の時っていったらあかねちゃんと颯土くんは恋人同士...だったじゃない...」

うん、とあかねが頷く気配が伝わってきて、

「...形はね。群竹くんだって意識してたかはわからないけど、私もヒカルちゃんに憧れていたからわかってた。そして、あの頃はそれでよかった...」

「そんな...」

――高校時代はそんなこと感じたことなかったよ...。でも.....。

「...ヒカルちゃんはいつだって風間先輩の方しか向いていなかったから気がつかなかったんだね...」

と、あかねも身体をヒカル側に向けた。

「風間先輩が帰ってきて、ヒカルちゃんと風間先輩を目の前にして、群竹くんは何を思ったのかな...」

あの日――。

パーティー会場で響と颯土が短い会話をしたあと、颯土が自分を見た一瞬の目の中にたくさんの言葉が込められていたように感じた。今までの颯土ではないように思えたあの時から、少しずつ変わってしまった自分と颯土。

――あの子、本当にヒカルちゃんが好きなのね。

颯土の母が言った何気ないひとことが蘇る。

その先を考えたくなくて、意識の遠くに押し込めていた言葉が鮮やかに。

あの目の中にあった言葉が、今、あかねが言った高校時代からの颯土の想いだったというのだろうか。

確かにあの日から颯土は変わった。

響と再会したあの日から――。

「ヒカルちゃん、幸せにならなきゃね！」

あかねはそう言ってから、そろそろ寝よう？と身体をまっすぐ戻し、

「今日はヒカルちゃんがいてくれて嬉しい。おやすみ」

と、目を閉じた。

「おやすみ...」

――幸せに....。

目を閉じた時、あかねの言葉が重く、重く、まるで身体中が鉛になったようにヒカルを覆った。

昨夜あかねから聞いたことを、どう受け止めたらいいのかヒカルにはわからなかった。
あの頃はそれでよかった、と言ったあかねの言葉が胸に刺さり息をするのも苦しいくらいだ。

——あかねちゃんはずっとそんな想いを秘めて来たの？高校の時からずっと、田村先輩と結ばれるまで——。

いつか、颯土と別れ田村と付き合いはじめたあかねをなじってしまったことがあった。

神戸でひとり、必死に自分を探している颯土を待つことが出来ず、寂しさに耐えかねて田村のもとに走ったのはあかねのわがままでと思った。高校時代の3年間、恋人として一緒にいたふたりが東京と神戸に互いの居場所を変えたとしても、心までは離れて欲しくないという祈りに近い想いを裏切られたような気がして...

でも、2年前に神戸からひとり、別れを決めて東京に戻って来た時のあかねはきっと、ボストンからひとりで戻った時の自分と同じ涙を流していたに違いない。

何年も一途に想い続けた恋に終止符を打ったのは自分自身。それでも救われない想いを抱えたあかねを抱きしめてくれたのが田村だ。田村がいたからあかねは颯土との恋愛を素敵な思い出に変えることが出来たのかもしれない。

——田村先輩がずっとあかねちゃんの傍にいたから...。

高校の時から。

あかねが颯土を想っていた頃からずっと、あかねに心を寄り添わせて——。

『群竹くん...、高校のときからずっと...ヒカルちゃんを想ってるよ』

昨夜のあかねの言葉が、一晩経っても消えないまま胸の中を巡っている。

颯土の想いを今は考えられない。

それよりも、颯土をそんなふうに見つめながら恋をしていた、あの頃のあかねの心の中がせつなくてならない。

あの頃の、涙も笑いも恋も友情も、ただただ輝いていた、輝きにしていたたくさんの想いたちがせつなくてならない——。

「...ヒカルちゃん、どうしたの？」

ヒカルは、つわりのあかねに代わってキッチンに立ち、朝食の支度をする手を休めてぼんやりとしていた。

午前8時。

そろそろ田村も帰ってくる。

「ううん...何でもないよ...」

昨日までのカラ元気も出てこないヒカルだ。

「...もしかして、昨夜あたしが言ったことを気にしてるの？」

「気にしてないって言ったら嘘になるけど...」

ヒカルは自分の隣に立ち、切りっぱなしでまな板の上にのったままのきゅうりやトマトを皿に盛り付けているあかねを見つめた。朝はとくにつわりがひどいというあかねは青白い顔をしている。

「ごめんね。あたし、変なこと言っちゃったね。別に群竹くんから聞いたわけじゃないしあたしが勝手に感じていただけかもしれないから気にしないで？ヒカルちゃんは風間先輩と幸せになればいいんだから！」

あかねはゆっくり喋り、ふう...と息をひとつ吐いた。食材の匂いが身体にキツイようだ。

「...あかねちゃん、休んでていいよ。あたしがやるから」

「うん、大丈夫。いつもひとりでやってるんだもん」

今、ここですべてをあかねに話してしまえたらどんなに気持ちが楽になるだろう。響のことも、颯土のことも、きっとまとまらない想いだけが言葉になって出てくるだろうけど.....

「あかねちゃん、あたしね...」

――ヒビクとは別れたの。もう、ヒビクと一緒に幸せにはなれないんだよ...

喉まで出かかったが、青白いあかねの顔を見て言葉にする前に飲み込んだ。

「...あたし...、きゅうりを切るの苦手なの。ほら、見事に繋がっちゃってるでしょ？」

と、ヒカルはまな板の上で器用に繋がっているきゅうりを指差して笑った。

「...あ、ほんとだ。でも、あたしも実はそうなんだあ。毎日修行しています...」

あかねも舌を出して笑った。

◇

帰宅する田村の休息の邪魔にならないようにと朝食を済ませたヒカルが帰り、田村のために寝具を整えたあかねは小引き出しの中から、昨夜見ていた文化祭の『ときめき写真館』で颯土が撮影してくれたポラロイド写真を再び取り出した。

――あんなこと、ヒカルちゃんに言ってよかったのかな...

颯土の想いをヒカルに告げてしまったことに今になって多少の罪悪感を感じているあかねだ。けれど、

――高校の時からずっとヒカルちゃんを想ってきたのは風間先輩だけじゃないんだよ…。

あかねのポラロイド写真はもう随分色褪せてしまい、純白だったウェディングドレスも薄いグレイに見える。

だが、ヒカルが持っているはずのドラキュラ伯爵と花嫁の写真は、あのあとすぐに颯土がコーティング処理をしてあげたようだ。あかねのもやってやるよ、と言いながら結局颯土はそのまま忘れてしまい、ここにあるのは色褪せたポラロイド。

心のアンテナを無意識にヒカルに向けていた颯土を肌で感じる度に泣きたいくらいにせつなくなっただけで、颯土がヒカルを心の目で追ってしまう想いもよくわかっていたから…、「やっぱりあの頃はあれでよかった…」

と、あかねは写真の自分に向かって呟いた。

――結婚パーティーに来てくれた群竹くん…。

2年前の神戸で勝手にホテルを飛び出して、そのあとは一方的に別れの手紙を送りつけ、そしてすぐに田村のもとに走った自分に、おめでとう、と言葉をかけてくれた颯土。

あんなふうに優しい再会が出来る日がくるなんて別れた時は思えなかった。あんなふうに優しい顔をする颯土を見たのも初めてだった。ヒカルが隣に居る日常が穏やかで、そんな毎日を大切にかみしめているということ、ふたり並んだ姿を見た時に感じた。

ヒカルと響の未来を願っていないわけじゃないが、裏腹なところで颯土の想いが届くことを祈っている。説明がつかない矛盾だけど、想いをヒカルに知られないまま長いひとつの恋が終わってしまうことがせつなく思えてたまらない。

――群竹くんの想いが届くことを願わずにはられない…。

ごめんね風間先輩、と心の中で呟いた時、ドアの鍵が回る音がして田村が帰って来た。

「ヒカルは？」

ただいま、の言葉と言う前に田村は狭い部屋を見回して言った。

「さっき帰った。優作さんの休息を邪魔しちゃ悪いからって」

「…そうか。こんなのがポストに入ってたから…」

田村は一枚のポストカードをあかねに渡した。

「これって…？」

ボストンからのエアメールだった。

差出人は浅倉ヒカルになっている。

――お腹の赤ちゃんは順調に育ってる？無理をしないでね。田村先輩、あかねちゃんをよろしくお願いします。

「...どうということ？ヒカルちゃん、ボストンに行ってたの？」

「ヒカル、何も言ってなかったのか？」

「言ってないよ...」

緑の公園でリスが戯れる写真のポストカードを、あかねは何度も裏表を返して見た。響のもとへ行っていたのならそう言うはずなのに、昨日も今日もヒカルはボストンの話など何もしていなかった。

「どうして言ってくれなかったんだろう...」

これまでのヒカルからすれば考えられないことだ。

ボストンのこと、響のこと、こちらが訊かなくても機関銃のように喋り倒すはずなのに――。

「変だな...」

田村の呟きがあかねに不安を連れてきた。変といえば、昨日からのヒカルの様子は変だった。何がどうとは言えないが、確かに自然なヒカルではなかった。

「...ボストンで何かあったのか...？」

と、田村。

「...何かって...なに？」

すがりつくような目で田村を見つめ、あかねはその腕にしがみついた。心臓がトクトクと鳴った。

◇

昨日とは別の重さを感じながらヒカルは自宅の前まで帰って来た。するとそこでまた思い出したのは、同じように朝帰りをした数週間前のことだ。

じわじわと込み上げてくるものを気合を入れて沈める。

――あの時は完全無断外泊だったけど、今日は違うじゃないの！

いつまでも後ろに引き戻ってしまう自分の女々しさがイヤになって、

「...はあ...、まったく...」

と、ため息をひとつ吐いたとき、

「ヒカルちゃん！」

と、声をかけられて、ヒカルは反射的に身体が硬直した。

「帰って来てるってお母さんから聞いて、もう会いたくて会いたくて仕方なかったのよ」

垣根越しに身を乗り出してきたのは颯土の母だった。

「...おばちゃん、ただいま」

ボストンに出発する前日に水月の店で、この母の前で泣いてしまった自分を思い出し、ヒカルのどこかが痛んだ。

「ちょっとうちでお茶でも飲んで行かない？」

「...あ...、うん」

会えばいつもお茶に誘ってくれる颯土の母。淹れてくれるハーブティーはとても美味しくて、今まではお茶に付き合うのが大好きだった。だが、今は何かに後ろを引かれ今までのように「うん、行く行く！」と入っていけない。

躊躇しているヒカルに颯土の母は、

「どうしたの？」

と、首を傾げて訊く。ヒカルは首を横に振って、誘われるままに隣家に入った。

久しぶりの颯土の家――。

前に来たのはいつだったろう？

何にしても、響のことでは心ときめかせ、颯土とはただ笑って過ごしていた頃だったことは確かだ。

そう思うと、胸が掴まれる思いがした。

「今、お茶を淹れるからそこに座っててね」

颯土の母は嬉しそうにキッチンに立つ。

相変わらずスッキリと片付きインテリアのパッチワークが素敵なリビングを、ヒカルはソファ―に腰掛けながらぐるりと見回した。

壁に飾られているパッチワークのタペストリーが以前あったものから新しいものになっていて、淡いオレンジをベースに黄色とブルーのアクセントがきいている柔らかで鮮やかなキルトだ。

「これ新作だね」

ヒカルはキルトの前に立ち眺めた。

「あ、それね...」

お茶を運んできた颯土の母は、トレイを持ったままクスッと笑った。

「え？」

「そのキルト、ヒカルちゃんをイメージして作ったのよ」

「ええ?! あたし?!」

ヒカルはキルトにじっと顔を近づける。

颯土の母はティーカップをテーブルに置きながら、

「ちょっとだけ颯土も入っちゃってるけど...」

と、笑った。

「颯土くんも...? これに？」

「黄色がヒカルちゃんのイメージ、ブルーが颯土のイメージなの」

――あ.....。

キルトを見つめたままヒカルは絶句した。

中心は黄色で絵の真ん中で鮮やかな`華、を描いている。その上下左右で涼しげなブルーが黄色を助け、だが、二色は決して交わってはいない、そんな光景が絵になった優しい作品だ。

「本当はね、ブルーは入れないで作っていたんだけど、オレンジと黄色だけじゃどうも見た感じがしっくりこなくて。ちょこっとだけブルーをいれたらバッチリ！向日葵のヒカルちゃんと風の颯土、ってイメージが頭の中で形になっちゃって勢いのまま作っちゃったのよねそれ...」

「向日葵と風...」

ヒカルはもう一度キルトをじっと見つめる。

「親バカもいいところ。笑ってやってちょうだい！でも...、これ素敵でしょ？私は気に入ってるんだけどね...」

「うん...。凄く優しい感じがするよ...」

じっと見ていると、ほっとするような温かさがしみこんでくる、そんなキルトだった。

その温かさの中に、ヒカルはまた胸の痛みを感じた。颯土の母がこの作品に込めた想いが伝わってくるような気がして、ヒカルは3週間前の水月の店を思い出さずにはいられなかった。

――あの子、本当にヒカルちゃんが好きなのね。

最後に会った日の颯土がキルトの中に見えるような気がして胸がつまる。

「...そういえば、颯土くんはまだシンガポールから帰ってないの？」

ヒカルはキルトから離れ、ソファーに座りなおして訊いた。

「とっくに帰って来たわよ。いつだったかな...？あ、ヒカルちゃんがボストンに発った日...」

颯土の母は思い出したように言った。

「ヒカルちゃんとは本当にすれ違う運命のようよ、あの子。ヒカルちゃんが帰って来た一昨日からは沖縄に行ってるの」

「沖縄...？」

「急に休暇をとってバタバタと出て行っちゃったわよ。あの子があんな素早く決めて行動するなんて珍しいわ」

と、母はまたくすくす笑う。

「休暇...なんだ？」

「きっと、何か考えがあつてのことだと思うけどね」

と、颯土の母はヒカルを見る。

その優しい瞳に心が痛い。

「...そっか。じゃあまたしばらく颯土くんには会えないんだね」

「そうね。いつ帰ってくるのかしら？聞いてなかったわ」

どうして休暇を取ってまで急に旅立ったのだろう、と心の片隅で意識した時、

「ねえ、ヒカルちゃん？」

颯土の母の少し改まったような声でそれがどこかに沈んで行った。颯土の母は、用意したパウンドケーキにナイフを入れ、切り分けたものを皿に乗せながら言った。

「この間私が言ったこと...、気にしていないよね？」

——...え？

目の前に置かれたケーキの皿は壁のパッチワークと同じ柔らかな黄色。ヒカルは視線をその黄色から颯土の母にゆっくりと向けた。

「あの時に私が言ったことは全部私の勝手な思い込みだから忘れてね。お願い」

「おばちゃん...」

「昔からヒカルちゃんのご事は本当の娘のように思ってるの。颯土は関係なく私がヒカルちゃんを好きなのよ。だから...」

引き締まったハーブティーと甘いパウンドケーキの香りと共に、颯土の母のやさしい笑顔が胸に染みる。

「おばちゃん...」

込み上げてくるものをハーブティーと一緒に ごくんと飲み込んだ。

「ヒカルちゃんがボストンに行っちゃった日、私があまりにも寂しがってるものだから、ヒカルちゃんの幸せを喜んでやれ、って颯土に言われちゃったよ」

——颯土くんが...？

「颯土にあんな風に言われるなんて思わなかったから少し驚いちゃった。あの子も知らない間にずいぶん優しい子になったわ...」

颯土の母は優しく微笑む。

「私が不用意に言った言葉で、ヒカルちゃんと颯土の間がおかしくなってしまうのだから...、ずっと心配だったの。颯土とヒカルちゃんには今まで通りでいて欲しいから...」

——群竹くん...、高校のときからずっと...ヒカルちゃんを想ってるよ。

昨夜、あかねが言った言葉と颯土の母の想いがヒカルの中で重なっていく。

「だから、ヒカルちゃんがお嫁に行っちゃってもここを実家と同じように思っていて欲しいな」

颯土の母は真顔で言った。

「おばちゃん...、それ、気が早すぎだよ...？」

半分呆れながら言ってヒカルはお茶を飲んだ。

「だって...すぐに行っちゃいそうなんだもの。ひよっとしたら海を越えた遠いところに...」

半ば潤んだ目で見つめられ、ヒカルは思わず目をそらした。

そして、

「...そうだね」

と、うつむく。

「颯土はどうかかわからないけど、私はヒカルちゃんには失恋よ！だから、せめてこの中ではね？」

と、颯土の母はキルトを見て笑った。

◇

泣きたい気持ちを無理やり沈める、昨日からそんなことの繰り返しのせいであかねの家を出た時から頭の鈍痛が再発していたヒカルだったが、その鈍い痛みは時間が経つにつれて頭から心へ下がっていった。

家ではいつものドタバタが展開されたし、さんざん騒いで暴れていた哲平が寝て、受験勉強の為に久美子が自室に籠った頃になって剛が帰宅した。

剛とは帰国した夜も昨日の朝も会っていなかった。

一昨夜は遅くに帰宅した剛が、妹の帰国に驚いている声が階下でしていたことを、声を殺して泣きながらの中で聞こえてきた。だから、兄が階段を上がってくる間にベッドに潜り、偽りの寝息を立てた。剛はそっとドアを開け部屋の中を覗いたようだが、ヒカル？とひとことだけ呟いたあとは中に入ってくることもなく再びそのままドアを閉めた。

ボストン行きを反対していた母を説得してくれ、空港まで送ってくれた兄。予定通りの帰国であれば、また迎えに来てくれることになっていた。剛にしてみればヒカルの予定外の帰国はやっぱり首を傾げるところがあったのだろう。昨夜もいつもよりも早く帰宅したそうだ。

「可愛い妹の元気な顔が見たくてさあ〜」

と、剛はおちゃらけながら言っていたが、その言葉の中に心配が隠れていることをヒカルは知っていた。空港では姿が見えなくなるまでいつまでも見送っていてくれた兄だ。

「ボストンの風に洗練されて一段と可愛くなって帰って来たでしょ？」

喉元に込み上げてくるものを沈め、また普段と変わらずに努め、自室に上がった時は一昨夜と同じようにどっと疲れが押し寄せた。

ボストン。

ヒビクさん。

何も知らない家族たちが放つ言葉が心に突き刺さり、気を緩めたらまた涙が出てきそうだった。

そのまま沈んで行きそうな気持ちを持ち上げて立ち上がり、無意識にカーテンを開いた時にヒカルは気がついた。

また自分は颯土を頼っている。

一昨夜の自分にあんなに腹が立っていたくせに、また…。

こんなにも身体が無意識に動いてしまうなんて…、とやや愕然としながらも、いつだってひとりで何かに沈み、先が見えなくなった時に気持ちの転機を求めてしてきたことは窓を開き消しゴムやビービー弾を投げることだった。それは、高校生の時からずっと当たり前のようにしてきたことだったから――。

――颯土くん、休暇を取って沖縄に行ったんだね…。

明かりのない窓に向かって心の中で呟いた。

高校2年の夏、朝刊配りのアルバイトをして資金をため、麻耶の兄の純平と沖縄に行った颯土

。あの頃の颯土は今のようないやらしい眼差しを携えてはいなかった。消しゴムを投げて窓を開けさせると、なんだよ…、と不機嫌そうな言葉と態度が返って来た。

颯土が変わったのはあの沖縄旅行からだ。あかねの想いを受け入れ、仲間たちとの触れ合い方も優しくなった。写真と本当の出会いをしたあの時の沖縄旅行はきっと、颯土にとって何かの分岐だったのだろう。

――今回の沖縄は…？

颯土の性格からして、わざわざ休暇を取って海水浴などが目的だとは思えないから、携帯したのは水着じゃなくカメラのはずだ。

今の自分と同じように、颯土もまた何かの分岐にいるのかもしれない。高校2年の頃に出会った何かを頼りに再び沖縄へ飛び、誰にも頼らずにひとりで何かと闘っているのかもしれない。

――群竹くん…、高校のときからずっと…ヒカルちゃんを想ってるよ。

空に輝く星を見上げ、ヒカルは飲み上げてくるものを飲み込んだ。そして、部屋の中を振り返り、柱の傷を見つめる。

そうじ

りょうた

ヒカル

幼馴染の証明――。

出会ったのは子どもの頃じゃなく、高校1年生とずいぶん大きくなってからだが、それでもあ

の頃の自分と颯土を振り返ると、幼馴染、という言葉はすんなりと当てはまってくる。

――仲良くなろうぜ祭りを開催しようと思って。

――こういう幼馴染みたいで良くない？窓からおーいってさ。困ったことがあった時、ヘルプ～って…。

幼かった頃の自分の声が聴こえるような気がした。

あの時から幾度も幾度もここと向こうで会話をしてきた時間を思い出した。

だが、あかねの言葉、そして颯土の母の想いが本当なのだとしたら…、

――もう、頼れないね…。頼っちゃダメだね。

再び向かいの窓に視線を戻し、そのままカーテンを半分閉じた時に突然に灯った明かり――。

――…え？

もう半分のカーテンを持ったままじっと向かい側を見つめていると、やがて閉じられたままだった向かい側の窓が開く。

震える思いをかみしめながら、顔を出すはずの人を待つ。

もしも、今までと違う顔をした颯土だとしたら、もう…。

「ヒカル…」

そう、名を呼んでくれたその人は、今までと変わらない優しい眼差しでこちらを見る颯土だった。

閉まった窓とカーテンが同時に開き、慌てたように顔を出した颯土が、

「...ヒカル」

と、名を呼んで笑った。

それは高校の時からずっと見てきた颯土の、少し照れたような笑顔――。

あかねの結婚パーティーで見た違う顔の颯土とも、そして翌日のふたりの間が変わってしまった瞬間の颯土とも違う、一緒にぶらぶら撮りをしたり水月の珈琲ショップでお茶を飲んだりしていた颯土と同じ。

ついさっきまでの不安な想いがどこかに飛んで行った。

――こんなにも...

颯土とのこの一瞬を心の底から望んで待っていたということをヒカルは知った。

「颯土くん...」

2メートル向こうに立つ颯土はじっとこちらを見つめたまま、ヒカル、と言ったあとの言葉を出さない。

ヒカルはそんな颯土を見つめたまま、2年近く前の粉雪が降る冬の再会を思い出していた。

――あの時も、こんなふうにあたしを見てた颯土くん...。

黒いタートルセーターを着て窓の枠に手を当てて、はにかんだように口元を少し上げて微笑んでこちらをじっと見つめていた優しい瞳。

――ずいぶん遅いお帰りだな、不良娘！

まだ、`群竹くん、`、`浅倉、`と呼び合っていたあの頃の、今よりも少し若い十代の颯土の声が聞こえたような気がした。

あの時も今のように、向かいの部屋に明かりがついて消しゴムを投げたら顔を出してくれる颯土をずっと待っていた。

昔から勉強のことも響のことも、リアクションは関係なく何でも話して、いつもどこかで頼っていた。

――それが、あたしと颯土くん...。

優しい瞳に頼りたい心が我慢できなくて、子どものように泣いてしまった2年前のあの時よう

にまたその....

風に揺れてちりん、と鳴った颯士の部屋の風鈴が、込み上げて今にもこぼれそうになっているものを飲み込む機会を与えてくれた。

「.....どうしたの？」

ひとつの呼吸をしてからヒカルは黙ったままの颯士に言った。

「.....お前こそ、どうしたんだよ...？」

と、颯士。

「あたし？」

「帰ってくるの早くないか？9月まで帰ってこないっておふくろから聞いてたけど...」

——あ....

ヒカルはふう....、と肩で小さく息をして、

「ヒビク.....、」

.....とは、別れてきたの、と言おうとした口が一瞬の間に何かを考え、

「...色々忙しくて邪魔にならないように早めに帰って来たんだ...」

母に言ったこととまったく同じ言葉を発した。

なぜ心と別の言葉が出てしまったのか、ヒカル自身にもわからない。

ただ....

——ヒビクの話....、今ここで颯士くんとしたくない....

今は笑っていたい。2年前のように泣いた顔でこの再会を過ごしたくない。

ヒカルは胸につかえた塊を、ぎゅっと心の奥にしまいこんで言った。

「沖縄に行ってたんだって？おばちゃんから聞いたよ！」

「...ああ」

「おかえり」

「ただいま....。っていうか、逆だろ」

「え？」

と、ヒカルが首をかしげている間に、颯士はフッとひとつ息を吐いて、

「...おかえり、ヒカル」

と、笑った。

——おかえり、ヒカル....

颯士の声と言葉が心の奥に染み込んでゆく。

「ただいま」

ヒカルはかみしめるように言って笑った。

一瞬の間、風が止んで沈黙していた風鈴が再び微かな音を鳴らした。熱帯夜の時期はいつの間にか過ぎ去り、窓と窓に立つふたりの間を穏やかな風が通り過ぎていく。

「今夜は東京も...まあまあ過ごし易いな」

サーッと吹いた風に前髪を揺らしながら颯土が言うと、ヒカルはさっき颯土の家で見たキルトのブルーが目につかんだ。

「...もう9月だもんね」

「幼稚園も始まるな」

「あ...ピアノの練習しておかなきゃ...」

「...えっ?!」

颯土はギョツとしたように言葉に詰まった。

「あ、また消化不良とか言うんでしょう？悪いけどこれでもちゃんと先生やってるんだから」

ヒカルはムツとする。ピアノの腕前を颯土にバカにされるのも昔からのことだ。

「いや？もうそんな失礼なことは言わないさ...」

と、口で言いながら、颯土は手に持っている物を見つめた。

「...それ、なに？」

ヒカルは窓から少し身を乗り出して颯土の手元を覗く。

「ん？浅倉ヒカルってヤツが送ってよこしたポストカード...。なんか...ボストンからみたいだ」

と、颯土は笑った。

「...あっ！そう言えば出したんだった...。すっかり忘れてた...」

——颯土くんと、またたくさん話がしたいよ。秋になったら——。

チャイルズ運河のポストカードに書いたメッセージはちゃんと覚えている。

運河の流れを見つめながら、頭の片隅にはいつも——。

「秋にならないうちに話せたな」

颯土はカードを上げて笑う。

——ほんと...、またこうやって話せて.....。

ヒカルが笑った時、また風が通り過ぎた。

「...ちょっと歩く？」

このまま窓を閉めてしまうのが名残惜しいヒカルが言うと、

「いいぜ」

と、即座に返事を返してくれた颯土。

それぞれの部屋からほぼ同時に外に出て、ふたりは夜風がそよぐ墨田公園を歩く――。

「...颯土くんとかうやって歩くの、ずいぶん久しぶりだね」

「そうだな」

「...沖縄では写真を撮って来たの？」

「まあな...」

「今度、見せてね？」

颯土は一瞬だけ間をあけて、

「...ああ」

少しうつむいて照れくさそうに笑った。

その、前髪から覗く瞳はボストンでいつも感じていたジョーイのはにかんだ瞳と同じだった。

――あんなにジョーイが気になって仕方なかったのは、この瞳のせいだったんだね...

瞼の裏側に貼り付いていた見慣れたものがあの時は形になって浮かんでこなかった。ただ、どこかが騒いでいる心を必死に鎮めようとしながら、この同じ瞳で自分を見つめるジョーイを放っておくことが出来なかった。

今、颯土の瞳からはっきりと浮かんでくるジョーイの面影。

――その逆は見えなかったのに.....。

ヒカルは隅田川に目を向けた。

水面が穏やかに揺れているだけで何も無い川だ。だが、ボストンではいつもチャイルズ河の上に隅田川を重ねていた。

ジョーイの瞳の奥に颯土の面影を見ていたように――。

颯土はヒカルの少し斜め前をゆっくりと歩く。

今はカメラは手にしていないが、それはいつも一緒にぶらぶら撮りをするときを決まって見ている颯土の位置と背中だ。

こんな時でも、ここに颯土がいるだけでこんなにも安らげる。響を想う痛みがどこか遠くに飛んでいく。

それはたぶん今一瞬のことで、また明日になれば同じ痛みはやってくるのだろうけど、今、颯土と一緒にいるこの時は――。

――あたしの中で、颯土くんはどんな存在として生きているのだろう…。

ふと考えて立ち止まると、その気配を察した颯土が振り返った。その、一瞬のテンポが昔からの自分と颯土だ。

『群竹くん…、高校のときからずっと…ヒカルちゃんを想ってるよ』

――あたしもきっとそうだったよ、あかねちゃん…。

『あの子、本当にヒカルちゃんが好きなのね』

――あたしもきっとそうだよ、おばちゃん……。

いつもいつも、自分の中に颯土はいる。

はっきり見えたり見えなかつたりするけれど、高校の時も卒業してから現在までも、颯土が自分の中から消えたことは一度もないだろう。

――でも、ヒビクもいる…。

高校の時から今もずっと、きっと永遠に心の中に住み続ける人――。

颯土と響、自分の中には昔からずっとふたりがいた。

その形と意味は全く違っていたが、存在として心に占めるスペースはきっと同じだった。

「ヒカル？どうした？」

うつむくヒカルに颯土が言った。

「颯土くん…、あたしね…」

ヒカルは顔を上げて颯土を見た。

――ヒビクとは…、

「…ヒビクと……、」

響の名を出した途端、心の奥に沈めておいたはずの塊が込み上げ喉を塞いだ。

「…ん？」

颯土はヒカルの目を見て訊き返す。

「…あの…ね…」

「どうした…？」

暗闇の中で自分を真っ直ぐ見つめる颯土の瞳に吸い込まれていきそうで、たったひとこと、響と別れた、という言葉がどうしても言えない。

一言言ってしまったら……もう…、

意識の上に涙とともに上がってくる感情と言葉を、ヒカルはまた下に沈めた。

「……久しぶりだと、話すこともあんまり見つからないね」

颯土は、はっ！と笑った。

「ヒカルらしくないな？いつだって機関銃のように喋るくせにさ…」

「機関銃のように…？そうだったあ…？」

「自分のことってわかんないっていう、あれは本当だな？昔、大熱出してる俺に消しゴム投げてよこして、真冬の木枯らしの中1時間も喋り続けた奴はどこ誰だったっけ？」

「あ…、あたしかも…」

「…ヒカルだよ！」

高校の時は一方的に飛ばしていた消しゴム。

卒業してからは飛ばし合ったビービー弾…。

――今は…、このまま何も変わらないまま少しの間、昔のままの颯土くんにご甘えさせて…。

ヒカルは舌を出して笑った。

◇

ヒカルの仕草ひとつひとつが、懐かしさとともに胸に鈍い痛みをもたらした。

いつもと同じ笑顔も、いつもと同じ声も言葉も、舌を出す顔も、もう昔のままのヒカルのものじゃない。

――ヒビク…か…。

颯土はヒカルから目をそらして隅田川を見つめた。さっき手にしたボストンの河のポストカードが脳裏に浮かんだ。

ボストンで越えてきたヒカル――。

そう思うと全身が焼け付くほどに熱くなる。今、ヒカルを目の前にして一緒に歩いてみてその想いは、つけた想いの決着に反してふつつつと湧き上がる。

――でも、もう...一番苦しかった時は越えた...、な。

ほんの少し前までは、ヒカルとまたこんなふうに出会えることなど出来なかったのに、今こうやってボストンから帰ったヒカルと真夜中の公園を歩いている自分が不思議だ。

その一方で、話すことが見つからないと言ったヒカルが、昔のように響のことをあれこれと話さないでくれることに救われている。

――機関銃のように風間先輩のことを話されたら...、さすがにキツイもんな...。

と、颯土は苦笑した。

「なに一人で笑ってるの？」

「いや...」

ふと空を見上げると、東京の空にも星が輝いていた。

2日前の石垣島で見た、あの満天の輝きとは比べ物にならないが、見上げればそこにはいつだってある輝き。

星空から視線をヒカルに戻すと、ヒカルも空を見上げていた。だが、どこか遠い目をしているのが気になって、

「...ヒカル？」

と、呼ぶと、

「なに？」

自分を見たヒカルはいつものヒカル。

「いや...、何でもない」

颯土は首を振ってまたヒカルの前を歩き出した。

そして、斜め後ろをついてくるヒカルの気配を感じながら再び星空を見上げた。

――ここでヒカルを見つめ続けたい。ヒカルに焦点を合わせていきたい。今までと何ら変わらずに...。

そう、もう一度心に刻みつけ、指で作ったスクエアから一番輝いているひとつの星を覗き、心のファインダーはヒカルに向けて――。

「昨日、あかねちゃんの新居に行って来たんだ...」

後ろでヒカルが呟いた。

「あかねちゃん、すっかり可愛いお嫁さんになってたよ」

「そうか」

そう答えて颯土は立ち止まり、ポケットから煙草を取り出した。

「高校の頃のいろんな話、夜遅くまでふたりでしてきた。颯土くんのことも色々だね」

ヒカルは颯土の手から煙草の箱を取り上げて残りの本数を数えながら言う。

「...俺のことねえ...。なんだかそれ、痛いな...」

颯土は煙草をヒカルから取り返そうとして失敗。

「痛い...? どうして?」

ヒカルは煙草を持った手を上に高く上げたまま、不安な目を颯土に向けた。

「...いや、女同士の話って怖いものがあるし...」

——何、言われてるかわかんねえよな...。

颯土はヒカルの肩に手をかけて、ひょいと手を伸ばして煙草を取り返した。

「あ...、取られちゃった...。颯土くんあたしがいなかったことをいいことに、随分吸いすぎている?」

...う...、と颯土は詰まる。

「...どうしてわかった?」

「匂い...」

ヒカルは颯土の胸元に顔を近づけて、くんくん、と匂いを嗅ぎ、

「傍にいただけで煙草の匂いがするもん...。前はそうでもなかったよ?」

と、上目遣いに睨んだ。

...う...、と颯土はもう一度詰まった。ヒカルがボストンに発ったあの日から、煙草の本数が増えたのは確かだ。

——けど、鋭い...。

こういうところにだけはな...、と颯土はまた苦笑いをする。

そして取り返した箱から一本抜き取って耳にさし、残りはポケットにしまった。

その様子をヒカルは見つめながら、

「全然だよ?」

と、唐突に言った。

「何が?」

「...あかねちゃん、颯土くんとの恋を凄くキレイな思い出にしていた。何も痛いことなんてないよ」

——...え?

ライターを探してポケットをまさぐっていた颯土の手が止まり、目はヒカルを見つめ、

「...そうか。よかった...」

笑って颯土は俯いた。

「田村先輩、あかねちゃんをすごく大事にしてるしあかねちゃんも田村先輩を心の底から信頼してる…。颯土くんとの恋があって別れがあって、今のあかねちゃんの幸せなんだよね…」

「…ヒカル？」

「…出会って別れて…、人はずっと同じ場所にはいられないんだね…」

ヒカルは誰にともなく言うように呟いた。

「思い出が多ければそれだけ忘れることもつらいし難しいけれど…、でも…誰かが傍にいてくれれば、苦しくなるほどのそういう思い出もキレイなものに換えていけるのかな…？あかねちゃんは田村先輩がいたから……、」

——ヒカル…？

ヒカルの横顔をじっと見守るように見つめていた颯土の目と、顔を向けたヒカルの目が重なった。

「…颯土くん」

ヒカルが名を呼んだ。

「…ん？」

ヒカルは少しの間、次の言葉をためらっているようだったが、やがてフッと肩の力を抜いて言った。

「……あかねちゃんが少し落ち着いたなら、またみんなで会いたいな…。結婚パーティーの時はあだし…、ゆっくり出来なかったから」

ヒカルの口から出た言葉が、どこかで予感したものと違っていたことに安堵した颯土は、ひとつ息を漏らして微笑んだ。

「…そうだな。秋になったらまた集まってもいいかもな」

——風間先輩が帰ってくる前に…、な…。

颯土はヒカルを見つめる。

「うん。ここを借りて同窓会しようね！」

気がつくやうに、ふたりはもう既に明かりの消えた水月の珈琲ショップの前まで来ていた。

9月 秋一一。

ヒカルが勤めるすずらん幼稚園は今日から新学期を迎えた。髪をふたつに結わき、ジャージとエプロン姿でまた園児やその父兄たちにヒカル先生と呼ばれる毎日が始まる。

「たんぽぽ組のみんな、元気に夏休みを過ごせましたかあ〜？」

ヒカル先生は久しぶりに会う子どもたちを前にして、朝から声を張り上げた。

「ボクは海に行ってきたよ！」

「わたしは田舎のおばあちゃんちに行ってきたよ！」

園児たちは口々に夏休みにあったことを話してくれる。

「みんな、真っ黒に日焼けしてカッコよくなったね？じゃあ、久しぶりだけど元気にお歌を歌いましょう！今日は9月の新しい歌で『げんき』だよ？みんな知ってるかな？」

子どもに大人気の映画の主題歌だから、子どもたちは大声で、知ってる〜！と手を上げる。

一一いっぱい練習したからちゃんと弾けるよね....。

ヒカルは多少緊張しながらピアノの前に座り、1ヶ月の練習の成果を発揮した。

空と太陽見上げれば ほら 元気〜

流れる雲を追いかければ また 元気〜

子どもたちの高らかな声が胸に染みこんでいく。

音程もバラバラだし、テンポもリズムもみんなバラバラに好き勝手な歌い方で歌う子どもたちだけど、今、この教室に流れる空気と自分自身がピッタリと一致している感覚に抱きしめられているヒカルだった。

一一ここが、あたしの居場所だ.....。

涙が出そうなほど心の底から、そう思う。

間違えないように指先を見つめながら、子どもたちの歌声を背中で受け止め、

一一あたし...、もう大丈夫...

と、思うヒカルだった。

始業式の今日は子どもたちは午前中でお帰り。

だが、明日からは運動会の練習が早速始まる。本番まで1ヶ月しかないから先生も子どもたちもかなりハードな1ヶ月を送ることになる9月だ。

園児たちをバスで送り職員室に戻ると園長先生と年長担任の遼子先生と一緒に、夏休み前に撮影した七夕行事のスナップ写真を模造紙に貼る作業をしていた。明日から廊下に貼り出して、保護者たちに自分の子どもが写っている写真を買ってもらうためだ。

自分の仕事をしながら何気なくその作業を見ていたヒカルだったが、
「ええ?!」

突然椅子から立ち上がって叫ぶと、園長先生と遼子先生は驚いて手を止めた。

「どうしたんですか? ヒカル先生」

「このスナップ、1枚120円もするんですか?」

コンビニに出せば20円で焼き増ししてくれる普通のスナップ写真だ。

「あんまりじゃないですかあ?」

「しょうがないのよ」

と、園長先生。

園行事の写真撮影は写真館に全て頼んでいるらしく、普通のスナップも割高になってしまいうらしい。

「何もそんなところに頼まなくて、先生たちで撮ればいいじゃないですかあ」

「ダメダメ。じっとしてない園児を素人が撮ると全然上手く写せないのよ。あとでお母さんたちにそれこそ文句言われちゃう」

と、遼子先生。

「でも、120円は高すぎますよお…。10枚買ったら1200円ですよお? よくお母さんたちから苦情来ませんねえ」

と、言いながら、ヒカルの頭に浮かんでいたのは当然…、

「園長先生も知ってる、うちの隣の群竹颯土くんが今カメラマンやってるんですよ! 行事の時は彼に頼んでみたらどうですか?」

と、提案した。

「颯ちゃんが? まあ、そうなの?」

「きっと引き受けてくれますよ! なんとってここの卒園児だし。それに腕は確かですよ? 私はいつも彼の写真に癒されてますから! 言問橋のたもとの喫茶店が彼のギャラリーになってるの知ってます? え? 知らないんですか? 今度是非行ってみてください! 彼ならきっと子どもたちを可愛く撮影してくれますよ! しかも格安で!」

ヒカルの熱心な推薦演説に、園長先生はクスリと笑った。

「ヒカル先生は確か颯ちゃんと同級生だったのよね?」

「はい、高校の時の」

「前に一緒に人形劇に来てくれたものね?」

園長先生は壁際の棚の上に飾ってある、人形劇スタッフたちと撮影した記念写真に目を向けた

。

――あ…。

あったことを忘れていたその写真に、ヒカルの胸がチクッと痛んだ。

写真には響も一緒に写っている。

金色の髪を結んで、オレンジ色のシャツを着て、ヒカルの後ろに立って笑っている高校時代の響――。

――ダメ…。また引き戻っちゃう…。

ヒカルはぎゅっと目を瞑った。

「颯ちゃんがカメラマンねえ。じゃ、ちょっとヒカル先生から訊いてみてくれる？とりあえず来月の運動会に来てもらえるかどうか」

と、園長先生は棚の写真から10月のカレンダーに目を移して言った。

「はい。訊いてみます」

そう答えながら、ヒカルは後でこっそりあの写真はしまっ飛ばさないと、思っていた。

◇

その夜、ヒカルは夏の公演を終えたばかりの海と、新宿のパスタが美味しいと評判の店で2ヶ月ぶりに再会をした。

劇団夢飛行は5月の芸術祭参加をきっかけに知名度が上がり、この夏は鮫島演出の『The Sun InThe Rain』は韓国、台湾で公演され海もずっと海外に行ったきりだった。

「海ちゃん、着々と進化してるね」

「進化なのか？まあ、たくさんの舞台に立てるってことは役者にとっちゃ幸せなことだよな」

と、海は相変わらずおおらかに話し、大きな動作でサラダにフォークを刺した。

「ヒカルはどうなの？元気にしてた？」

「うん。私はいつも元気だから」

と、ヒカルは笑う。

「そういやヒカル、ボストンに行ってたんだな？ハガキが来てた。ヒビクセンパイに会えたんだな」

海は思い出したように大声で言った。

「2、3日前だったか…、亮太が泣きながら楽屋に来たぜ？ヒカルちゃんがとうとう手の届かないところに行っちゃったよあってさ。最初から届かないって一の、なあ」

海は、アハハと笑う。

「で、どうなの？」

口をもぐもぐ動かしながら、うつむき加減に黙って海の話聞いていたヒカルは、

「...どうって？」

と、顔を上げた。

「ヒビクセンパイ、本当に12月に帰って来んのか？」

「...どういうこと？」

ヒカルは海を見た。

「いや、ヒビク先輩が帰って来る代わりにヒカルがボストンに行くのかな？と思ってさ？」

ヒカルは答えずに海から目をそらしてうつむいた。

「こう言っちゃなんだけど、あそこまでチャンスが拓けてる芸術家がさ、それを捨てることは出来ないんじゃないかな、って思った。オレなら絶対出来ないし。やっぱり見えてたらそれを掴みたいって思うだろ。3年半もの間、根性入れて勝負してきたヒカルのヒビクセンパイだしさ。芸術祭で聴いたピアノ、凄かったもんなあ...。だから...、帰って来ないだろうなってヒカルから話を聞いた時正直思ったぜ。あん時は言えなかったけどさ」

サラリと言いながら海はサラダを口に運ぶ。

「たぶん、ヒカルがあっちに行くことになるんじゃないかなって。いずれヒビクセンパイはそう言うんじゃないかなって思った。亮太が泣くのも無理ないな！」

海の口と皿の間を行ったり来たりしているフォークをただ見つめていたヒカルは、

――もう...、あたしは大丈夫...

と、心に呟き、

「...海ちゃんの言う通り。ヒビクは帰ってこないよ――」

――と、

10日前に帰国してから誰にも言えなかった真実を冷静を努めながら言った。

そして、

「そうだろ？だからヒカルが...」

と、言いかけた海を遮り、

「...あたしも、もうボストンには行かない」

と、続けた。

海はフォークを空に浮かしたまましばらく動きを止めていたが、

「...もう、ってことは...？」

と、呟きヒカルの目を見つめた。

言えなかったもうひとつの真実――。

ヒカルはスッと息を吸い込み、

「...別れて来たの」

と、呟いた。

「...マジかよ？」

ヒカルはゆっくりと頷いた。

「ヒカル.....」

「...ヒビクはアメリカでピアノを弾き続けるし...、あたしはここで幼稚園の先生を続ける。あたしたち.....、別々に生きる未来を選んだ...」

たったこれだけの言葉を言い終える時間が果てしないものを感じた。やっとの思いで言った途端、心のどこかに大きな穴が空いて冷たい風が通り過ぎた。

海に真実を話ただけなのに、全身に感じる虚脱感がまるでボストン空港からひとりで飛行機に乗り込んだ時と同じようにヒカルを襲い締め付けた。フォークを持つ手が自然にカタカタと震え、ついには床に落ちて小さな金属音を響かせた。

「ヒカル、大丈夫かー？」

海はヒカルが落としたフォークを拾い、それからテーブルの上で震えるヒカルの手を握った。

「こんなに震えて...。ほんと大丈夫か？」

ヒカルはうんうん、と何度も頷いた。だが、勝手に震える身体は自分でどうすることもできなかった。

「どうしてこんなに震えちゃうんだろう...。海ちゃんに本当のことを話ただけなのに...」

自分自身に戸惑い、ヒカルは視線をあちこちに泳がせる。突然の自分の状態を自分が受け入れられずに全身が冷たくなっていく。

海は、そんなヒカルの手を両手でぎゅっと包んで言った。

「...ヒカル、そのこと、誰にも言ってなかったのか？家族にも、隣人家的のソージにも」

ヒカルは、うん、と頷き、

「...颯土くんには言おうとしたけど、どうしても言えなかった...。言えなくて...」

震えたまま呟いた。

海は両手で震えるヒカルの手をさらに強く握り締めた。そして、言った。

「...ヒカルは、ヒビクセンパイと別れたことを自分の中で現実にしたくないんだな」

その海の言葉がヒカル的心を真っ直ぐに貫いた。震えが止まり、ゆっくりと顔を上げてヒカルは海を見る。

分かっているながら言葉にしたくなかったことを、今、はっきりと海に目の前に示されたのだ、ということヒカルはもう理解している。

海の言葉通り――。

誰かに話して、その真実を現実として受け入れなくてはならないことに恐れを抱いている。たとえ、思い出に締め付けられてもどんなに苦しくても、どこかでまだ響との繋がりを断ち切りたくない自分がある。

だから、あかねや颯土に話すことが出来なかったのだ。あかねの体調を気遣ったからとか、心配をさせたくないからとかじゃなく、昔からの自分と響を見てきた人たちに、それぞれの中で自

分と響の歴史にピリオドを打って欲しくなかったのだ。

「...ヒカルのことだから、たぶん自分から別れを切り出したんだろ？」

大きく息を吐いて必死に呼吸を整えようとするヒカルに、海は煙草に火をつけながらさり気なく言った。

「ヒビクセンパイの未来...考えたんだろ？」

ヒカルは答えずにまたうつむく。

「...って、周りは勝手に想像するよな。本人たちにとっちゃ、そんな簡単な言葉で表せる決断じゃないってのに」

「海ちゃん...」

「これこれこーだから別れましたっていう理屈じゃないだろ...？」

理屈...、とヒカルは頭の中でぼんやりと思った。

「だって、ヒカルもヒビクセンパイも、互いを一番に想い合ってるってこと...、こんなオレにでもわかるぐらいだぜ？」

海は煙が立つ煙草を指に挟んだままヒカルを真っ直ぐに見つめた。

「どんな理由があったのかは訊かないよ。けど、想い合っているのに別れて来たから...ヒカルの本当の部分が終止符を打ちたくないんだ」

「でもそれじゃダメなんだよ...。もう、あたしとヒビクは...、なのに...あたしはいつまでも...！」

——自分で決めてきたことなのに、こんなに震えてしまうぐらいにそれを自分が受け入れられないなんて...！

ヒカルは膝の上に置いた両手でスカートをぎゅっとつまんだ。

「ヒビクの未来だけを考えて身を引いたわけじゃない。あたしたちふたり、それぞれの今いる場所が本当の居場所だから...」

響はアメリカで。

自分はここで。

ふたりの居場所が違ったから——。

「...そうだな。ヒビクセンパイが帰ってきたとしても、ヒカルがボストンに行ったとしても、それが違えたものなら自分の真実はいつかまた顔を出す」

だから真実なんだ...、と、海は呟いた。

「...ヒカルの真実を表に出す、ヒカルがその勇気を持てるか...だな。周りがどう思おうがどうなるだろうが、それがヒカルとヒビクセンパイが決めた未来だってことを、自分が受け入れていくしか...な」

「わかってる...。わかってるんだけど...！」

今はどうしても言えない。
母にもあかねにも、颯土にも――。

「...でも、ヒビクセンパイもヒカルと同じ想いをしてるはずだぜ？それでもふたりはあえて別々に生きる未来を選んだんだろ？」

――ヒビクも同じ...。

ヒカルは、コクン、と頷いた。

「...痛いな。別れたことうんぬんじゃなくて...ふたりの決意と想いがさ...。あのピアノは――」
と、言いかけて海は口をつぐんだ。

「...でも、いつかヒカルの太陽はまた必ず輝くさ。今は『雨の中の太陽』でも。ゆっくり時間をかけて、な」

「うん...」

ヒカルは力なく微笑んだ。

◇

ヒカルが向島の駅に降りた時はもう10時を過ぎていた。

時々国道を走る車のライトに照らされながら、ヒカルは帰り道をたどる。

海に真実を話せたのはきっと、響に同じ思い出がないからだ。海が極力サラリと聞いてくれたことが救いだった。

あかねに話したらきっと泣かれるだろうし颯土も動揺しないはずがない。

高校時代の自分と響を知っている人たちはみんな――。

明日は朝のバス当番だから早めの出勤だ。運動会の練習も、小さな年少児にお遊戯を教えるのはきっと大変だろうしはちゃめちゃで賑やかな毎日になるのは目に見えている。

そんな毎日を自分の居場所で生きながら、響のことも自然にフェードアウトできる時が来るだろう...。

――ヒビクをフェードアウト...。

ぐっと込みあがるものを沈め、再び震えが来る前にヒカルは歩調を速めた。だが、海に示された現実に重く心を塞がれる。

――もう大丈夫だなんて...、そんな簡単にはいかないね...。

深いため息がこぼれた、その時、

「ヒカル」

後ろから突然肩を叩かれてヒカルは、ひゃっ！と、飛び上がった。

「あ、悪い、驚かしたか？」

振り向いたところいたのは同じ電車で着いた颯土だった。

「颯土くん...」

車のライトに明るく照らされた颯土の顔を見て、肩の力がスーッと抜けほっとした。

「今、帰り？」

「ああ。ヒカルは何でこんな時間にこんなところ歩いてる？」

「今日は2ヶ月ぶりに海ちゃんに会って来たんだ」

そうか、と呟いて颯土はヒカルと並んで歩き出した。肩から提げたカメラケースが揺れていた

。

「颯土くん、いつもカメラ持ってるの？」

ヒカルは何気なく訊き、

「まあ...、一応職業がカメラマ...、」

答える颯土に全部を喋らせる前に、

「あっ！そうだっ！」

と、思い出したように叫んで立ち止まった。

今度は颯土が、ひっ？！と、飛び上がった。

「あのさ、颯土くん！」

「は、はい？！」

ヒカルは今日の園での話を、園児を送って職員室に戻ったところからはじめて機関銃のように喋りはじめた。が、余計な話が長すぎてなかなか核心に入ってこない。

ちょうどすぐそこは水月の珈琲ショップ。こおぼしい珈琲の香りが漂っている。

「...珈琲飲んでくか？話はここで聞くよ」

颯土がやや困ったような顔をしながら水月の店を指差すと、

「了解っ！」

と、ヒカルは応じ格子のドアを開けた。その時、温かい風がヒカルのどこかを通して行った。

「おや！おふたり揃って珍しいですね！ヒカルさんは随分久しぶりじゃないですか！」

ふたりが店内に一步足を入れた途端、カウンターの水月が弾ける声で歓迎した。

「ほんと、ご無沙汰してました！水月さんもお元気そうで嬉しいです」

ヒカルは自分専用の白木の椅子を引いた。その隣に颯土も座る。

「何だかヒカルさんもお痩せになりましたか？」

水月は水の入ったグラスをカウンターにふたつ並べ、颯土と見比べながら言った。

「あたし、痩せました？！うれしいなあ！」

と、ヒカル。

言われてみれば...、と颯土は隣のヒカルを見つめた。

「でね？颯土くんさっきの続きなんだけど」

ヒカルが早速話の続きをはじめると、水月はふたりの邪魔をしないように珈琲を沸かしはじめた。ヒカルの言葉の嵐をひとつひとつ受け止めながら飲み込んでいく颯土。ここでのいつものふたりの光景を、微笑ましく見つめながら。

そして、珈琲が入った頃によくヒカルの長話は終わった。

「どう？来てくれる？」

ヒカルが最後にそう言うと、

「うーん.....」

と、颯土は唸った。

「なんか都合悪い？」

「...いや、そーじゃないけど...」

園児を忘れて「ヒカル先生、ばっか撮りそうだ、俺...、と颯土は心の中で呟き、手帳でスケジュールを確認する。

「ちょうど休みの日だから、とりあえず運動会は行ってもいいぜ？」

「ありがとう！園長先生も喜ぶよ！」

「群竹さん、相変わらずヒカルさんに巻き込まれてますね」

という水月の突っ込みに、颯土は、

「はあ...」

と、頭をかくしかなかった。

珈琲を飲み終えたヒカルは椅子から立ち、フロアを歩きながら壁の写真のひとつひとつを見はじめた。何度も見ていた写真だが感じるものがいつもと違うということ、一歩店の中に入った時から思っていたからだ。

「ヒカル？」

颯土はくるりと体勢を回転させてフロアを歩くヒカルを見た。

「ふたり、隅田川、木漏れ日、向日葵、モノクロの教室...」

ヒカルは写真につけたタイトルを言葉にしながらフロアをぐるりと回ってきて、最後の格子窓の前で止まった。

「笑顔と猫...」

「急にどうしたんだ？」

颯土も椅子から立ち上がった。

「...うん。みんなキラキラしてて懐かしくていい写真たちだね」

「何を今更...」

颯土はヒカルの横に立ち、じっと目の前の写真を見つめるヒカルを見下ろした。

「さっき園長先生にも言ったんだけど...、今凄く癒されるよ、この写真たちに。何だか抱きしめられてみたい...」

ふわっと温かい感触の奥に優しい眼差しがあるようだ。

――それはきっと....

ヒカルは颯土を見て微笑んだ。

「おいおい....、どうしちゃったの...」

と、呟きながら、だってこの写真たちは...、と颯土もヒカルを見て微笑む。

「な〜んでもない！ねえ、水月さん？」

ヒカルはくるっと水月に振り向いて言った。

「今度、ここで同窓会をさせてくださいね？みんなにも颯土くんの写真と水月さんの淹れてくれる珈琲を味わってもらいたいから！」

「もちろん、いつでも歓迎しますよ」

水月はヒカルの隣でやや呆然としている颯土を見つめながら優しく微笑んだ。

10月6日に運動会をひかえたヒカルは9月の末から毎日の残業でその準備に追われていた。園庭に張る運動会の旗は園児たちが画用紙に描いた女の子やお花や車や電車たち。これをロープに繋げたり、`魔法使いのおチビちゃん、`というお遊戯で被るトンガリ帽子やマントやステッキを画用紙や模造紙で作ったりという手作業だ。

ヒカルは初めての運動会だから園長先生や先輩先生たちの指導の下で、てんやわんやしながら余計なことを考える暇もない忙しい毎日が過ぎていった。

「運動会...、おもほり...、お遊戯会...、クリスマス会...」

ひとりきりのたんぼ組で作業の手を休めたヒカルはカレンダーを見つめた。続く行事でいっぱいな二学期は運動会が終わった翌日からはもう、12月のお遊戯会に向けての準備を始めなくてはならない。

「12月...」

カレンダーのその数字を見てヒカルは呟いた。

8の数字に○がついているのはその日がお遊戯会だからと、もうひとつ、ヒカルにとっては大切な予定の日だったからだ。

余計なことを考える余裕はこのところ確かにはない毎日でも、時々気を抜いた瞬間にその`余計なこと、`は待ってましたとばかりに心の奥から顔を覗かせる。

職員室に飾ってあった人形劇公演の記念写真は、このあいだこっそりと整理棚の奥にしまってしまった。園長先生も他の先生たちも気がついていないようだし、ヒカル自身もしばらく忘れていたぐらいだ。それでも12月のカレンダーと○がついた8の数字だけで、運動会の準備をしているさ中にもそれは突然降って来る。そしてその痛みはひと月が過ぎた今でも癒えていない。そんな自分を知る度にヒカルは愕然とした。

「弱虫...」

カレンダーから目をそらしてヒカルは教室の外に目を向けた。

電気のついた教室から見る園庭はただの闇。先日、赤や黄色のペンキに塗り直したばかりのカラフルな遊具たちも闇色に溶けてしまっている。じっと見つめているとその中に引っ張られて行きそうだった。

「――いつまでこんな自分であるつもり...？」

窓ガラスに映った自分に向かって問いかける。

ガラスの中のヒカルは無言で見つめ返しているだけだ。その向こうには、やりっぱなしになっている紙やはさみが散乱している。

ヒカルは教室を振り返り、床に広がったそれらに目を戻して、途中だった作業の続きをはじめた。運動会は明後日だからこの旗は今日中に仕上げなければ明日の午後、園庭に張ることが出来ない。園児たちが描いてくれた何枚ものお絵かきを教室いっぱいを使い長いロープに繋げていく。他の教室でも同じ作業を先生たちがそれぞれやっている。もくもくと作業をしているため

、明かりは点いていても園舎の中は妙に静かだ。カチカチと進む壁時計の秒針の音だけが響いている夜9時を過ぎた教室――。

まだ暖房が入ってない夜の教室は薄手のトレーナー一枚では肌寒い。椅子の背もたれにかけてあるフリースのパーカーを羽織った時、廊下を歩いて来た足音がたんぽぽ組の前で止まった。

「ヒカル...先生」

まったく予想もしていなかった低い男の声にヒカルはビクッと肩を震わせて廊下に目を向けた。

扉の外に立っていたのは颯土だった。

颯土は照れくさそうに微笑みながらもう一度、

「ヒカル先生」

と言った。

「...颯土くん、どうしたの？」

いるはずのない人がそこにいる驚きにポカンとしながらヒカルは呟いた。

「...運動会のことを園長先生に訊きに来た。職員室に行ったら園長先生にたんぽぽ組にヒカルがいるって言われて...」

と、颯土は頭をかく。

「幼稚園の先生って大変なんだな...。こうやって遅くまで作業してるんだ？」

颯土は床に散らばったものを眺めながら言った。

「うん。行事の前はね。そんなところに立ってないで入れば？」

扉の向こう側に立ったままの颯土にヒカルが言うと、颯土は、

「いや、いいよ...」

と、笑って首を振った。

甘い匂いのするたんぽぽ組の教室でヒカルとふたりでいることがくすぐったい。髪をふたつに結わき、ピンクのジャージにピンクのエプロン、そして鮮やかな黄色のパーカーを羽織ったヒカルは普段よりもずいぶん幼く可愛らしく見え、颯土は自分が園児だった頃に憧れていた先生を思い出した。

ふと思いついたように颯土は肩に提げているカメラを手にした。

「うるわしのヒカル先生を記念に一枚...」

ニヤリと笑ってファインダーを覗くと、ヒカルは、

「あら、やだわあ〜」

と、言いながらもまんざらでもない様子でニッコリと笑った。

けれど....

――...ん？

レンズの向こうに見えるヒカルにどこか違和感を覚えた颯土だ。

ファインダーを覗くのを止め、もう一度自分の目でヒカルを見ると、
「どうしたの？」

と、ヒカルは首を傾げた。

「...いや」

颯土はもう一度ファインダーからヒカルを見る。

——なんだろ、この違和感...

どこかで何かがしっくり行かない気持ちを抱きながらも颯土はそのままシャッターを切った。
そして、そのあとにもう一度ヒカルを見る。

「...なに？」

と、返すヒカルはいつものヒカルだ。

「...いや...」

——気のせいかな...？

「そう言えば、同窓会の方はどうなった？みんなに連絡はついた？」

思いを巡らせる前にヒカルが出した話題で、感じていたものがスッと逃げていった。

来週の日曜日は水月の珈琲ショップで同窓会を予定している。言いだしっぺはヒカルだが、今のヒカルはこのようにてんでこまいな毎日のため、幹事は颯土がやっていた。と言っても、元1年F組にぎやか組のメンバーたちに日程を確認して連絡を取るだけの幹事ではあるけれど——。

「一応連絡はしておいた。たぶんみんなオッケーだと思うぜ。あかねはちょっとわかんないけどな...」

「あかねちゃんにも電話したの？」

ヒカルは目を真ん丸くして訊いた。

「...したさ」

颯土はややぶっきらぼうに答えた。実際、あかねに電話をするのはかなりの勇気を出した。だが、田村です、と電話口に出たあかねは自分の声を聞いて一瞬だけ息を呑み込んだ様子だったが、すぐに昔のままの優しい声で近況などを訊いて来た。あかねとの会話は驚くほど穏やかだった。

「...頑張ったね、颯土くん」

ヒカルは呟いてうつむく。

その不自然に思える仕草に颯土はさっき感じたものが再び心によぎり、その思考を固めようとした時に、ヒカルはまたそれを遮った。

「あかねちゃん元気だった？」

「安定期...っていつのか？...には入ったらしいけど、どうだろな...？」

颯土は騒ぐものを沈めながら答えた。

「でも、来ないとは言ってなかったでしょ？」

「ああ」

「じゃあ来るよ！」

ヒカルは笑った。

「みんなに会えるの楽しみだなあ〜」

「...その前に運動会、こっちを片付けちまわないとな」

「不安？」

「まあな。子どもを撮るのは初めてなんで！」

ヒカル先生ばかり撮っちゃうかもしれないし、という言葉は心の中で言った颯土だ。

「じゃ、俺は職員室に行ってるからヒカル...先生はお仕事を片付けちゃってください」

「はい。そうちゃんは園長先生とお話しててくださいね？」

ヒカルはくすくす笑う。

「その呼び方やめて...」

颯土はたんぼぼ組をあとにして廊下を職員室に向かった。

「あらそうちゃん、もう帰ってきちゃったの？」

園長先生はずいぶん早く戻った颯土に笑顔を向けて言った。

「あー、はい。ヒカル...先生は作業中でしたから...」

またその呼び方...、と颯土は少し無然としながら答えた。

園長先生はクスッと笑い、颯土に椅子をすすめ、入れたお茶を出す。

「それで、明後日の運動会ですけど.....」

昔と同じ眼差しで自分を見つめて微笑む園長先生にどうも緊張する颯土だ。あの頃は亮太といわずらばかりしてこの職員室で何度も叱られた。`おっかない園長先生、に見つからないように、ふたりであの手この手を使いながらいたずらをしていたその記憶がまだ鮮明に残っているからだ、と颯土は思った。

「よろしくお願いしますね。園児たちを満遍なく撮ってくればそれでいいから」

「...満遍なく、ですね。総合で何枚ぐらいですか？」

「...そうね、園児は全部で60人なのでその3倍ぐらいは」

「了解です」

と、颯土は手帳に書き込む。

「くれぐれもヒカル先生ばかり撮らないようにね」

という園長先生の何気ない言葉に、颯土はギクリとした顔を上げ、

「と...撮りませんよ...」

と、呟いた。

園長先生はまたクスクスと笑う。

「この間、言問橋のたもとの珈琲ショップに行ってみたのよ？ヒカル先生に是非行ってそうちゃんの写真を見て来いって言われてたから」

え...?!と固まる颯土。

「いい写真たちだったなあ…。とくにこの界隈を写した写真。隅田川とか墨田公園とか…ヒカル先生とか…ね」

カーッと赤くなる颯土。

「学校の教室もよかったな。ポストカード買ってきちゃったわ」

「…ありがとうございます」

「そうちゃんの声が聴こえてくるようだった。いろんな声。やんちゃだったそうちゃんとか、そうじゃないそうちゃんとか…」

園長先生はニッコリと笑った。だが颯土にとってはやっぱりいつまでも「おっかない園長先生」だ。

「下駄箱にあったみんなの靴をりょうちゃんとふたりに園庭に全部投げちゃったり、お遊戯会の練習をいやがって物置きに隠れちゃったり、お給食の時間にチョロチョロして椅子に縛り付けられたりしてたそうちゃんが、ずいぶん立派になったものだわね」

「…よく覚えてますね」

と、颯土は苦笑い。穴があったら入って隠れてしまいたい思いだった。昔の自分をあますとこなく知っている人に今の自分を透かして見つめられてるようだ。思わずうつむいた目の先に、ここで叱られながらの小さな自分が、その目線でいつも見つめていた壁の傷がずいぶん下の方になってまだ残っていた。

「覚えてるわよ。そうちゃんはやんちゃなヒーローだったもんね」

――やんちゃなヒーロー…か。

職員室をぐるりと見回しながら颯土は、こんなにも職員室の中を覚えてる園児もあまりいないだろうな…と思った。

今、ここはヒカルの職場。

ヒカルの毎日はこの職員室から始まる。

――不思議だな…。

颯土は廊下の先のたんぽぽ組に視線を投げた。電気の消えた廊下に教室の明かりがぼんやりと注がれている。中でヒカルが動き回っているのか、時々影のような闇が光とクロスして揺れる。

さっき、ファインダーを覗いたときに感じた違和感がまだ気になっている颯土だ。何かが違うと分かっているのにそれを言葉に出来ないもどかしさ。

あれはいったい何だったのだろう…。

「園長先生...」

颯土は視線を再び職員室に戻した。

「はい？」

「ヒカル...、いや、ヒカル先生、最近変わったこととかない...ですか？」

言いながら何を訊いてるんだ、と思った。

どうしてこんなことを言葉に出して園長先生に訊いているのか自分でも分からない。ただ、どこかで微かに感じている不安な感覚に気持ちが落ち着かなくて仕方がない。

「いいえ？いつも元気で明るいヒカル先生ですよ？」

園長先生はきょとんとして答えた。

――やっぱ俺の気のせいかな...

「どうして？」

「いえ...」

颯土が再びたんぼ組を見た時、ちょうど教室の明かりが消え荷物を抱えたヒカルが出てきた。ヒカルは作った旗をいったん廊下を曲がった倉庫に収納してから職員室に戻ってきた。颯土が腕の時計を見ると9時半を回ったところだった。

「颯土くん、園長先生とお話は終わった？」

「ああ。だいたい...」

颯土は園長先生をチラリと見て首をすくめる。運動会のことよりも昔話やその他余計な話の方が長かったような気がする。

「大丈夫ですよ、ヒカル先生。そうちゃんとはちゃんと話しましたから」

園長先生はまたクスッと笑った。

「お疲れさまでした」

他の先生たちも次々に仕事を終えて職員室に戻って来、いつの間にか園舎の電気は全て消されていた。

ヒカルも他の先生たちも仕事が終わったあとはてきぱきと帰り支度だ。

「ちょっと、そこいいかな？」

と、ヒカルは颯土が座っている椅子の側の引き出しを開け糊やはさみをしまう。応接セットなどない狭い職員室で颯土がいた場所はヒカルの机だったらしい。ひまわり組の遼子先生とさくら組の亜希子先生は、呆けた様子でヒカルを見守っている颯土をチラチラと気にしながら後片付けをしている。その視線に気がついたヒカルがふたりに颯土を紹介をした。

「ああ！噂のそうちゃんね！」

遼子先生は妙に納得したように言った。

どんな噂なんだか...、と、颯土は苦笑い。

時間も時間だから、ということでヒカルも含めた先生たちはすぐに職員室の隣のロッカー室に入り着替えをする。仕事が終わったあとはいつまでもダラダラとお喋りはしないようだ。

そして、ふたつに結わいていた髪を下ろし普段着に着替えたヒカルが一番最初に出てきた。あつと言う間の時間だった。

先生一同と颯土も一緒に園を出たのが10時10分前。

颯土は園の駐車場に車を停めていた。

「もちろん乗せてってくれるんだよね？」

と、ヒカルは笑う。

「...どーすっかなあ...」

「ふん！いいよ！歩いて帰るから」

と、膨れてスタスタと歩き出したヒカルの手を、颯土は慌てて掴み、

「冗談に決まってるだろ？」

と、自分に引き戻した。

その力がやや強かったのか、ヒカルが磁石が吸い付くように勢いよく自分の腕の中に返って来た。

ふわりと舞ったヒカルの髪が颯土の唇に触れた。

驚いたような丸い瞳が月明かりと街灯ひとつの闇の中で輝きを発しながら自分を見た。

だが、その輝きが今までとどこか違っている。さっき、ファインダーを覗いて見た時と同じ違和感がある――。

「...ヒカル？」

ヒカルの目を捕らえたまま颯土は名を呼んだ。掴んだままの手に思わず力が入る。

「...なに？」

ヒカルは驚いたままの瞳で見つめ返し、上ずった声で返事をした。

――こんなだったか...？ヒカルはこんなだったか...？

拭えない違和感に不安が募る。

その不安からか、今、こんなに近くで自分に触れているヒカルの体温が心の底に沈めたはずの想いを引っぱり出してくる。このまま強く抱きしめてしまいたい衝動に突き動かされそうになったが、それが力になって腕に伝わる寸前のところで颯土は思いとどまった。

――俺のポジションは...ここじゃない。

やっと、今ここでの答えを出し、颯土はヒカルを放した。

「...ったく。相変わらずすぐに膨れるヤツ...」

颯土は車の助手席を開けてシートに散らばっているガラクタを後部座席に投げた。

「どうぞお乗りくださいませ。お嬢さま...」

まるで執事のように気取ったポーズの颯土に、ほっとしたように息をついたヒカルは、

「...もう少し、中のお掃除をした方がよろしいことよ？」

と、すました声で応えた。

はぁ？と絶句する颯土の前でケラケラ笑うヒカルは今まで通りのヒカルだった。

.....けれど――。

運動会は秋晴れの青空の下で行われ、園児もヒカル先生もはちきれほどの笑顔で園庭を走り回っている。

青空に吸い込まれていく歓声と笑い声があり、小さな園児を誘導しながら明るく笑う`ヒカル先生、――。

だけど――。

――違う...。ファインダーを通して見るあいつは――違う。

園児たちにレンズを向けながらもヒカルの姿を無意識に探し、見つけたヒカルをアングルの中に捕らえた一瞬に見える`絵、は、今まで追いつけていたものと違うことを颯土は確信した。

――どうしてだ...？

園児と一緒に笑うヒカルはいつものヒカル。

だが、今までずっと見てきたファインダーの向こう側にいるヒカルは...

――輝きが見えない...。ずっと憧れてきた光を感じない。

ヒカルの中から失われた光――。

これが言葉に出来なかった違和感の正体だった。

カメラでは園児たちを追いながら、颯土の心の目はヒカル一点に向いていた。

――何故...だ？

現像液の中から浮かび上がる `絵、を見つめ颯土は呆然とした。

レンズに反射するほどの輝きに引き込まれて追いかけ、そして四角い平面いっぱいに溢れるほどの光に満ちていたはずの `ヒカル、。

だが、今手の中にあるものはカメラ目線で笑顔を作っている `女の子、。

頭の中にインプットされている今まで写したヒカルがスライドショーのように次々と目の前に浮かび上がってきた。

高校1年の文化祭。

高校2年のときめき写真館。

高校3年の銀杏並木。

笑顔と猫や桜の下で笑うヒカル――。

たくさんのヒカルを追いかけてきて写真に写せたものもカメラを持ち合わせてなく頭の中のアルバムにしまったものも、ヒカルは何もしないでそこにいるだけで `ヒカル、だった。それを自分は高校時代から意識の上でも無意識の中でも追いかけ心の焦点を合わせていた。

運動会でのヒカルはカメラを向けている自分に気がつくところでニッコリと笑った。まるで、笑顔を無理やり引っ張り出さなければならないという義務感に支配されているような笑い方で、そこには今までのようなナチュラルな輝きがなかった。

――ヒカルしか撮れないカメラマン.....。

それでもいいと心に決着をつけたはずだったが、

――俺が変わったのか.....？

明らかに違う過去と現在の写真たちを比べ、そこに写しだされた結果の意味を考える颯土だ。

自分の中で答えを出し決着をつけてから初めてヒカルと向き合った写真だから、あるいは自分がヒカルを見る目がどこかで変わったのかもしれない。今まで無意識の中でヒカルに合わせていた焦点が、その無意識の中で少しずつズレはじめたのかもしれない。

もう、いくらここに合わせていてもどうにもならない。

その現実を、自分の心がいやと言うほど悟りきってしまったから――。

暗室を後にして自分のデスクに戻り、颯土は写真を机の上に無造作に投げてから崩れるようにして椅子に座り込んだ。

もしもそうだとしたら、もう以前のような絵には出会えないということだ。ついこの間まで自分はそれを望み、心の中からヒカルを追い出すことを考えていた。レンズを通して見えるものすべてがヒカル色になってしまう自分を変えたいとさんざんもがいた。

――もがいた結果がこれなのか？

ひとつの区切りをつけた結果はこんなにも味気ないものだったのか。身体の底から湧き上がってくるこの空しさはいったいなんなのか――。

はあ...、と大きく肩で息をついた時、

「何？新しい写真撮ったの？」

背後から覗き込んで来たのは瑠璃だった。

「まあ！可愛いお子ちゃまたち！どうしたの？こんな写真撮っちゃって！」

瑠璃は机の上にあった園児の写真たちを適当に手に取って言った。

「もしかしてこの中に群竹くんの隠し子がいるって言うんじゃないでしょうね～？」

「ち、違いますよ！何言ってるんですか！友人に頼まれて幼稚園の運動会を撮影してきたんです」

「ふーん。群竹くんの友人って先生でもやってるの？」

「まあ...」

「へえ～。群竹くんにも女の子の友人がいたんだあ」

瑠璃は妙に感心したような口調で言った。

「なるほど～。この子ですなあ？」

次々とめくっていた写真の中から、夜の教室でヒカルだけを写した一枚に目を留めた瑠璃は、肘で颯土をつついて冷やかす。

颯土はあっ...！と小さく叫んでその一枚を取り返そうとしたが、瑠璃はサッとすばやく手を上に上げてそれを防いだ。

「カメラ目線の笑顔だね？撮られるのをすごい意識しちゃって可愛い～！」

「...え？」

立ち上がろうとして腰を半分浮かしたままの姿勢で颯土の動きが止まった。

「...意識してる？この写真そう見えますか？」

「何言ってるの？自分で撮ったんでしょ？被写体の状態がわからないってわけでもなかったでしょうに？」

颯土はゴクリと生唾を飲んだ。

「それはそうですが...。じゃあ、これは？」

颯土は園児たちの写真の中に埋もれていた、以前写したものを探して瑠璃に渡した。

「これも意識してるように見えますか？」

瑠璃は颯土から受け取った写真にじっと見入った。白いTシャツにジーンズの普段着姿で、やっぱりこちらを見て笑っているヒカルだ。

「これ、同じ子？」

「そうです」

「何か違うね？アングルは同じだけど中身が全然違うよ？」

「中身...」

「こっちはとってもナチュラル。そっちはガードが堅いって言うか...、光と影のような対照的な二枚だね」

そう言いながら瑠璃は二枚の写真を颯土に返した。

「何かあったんじゃないの？この被写体の子に」

瑠璃のそのひとことは頭に重たい鉄の塊が落ちてきたような衝撃だった。

自分の目が狂ったわけじゃなかった。

自分の目は変わらずにヒカルを見ていた。

変わったのはやっぱりヒカルー。

――何があった...？

颯土は写真のヒカルをじっと見つめた。夏のヒカルと秋のヒカル。

ボストンに行く直前とボストンから戻ってからのヒカルー。

――そうだ、ボストン。風間先輩...だよな...。

変わっていて当たり前だ。

ヒカルはボストンで響と3週間近くを過ごし、もう普段着のままのヒカルではない。今までのような無邪気さは消え、これからの自分にとってのヒカルはよそ行きで当たり前。作られた笑顔で当たり前――。

スーッと胸に落ちてくる重い塊を飲み込んで、颯土は今更そんなことに気がついた自分に少し腹を立てながら写真を袋にしまう。

――でもあいつ...、どうして風間先輩のことを一言も言わないのだろう...？

ボストンから帰ったヒカルと再会してから今日まで、響のこともボストンでのこともヒカルからは一言も聞いていないことにたった今気がついた。

今まで考えもしなかったが、ヒカルから響の名を聞かないのは不自然だ。高校時代からついでの間までその人のことは耳にタコができるほど一から十まで喋りつくしていたヒカルだったのに

—まあ...、今はあんまり聞きたくないことだからいいけど...

とは思う。

ボストンで響と過ごした甘い時間の話をあれこれされるのはキツイ。今はまだ、高校時代のよ
うに笑っては聞けないだろう。

—高校時代...？

ヒカルと風間先輩は—。

今、何かを思い出したような気がした。

だが、意識の上に上がってくる前に無意識がそれを沈めてしまった。

◇

翌週の日曜日は水月の珈琲ショップに、ヒカルと颯土をはじめ、あかね、麻耶、祐輔、勇斗が
集合して元1年F組にぎやか組同窓会が行われた。

このメンバーが同じテーブルに集合したのはあかねの結婚パーティーを除けば高校卒業以来の
3年ぶりだ。

同窓会を企画した言いだしっぺはヒカルだ。だが、運動会の準備でてんてこまいだったヒカルの
代わりにみんなに連絡をしたり日程を調整したり水月と打ち合わせをして会場のセッティング
をしたのは颯土だった。

「ちょっと意外だったなあ...」

颯土の行動力にかなり驚いた調子で呟いたのは麻耶だ。このメンバーの中では一番そういう役
目をやりそうもないのが颯土だからだ。

「でも...群竹くんから電話をもらった時はうれしかったな」

と、昔と変わらない調子でふんわりと笑ったのはあかねだ。昔と違うのはもうお腹が完全に突
き出た状態のマタニティーレディーだということ。あかねは妊娠6ヶ月を過ぎてつわりもようや
くおさまり顔色もずいぶんよくなった。

「...かなり勇気出したんだぜ？田村先輩が出たらどうしようって思ってさ」

颯土は頭を掻きながら笑った。

「そうだろうと思った」

あかねもくすくす笑う。

「群竹ちゃんとあかねちゃん、いい感じだなあ...」

勇斗がしみじみと呟いた。

「そう？」

「ふたりとも大人になったな～って感じ」

「そりゃね。だってあかねはもうすぐママになるんだし。いつまでも甘ったれじゃないでしょ。群竹くんだって社会でもまれてるわけだからいつまでもネクラじゃいられないだろうし」

と、相変わらずシビアに言い放つ麻耶の言葉に、あかねと颯土は顔を見合わせて笑った。

「なに？あたし、何か変なこと言った？」

「いや。結野の言う通りです」

「そ。麻耶ちゃんの言うとおりに」

その自然なふたりの会話がヒカルには眩しく見えた。

3年前までは恋人同士だった颯土とあかねだ。このメンバーで集まるときもそうでない時もふたりはいつでも触れ合い仲良く寄り添っていた。

別れがあって互いに別々の時間を何年か過ごして、今こんな風にまた自然に笑い合っている颯土とあかね――。

――こんな風に…。

「ヒカルちゃん、元気かい？」

颯土とあかねをぼんやりと見つめているヒカルの目の前で、勇斗は手を振る。

「…え？あ、うん。元気だよ！」

ヒカルは視線を勇斗に移し、にっこりと笑う。

「浅倉はずいぶん変わったよなあ？」

「あたし、変わった？」

「おきさん、じゃなくなったって気がするよ？適度に落ち着いて女らしくなったっていうのかな？」

「あら！そんなこと言っても何も出ないよ～」

ヒカルは祐輔の肩をポンと叩いた。

「そりゃそうよね？ヒカルちゃんだって今は恋愛真っ最中なんだからいつまでも`おきさん、じゃないわよね～？」

と、麻耶。

ヒカルは、

「そりゃねえ～？でもそれは麻耶ちゃんもでしょ！」

と、話しを合わせて笑う。

`おきさん、じゃなくなったから輝きが見えなくなったのか、と颯土は思い、そして、どこか不自然に見えるヒカルの笑顔をじっと見つめるあかねだ。

「…それから群竹」

「俺？」

祐輔はスッと立ち上がり、フロアを飾っている写真たちに視線を投げた。

「いい写真じゃないか。素朴な素材だけど胸に迫ってくるものがあるよ。光が溢れてる」

祐輔はゆっくりと壁に向かって歩き出した。そして、ひとつひとつをじっくりと見て回る。

「それ褒めすぎ」

「いや、そんなことないさ。高校の時から群竹にはかなり刺激されてたけど、今日またいい刺激を受けたよ。これ...、」

と、祐輔は『モノクロの教室』の前で立ち止まった。

「卒業式のあと、ひとりで校舎に入って撮ってきた写真だろ？」

「...ああ、そうだ」

颯土も祐輔の横に立って自分が撮った教室を見つめた。

その一瞬――。

「――あっ...！」

颯土は小さな叫び声を上げた。

「どうした？」

――これに色はいらない、な...。

この写真を撮った時に思ったことが蘇った。

焦点の合った机の上には並んだふたつの文字があった。

――一緒にいなくても響き合いながら輝いてるんだな、浅倉と風間先輩は...。

シャッターを押す指に込めたものは、ヒカルと響の輝きを色褪せたものにはしたくないということだった。思い合うふたりは強烈な光と輝きを発散させ、この頃の自分はその光に憧れ続けていた。

ふたりがくれた光と輝きこそが自分の原点だと思い、フィルムを白黒に変えて撮った一枚がこれだ。

――一緒にいなくても、思い合い繋がっているだけで輝いていたヒカルだった...よな...？

颯土はフロアの真ん中で麻耶たちと笑っているヒカルを振り返った。

――あの笑顔は偽りだ。ヒカルはあんな作り笑いをするヤツじゃないはずだ。

少女から女になってよそ行きに着替えてもおきゃんじゃなくなっても、ヒカルはヒカルであるはずだ。響と思い合い今を幸せに生きているのであれば、その光は今まで以上に輝いていていいはず...。

——ヒカル……？

どうして風間先輩のことを言わないんだ？どうしてボストンの話をしないんだ…？

たった今、そのことが何よりも不自然に思えてきた。

聞きたくないことだからと、意識の外に放り出していたことだったが、それが何よりも——。

「あの入り口に飾ってあるヒカルちゃん…最高だね」

いつの間にか祐輔はみんなの場所に戻り、隣に立っていたのはあかねだった。

「私、高校の時、ヒカルちゃんのおんな笑顔にずっと憧れてたな」

「あかね…」

「…群竹くんもそうでしょ？ここにある群竹くんの写真たち、みんな優しいよ」

あかねは颯土を見て微笑んだ。

「ここに来てからずっと、群竹くんの想いをたくさん感じている。きっとみんなもそうだと思う。言わないだけで…ね」

颯土は勇斗たちと高校時代の思い出話で盛り上がりケラケラ笑うヒカルを見つめる。

「だって…おんな笑顔のヒカルちゃん、ヒカルちゃんをよく知っていてヒカルちゃんをまっすぐに見つめている群竹くんにはしか撮れないんじゃないかって思うもん。そうでしょ？」

「…そうかも…な」

ヒカルしか撮れないカメラマンだから…、と颯土は心の中でつぶやく。

「あれが本当のヒカルちゃんだよね？今のヒカルちゃんは違う…よね？」

「あかねもそう思うのか…？」

颯土は声のトーンを下げて言った。

「よかった…。やっぱり群竹くんは感じてたんだね…」

あかねはほっと安堵の息をついた。

「私、ずっと気になっていたの。夏の終わりにヒカルちゃんがウチに来たときから」

ヒカルがあかねの新居を訪れたのはもう2ヶ月近くも前のことだ。

ヒカルは響のこともボストンのことも何も言わずに帰り、そのあとにボストンからのポストカードが届いた。

「あいつ…、あかねにも言わなかったのか…？」

「うん。風間先輩のところに行ってたなんてひとことも言わなかった」

——何故なんだ…？

颯土の心臓がトクトクと早いテンポを刻み始めた。

「おかしいと思った優作さんが風間先輩に手紙を書いたの。でも…」

「風間先輩は…？」

「その手紙…、宛て先不明で戻って来ちゃったの」

「どういうことだ？」

「わからない。電話も繋がらないらしいから...、どこかに引っ越してしまったみたい」

「だって...、風間先輩は12月に帰ってくる予定なんだろう？それなのに今...？」

颯土は汗ばむ両手を思わず固く握り締めた。

「優作さんが言うには...、帰って来ないつもりなんだろうって...。それだけじゃなく、ヒカルちゃんと風間先輩は――」

「.....ちょっと待ってっ！」

あかねの言葉の続きを颯土は叫び声で遮った。

ヒカルや麻耶たちがその声に驚いて会話を中断し颯土に注目した。

颯土はあかねの目の前に手をかざしたままの状態に固まっていた。頭の中では混乱した思考を必死に整理している。

――ちょっと待ってくれよ。

ヒカルと風間先輩が...？まさか、そんな...？だとしたら、それをヒカルは2ヶ月も黙ってるってことなのか？だから俺が見たヒカルはいつも不自然に笑ってたのか――？

顔を上げた颯土はゆっくりとヒカルにその顔を向けた。

「...なに？」

のど元に詰まったような声でヒカルはつぶやいた。

――ヒカル――。どうして風間先輩のことを言わないんだ？どうしてボストンの話をしないんだ...っ？！

「ヒカル、ちょっと」

颯土はヒカルの腕をつかんだ。

「...な...に？」

颯土は答えずにそのまま引きずるようにしてヒカルの腕を引いて歩き出した。

「ちょっ、ちょっと、颯土くん、どこに行くのよ？」

――何やってんだ、俺...？ヒカルを連れ出して何をするつもりなんだ...！

ヒカルの手を引いたまま店を出た颯土は、自分が何処に行こうとしているのかもわからない。だが、動き出したものはもう止まらない――。

握った手に力をこめて、颯土はそのまままっすぐ隅田川に向かって歩いて行った。

波止場を出発してきたばかりの水上バスがゆっくりと隅田川を走って行った。

水の匂いが漂う公園を川が流れる方に向かい、ヒカルの腕を引いたまま颯土はただ無言で歩くだけだ。

水月の店を出た時までは勢いがついてきた歩調もだんだんとその速度は遅くなり、最初は進む颯土にやや抵抗しながら歩いていたヒカルも、今は黙って腕を引かれ、颯土が行くままに任せている。

川岸までまっすぐ歩いて来たとき、ずっとヒカルの腕を握ったままでいる颯土の手にこめられていた力が少しずつ緩んでいった。10月の夕暮れの冷たい空気で頭は冷え、風にさらわれて足元に落ちた木の葉が靴の下でカサッと鳴いた。

その音と感触を合図にするようにして颯土はようやく立ち止まり、握っていたヒカルの手をそっと放した。

「ヒカル」

振り向いて名を呼ぶと、ヒカルは今放された右手の手首を左手でさすりながら顔を上げた。

いつもと変わらないように見える笑顔が小さな顔に貼りついている。だが、今はもうそれも偽りにしか見えない颯土だ。

勢いでヒカルを連れ出して来てしまったことを、ここまで来る間に少し悔やんでいた。だが、今またヒカルの顔を見てさっき思わずヒカルの手をつかんでしまった時の想いが蘇った。

「ヒカルに訊きたいことがある...」

「.....幹事がいなくなっちゃって、今頃みんなきっと驚いてるよ？」

ヒカルは颯土の目から微妙に視線を外した川の向こうを見つめた。左手ではまだ右手をゆっくりとさすっている。

「あいつらのことは大丈夫さ。そんな気を使わなきゃいけないようなヤツらじゃない...」

そう答える颯土の目はヒカルを捕らえたまま離さなかった。

「颯土くん...」

ヒカルはまっすぐに自分を見る颯土の視線に痛みを感じた。

水月の店からここまで来る短い間、痛いぐらいに自分の腕を握る颯土の手が熱かった。言葉を出すこともできない緊迫した想いがさっきまでその手を通して伝わっていた。

「悪い...痛かったよな」

ずっと右手を押さえたままのヒカルに颯土は言う。

「うん...。跡がしっかりついてるよ」

袖をまくって見せた手首はそこだけ肌が赤い色に変わっていた。

強い、強い颯土の想いの跡――。

そこまでして颯土をこの場所まで動かしたものが何なのか、水月の店でも今ここでも自分を見た目にある鋭い光の中からヒカルはどこかは感じ取っていた。

「ヒカル」

颯土がもう一度名を呼んだ。

「なに？」

颯土より半歩下がった位置に立っていたヒカルは、その半歩を縮めて颯土の真横に立ち、正面の隅田川を見つめた。

水の上にはさっきの水上バスがつけた一筋の白い線が延び、両サイドから戻ってくる波がバスの足跡をゆるやかに消していく。

颯土も同じようにして同じものを見つめ、

「...ヒカルがボストンからよこしたポストカード、川の写真だったな」

と、つぶやいた。

「うん...。チャイルズ河っていう名前...。ヒビクのアパートのすぐ近くを流れてる河なの。河沿いにはここと同じようにまっすぐ続いた遊歩道があって...、」

ヒカルの言葉はそこで途切れた。

少年たちの甲高い声が聞こえ、自転車に乗った少年ふたりが隅田川に向かって立つヒカルと颯土の後ろを走り過ぎていった。

その一瞬に通り過ぎた風でヒカルが思い出したのはローラーブレードを滑らせていたジョーイだ。

「颯土くんとまたたくさん話がしたい、秋になったら...、そう書いてあったな」

颯土の黒髪が風にサラサラと揺れている。

その間から覗く瞳は、ジョーイの中に見えていたそのものだ。

「...うん。そう書いた」

「秋になったけど.....、お前は何も話してないよな？ボストンのことも...、風間先輩のことも...っ！」

颯土の言葉に、ヒカルは目をかたく閉じてうつむく。

そして、

「...だってそれは颯土くんが訊かないから...」

と、呟いた。

颯土はうつむくヒカルをしばらくじっと見下ろしていた。それから、スーッと大きく息を吸い込んで言った。

「ボストンで何があった――？」

颯土がその言葉を出した時、空の上を飛行機が音を立てて飛んで行った。

ヒカルは上を見上げ、

「ボストンで...、」

と呟き、そのあとの言葉を濁してもう一度川面に視線を向け、

「.....チャイルズ河にはヨットがたくさん浮かんでいたんだよ。今ぐらいの時間は夕日が水に反射してキラキラ光って...、停泊しているヨットたちも夕日色に染まってすごく綺麗だった。遊歩道を散歩している人たちが声を掛け合っているの。全然知らない人同士なのに、ハイッって手を上げながら...」

と、颯土が問いたいこととは無関係な話をする。

「その遊歩道には毎日同じ時間にローラーブレードでやってくる男の子がいたの。あたしはその子と友達になりたくて英語も出来ないのに一生懸命身振り手振りで会話をしたんだ」

颯土は黙ってヒカルを見つめたままだ。

「もっと英語を勉強しておけばよかったなって思ったよ。でも、ボストンには日本人留学生もたくさんいるから、その人たちが利用している案内所のお姉さんにいろいろ助けてもらったんだ。すごく親切な案内所で留学生たちはみんなその人を頼りにしてて。それから...、」

「ヒカル」

続くヒカルの言葉を颯土はようやく遮り、ピクッと肩を震わせたヒカルはゆっくりと颯土に顔を向けた。

「ヒカル...」

息を呑み颯土は呆然とした。

さっきまで貼り付けていた偽りの笑顔さえもない、泣いてもいない、感情の行方がわからない顔でヒカルは自分を見つめている。

——こんなに表情のないヒカルには...、会ったことがない——。

背筋につめたいものがほとぼしる。

曇った場所から日向に出た瞬間のような温かさがヒカルのはずだった。

それはいつでもどんな時でも、出会った時から今まで変わらなかったはずなのに。

「——颯土くん、あたしね...」

ヒカルは、大きく瞳を広げて自分を見つめる颯土をまっすぐに見た。

いつか海に真実を話した時と同じように足も手も全身に微かな震えがこみ上げて来た。

けれど、ひとつの息を小さく吸ってはいてから、

「ボストンでヒビクと...、」

と、言葉を繋げ、

「……………」

あとの言葉は言えずにうつむいた。

肩を震わせてうつむくヒカルだけで、颯土はヒカルが言えないひとことを理解した。

違っていた過去と現在の写真、田村が確認しようとして出来なかった答えがもうここに出ている。

——ヒカルと風間先輩…別れたのか…？

颯土は自分の中でその事実を言葉にした。

心臓は鳴り、頭の中は混乱し、心も乱れ——、

その高鳴りが、

「どうして…！」

という叫び声に出ってしまった。

——どうして…。

ヒカルは心で呟いた。

「…あたしとヒビクは——、」

——ヒビクセンパイが帰ってきたとしても、ヒカルがボストンに行ったとしても、それが違えたものなら自分の真実はいつかまた顔を出す。

海が言った言葉をヒカルは今またここでかみしめる。

「ふたり…、それぞれの今いる居場所が今の真実だから…、ヒビクはアメリカでピアノを弾き続け、あたしはここで——」

ここで……。

ヒカルは流れる隅田川を見つめた。チャイルズ河のように澄んだ色はしていない川の水だが、この流れと匂いがあるこの場所が自分のいる所…。

2ヶ月前から、もう何度も納得しなおしてきたことを、今また颯土の問いに答えながらヒカルは改めて心に刻みつけた。

「颯土くん…」

垂れた前髪の間から覗く颯土の瞳はまっすぐに自分を捕まえている。手首の感触もまだ消えていないうちに、今はさっきよりももっと強い力が自分の両肩をつかんでいた。

「...だから...、私とヒビクは終わったの...」

言葉にしながらヒカルは想いを飲み込む。

「お互いに別々の未来を生きることに決めたから...」

「それでいいのか...?!」

ヒカルの肩に置いた颯土の手にいっそうの力が入る。

会えない長い時間を経ても互いの想いを繋いできたふたりが、たった3週間のために別離を決めた現実を実感できるはずがない。

あかねの結婚パーティーで響に再会したのはつい2ヶ月前のことだ。

あの時から己の想いに区切りをつけた夏の終わりまでの果てしなく長く苦しかった自分の時間のことがよぎらないわけじゃない。

だが、それよりも心に刻みついている高校時代から今まで見てきたヒカルと響、ふたりの絵が鮮やかすぎる。

コクンとうなずいてヒカルはまた貼り付けた笑顔で微笑んだ。ナチュラルではないその笑顔には不自然なえくぼが出ている。

――いいわけないだろ！

「こんなに震えているくせに...っ！」

颯土はヒカルの肩を揺らす。

颯土が肩をつかんでいなかったら今にも足元から崩れていきそうだった。かみしめてもかみしめても、まだこんなにも震える自分にヒカルはまた愕然とする。

「何で颯土くんには分かっちゃうのかな。あたし普通に振舞っていたつもりなのに...」

震えたままのヒカルが言った。

「ヒカル...」

「何度も颯土くんには言おうと思ったけれど...、喉に言葉が詰まって言えなかった。いつもと変わらずに笑って毎日を生きながら、だんだん胸のつかえもときほぐれてくるだろうって思っていた。そうなった時に話そうって思ってた」

「...たかが本城の演劇部経験したぐらいの大根役者に女優は無理だったってことだよ」

「ひどい...。颯土くんだけには...だよ」

明かりが灯りはじめた川の向こう側の街に目を移し、ヒカルは小さなため息を吐く。

「ヒカル？」

ヒカルの肩をつかんだままの颯土はその視線を追い瞳の中を覗く。

ヒカルの瞳が動き、そこに映る自分の姿が見えたとき、

「後悔はしていないよ...。ただ、つらいだけ...」

と、ヒカルはつぶやいた。

「ヒカル...」

「会えないこと、触れ合えないことが寂しいだけ。約束をしなかったことが苦しいだけ...」

「...約束？」

「未来の約束...」

「...なんで！今は風間先輩にはアメリカでやるべきことがあるのかもしれないけど、未来にヒカルがいてもいいじゃないか！その未来に向かって今を生きることは出来ないのか？！」

「...分からない。出来たのかもしれない。でも、後悔したかもしれない。今はもう分からないけど、あの時私たちが決めたことが真実なんだよ...。私もヒビクもそれでいいと思ったから今のこの現実なんだよ...」

現実...、と颯土は呟いた。

「私は自分で決めたことを自分で受け入れる勇気がなかつただけ。だから、颯土くんにもお母さんにもみんなにも言えなかつたの。でも...、」

と、ヒカルはまっすぐ顔を上げ、

「今、颯土くんに言ったら胸のつかえが少し取れたよ」

と、えくぼを見せて笑った。

「.....ありがとう。あたしも大丈夫。明日からはちゃんと前を見て歩いていけそうだよ」

「ヒカル...」

ヒカルの肩をつかんだ指先が熱くなる。

強烈にこみ上げてくるもので胸の中も熱い。

どこまでも強がるヒカルが愛しくて悲しくて....、

——その笑顔が本物じゃないことなんかとっくにわかっているのに、まだ俺の前でそうやって笑おうとする...！

「...本当にいいんだな？風間先輩とは本当に終わったんだな？」

口から出た声は、自分でも驚くほどに低くかすれていた。

「...うん」

うなづくヒカルの振動が手を伝って心の中にまでも響いて来た。

「...ヒカル！本当にそれでいいのか？！」

もう一度同じことを訊く。だが、何度訊いてもヒカルが同じ答えを言うことはわかりきっている。

本当であるはずがない答えを——。

「うん...」

つかんでいたヒカルの肩からゆっくりと手を放し、颯土は放心したように立ちすくんだ。

全身に流れる血が熱い。

熱くてたまらない——。

今、欲しくてたまらなかった人が目の前にいる。

どうあがいても手が届かないはずだった人がここにいる。

もしも今――、

「...俺がお前に...、愛してるって言ったら――」

掠れたままの声で颯土は呟いた。

「――風間先輩のことは考えずに受け入れられるのか？」

「...え？」

ヒカルは顔を上げ颯土を見た。真っ黒な瞳が優しく鋭くヒカルを貫いていた。

その間に交わったヒカルの視線――。

――何を俺は...

熱くたぎる想いを冷ますように、颯土はヒカルから川の水に視線を流した。

そして、

「...例えばの話さ...」

と、深く息を吐く。

「出来るはずないだろ？俺じゃないにしても、風間先輩以外のヤツを受け入れるなんて出来ないだろが...」

うう...、とヒカルは微かな嗚咽を漏らした。

「俺は、分断したヒカルと風間先輩を真実として見られないぜ...。ヒカルと風間先輩でひとつの絵だったから...」

――昔から...

「...それでもそれが現実なんだよ...！」

少しだけ声を高ぶらせてヒカルは言った。

「...現実、か――」

颯土は肩で息を吐いた。

「さっきあかねが言ってた。田村先輩が風間先輩に出した手紙が戻ってきたって」

「...え？」

「宛先不明...、電話も繋がらないって...」

「――そんなんっ！どうして...っ！」

ヒカルは思わず颯土の腕をつかむ。颯土はその手をじっと見下ろし、

「...風間先輩がもうどこにいるのかわからないらしい」

と、呟いた。

おさまっていた震えが再び襲って来た。

それはさっきまでのものとは違い、全身を強く揺さぶられ、立ってられなくなったヒカルはとうとう地面に崩れた。

——ヒビクはあのアパートを出てひとりで歩き始めた...？

微かに繋がっていた最後の糸が途切れたことをヒカルは思い知った。

「...それでいいんだよ。だから...私たちは約束をしなかったんだから...」

地面に座り込んだままヒカルは呟いた。

「ヒビクは...ヒビクの未来に向かって...歩き始めたんだよ...。彼の音楽を響かせていくために...、夢のために...」

ガクガクと全身を震わせたままヒカルは途切れ途切りに言葉を発する。

「ヒビクがどこにいても...どこにいるか分からなくても...ヒビクはきっと...」

「ヒカル...」

立ったままヒカルを見下ろしていた颯土がゆっくりと腰を落とし、地面についたヒカルの手を取った。

「現実って言ったな...。現実を知って受け入れていくことは簡単じゃないんだぜ」

「...颯土くん」

「こんなに震えて、立てなくなって...それでもお前はまだ強がるのかよ」

取ったヒカルの手を颯土は大きく揺らす。

「...だって」

「俺の中には高校の時からずっと見てきた隣んちの `浅倉ヒカル、がいるんだよ...」

「...颯土くん？」

「隣んちのそいつは嬉しい時は笑って悲しいときは泣いて悔しいときは怒って...、いつだってありのままだったぜ...」

——そいつの輝きに憧れて、太陽のあったかさに着物をひとつひとつ脱いでった旅人が俺だ...。

「現実ならそれも仕方ない...。けど、無理すんなよっ！ひとりで泣くなよ！」

——ひとりで...！

夜通し泣いたあの苦しみが颯土の胸にふつふつと蘇る。

もうどうにもならない現実を目の前にして、手にいっぱいビービー弾を握り締めた夏の夜——。

声にならない声でヒカルは嗚咽を漏らした。

ぼろぼろとこぼれた涙の粒が地面にいくつもの黒い点々を作っていた。

「...あたしの隣んちにはネクラで不器用で無愛想...、」

「.....だけど、ありのままのヒカルが昔っから大好きなヤツが住んでるんだよ...！」

——そいつの笑顔を、太陽のような笑顔を、ただただ守りたいって思ってるヤツが...！

震えるヒカルを、颯土は力の限り抱きしめた。

もう、響のことでは泣かないと自分で決めたことを自分で覆し、心の底から溢れるままの涙をヒカルは流す。

その溢れた涙はシャツで、想いはいのちで全部受け止めてくれるのは隣んちの颯土。

強く、強く自分を抱く颯土の腕から、その想いはダイレクトに心に染み渡る。

喉元で抑えていた声がだんだん解放され、颯土の胸に顔を押し付けたヒカルはその場所での出るままの声を張り上げた。

颯土はその振動を全て自分の中に浸透させ、腕に力を込めてヒカルを包む。

——不器用な颯土くん...。さっき言ってくれたこと...全部...。

『一俺がお前に...、愛してるって言ったら——』

現実を知って受け入れていくことは簡単じゃない、と言った颯土の言葉が心に重く響いている

。叶わない現実を知ってそれを受け入れてなお、こんなにも包んでくれる颯土の言葉だから——。

——簡単じゃない。こんなにもつらい現実...。

でも、受け入れていく。

これが、私とヒビクが決めた真実だから——。

そして、いつかきっと。

きっと——。

隅田川を戻ってきた水上バスがゆっくりと波止場に還り汽笛を鳴らした。

動く水の音と秋の夜風に肌寒い感触を覚える中で、颯土の温もりに包まれ震えもだんだんとおさまっていくヒカルだった。

想いを全て吐き出す声が外に漏れていかないように、颯土は胸の中のヒカルを身体全部で包んだ。

一度解放された想いは止まるところを知らず、抱きしめても抱きしめても胸に伝わる振動は緩まない。

だが、さっきまで激しく震えていたヒカルはいつの間にかそれは和らぎ、今はただただ包んだ胸の中で声を上げ、止まらない涙をシャツの上に落としている。

泣いても泣いても溢れる涙と、張り上げて張り上げていのちの底からこみ上げてくる声に、ヒカルは自分で驚いていた。

――ヒビク、ヒビク、ヒビク...！

もう二度と叫ばないと思っていた名を颯土の胸の中で何度も叫んだ。

その名は颯土の胸の中にただ吸い込まれて行く。

颯土がそうしてくれている。

ここで放つ想いが空気を伝ってどこかに行ってしまうないようにまるごと包んでくれるから、黙ってためていた2ヶ月分の想いと涙が嘘のように流れていく。胸の中につかえていた硬い鉛のような塊が、ひとつひとつ流れ出る瞬間には柔らかな真綿になって――。

颯土の腕は力が強く息ができないほどに苦しいけれど、その力強さに癒されていく自分を感じる。

――この胸の温かさを...私はずっと前から知っていた...

高校生の頃からいつだって颯土は、響を想い流す涙を受け止めてくれていた。何度あったかわからないほどのその時の涙がひとつひとつフラッシュバックする。

――あの時も、あの時も...

今、全身で受け止めてくれるぬくもりも、今まで何度も同じようにして包んでくれた腕の温かさと同じだ。

――あの頃も今も颯土くんの想いはたぶんひとつ...。さっきの `例えばの話...、はきっと昔からの颯土くんの真実...

そうとわかって颯土には自分の全部をぶつけてしまえる。

忘れられない響への想いも、そんな自分に対する憤りも、迷いも矛盾も全部を。

そして、やっぱり颯土はそんな全部を颯土の全部で受け止めてくれる。それはずっと昔から変わらない。

——颯土くんは...何も変わってない...。

夕暮れの墨田公園は家路に向かう人たち、サッカーボールを転がしながら走っていく小学生たち、泥だらけのユニフォームを着た野球少年たちが向こうからこちらからと行き交い、川の流れるとは対照的なあわただしい空気と時間が交差する。

向こう側の街がすっかり明かり色になった頃、ヒカルはゆっくりと顔をあげた。

街灯は少し遠くにあるため、日が沈みきった蒼色の中で今までじっと目を閉じていた颯土にはっきりと見えたのは、まだ潤んで輝いているヒカルの瞳だけだった。

「...ヒカル？」

涙が完全に止まってはいないヒカルの肩はまだ上下に揺れている。

「ごめん...」

ヒカルは颯土の両腕に自分の手をかけ、隙間がないほどに触れ合っていた身体をそっと放した。

「...颯土くんのシャツがびしょびしょになっちゃった...」

自分の流した涙で濡れた颯土のシャツに手を当てヒカルが言うと、

「...今日はティッシュ箱を持ってなかったからな」

と、颯土は笑った。

「ティッシュ箱か...。あの時もここで泣いたね、私」

「ティッシュ箱が空になるぐらいにな」

こくと頷いてヒカルはようやく笑った。

「あの時以上の涙を颯土くんのシャツでふいちゃったみたい...」

今までヒカルがいた場所に風が当たり涙が染み込んだシャツが冷えていく。

「いいさ。今日は俺が泣かしたようなもんだし...」

「...そうだね」

ヒカルは肩を上げてまた笑う。

「でも...」

言いかけて言葉をつぐみ、ヒカルは向こう側の明るい街に目を向けた。

颯土と並んだ後ろ側を自転車や人々が通り過ぎ、隅田川の上では屋形船にも明かりが灯り始めている、いつもと同じ夕暮れの風景。

——...ここが、私の本当の居場所。ずっと前から知っていた私の居場所...。

だから....

「...やっと、ちゃんと受け入れられる気がする」

.....と、街の普段と変わらない時間の流れに溶け込んだヒカルが言った。

「...シャツ...貸してくれてありがとう」

颯土は答えずにただヒカルの横顔を見下ろした。

蒼色の中に目が馴染んで見えたものは、まっすぐに前を見つめ街の明かりを瞳に映したヒカルだ。

凜と背筋を伸ばし肩に垂らした髪を少しだけ風に揺らし、少女と大人の顔を交差させた、颯土がよく知っている `隣んちの浅倉ヒカル、がここにいた。

「ねえ、颯土くん...」

「ん？」

「—いつかきっと、ヒビクのメロディが聴こえてくるよね...？」

ヒカルはためらうような目で颯土を見上げた。

「ああ。風間先輩だから、間違いなく」

間違いなく、という言葉に力を込めて颯土が答えると、ヒカルはスーッと息を大きく吸い込んで微笑んだ。瞳の中にたまっていた最後の涙の粒が同時に零れ落ちた。そのひと粒を人差し指で払い、

「...みんなのところに帰ろう？寒くなってきちゃったし」

と、ヒカルは川に向けていた身体をくるっと方向転換した。

「ああ、そうだな」

颯土のブルゾンもヒカルのジャケットも珈琲ショップに置いたままだ。

「あったかい珈琲が飲みたいね？」

「...ああ」

「あ...、でも...あたしの目、腫れてるかな...？みんな驚いちゃうよね？」

「暗くてよく見えないけど...たぶん腫れてるだろ—な？」

やっぱり...、とヒカルは冷たくなった両手を両目に当て、ほてった瞼を冷やした。

「でも...、」

と、颯土はヒカルを見る。

「なに？」

「ヒカルがヒカルなら目が腫れてたって気にならないぜ...？」

—あたしがあたしなら...。

「.....そうだよね！」

ヒカルは颯土よりも一歩先に歩き出した。だがすぐに立ち止まり、もう一度川を振り返った。

「どうした？」

「...うん。忘れもの...」

「忘れもの...？」

穏やかに流れる川の水を見つめながらヒカルは心の中で呟く。

――ほんとうに...さよなら。さよ...なら.....、ヒビク。

「.....行こう？」

今度こそ、ヒカルは颯土の前を水月の珈琲ショップに向かって歩き出した。

◇

フロアの大時計が午後6時の鐘を鳴らした。

あかねや祐輔たちは、その低く鳴り響いた音で互いの顔を見合わせた。颯土がヒカルを連れて店を出て行ってからそろそろ1時間が経とうとしている。

「...遅いね、群竹くんとヒカルちゃん...」

黙り込んでいる祐輔に麻耶が呟いた。

ついさっき、あかねを迎えに来た田村からヒカルと響の間に起こったかもしれない話を聞き、一同は黙り込んだままだった。水月が淹れてくれた新しい珈琲も冷めてしまい、貸切のフロアの中は時を刻む大時計の秒針の音だけが響いている。

颯土とヒカルが店を出て行った直後のこと――。

『なにあれ...？群竹くんどうしちゃったの？』

麻耶が呆気にとられた顔で祐輔やあかねたちの顔を見回した。

だが、あかねも勇斗までも口を一文字に結び、扉で遮られているはずの颯土たちが行った先をじっと見つめたまま動こうとしなかった。

麻耶の問いに答えるようにして祐輔が立ち上がり、壁の写真の前に足を進めた。

『伊藤くん？』

首をかしげながら麻耶もその後につき、やがてあかねと勇斗も祐輔の隣に立ち、窓辺の『笑顔と猫』の前に四人が並んだ。

『こんな想いの表し方もあるんだな...って、ここに来て思ったよ...』

目の前の写真を見つめながら祐輔がつぶやいた。

『ある意味...すごい伝え方だしね』

と、勇斗は店の中を見回した。

『...わからないのはヒカルちゃんだけなんじゃないかな...』

あかねは勇斗の言葉に頷いた。

『あまりにも当たり前すぎるから、その真ん中にいるヒカルちゃんだけがわからないんだと思う...。そして群竹くんもたぶん自分がこんなにも想いを見せてしまっていることわかってない

と思うな』

『どうということ？』

と、麻耶がまた首を傾げると、

『——ここにもわかんない人がいるみたいだけど...』

と、勇斗に笑われ、

『今日この写真たちを見て、水沢と群竹を見て、浅倉を見て...群竹の真実が見えた気がする』

と言った祐輔の言葉でようやく麻耶も気が付いた。

『...群竹くん、そういうことだったの——？』

思わず口にした言葉に、首を横に傾けながらあかねが小さく頷いた。

『——そんな...。だって、ヒカルちゃんは...』

『群竹くんの真実か...』

あかねが麻耶の言葉の続きをさり気なく遮るようにして、壁の写真ひとつひとつを目で追いながら、

『.....やっただね』

と、つぶやいた。

『やっど、昔から群竹くんの中に隠れていたずっと変わらない真実が見えてきたんだね』

『昔からずっと変わらない真実...か』

祐輔は隣のあかねを見た。あかねは写真を見上げながら微笑んでいた。

『水沢はわかってたんだ？』

『...うん』

『...あかね、ほんとなの？昔からあかねは知っていたの？』

『うん。知っていた...。もう、高校1年のときからずっと』

『そうか...。いろんな想いがそんな昔から交差してたんだな』

——長い間交差してきた群竹くんのいろんな想いがやっど...。

あかねは窓辺の写真をもう一度見つめた。『笑顔と猫』のヒカルは高校時代のようなハツラツとした笑顔ではない。陽だまりの中で少しだけせつなく、それでも優しく笑っているありのままの笑顔。本当に心を許せる相手にだけ見せるヒカル自身——。

『これは群竹と浅倉の時間...だな』

祐輔も、もう一度ヒカルの笑顔を見つめて言った。

『そうだね...。でもこれは、きっと高校のときからずっとふたりの間には変わらずに流れていた時間なんだよ。私たちが知らなかっただけで』

『そうか...。僕は昔からあいつがどんな写真を撮るのか興味があったんだ。いつもは鋭くナナメに構えたまなざしのあいつが、カメラを持ったときはものすごく優しい目をしてた。何気なく見えたあいつのそういうところが気になってたらさ、卒業の時のあの翼の写真だろ？心底凄って思ったよ...。でも...。』

祐輔は足を奥のフロアに進める。

『あいつがああ優しい目で真っ直ぐに見ているものが、この木漏れ日とか川とかの素朴な素材の向こう側に見えた気がした。あいつが撮りたいものがさ。このギャラリーは光に溢れてるよな』

——光溢れたギャラリー。

『...なんか、群竹くんの心の中を土足のまま覗いちゃったみたい...』

涙ぐんだ麻耶が言った。

『...ただのネクラじゃないとは思っていたけど...そんなにも真っ直ぐにヒカルちゃんを想ってたなんてせつないよ。それに...、』

と、麻耶はあかねを見る。

『そんな群竹くんをわかってたっていうあかねも...』

あかねは首を横に振って笑った。

『でも、さっきの群竹ちゃん、ちょっと普通じゃなかったよね？どうしたんだろ？』

勇斗が思い出したように再びドアに目を向けた。

『.....それは、』

と、あかねが言いかけたとき、カラン、と、ドアのベルが鳴った。

ふたりが帰ってきたのかと四人が一斉に目を向けたが、そこに立っていたのは、

『...なんだよ？どうした？』

注目されて少し驚いた顔の田村だった。

水月が新しい珈琲を淹れてくれたので、あかねを迎えに来た田村も一緒にフロアの真ん中の大テーブルについた。

『頭数が足りなくないか？』

田村はフロアと皆の顔を見回し、そこに足りない顔の所在を気にする。

『今、ヒカルちゃんと群竹くん、ちょっと席を外してるの...』

祐輔も麻耶も勇斗も、神妙な顔をして押し黙っている。そんな後輩たちを見て、

『お前らみんな、なんかあったって顔してるな...？』

と、田村は呟いた——。

「...もう外も暗くなっちゃったし...」

田村の話聞き、黙ったままのみんなを見回した麻耶は立ち上がって格子の窓から外を眺めた。

田村は麻耶の行き先を目で追い、窓の横に飾られている『笑顔と猫』に気が付いた。それからぐるりとフロアの壁をゆっくりと見回していく。

「もしもヒビクがここに来たら...焦るだろうな...」

そう言って田村は苦笑いをこぼした。

その時、再びドアのベルが鳴った。

◇

先に店の中に入ったのはヒカルだった。

「ヒカルちゃん！」

ちょうど扉の前にいた麻耶が間髪を入れずに駆け寄った。

「わっ、びっくりした...」

もう少しで扉を麻耶にぶつけそうになったヒカルが足を一步踏み入れたところで立ち止まると、その背中にあとから来た颯土が軽くぶつかった。

「なんだよヒカル。急に立ち止まんなよ...」

颯土はいつもと同じように呟くような喋り方でヒカルに文句を言う。

「ごめん」

ヒカルは笑って奥の大テーブルに向った。そして、そこに田村の姿を見つけた。

「わぁ、田村先輩！お久しぶりです！この間はお邪魔さまでした！」

田村は、おう、と軽く相槌を打ち、ヒカルとその後ろに突っ立っている颯土を見比べた。

ヒカルの目は真っ赤で今まで泣いていたということは一目瞭然だ。なのに2ヶ月前よりも自然に笑っているように見える。

そして颯土は――。

目の前のヒカルを見下ろす颯土の目は果てしなく優しい。こんな颯土を見たのは初めてだった。

どこまでもどこまでも視線の先にいる人を見守っていたいと自分が決めてしまっている目。

その覚悟が田村のどこかに自分もよく知っている苦しいほどの身近な意識として伝わって来た。

田村はもう一度、壁の写真ひとつひとつに視線を這わせ、最後に自分の隣で心配気なまなざしをヒカルに向けているあかねに目をやった。

「ふたりとも～、どこ行ってたんだよ？幹事がいなくなっちゃったからメインディッシュがお預けになっちゃってたんだぜ～？」

「ごめんね！」

ヒカルは自分がもとにいた席に戻り、1時間前と同じようにその場の空気に溶け込んだ。

勇斗も祐輔もヒカルの赤い目にはとっくに気が付いていたが、それよりもさっき店に帰ってきた時の、ヒカルと颯土のあまりにもナチュラルな光景でそれまでの心配がどこかに消えていた。

「みんな悪かったな...」

颯土はひとこと詫びてから、慈しむようなまなざしであかねを見つめている田村に目を向けた。

「...田村先輩は...まだ時間がありますか？」

あかねに無理をさせないために早めの時間帯をセッティングしたのは幹事の颯土だ。本当な

ら今頃はもうお開きになっているはずの同窓会だった。

田村はゆっくりと颯土に顔を向けた。

空中でふたつの優しいまなざしが交差した。

「時間は大丈夫だけど…」

「…あかねは疲れてないか？」

と、颯土はあかねに訊く。

「うん、大丈夫」

「じゃ、田村先輩も一緒にこの後のメインディッシュを食べて行ってください」

「…おお。サンキュ…」

「それから…、あとでちょっといいですか？」

一瞬の間をおいた後、颯土は背後のヒカルを気にしながら田村に言った。

「……ああ」

田村の視線もヒカルにあった。

ヒカルは麻耶や祐輔たちの会話の中に入り込み、こちらを気にしている様子はない。

「風間先輩のこと…？」

あかねが小声で言うと、颯土はゆっくりと頷き、

「……ヒカルのことも田村先輩には話しておきたいから」

と、答えた。

「ヒカルのこと…か。わかったよ」

田村は頷き、

「俺も群竹に訊きたいことがある——」

と、颯土の目を見た。

「…じゃ、あとで」

颯土は軽く田村に頭を下げてから、遅れたメインディッシュの手配をするためにカウンターの水月のもとに向かった。

午後7時半――。

水月が特別にブレンドしてくれた珈琲を飲み終え、同窓会は一応のおひらきとなった。

あかねはやはり疲れが出てお腹も張ってきたようなので、颯土は田村とあかねを車で送ることにした。

ヒカルは祐輔たちと勇斗のアパートに流れて二次会に参加すると言う。

「あかねちゃんたちを送ったら群竹ちゃんも来いよ」

という勇斗の誘いには曖昧に答え、颯土はふたりを乗せて車を出した。

日曜日の国道は流れが悪く、スムーズに走れば30分ほどで到着できるはずのあかねたちの家だが、この分だと二倍の時間はかかりそうだ。

「疲れさせて悪かったな」

ルームミラーを覗きながら後部座席にいるあかねに向かって颯土は言った。

「ううん？楽しかったから全然大丈夫。夕方になるといつもお腹が張っちゃうの。ね？」

と、あかねは隣に座る田村に言った。

「ね？と言われても...俺は実感できねえけど、そうらしい...」

田村がやや困惑顔で答えると、颯土は、はっ！と笑った。

ルームミラーに映る颯土の目が優しい――。

ヒカルを連れ出す前と珈琲ショップに戻ってきた時とでは、颯土の周りにある空気が違っていったようにあかねには思えた。

ヒカルの目は真っ赤になっていたけれど...

――ヒカルちゃんの涙はどんな涙だったんだろう...

ハンドルを握る颯土をルームミラー越しに見つめながらあかねは思った。

自分を家に送り届けたあと、颯土と田村は場所を変えてふたりで話をするつもりでいるらしい。

――ヒカルのことも田村先輩には話しておきたいから。

――俺も群竹に訊きたいことがある。

颯土が話したいヒカルのこと、田村が颯土に訊きたいこと、それらがどんなことなのかあかね

には分からないし詮索しようとも思わない。

ただただ、今は――。

「群竹くん、ヒカルちゃんと話したんでしょ...？」

ミラー越しの優しい目があかねを見た。

「ああ。話した」

「...珈琲ショップを出る前と帰ってきたときのヒカルちゃんは違ってた。目は真っ赤になっていたけれど私がよく知っている...高校の時からヒカルちゃんが帰ってきた気がしたよ」

あかねはミラーの向こうの颯土の目を見る。

「...そうか...」

颯土は呟いてミラー越しに合っていた目をフロントガラスの向こうに移した。

「優作さんが確かめようとしたこと...、」

あかねが言いかけ、

「もう...それは...、」

田村が言葉を出すと颯土の視線は田村に移る。

「さっきのヒカルと群竹を見てわかったよ...」

「...優作さん？」

「あいつら、思ったとおりであったんだろ？」

ちょうど信号が赤に変わり、車を停止した颯土はゆっくりと後ろを振り返った。

「そう...ヒカルは言っていました」

あかねは深いため息を吐き、目をかたく閉じる。

「やっぱり風間先輩とは連絡がつかないんですか？」

「ああ...。何度か電話をしてみたけれど繋がらない。ヤツが今どこで何をしているのか、もう俺の方からはつかみようがない。あいつが連絡してくるのを待つしかねえな...」

「そうですか...」

再び信号が青になり、車はゆっくりと動き出す。

――どうするの？群竹くん。あなたの想いをどこに.....。

ルームミラー越しに颯土を見つめ、その視線に力と想いを込めるあかねだった。

◇

山吹色のアパートの前に車は到着し、田村はあかねを部屋まで送った。

「じゃ、俺はちと群竹と話してくるから」

そう言う田村はいつもと変わらない優しい顔をしている。

「うん...」

あかねが居間に座るのを手伝ってから田村が再び部屋の出口に向かおうとすると、

「...あの、優作さん」

あかねは田村を小さく呼び止めた。

「ごめん...。私ね...」

そう呟いてあかねはうつむいた。

あかねの想いは颯士の想いがヒカルに届くこと――。

それは、響の親友である田村にとっては想いの相反かもしれない。

それでも...

「...あかねの気持ちはわかってる。けど、俺はヒビクの友人としてヤツには訊かなきゃならないことがある...」

そう言う田村の目はいつになく厳しい光を放っていた。

「うん。それはわかる...」

「...心配すんな。ヒカルのこと訊きたいし、とりあえず行ってくるから」

田村は昔からそうしていたように、あかねの頭をそっと撫でて部屋を出た。

――ヒビクの友人として...

それはもちろん間違いのないことだ。

だが、それだけじゃない。

颯士が待つアパートの駐車場までの間に田村は自分の想いを整理する。

高校時代からの、そして今現在の...

颯士は車から降りて待っていた。

「悪かったな。送ってもらっちゃって」

「いえ。俺の方こそ突然すみません」

「こんな時間だし、ほんとは一杯やりたいとこだけど群竹は車だしなあ...」

田村が目に向けたのは道路を挟んだ向こう側にあるドトール珈琲だった。

◇

「...色気も素っ気もねえ場所だよなあ」

トレイに珈琲と灰皿を乗せ、二階の座席に向かいながら田村は言った。水月の珈琲を飲んできた後のこれはあまりにも...な気もするが仕方がない。

狭いフロアには二、三組の客がいるだけだった。

ふたりはアパートが見える窓際の座席に着き、田村はさっそくポケットから煙草を取り出した。

「まあ...、田村先輩と話をするのに色気があってもしょうがないし」

と、颯土は笑う。

「そうだな」

水月の珈琲ショップでも颯土の車の中でも妊婦の妻に気遣って禁煙をしていた田村は、ようやくというようにして煙を吸い込んだ。

「群竹とは一度話をしなきゃと思ってたから今日はちょうどよかったぜ」

「...俺もです」

「ヒカルとヒビクの話をするまえに、俺にはつけておきたいけじめがあるんだ」

そう言って、田村は煙草を灰皿に押し付けた。

「まず...、あかねをお前から奪い取っちゃったことに対して俺はお前に詫びなきゃいけない、な」

颯土は答えずに田村を見据えた。あかねを田村に奪われたとは思っていない。思ったこともない。

だが、田村がつけたいけじめはよくわかる。

「俺は、田村先輩に別の意味で詫びなければなりません」

「...その別の意味が今日の話の核心...だろ？」

「はい」

「俺がお前に訊きたいこともそれ...。あかねとは関係なくヒビクの友人として」

颯土が言う別の意味――。それは、ヒカルに対する昔からの颯土の想いだ。

ゴクリと息をひとつ喉の奥に通し、煙草吸ってもいいですか？と颯土は田村に訊いてから火を点けた。そして、頭の中で言葉を整理しながら一本を吸い終わったあとに颯土は言った。

「...俺はずっとヒカルを...、あいつが風間先輩と一緒にいて、俺はあかねと付き合ってた頃から...、想ってた」

田村の目が鋭く光る。

その刺激を颯土はいのちで受け止めた。

「ずっとってことは...今でも変わらないってことだよな？」

「...変わろうと思ったけど変われなかった」

田村はじっと颯土を見つめる。

変わろうとしても変われない想い――。

その痛みが鮮やかに、田村の胸にこみ上げる。

二本目の煙草に手が伸びた。

「ヒカルが風間先輩と別れたって知ったのは今日、さっきです。あいつ、ずっと言わなかった。

誰にも言ってなかった。それを俺は無理に言わせました。あいつが言いたくなかったこと言わせて泣かせました...」

それであいつの目は真っ赤になってたんだな、と田村は納得したように呟いた。

「でも、あいつ...」

「ん？」

「あいつは、別れた、って言葉は結局言ってない...」

「でも、お前が察したわけだ。そして、それがやっぱり事実——」

「その言葉だけは、言いたくなかったんだと思います...」

と、颯土は頷いた。

「互いの居場所でそれぞれの生きる道を行くために未来を約束しなかったってあいつは言っていました。風間先輩はアメリカでピアノを弾き、自分はここで幼稚園の先生を続けるんだって。そうやってあいつから言い出したことで...、」

「...ヒビクもそれに納得したってことか...」

颯土はゆっくりと首を振った。

「群竹...？」

「あいつ、本当にそんなふうにしてたわけじゃない...。本当は、あいつはただただ、風間先輩の未来だけを思ったんじゃないかって思います。だから自分が受け入れられなくて誰にも言えなくて...あいつ、壊れる寸前でした。俺は今日までそれに気が付いてやれなかった」

まだ、自分がイッパイイッパイだったから...、と颯土はうなだれた。

「...群竹...」

「ヒカルってそういうヤツです。風間先輩がそういうヒカルを知らないはずがない。そうですね？」

「...そうだな」

——でも、それでもヒビクは...

喉元まで上がった言葉を田村は珈琲と一緒に飲み込んだ。

「自分の居場所はここだってヒカルは言った。でも俺は、ヒカルと風間先輩ふたりと一緒にいるその場所こそがあいつの居場所、ふたりがいてひとつの絵だって...高校の時からずっと思ってるから...」

「群竹...」

「田村先輩、風間先輩とはもうどうしても連絡は取れないんですか？風間先輩の消息がわかるすべはないんですか？」

颯土の目はひとつの曇りもなく田村を見据えていた。

——こいつ...。

その鋭い輝きに田村の胸はまた痛む。

どこまでもどこまでも、想う相手を見守り続ける覚悟の目――。

「...ヒカルがボストンで出したポストカードが届いた後、ヒビクと連絡が取れなくて、俺もあかねもどうしたらいいのかわからなかった。ヒカルは俺たちに何も言わなかったし、言わなかったってことは言いたくなかった、言えなかったことがふたりの間にあったってことぐらい察しがつくだろ？」

颯土は頷く。

「...ヒカルのこともそうだけど、俺はヒビクのことを気になってさ...。あいつのヒカルへの想いを俺はずっと見てきたし、3年半の間があって7月にやっと再会したあいつらはもう離れ離れになることもないだろうって思った...。12月にヒビクがこっちに帰ってきたらあとはまとまるだけだろうって思った。なのに、ヤツはこの時期に行方不明だ...」

「...はい」

「何も言わないヒカルと突然消えちゃったヒビク...。もう確かめなくたってわかるよな。ふたりの間にどんな話し合いがあってこういうことになったのかまではわからないけど、俺はヤツが今、何を思い何をしようとしているのか気になってさ...、」

田村は一旦言葉を止めた。

そして、すでにぬるくなった珈琲を一口飲み込んだ。

「...ヤツのおふくろさんに会ったよ」

「風間先輩の...？」

「おふくろさんならヤツの消息を知ってると思ってさ」

「...で?!」

身を乗り出す颯土に対し、田村は首を振った。

「ヒビクからの連絡は夏に帰って来て以来一度もないって」

颯土は失意のため息をつく。

「何でも突然決めて行動するヤツだから今回もきっとそうだろうって言ってた...。けど、あいつが突然決めることはいつもただの思いつきじゃない。あいつなりに遠くの未来をいつも考えてるんだよ...」

「遠くの未来...」

「ヒビクは昔からそうだった。いつも遠くを見つめてる。ヒカルへの想いもそうだ。すぐ手が届く場所にいるってのに、ヤツは手を伸ばさなかった」

「...どうして？」

「自分を知ってたからだろうな。自分の弱いところ醜いところ...をあいつは知っていて、それが自分で許せなかったんだ。だから、遠くを見てまず自分を磨くことを優先した」

「自分を磨く...」

「それがあいつにとっての夢。ピアニストだった。高校時代のあの頃はな...」

田村は小さなため息をついた。

「今は...？」

「分からないけど...、あいつの中で夢の形が変わったのかもしれないな」

「どんな形に...！」

颯土は思わず声を荒げた。

「それは、ヒカルを手放して叶える夢なんですか?! そんなの...っ」

群竹落ち着け、と田村に冷静に諭され、颯土はひと呼吸ついた。

「ヤツが何を考えてるかは分からねえよ。今言ったことは俺の憶測だから」

そうですね、と颯土はもう一度息を整え、すみませんでした、と小さく詫びる。

「ヒビクのおふくろさんは、もしもあいつらが別れ道を選んでたとしたらヒビクはアメリカでピアノを弾き続けたいと思い、ヒカルはそんなヤツの真実が見えたんだらうって言ってた。ただそれだけだらうって...。そして...、」

——田村くん。愛の行き先は、ただ一緒にいることだけじゃないんだよ。

「ヤツのおふくろさん、そう言ってた...」

「一緒にいることだけじゃない...」

「ああ」

珈琲カップを両手で包んだまま口をつけずにいる颯土を田村は見つめる。

そして、

「...ヒカルの話はわかった...。たぶん、俺も群竹が言ったとおりだと思う...。ヒカルは間違いなくヒビクの未来を考えたんだらうな」

と、呟いた。

「例えば、ヒビクの消息が分かったとしてどうする...？」

「...ヒカルの想いを伝えてください。あいつは風間先輩じゃなきゃダメだってこと田村先輩から。風間先輩に繋がられる人はたむ...、」

颯土の言葉を途中でさえぎり、田村は言った。

「——お前はヒカルとどうなりたい？」

颯土は伏せていた目をゆっくりと田村に向けた。

「俺...？」

「そう。ヒビクのこととはとりあえずいいから、おまえ自身。ずっと昔からヒカルだけを見てきたんだろ？あかねと付き合いながらもずっとさ...」

「それは...」

「恋人になりたい?...結婚したい?本当の群竹の想い...。俺がお前に訊きたかったことはこれ...」

珈琲ショップのギャラリーは颯士の想いで溢れていた。

写真の中で真っ直ぐにヒカルに向けた愛情が四方の壁から迫り、押しつぶされるかと思うくらいに――。

「――俺はあいつの想いが一番です」

颯士は小さな息をひとつ吐いた。

「どうにもならない現実に泣いてもがいた時もあったけれど...、自分の想いにはもう...決着をつけました」

「...そうか」

と、田村は颯士の目を見る。

「さっき、あいつは俺のここで何度も何度も風間先輩の名を叫んだ...」

颯士はシャツの胸に手をあてた。

「あいつの声と涙が全部俺のここに染み込んで行った。それは、全部風間先輩への想いだ。あいつが風間先輩の名を叫ぶたびに、俺のここにその名はびんびん響いて...、今でも俺の中を駆け巡ってる...。泣いたからって、叫んだからって真実の想いは消せないんだ...」

「...群竹」

「――俺も...そうだから...っ！」

想いの決着なんて本当はついてなんかいない。

現実を受け入れ、そう心が覚悟を決めただけだ。

本当はこんなにもヒカルを抱きしめたい。

いつだって一番望むものはたったひとりのヒカル――。

「風間先輩だって同じはずだ...！ピアニストになることも、幼稚園の先生を続けることもふたりには同じぐらいに大事なこともかもしれない。でも、それ以上に一番に求めているのは互いであるに違いないんだっ」

言って、颯士はとっさに田村から視線を外した。

「...群竹？」

田村が息を呑んだと同時に颯士は頬を掌で払った。そして、

「俺はもう、あいつの泣き顔だけは見たくない。ただそれだけです...」

すっかり冷たくなった珈琲を一気に飲み干した。

「――俺も群竹と同じだったよ」

田村は微笑んだ。

「俺も高校のときからずっと、群竹と一緒にいるあかねを想ってた」

「...田村先輩」

「あかねの泣き顔だけは見たくないって思ってたよ、ずっと...」

颯土はうつむく。

「群竹を真っ直ぐに想ってるあいつをまるごと見ていたかった。あいつはいつも何かに傷ついていてさ...。俺にはそれがよくわかったけど、あいつの想いが最優先だったからさ、俺も...」

「――傷つけてたのは、俺だ...」

高校時代のあかねを思うと、颯土の胸は痛む。一番傍にいたはずなのに、あかねの何をも見ていなかった自分を悔やむ――。

「そう。お前だった。でも...、それをあの時にお前が気が付いてたら今の俺とあかねはなかったかもしれない...。どんな形であっても、俺はあかねを抱きしめることが出来た。叶わないとあきらめもしたし、違う女と付き合ったこともあったけど、俺の真実はあかねひとり。俺が一番欲しかった人だから...」

向こうに見えるアパートの部屋にはまだ明かりが灯っている。あの窓の向こうでその人は田村の帰りを待っている。

「群竹、俺は――」

と、言葉を切り、田村は颯土を見た。

「...もう、お前も自分の想いに真っ直ぐ生きてもいいと思う。ヒビクが出来ないことをお前がやってもいいと思う――」

「...田村先輩...っ?!」

颯土は思わず立ち上がった。テーブルが揺れ、その勢いで珈琲カップが転がった。

「ヒカルの真実、ヒビクの真実があるようにお前にだってずっと胸に抱きしめてた真実があるだろう...」

それは...!と、言ったまま颯土は絶句した。

ヒカルの真実と自分の真実は相容れない。交われない。交差することはない――。

立ったまま唇をかみ締める颯土をじっと見つめ、田村は言った。

「どこまでもヒカルを想うお前の心...、その真実を旗揚げしろよ。あの、光溢れる写真に込められてるものをお前自身で」

「...そんなこと...っ」

出来るはずがない、と颯土はうなだれる。

「ヒビクは昔俺にこう言った。ヒカルへの想いを断ち切ってアメリカ行きを決意して、5年は帰らないってカッコつけて言うあいつに、俺は欲しいものは欲しいって素直にダダをこねろ、って言ったらさ...」

――俺はここで一旦あいつへの想いに決着をつける。自分で認める俺になれば、その時にかっ攫いに行くからさ!

「もしもその時にヒカルが誰かのものになっちまってたらどーするんだってヤツに言うと、その時はその時の自分が答えを出すはずだって」

高校3年の秋、夜の公園での響との会話はまだ色鮮やかに覚えている田村だ。

「時が流れて...出てきたひとつの答えがヒビクとヒカルの今の現実だろ？群竹が言うようにあいつらは互いを一番に求め合ってるかもしれない。でも、今のヒビクが選んだのは日本に帰ってくることよりも向こうでピアノを弾きつづけることだし、ヒカルもこの場所に留まることで、ふたりを同じ場所に置くことじゃなかったんだ」

颯土はかたく瞼を閉じ、こみ上げるものを飲み込む。

「...俺が見てきたふたりの絵はもう...」

「別の絵に変わっていくんだろう...」

颯土はゴクリと固唾を呑み込んだ。

「群竹が本当につける決着は...、一番欲しいものに手を伸ばすことじゃないのか...？」

田村の言葉は颯土のいのちの真髄までを貫いた。

「2年半前、傷ついて神戸から帰ったあかねを俺は抱きしめた。あの時、俺は自分の想いに決着をつけた。今の群竹と同じ想いをかみ締めながらそれでも、一番欲しいものに手を伸ばしちまった！」

そう言って田村は笑った。

「...でも、俺は一一」

「これ以上は言わないさ。あとは群竹が決めることだ」

一一俺が決めること...。

田村が言ったひとことひとことを自分の中で噛み砕きながら、颯土は心の中で呟いた。

「...ひさびさに見たヒカル、いい笑顔してたなあ」

田村は思い出したように天井を見上げてから、三本目の煙草に火を点けた。

◇

颯土が勇斗のアパートに到着したのは午後11時を回っていた。

祐輔、麻耶の姿はもう既になく、ヒカルもさっきまで颯土の帰りを待っていたらしいが、明日の準備をしなくちゃならないからと、今勇斗が送って来たばかりらしい。

お茶でも飲んで行けば？という勇斗の誘いをやんわりと断り、颯土はそのまま帰宅した。

自宅の駐車場に車を入れ上を見上げると、ヒカルの部屋にはまだ明かりが灯っていた。きっと今頃、眠い目をこすりながらおたより帳を書いているに違いない、と颯土は思った。

いつもはもう母親も休んでいる時刻なのに、今日はリビングにもまだ明かりがある。

玄関を開けた途端、珍しく母が出迎えに来た。

「...おかえり、颯土」

「ただいま...？」

母の様子が少し変だ。どこか心配気な顔で自分をじっと見つめている。

「...どうした？」

「ううん...？」

母は引きつった顔で答え、そのままリビングに戻った。

作りかけのパッチワークをやっていたようだ。普段は、夜は目が疲れるからと言ってる母なのに、と颯土は首をかしげながらも冷蔵庫から缶ビールを一本出して自室に向かった。

部屋の明かりをつけ、着替えを済ませた時、窓がパチンと鳴った。ひとつの深呼吸をしてから窓を開くと、もう寝る準備を万端に整えたヒカルが立っていた。

「おかえり颯土くん。ずいぶん遅かったね？」

「...ああ。道が混んでて...」

とっさにそんな言葉が出たが、それにしても遅すぎるということに気が付いて、颯土は思わず自分で笑った。

「あかねちゃんちにあがりこんでたんでしょう～？」

「...まあな」

似たようなもんだな、と颯土はまた笑う。

「大久保くんちでずいぶん待ってたんだよ、あたし」

「さっき寄ってきた。悪かったな。もう明日の準備は終わったのか？」

「うん。もう寝るところ。明日からはお遊戯会の練習が始まるからまた忙しくなるしね」

「そっか...。じゃ、おやすみ」

「...うん。おやすみ」

ヒカルは窓を半分閉めたところで、

「颯土くん」

と、名を呼んだ。

「ん？」

「今日はありがとう...」

ヒカルはそう言って笑った。思わずシャッターを切りたくなる、いつもの笑顔で一。

とっさに言葉が出ずに、颯土はただヒカルを見つめるだけだ。

「どうしたの？」

「いや...。ヒカルの顔見たら急に写真を撮りに行きたくなった...」

「ぶらぶら撮り？」

「.....そう。それ...」

懐かしい呼び方だな、と颯土は笑う。

「行くときはあたしも連れてってね！また颯土くんが写真を撮るところが見たい」

「了解」

「...じゃ、おやすみ」

カラカラと窓が閉まりヒカルの姿は見えなくなった。その数秒後には明かりも消えた。

缶ビールを開け、窓はまだ閉めずに颯土はそのまま空を見上げる。

手の届かない遙かな場所で星は鮮やかに輝いている。

——一番欲しいものに手を伸ばすことじゃないのか...？

今また、田村の声が聴こえたような気がした。

窓辺の会話を終え、ヒカルは明かりを消した。カーテンの向こう側ではまだ窓を閉めずにいる颯士の気配を感じる。

子どもの頃、闇が怖くて布団に入っても寝付けない夜に、隣の部屋でまだ起きている父や母の気配を感じるだけで安心して眠ることが出来た。

今、幼い頃に感じたその安心感と同じものに包まれている。こんなにも安らかな気持ちで眠りにつけるのは何ヶ月ぶりだろう。

颯士が隣にいてくれるだけで、そこに気配を感じるだけで――。

ヒカルはそっと目を閉じ、さっき勇斗のアパートで颯士を待っていた時のことを思い出した。

勇斗は祐輔に寄り添う麻耶を、ずっと優しい眼差しで見つめていた。時々いつもの調子で、あんまりベタベタすんなよ、と文句を言っていたが、それでもふたりの幸せを穏やかに笑いながら。

あかねたちを送ったまま戻ってこない颯士をあきらめた自分を、家の前まで送ってくれた勇斗は星空を見上げながら、

『珈琲ショップに帰ってきたヒカルちゃんと群竹ちゃんが笑ってて安心したよ』

と、言った。

『ヒカルちゃんの目は真っ赤だったけどね』

『...やっぱりわかった？』

『そりゃね。でも、それでもヒカルちゃんらしい、いい顔してたよ』

それは颯士のおかげだ、と言うと勇斗はうん、と頷いた。

『...あたしは昔から颯士くんに甘えてばかり。今日だっておもいきり...』

颯士の想いを知ってもなお響の名を叫んでしまった自分と、それでも泣かせてくれた温かい胸が、今、心に痛くて思わず小さなため息が漏れた。

それが勇斗に伝わったのかどうかはわからないが、勇斗は、

『でも、群竹ちゃんはヒカルちゃんの傍にいたろ？泣き止むまでさ』

と、明かりのついていない颯士の部屋を見上げた。

『そして今ヒカルちゃんは笑ってる。それでいいんじゃない？』

勇斗が勇斗じゃないようだった。麻耶を諦めるまでには勇斗もたくさんの苦しみと涙を飲み込んだはずだ。

それでも祐輔や麻耶と昔のままの付き合いが出来、ふたりの幸せを見守れる勇斗だ。

せつなさや温かさが胸の中でクロスした。何をどう言ったらいいのかわからなかった。

『――今日の同窓会はたくさんの想いが交差してたね...』

あかねと颯士、勇斗と祐輔たち、田村と颯士、そして自分と颯士...

『でも、みんな昔のままのにぎやか組。それが確認できてオレは嬉しかったな』

勇斗は笑った。

そして、

『ヒカルちゃん、幸せになれよな』

ポンと肩を叩いて月明かりの中を帰って行った――。

――あたしはずっと幸せだよ…。

暗闇の中でヒカルは目を閉じたまま心の中で呟いた。

隣んちの明かりはまだついているし、そこに颯土の気配もまだある。

あの星空を見上げ、今颯土は何を思っているのだろう、とヒカルは思いながらいつの間にか眠りの中に沈んでいった。

◇

翌朝、ヒカルが階下に下りていくと食卓についていた哲平が無言で顔を向けた。

「あれ、哲平？今朝はずいぶん早いね？」

いつもならまだパジャマのままテレビを観ている哲平が、今朝はすっかり身支度を整えている

。最近の浅倉家は父と兄の剛が一番に一緒に家を出、次にヒカル、久美子と哲平はヒカルが出勤したあとしばらくして家を出る。

「…うん」

哲平はヒカルの顔をじろじろ見つめながらしんみりと頷いた。

「どうしたの？元気ないみたい？」

ヒカルは首を傾げながらも食卓に着いてそそくさと朝食を摂る。今朝は通園バス当番だからいつもより早めに家を出なくてはならない。哲平はそんなヒカルをまだじろじろと見つめている。

「ちょっと哲平くん。いくらヒーねえが可愛いからって、そんなにじっと見つめられちゃごはん食べづらいんだけど…？」

「べ、べつにじっと見てなんかないよ！」

哲平は少し恥ずかしそうにうつむいて自分もパンに手を伸ばした。

「変な哲平…」

ヒカルはまた首を傾げる。

ふと視線を感じて振り返ると、母が、珈琲をいれたカップを手に持ったまま立っていた。

「…お母さんまでどうしたの？」

ヒカルはややギョツとした。母は、え？と呟いてヒカルに珈琲を差し出した。

哲平と母、ふたりは同じ空気を漂わせながら自分を見ている。そう言えば昨夜帰ったときも母

は今の様な顔で自分を見ていた。

「ふたりとも朝から変だよ？」

「...ヒカルは大丈夫なの？」

「――ヒ―ねえは平気なの？」

母と哲平が同時に言った。

「――あ」

と、ヒカルは壁の時計を見た。

「大丈夫じゃない！行ってくるね！」

ヒカルは珈琲を一口流し込んで慌てて立ち上がった。

玄関を開けて外に出ると、隣の家からまだ髪に寝癖をつけたままの颯土が新聞を取りに出てきた。

「おはよう、颯土くん...」

昨日のことが瞬時に蘇り、ヒカルは声をかけるのに少しだけ躊躇した。

「おお...」

颯土はいつものように寝ぼけた声で返事を返し、大きなあくびをひとつ出してヒカルを見た。まるで高校の時から変わっていない朝の颯土だ。そんな颯土にほっとする。

「...ん？」

次の言葉を出さずに自分を見て微笑むヒカルに颯土は首をかしげた。

「今朝はゆっくりなんだね？」

ヒカルは颯土の髪を指差しながらケラケラ笑った。

颯土は、あ――、と声をあげ、

「...今日は現場直行だから...」

と、見事に突っ立った髪を慌てて掌で押さえた。

「現場って？」

「スタジオでモデル撮影...のアシ」

「モデル撮影？ファッション雑誌？」

「ああ」

ヒカルはプツと吹き出した。

「キレイなモデルさんを撮影するカメラマンがその寝癖だもんねえ...」

「...悪かったな！今日、俺はアシスタントだし。お前こそ呑気に喋ってていいのかよ？遅刻するぜ？」

「あ！そうだった！じゃあね～。モデル撮影...のアシ、頑張ってるね～」

ヒカルは手を振りながらパタパタと走り出す。

ポストから抜き取った新聞で肩をポンポン叩きながら、颯土はヒカルが行く姿を見送った。震えながら泣いて叫んだ昨日のヒカルは幻だったのではないかと思うほどに、もういつもと変わらないヒカル。

通園バスではとびっきりの笑顔を振りまいて、朝の爽やかな光を園児や見送りの父母たちに注ぎ、幼稚園では今日から始まるらしいお遊戯会の準備にまた追われながら明るくハツラツとした日々を送っていくのだろう。それはあまりにもヒカルらしい日常だ。

――ヒカルの居場所…。

隣の家も走った先の道もその向こうの墨田公園や隅田川も、そしてすずらん幼稚園も、ヒカルがいるべき場所には違いない。

ヒカルのためにそこにある場所、ヒカルがいるから光溢れ輝いているこの場所。

でも、それは此処でヒカルを見ていたいと思う自分を中心にしたもので、ヒカルが本当にいたいと願っている場所は…、と颯土は空を見上げた。

快晴の青空に一筋の白い直線が彼方に伸びていた。

――ねえ、あのひこうき雲、手が届きそうだよ！

――じゃ、手を伸ばしてみろよ。届くかもしれないぜ！

ヒカルと初めてぶらぶら撮りに歩いた日の自分たちの声が聴こえた。

この一瞬。

トドケ、ヒカルノオモイ

カザマセンパイノ　モトニ…！

そう願いを込め、ひこうき雲に向かって手を伸ばしたヒカルを撮ったあの日の一瞬。

あの時、背伸びをしながら精一杯伸ばしたヒカルの手は、自分が写した写真の中で間違いなくひこうき雲に届いていた。

そしてそれは、ヒカルと自分の想いは交わらない証。

その一瞬に込めた想いを己の胸に刻み込むために、毎日持ち歩く星のロケットに忍ばせたあの一枚だったけど…。

昨日勢いでヒカルを連れ出し、問いただし、泣かせて抱きしめて、ヒカルが放った想いの余韻がまだ颯土の胸にある。

昨日はその感触を忘れないまま、田村にヒカルと響が再び繋がる橋渡しを託そうとしたけれど――。

――群竹が本当につける決着は、一番欲しいものに手を伸ばすことじゃないのか？

一番欲しいもの...、と颯土は空を見上げたまま大きく息を吸い込んだ。

――今、あの青空の一筋に手を――？

シャワーのように降り注ぐ朝の光が寝起きの目に眩し過ぎて、颯土は右手を目の上にかざした。

その時、

「ソージ...」

後ろから声をかけられ振り向くと、ランドセルを背負いサッカーボールを肩に提げた哲平が立っていた。

「おう、チビ早いな？朝練か？」

哲平は答えずにじっと颯土を睨んでいる。

「...なんだよ、チビ。どうした？」

「チビチビ言うな！オレはもう四年生なんだ！」

哲平は挑むような口調と態度で突然食ってかかった。呆気にとられた颯土は首をかしげて寝癖の頭をぼりぼりかく。

「...何怒ってんだよ？俺、お前になんかしたか？」

「オレにじゃなくてヒーねえにしたらろ！」

哲平は肩から提げたサッカーボールの紐を手に取り、いきなり颯土のわき腹にボールをぶつめた。

「はあ？」

わき腹を直撃したサッカーボールをそのままその場所で捕まえて颯土は言った。

「ヒーねえに俺が？」

「とぼけるなよ！昨日ヒーねえのこと泣かしてたじゃないか」

――えっ？！

颯土は哲平を見下ろしたままその場に固まった。

――こいつ、見てたのか...？！

思わずゴクリと固唾を飲み込む颯土だ。弛緩された手からサッカーボールが哲平に取り返されて行った。

「ヒーねえに何したんだよ、ソージ！何でヒーねえ泣かしたんだよ！」

「ちょっと待て！俺はヒーねえには何も...、」

と、言いかけて颯土は言葉を切った。確かに昨日、ヒカルの涙を引っ張り出したのは自分だ。泣かしたのは...俺だよな...、と颯土は申し訳なさそうに頭をかきながら哲平を見る。

「ソージはオレにいつも女は守ってやらなきゃならないんだって言ってたじゃないか。なのにどうしてヒーねえ泣かしたんだよ！」

哲平は真っ赤な顔をして紐を振り回し、サッカーボールをパシパシぶつけて来た。

「あのな、チビ...」

颯土は哲平の肩に手を回し自分にぐっと引き寄せた。

「お前にもそのうちわかる時がくると思うけど、守るにもいろんなやり方があるんだよ。本当に守らなきゃいけない時は昨日みたいなこともありえるってこと...だ...」

俺も最近わかったことだけど、と最後に付け加えて颯土は言った。

「ほんと？」

もしも昨日、ヒカルの想いが自分の胸の上に解放されていなかったら、今日はまだ笑顔が無理に貼り付けていたヒカルだったかもしれない。

「ああ、ほんと」

「...じゃ、ソージはヒーねえを苛めたわけじゃないんだね？」

哲平は颯土の顔を見上げた。

「俺がお前の大事なヒーねえを苛めるわけないだろ...？」

「ソージはヒーねえを守ったってことなの？」

——守ったのだろうか。守れたのだろうか...

「——俺はそういう気持ちだった...ぜ？」

答えながら颯土は、何でこんなこと四年生のチビに話してるんだか...、と、苦笑した。

「なーんだ。そっか。そーだったのかあ〜」

哲平は今度はにやにやする。

「やるなあ、ソージも。昨日のあれはヒーねえとらぶらぶの現場だったのかあ〜」

哲平はサッカーボールを颯土に軽くポンポンぶつけながら言った。

「なっ？ら、らぶらぶっ？」

ボールから身をかきながら颯土は仰天した。

「じゃあ、お母さんに言い直してこなきゃ！」

「ちょっ、ちょっと待てっ！お前、おふくろさんに言ったのか？」

「言っちゃったよ？ソージがヒーねえ泣かしてたって...。ソージんちのおばちゃんにも言っちゃった...」

――で、昨夜のおふくろだったってわけか！

颯土は妙に納得した。

「.....おまえなあ――」

と、言ったまま颯土は次の言葉が出ない。哲平の話を聞いたふたりの母が、昨夜は帰りの遅い娘と息子を心配しながらあたふたおろおろしていた様子が目に浮かぶようだ。

「.....だってさ、ヒーねえが泣くなんて見たことなかったんだもん、オレ...」

哲平はバツが悪そうにうつむいた。

「ヒーねえ、いっぱい泣いてたからオレさ...」

「チビ.....」

大好きなヒーねえが泣く姿を、後ろからなのか横からなのか、とにかく夕暮れの公園を通りかかり、見てしまった哲平の心の痛みが颯土にはわかった。

――こいつもヒカルの泣き顔なんて見たくねえんだよな....。

「...そうだよな。お前のヒーねえはいつも元気だもんな」

颯土は哲平の頭をくしゃっと撫でる。

「うん。オレは元気なヒーねえじゃなきゃいやだ」

「それは俺も同じ...」

哲平はまたニヤリと笑った。

「そっか〜。ソージもそーなのかあ」

なんだよ、こいつ...、と颯土はやや焦る。

「ソージ、ヒーねえを幸せにしてやってよ？約束だよ？」

「...それ飛躍しすぎ！」

「ヒヤクって何？」

哲平は無邪気に首をかしげた。

「考えが飛び過ぎてこと！そんな約束できねえよ...」

あいつを幸せにするのは俺じゃなく...、と心でブツブツ言ってる間に、哲平はまたサッカーボールをおもいきりぶつけて来た。

「約束できないくせに、ヒーねえとらぶらぶチューしたんだったらオレが許さないっ！」

「だ、誰が、らぶらぶ...チ...っ！...この、ませガキッ！」

やっぱり幼稚園児の頃からお姫様お助け系のテレビゲームを見せていたのが悪かったか、と颯土は今頃己を反省した。

「責任取って幸せにしろよっ！」

颯土は、何の責任だよ、まったく...と呟く。

「.....幸せにとってさ、お前はヒーねえがどうなれば幸せだって思うんだ？」

「毎日楽しそうに笑ってること！」

間髪をいれずに哲平は答えた。颯土は思わず笑みがこぼれ、やっぱり俺の教育は間違っちゃいなかったかな、と思いなおす。

「...それは俺も同じ。だから、俺なりにお前のヒーねえが毎日幸せに笑ってるように守ってやる。けど、お前も守ってやれよ？わかったか？」

「ラジャーッ！」

哲平は小粋に右手の二本指を眉毛の上に乗せて応えた。

「.....お前のヒーねえは幸せだぜ。ねーちゃん思いの弟がいてさ」

颯土が哲平のおでこをつつくと、へへんと鼻を鳴らした哲平は、

「とにかくお母さんに言い直してくる！じゃっ！」

と、家の中に駆け込んでいった。

「お、おい！余計なおかずはつけずに話せよっ！」

と、いう颯土の言葉などもう聞きゃいない。

「...参ったな。あいつ、らぶらぶ...チ...とか言わねえだろーなあ...」

またさらに大騒ぎになるような予感がする颯土だ。

けれど――。

――ヒーねえを幸せに...か。

哲平が言った `幸せ、`、という言葉が軽い衝撃だった。

空を見上げると、まだそこに白い直線が真っ直ぐに伸びていた。

◇

空に伸びるひこうき雲を見上げながら、幼稚園に続く道をヒカルは歩いていた。いつか、颯土と一緒にぶらぶら撮りに行った時に見上げたひこうき雲を思い出す。

遙かな空の上にあった真っ白な線に、とどけっ！と叫んで伸ばした手――。

届きそうで届かないね、と呟いた自分に颯土は、届くさ、と言い切った。その言葉どおり颯土が撮ってくれた写真の中で、伸ばした手はしっかりと白い線を掴んでいた。

――あたしの想いはちゃんと届いた...。

響と会えた。

触れ合えた。

風間響という人と生きた時間をいのちに積み重ねることが出来た。

あの時に一番欲しかったものは叶った。そしてそれは決して悲しいものじゃなかった。ただ、短い間だったというだけで――。

――ヒビク…。

幼稚園の正門の前に立ち止まり、空を見上げたままヒカルはひとつの深呼吸をした。

――手を伸ばしてあなたの夢を掴んでね…。あなたがどこにいても私はここでずっと応援している。ヒビクのお母さんがジャックさんを応援し続けたように、ずっと――。

「おはよう、ヒカル先生」

後ろから遼子先生に声をかけられ、

「おはようございます！」

と、あいさつを返しヒカルは正門をくぐった。

職員室で先生たちの朝礼をしてからヒカルはバスに乗る。

「また今日から修羅場ね！」

遼子先生が言った。

今日から12月のお遊戯会に向けて、合奏やお遊戯の練習、衣装作りで追われる毎日が始まる。ほとんど毎日のように残業が繰り返され、その準備期間がもっとも長いお遊戯会は先生たちにとっては年間行事の中で一番大変な行事なのだ。

「幼稚園の先生がこんなに大変なものだったなんて…って、ヒカル先生はそろそろ根を上げたくなくなってる頃じゃない？」

と、言ってる亜希子先生が根を上げたような顔をしている。

「いえ！私は昔からこういうドタバタは得意だったんです。体育祭文化祭の準備は人一倍張り切っていましたから！」

高校の頃、自分の周りにあった空気がじわじわ蘇ってくることを肌で感じる。それは長い間どこかに置き去りにしてしまっていた自分自身のような気もする。

「――私、こんな日常に憧れてこの職業につきましたから。だからどんな修羅場も子どもたちと一緒に、楽しんで朗らかに乗り切りたいです」

今、心の底から自分が笑顔になれていることがわかる。

「楽しいだけじゃないんたけどねえ…」

と、亜希子先生はため息をつく。

「朝からため息をつくときが逃げちゃいますよ？朝の空気の中には今日一日の幸せがいっぱいつまってるんです！だからこーやって…、」

ヒカルは身体を前屈し、そこから徐々に身体を起こし空気を吸い込む「バキューム機式深呼吸」を先生たちに教えた。

「なんだか変な深呼吸だけど、元気が出る感じね！これ、私たちの毎朝の日課にしましょうか」

と、遼子先生が笑った。

朝礼が終わると先生たちはそれぞれの持ち場に走る。園舎の中は一斉に活気が沸く。

ヒカルはバスに向かおうとして職員室の出口横にある記念写真や賞状などが飾られているガラスケースの前で立ち止まった。そして、いつか戸棚の中にしまってしまった人形劇の記念写真をそっと元の場所に飾った。

本城高校人形劇サークルのみんなと、にぎやか組のみんなと、田村、颯土、そして響の笑顔がまたここに並んだ。

――これは、あたしの夢が叶った日の写真。だから、これからも――。

正門を出るとバスがエンジンをかけて待っていた。

ふと空を見上げると、少しだけ薄くなったひこうき雲が、まだ青空の中で白い線をのばしていた。

颯士が危惧したとおり、哲平がおかずをいっぱいくつつけて墨田公園でのことを両家の母たちに報告してくれたおかげで、浅倉家と群竹家に嵐が起こった。

ヒカル之母は当然響のことを訊いてきたし、ようやくボストンでの事実を話したヒカルはおもいきり母に泣かれた。ボストンに発つ前にこのような状況になることを心配して、あれほど反対した母だからそれも当然だ。

気持ちがここまで来るのにずいぶん時間がかかったけれどももう大丈夫だから、と何度も母と話をしようやく母娘の間の嵐は去った。

同時に起こったもうひとつの嵐は早合点の兄だ。

『金髪野郎をぶん殴りに行って来るっ！』

と、鼻息を荒くして本当にボストンまで飛んでいきそうな勢いをつけてしまい、ヒカルは、響とのことをひとつひとつ話して兄を鎮めるのにずいぶんな労力を費やさなければならなかった。やっと気を鎮めてくれた兄にはそのあと、『どうしてすぐに言わなかったんだ！』『何のための家族なんだ！』と、ひとりで抱えていたことに対してさんざん責められ、そのことについてはただ謝るしかなかった。

そして、その一大騒動の後はおもともと互いの娘と息子をまとめた夢を持っていた両家の母たちは、哲平からの素敵な報告に当然舞い上がり、将来の夢の話で盛り上がってしまい、颯士之母は単身赴任中の父にまで報告してしまったりと、大きく広がってしまった誤解を解く作業でヒカルも颯士もへとへとになった。

ヒカルはその間も、お遊戯会の準備に追われて毎日残業。それに加え、お遊戯と合唱で使う新たな楽曲のピアノ練習があつたりで休日もない日々だったし、颯士はまた突然の海外取材に同行して真夏のブラジルに飛んだり、帰ったら今度は真冬の北海道に飛んだりして11月はほとんど家を空け、落ち着いたと思ったら大風邪で3日ほど寝込んだ。

そして今日はすずらん幼稚園のお遊戯会。

何とか風邪も治癒した颯士は再び専属カメラマンとして園児たちを撮影した。

運動会での経験があるとはいえ、やっぱり子どもの撮影には神経を使うし、たんぽぽ組の演目時は、ヒカル先生のあぶなっかしいピアノ伴奏にハラハラし通しで、本音のところでは写真撮影どころじゃなかった。最終演目の幕が下りた後は今日一日だけでなく今までの疲れがどっと押し寄せた颯士だ。

「……ほんと、嵐だった……」

帰り道は雨。

嵐とまではいかないが、まとまった雨が傘を打つ中、正門から百メートルほど歩く駐車場の車に向かいながら、颯土は半ばぐったりとした様子で呟いた。

「あたしの嵐はまだまだ続く……」

両手に荷物を持ち、首と肩で支えた傘がずり落ちそうになっているヒカルは一旦立ち止まり、体勢を立て直しながら言った。

「明日休んだら来週からクリスマス会の準備だし、また新しい曲を練習しなきゃならないし…」

「げっ、また新しい曲かぁ…」

颯土は心底ギョツとした顔をヒカルに向けた。新しい曲を練習し始める時のヒカルのピアノにはいつも頭を抱えさせられる颯土だ。

何度も聴かされる間違いだらけの音程がいつの間にか耳の中にインプットされてしまい、それが軽いトラウマになってまともに弾けるようになってからも常にハラハラさせられ心臓に悪い。

「何よ、その顔…」

ヒカルはムツとした。

「い、いや？お前、ぶっ倒れちゃうんじゃないかねえかって心配してやってんの…」

「そっか。ありがとう」

ヒカルは機嫌よくニッコリ笑った。

うまくフォローした自分の言葉ににんまりし、ヒカルの手にある荷物をさり気なく取った颯土が今度は肩と首で自分の傘を支える。

「でもあたしはこれでも体力には自信あり。颯土くんこそ風邪ぶりかえさないでよ？」

ヒカルは斜めに曲がった颯土の傘の柄に手を伸ばし、真っ直ぐに支えた。

「ヒカルちゃんがビービー弾を飛ばしてこなかったらたぶん大丈夫」

と、颯土は笑う。

「…ごめ～ん…」

颯土の風邪をこじらせた犯人はヒカルだった。寒空の中を窓を開けさせ、くだらない長話をしてしまうのは高校の時から常だ。長期間部屋を空けていた颯土が北海道から帰った日は、窓越しに何時間捕まえて喋ったか分からない。その翌日から颯土は寝込んでしまった。

はっくしょん！と颯土はくしゃみを出す。

「まだ完璧じゃねえなあ…」

颯土は鼻をぐすぐす鳴らす。

「…今夜はゆっくり休んでください…。ビービー弾はお休みします…」

「ありがたいお言葉感謝します…」

駐車場に到着し、両手がふさがっている颯土がヒカルに、ブルゾンのポケットから鍵を出して、と言うと、ヒカルは手を入れてキーを探す。

ガムや煙草が一緒にもぐっているポケットの中を手探りゲームのようにまさぐって、ようやく掴んだキーホルダーはいつか自分がプレゼントした星のロケット。

「あ、これ、まだ使ってくれてるんだね！」

ヒカルが車にキーを差し込んで笑うと、颯土は照れくさそうに、まあな...、と呟いた。

◇

来週からもまだ行事が続くとはいえ、とにかく一大イベントのお遊戯会は終わった。

たくさんの嵐が通り過ぎて季節はいつの間にか秋から冬に変わっている。クリスマス会で伴奏する『あわてんぼうのサンタクロース』の練習を一通り終えて、ヒカルはほっと息をついた。そして、カレンダーの『8』の数字にナナメの線を引っ張った。

お遊戯会が終わったらすぐに成田に向かう予定でいた12月8日――。

夏までの予定なら、今日はアカデミーを修了した響が帰国する日だった。

この日を迎えるときの自分がどんな想いをするのか、少し前までは怖くて12月のカレンダーを見ることも出来なかった。でも今、6日や7日と変わらない想いで線を引くことが出来た。

線で消えた『8』の数字をじっと見つめていたヒカルは、思いついたように机の引き出しの中からひとつの楽譜を取り出した。

――Shine。

響の文字で一番上にタイトルが書かれた五線譜をそっと開き、ひとつひとつの音符を目でたどっていく。

速度指示はAdagio(アダージョ)。

そして、クレッシェンド、デクレッシェンド、フォルテ、ピアノ、ピアノシモ、フェルマータにダカーポ...

知らなかったたくさんの記号が並んだ楽譜に頭を抱えながらも、奇跡を信じて毎日これを練習していた1年半の月日が蘇ってきた。

ボストンから帰ってからは、その時間とメロディがあまりにも痛くて開くことも弾くことも出来なかった『Shine』だけだ――。

ヒカルは楽譜を譜面台に乗せて再びキーボードの前に座った。

そして、最初の音の鍵盤に指を乗せたとき、ボストンのライブハウスで響が弾いた『Shine』のメロディが聴こえた気がした。

甘くせつない旋律を、あの日の響はよりせつなく弾いていた。ひとつひとつの音符に込められた響の言葉が優しく心に響いて来たけれど、それ以上に口に出すことが出来ないせつなさに支配された。そして、そのメロディはボストンでの最後の日を迎えるまでずっと、ゆるやかにゆるやかにせつないまま流れ続けた。

――でも、この曲のタイトルはShine....

ヒカルはメロディを指でたどる。

――せつない旋律だけど、これはせつないだけの曲じゃない。Shineだもん。光だもん....

心の中で誰にともなく語りかけながら、ヒカルは数ヶ月ぶりの『Shine』を弾く。

サンタクロースの曲は弾けなくても、この曲の音符は数ヶ月弾いていなくても指がちゃんと覚えている。

p (ピアノ)、pp (ピアノシモ)、decresc (デクレッシェンド)。

『Shine』は片想いの曲だと響が言っていた通り、楽譜通りの指示で弾けばあまりにもせつない曲。

でも、『Shine』の言葉の意味を思い描きながら弾けば希望の光に満ちた曲。

――一曲が生まれた高校時代のあの頃と今では、きっと光の種類も輝き方も違うから....

ひとつひとつの音を自分に聴かせるようにしてヒカルは弾く。そして、最後の四小節を弾き終えた時、長い間、心の中に降り続いていた雨が穏やかに上がって行った。

◇

ベッドに転がりながら、窓の向こうから流れてくるたどたどしく間違いだらけの『あわてんぼうのサンタクロース』を颯土は聴いていた。

次はこの音に来るだろうと思っていると予想を裏切られた不協和音が聴こえたり、テンポに乗ってるとそれが突然狂ったり止まったりして、寝転がっているというのにずいぶん疲れ、やっと音が鳴り止んだ時は何故かはあはあしていた。

もう今日の練習は終わりか、と安心していたところに、再び音が鳴った時はため息が出たが、さっきの曲と違い今聴こえているメロディはつかえることも止まることもなく流れていく。

――この曲は確か....

もうずいぶん前に毎日聴こえていた曲だ。響がヒカルに贈った、

――『Shine』.....

甘くせつない旋律だったということを耳が覚えていたが、今聴こえてくる『Shine』はどこか

違う。

颯土は目を閉じて神経を窓の向こうに集中させた。なだらかに流れるメロディはせつない旋律には変わらない。けれど温かい。雨が上がったあとに降り注ぐ柔らかな光が目には浮かんた。

——雨上がりの光、か……。

さっきまで降り続いていた雨はもう上がったのだろうか。雨が屋根を打つ音もそういえばもう聞こえない。

ベッドから起き上がり、カーテンを開いてみるとやはり雨は上がったようだ。暗い空にかかっていた雲がゆっくりと晴れて行き、霞んだ月がぼんやりと輝いていた。

窓を開けると12月の冷たい空気が部屋の中に流れ込んできた。それでもやっぱりどこかが温かい。月の明かりのせいかな、とそのままヒカルが奏でる『Shine』に耳を傾ける颯土だ。

——いや、月のせいじゃないな…。

目を閉じた瞼の裏に浮かんたヒカルと響の絵が、今までの目もくらむほどの強烈な光から柔らかで優しいものになっていく。その光の中に心が溶け込み満たされていく。

感動という言葉はありふれているが、その不思議な感覚に熱いものが胸に込み上げる。

颯土は本棚の中から古い雑誌を取り出した。高校1年の文化祭で、初めて撮ったヒカルと響の写真が掲載されている『ピクチャーライフ』だ。ステージの上でまばゆく発散されていたふたりの輝きに衝撃を受け、夢中でシャッターを押したあの文化祭が、今写真を撮っている自分の始まりだった。

真っ直ぐに響を想うヒカル、真っ直ぐにヒカルを見つめる響。

ふたりの視線はいつも空中で交差し、スクエアの中におさまるふたりの絵は現実で見るよりも美しく光溢れていた。

過去から未来まで、同じ輝きを放つ光だと知っているつもりだったけれど——。

手が届かない光。

隣んちのヒカル。

どちらも同じヒカル——。

いつの間にかピアノの音は止み静寂が訪れていた。

颯土はビービー弾を隣の窓に向かって投げた。すぐに窓が開いてヒカルが顔を出した。

「あれ？今日はビービー弾休みだって言ったじゃない…？」

「…そのつもりだったけど、素敵な演奏の感想でも述べてやろうかと思ってさ…」

「あ…、ごめ～ん…。うるさかったよね…」

ヒカルはまたやっちゃった、というように首をすくめた。

「いや、マジで…。今のピアノはひとこと言いたくなるくらい上手く弾けてたぜ？」

心からの賛嘆をヒカルに伝えると、ヒカルは顔中で微笑んだ。

「ありがとう…。『Shine』っていうタイトルを考えながら弾いてたの…」

「Shineか…」

「うん…。光にもいろんなものがあるよね」

「…ああ、そうだな」

晴れた日の太陽や柔らかな木漏れ日や雨上がりの光…、と颯土は自分が知っている光を頭に描く。

「ヒカルらしい『Shine』だったぜ？曇った場所から陽だまりの中に飛び込んだようなあったかさっての？雨が上がったあのお日様っての？とにかくそんな光が見えた」

「ほんと？」

あたしってもしかして名ピアニストかも！とヒカルははしゃいでから、

「時代によって形や意味は変わっていくよね…」

と、ヒカルは雲が晴れた月を見上げた。

「…ねえ、颯土くん」

「ん？」

「あのひこうき雲の写真…まだある？」

「…あるさ」

ヒカルは見上げていた顔を颯土に戻して満足気に笑った。そして、

「――あたし、とっても素敵な恋をしたって、今、そう思うんだ…」

と、微笑んだ。

月明かりの中のナチュラルな笑顔が美しくも見え可愛らしくも見えて、とっさに言葉が見つからない颯土だ。

明るく柔らかな光。

Shine。

ヒカル――。

「そうか…」

心に描いていた絵が形を変えていく。

でもそれは決してセピア色に色褪せたりはしない。

鮮やかで自然なまま現在の形から過去の形へ――。

「なあ、ヒカル」

「ん？」

「.....明日ぶらぶら撮りに行こう」

「...うん！」

「朝早く出るぜ？」

「颯土くん、大丈夫～？」

ヒカルは目を細めて笑う。

「撮りたいものがある時はどんなに早くても大丈夫...！」

と、颯土は頭をかいて笑った。

◇

翌朝はまだ夜が明けきらないうちに、ふたりは互いの家を出た。

「おはよう。寒いね」

ヒカルは手袋のない手に白い息を吹きかける。朝からもうとびきりの笑顔だ。

颯土は自分が被っていたニットの帽子をヒカルに被せた。

「耳まで深く被ってるよ」

「...うん！ありがとう！」

言われた通りヒカルが帽子を深く被ると、しっとりとした冷たい空気の中をふたりはどちらからともなく墨田公園に向かって歩き出した。

東の空がぼんやりと赤紫に色づき、まだ目覚めきっていないいつもの街は道路も建物も昨日の雨に穏やかに濡れたままで、どこか別の場所のような気がした。

隅田川は昨夜の雨で灰色に濁り決して綺麗だとは言えないが、遙かに伸びた川の東側から、昇り始めた朝日が水の上にほんの微かな光を躍らせている。

颯土がカメラを構えたので、ヒカルは一步後ろに下がって見守った。

シャッターが切れる音が透明な空気の中に響き、後ろを振り返った颯土はじっと自分を見つめて微笑んでいるヒカルに照れくさそうに笑った。

ふたりは雨が乾いていないコンクリートの遊歩道を東に向かってゆっくりと歩く。

木々の葉っぱやプラスチックのベンチが小さな水滴をつけていた。

颯土はふと立ち止まった。

「どうしたの？」

「ここで日が昇るのを待とう」

立ち止まった場所で颯土は東の空を見つめる。

「じゃ、珈琲でも飲んで待つ？」

ヒカルはバックの中から水筒を出して笑った。

「マジ？珈琲入れてきたのか？」

「うん。インスタントだけどね」

プラスチックのカップを颯土に手渡してヒカルは珈琲を注ぐ。真っ白な湯気とこおばしい香りが立ち、颯土は嬉しそうにその香りを大きく吸い込んだ。

「気が利くねえ～、ヒカルちゃん」

「おにぎりもお菓子も持ってきた」

と、ヒカルはそれらを颯土に見せた。

「...ピクニック...ですか？」

颯土はやや呆れたように言った。

「だって、颯土くんとのぶらぶら撮り、楽しみにしていたんだもん！最近は何も昔みたいになかなかついていけないし」

「ヒカル先生が忙しいからな」

と、言いながら、この前ヒカルと写真を撮って歩いたのはいつだったろう、と颯土は考えた。たぶん、ヒカルが先生になってからは初めてじゃないだろうか。だが、そんな前だと思えないのは、写真を撮る時は常にヒカルが心の中にいるからだ。何を写すのもヒカルを重ねている、ヒカルしか撮れないカメラマンだからな、と颯土は苦い笑いを噛んだ。

「ねえ？立ったまま飲むのも何だし...」

ヒカルがベンチの水滴をタオルで拭こうとすると、颯土は、

「待った！そのままにしといて」

と、ヒカルの手を取ってそれを止めた。

「何で？このまま座っちゃうの？お尻が濡れちゃうよ？」

真顔で言うヒカルに颯土は呆気にとられたあとに、はっ！と笑った。

「...朝日が昇ったらたぶんわかると思う...。まあ、確信はないけど...。とりあえず座らないでこのまま待ってようぜ？」

颯土の意図がヒカルにはさっぱりわからなかったが、

「うん...。じゃあそうする」

と、首をかしげ、その横で颯土は珈琲をすすった。

熱い珈琲をふうふうしながら全部飲み終わった頃、朝日が勢いをつけて昇り始めた。

颯土はカップをヒカルに手渡してファインダーを覗いた。

――え？

颯土がレンズを向けたのはさっきのベンチだ。

無数の水滴が向こう側からの朝日に照らされ、ベンチの上は光の粒に覆われた。

ひとつひとつはとても小さな輝きだ。だが、それらがこんぺい糖のような形をもった光線を

放ち、まるで生命があるかのようにその場所で踊りはじめた。

そのあまりにも健気で儂い光のダンスに、ヒカルは言葉を失くした。

――ただのベンチについた水滴なのに…。もしもさっき、サーッと拭いてしまっていたら、この光の粒たちは生まれてなかった。

颯土はいろいろな角度からベンチの水滴を写真に撮っている。真剣な目の中に優しさをにじませて――。

「…やっぱ天才」

思わず呟くと、颯土はまた、はっ！と笑った。

「このイメージは昨日のヒカルのピアノから湧いたんだぜ？」

「え？ そうなの？」

「雨上がりに生まれる光たちが目の前に浮かんでさ、写真にしてみたくなった」

「あたしのピアノで？」

「そ。だから俺が天才だとしたらヒカルはもっと天才だってこと」

あたしってすごーい！とヒカルはおおはしゃぎだ。

「――お前、都合よく解釈してるけどさ、ようするに俺は天才なんかじゃないぜってことが言いたかったんだけど…」

という颯土の言葉など聞いちゃいない。舞い上がったなら一直線なのは昔から変わらないヒカルだ。

光。

輝き。

時代の流れにつれて形を変えるものも確かにある。だが、変わらないものもその中にはちゃんと存在する。おきゃんではなくなったヒカルかもしれないが、こんなところは昔のまま。

颯土はヒカルの笑顔をいつまでも見つめる。そんな自分も昔のままだ、と思いながら――。

濡れた葉っぱの間から零れる光。

朝日が雫に反射した草の上で七色に輝く光。

隅田川の水面で揺れる光。

木の葉から滴り落ちる寸前の雫の中に輝く光――。

颯土はそんな雨上がりの光の風景をひとつひとつ写真におさめて歩く。

陽もすっかり昇った公園に、犬を連れて散歩する人があっちからこっちからとやって来た。きっと毎日同じ時間を歩いている人たちが、すれ違いざまに朝のあいさつを交わして行く。活気がつき始めた街はもういつもと変わらない風景に戻りつつある。

その川べりの道を、ニット帽の裾から出た髪を揺らしながらステップを踏むように軽やかに歩いていたヒカルが、

「こんなに近くに光はたくさんあったんだね！」

と、振り返った。ずっと前を歩くヒカルにレンズを向けていた颯土はその瞬間にシャッターを押した。

――それは手が届く光たち…。

身近なところで輝く小さな光も、燦燦と降り注ぐ太陽の光も、自分にとって輝いていることの意味は同じ。

――今、ここで笑っている `浅倉ヒカル、が俺の光…。ただそれだけで――、

「――ヒカル」

再び前を歩き出したヒカルを颯土は呼び止めた。

「ん――？」

ヒカルはくるりと振り向く。

颯土はそっと自分の手を伸ばし、ヒカルの掌をにぎった。

「…颯土くん」

ゆっくりと、時をかみ締めるように颯土はヒカルを腕の中に引き寄せせる。

――過去の絵やその輝きはいつまでも俺の憧れ…。

腕の中に抱き寄せたヒカルの目を颯土はじっと見つめた。

ヒカルも颯土の目をじっと見つめる。

――未来のことはわからない。わからなくていい…。

泣いていない、そのままのヒカルを颯土はそっと抱きしめた――。

前髪から覗く颯土の真っ黒な瞳が自分を真っ直ぐに見つめて優しく輝いていた。その温かな眼差しから颯土の言葉がたくさん聴こえて来る。水月の珈琲ショップにあるどの写真よりも、さっき見たどんな光よりも、颯土の瞳の中にある光は愛が溢れ今にも零れ落ちそうだ。

「…颯土くん」

小さく名を呼ぶと、自分を抱く颯土の腕に力が入った。

スーッと心の中に懐かしく温かい風が通り過ぎ、強張っていた身体の力が抜けて行った。颯土

の腕の力が強くなればなるほど、自分の身体は自然に柔軟になっていく――。

後ろから注ぐ朝日は柔らかく透明な輝きを放ち、腕の中で目を見開いて自分を見上げるヒカルの顔を鮮やかなピンク色に染める。

――俺との時間で笑うヒカルの笑顔。晴れた日ばかりじゃない、雨も嵐もある。

ありのままのヒカルを、ありのままの俺が...、この街で、この風景の中で、この笑顔を守ることは出来る――。

颯土がゆっくりとヒカルに近づくと、ヒカルはそっと目を閉じた。

「―― ...してる」

唇と唇が触れ合う寸前に颯土は言った。

――いま現在、俺の真実はここにいる浅倉ヒカル。

ただ、それだけ。

それが、全て――。

どこまでも優しいキス――。

雨があがった柔らかな光の中、颯土の想いの全てがヒカルの全身に染み込んでいった。

『きみにとどくまで Gracile』 完

『きみにとどくまで Fermata』につづく

――一緒に生きる未来はなくなった。

もう約束はしない。

待てとも言わない。

俺がやらなきゃならないことは、

ここで一から、まっさらな俺からのスタートを切り出すこと――。

◇

さっきから同じ言葉ばかりを無意識にリピートしている。

見える景色はどんどん移り変わっていくが、それらはただ視界に入ってくるだけで意識の何処にも引っかからない。心の中で何度も繰り返されるその言葉の意味だけが、今の響が認識できる全てだった。

「着いたけど...？」

煉瓦色の建物の前で景色の移動がなくなっても、次の行動を取ることもせず、膝に肘をあて頬を支えた同じ姿勢をとったままの響に隣にいる人間が声をかけた。

「.....カザマ・キョウ？」

名を呼ばれ、響はゆっくりと顔を左側に向けた。

「大丈夫？真っ青よ？」

2時間前、大通りに飛び出してきた響を空港まで送り、今また空港からここまで無言のままの響を車に乗せてきたのはボストン案内所の淳子だ。

「...あ、ああ」

ここが自分のライブハウスの前だとやっと認識した響は曖昧な返事を返した。

「あんまり大丈夫って感じでもないわね...。でも、当然か...」

響は車のフロントガラスから遠い空に目を向けた。

ついさっき、あの空の彼方にヒカルは消えて行った。

――...さよなら、ヒビク。

3週間前、自分の姿を探して佇むヒカルを後ろから抱きすくめた空港ロビーの同じ場所で、最後の抱擁を交わした腕の中で微笑んだあと、背筋を伸ばし肩の上で髪をふわふわと躍らせながら、一度もこちらを振り返らずに搭乗ゲートをくぐって行ったヒカル。

その凜とした後姿と最後の笑顔は臉と命に焼きついた。

『よかった。別れるのはやめたのね？』

ヒカルの姿がゲートの向こうに見えなくなったあと、淳子は言った。

『...別れました。もう、ヒカルと俺に共に生きる未来はありません』

響はそうはっきりと答えた。

『そんな...。だって、今.....』

そのまま絶句した淳子だった。抱き合い、くちづけを交わしたヒカルとの最後の瞬間だったから、ふたりが真実の別離を迎えたようには見えなかったのだろう。

——もう、ヒカルと俺に、共に生きる未来はありません。

あの時、空港で淳子に言った自分の言葉と声が耳に残り、時間が経つにつれてじわじわと全身を伝ってくるそれは今、響のあらゆる部分に大きな痛みをもたらしている。

別れの口火を最初に切ったのはヒカル。

だが、それを受け入れたのは自分。

「いや、俺は大丈夫ですよ、淳子さん」

空を見つめたまま響は言った。

「カザマ・キョウ...？」

「俺は大丈夫。これは、自分で決めた結論だから」

響は己に確認するように言った。

「今日はありがとう。おかげで色々助かった...」

「私があなたを迎えに来たのは、こんなことになって欲しくなかったから...だったんだけどね...」

と、淳子は呟いた。

・
・

昨日、淳子が手配した成田行きの航空券を手にしたヒカルの手は微かに震えていた。

『身体はもう平気なの？』

その前日、急病に倒れたヒカルは、まだ蒼白い顔をしていた。

『手が震えてる』

『...今、ジョーイとさよならしてきたばかりだから...』

ヒカルは震える手を押さえて微笑んだ。まだきっと、体調も完全には戻っていないだろうに、そしてジョーイとの別れもさることながら、明日、今手にした航空券を使う決意で心の中は雨が降っているだろうに、無理して明るく笑うヒカルに淳子は胸が苦しくなった。

『...カザマ・キョウには話したの？』

『いえ、まだ。これからヒビクのライブハウスに行くつもりです』

ヒカルは航空券を大事そうにバッグにしまいながら首を振った。

『ライブのチケットは持っていないけれど、ここでヒビクのピアノを聴きに來る人たちと同じ想

いをかみしめてみたくて…。その後、話そうと思っってます』

そう言ったヒカルは、さんざん涙を流したあとに決めた覚悟の顔を見せていた。

昨日、ボストン案内所に息も途切れ途切れの苦しみの中で電話をかけてきたヒカルは、淳子がアパートに飛んで行った時、グランドピアノの足元にうずくまっていた。

ほとんど意識のない中のヒカルは、冷たい汗に混じって幾筋もの涙を頬に伝わせ、うわごとのように淳子がいつも聞いている名とは違う呼び名を呼び続けていた。

『考え直すことは出来ないの？』

ヒカルに頼まれるまま航空券は用意したが、今、そのことを後悔している淳子だった。

『考え直すって...？』

『カザマ・キョウとヒカルさんの未来...』

初めてこの案内所に訪れた時のヒカルはたぶん、3週間後の今日、自分がこんな決断をすることなど考えもしていなかっただろう。ただ夏休みを利用して恋人の元にやってきて、夏休みが終われば恋人のまま日本に帰るつもりのお嬢さん、だったはずだ。

ボストンでの恋人カザマ・キョウの立場や、カザマ・キョウに囁かれているチャンスなど何も知らず、何も聞かされていなかったお嬢さんが、BTMのゲームスから`worst lover、の言葉を投げつけられた時から今日までの短い間に、いくつもの想いを交差させ、それをひとりで消化し、カザマ・キョウの未来をものすごいスピードで考えに考え、ひとりで泣いて泣いて泣いたあとにこの決意に到達したに違いない。

『...考えて決めたことだから、もう...』

と、ヒカルは穏やかに笑った。

『でも、ヒカルさんがひとりで考えたことでしょ？カザマ・キョウとあなたたちの未来のことをちゃんと話し合っていないのでしょうか？』

しばらく考えた後にヒカルはこくん、と頷いた。

『だったら結論を急がないで…。航空券のキャンセルなら私がやっつくから』

『...キャンセルはしません』

小さく、それでもキツパリとヒカルは言った。

『...ヒビクはここでピアノを弾き続けていく人だってわかってる。でも、話し合いをしたら私はきっと、日本に帰ってきて欲しいと言ってしまう。いえ、言わなくてもそう望んでいることが彼には伝わってしまう』

『それでも、お互いの本当の気持ちをぶつけ合わなければ後悔することになると思うわよ？』

『...後悔はするかもしれないけれど...、ぶつけ合っても選ぶ未来は同じだと思います』

『同じ場所で生きることはしないってこと...？』

ヒカルは頷いた。

『ぶつけ合って傷つき合って選ぶ未来が同じなら、分かり合っている今、未来を約束しないでさよならした方がいいから...』

『本当に分かり合ってる...？』

ヒカルは少しの間、目を閉じ考えていた。

分かり合っていると信じたい...、とその仕草が物語っている気がして淳子の胸はまた痛んだ。
『少なくとも...、私はヒビクの想いがわかる...。ヒビクは真実の心と正反対の選択をしようとしている...。私を想ってくれているから...』

『ならそれでいいじゃない？彼がそれでいいなら...、』

ヒカルは首を横に振った。

『ヒビクはずっとここで覚悟を決めてピアノを弾いて来たんです...。でも、彼は自分のピアノのことを私には何も言わない。ピアノへの想いや夢を私に話そうとはしない...』

ヒカルはごくく、と息を飲み込んで肩で息を吐いた。

『でも、ヒビクがピアノに込めてきた覚悟はいろんなところで見えてしまったし、感じた...。私は私でヒビクが遠くに行ってしまうことが怖くて、そういうことに目を瞑りたいと思ってた』

『...ヒカルさん』

『.....ヒビクが私に言わないのは、それが彼の真実で、その先には私たちの分かれ道があるからなんです。ヒビクの目指したい夢はきっとそこまでのものなんです。私が待っているからヒビクは急いで約束を守ろうとしてくれている。でもそれは、ヒビクが本当に望む彼の未来じゃない。彼が本当に守りたいのは真実の方...』

『そうだとしても、そういうことをじっくり話し合えば、ふたりが分かれ道を歩かないでひとつの道を歩いていく方法が見つかるかもしれないでしょ？』

ヒカルはゆっくりと首を振った。

『私の真実の望みはヒビクを困らせてしまうだけです...。たとえ、私がそれを言葉に出さなくても、彼はきっと私の望みに縛られてしまう』

『――ヒカルさんの居場所はどこではないのね...』

ヒカルはゆっくり頷き、

『私には...私の居場所があると思います...』

と、寂しげに微笑んだ。

それでも、響は別れを受け入れはしないだろう、と淳子は思っていた。

病室に駆け込んできた響の顔は、偽りなどひとつもない、愛する人を慮る表情（かお）だったから――。

どんなことをしても響はヒカルを引き止めるだろうと、どこかで信じていたから、数時間前、ヒカルが案内所に別れを告げにやって来た時は愕然とした。

本当の望みを心の奥に封じ込め気丈に振舞うヒカルが哀しくて、いてもたってもいられなくなり、淳子は車をカザマ・キョウのアパートに走らせた。

ヒカルを追いかけ、ちょうど大通りに飛び出して来たカザマ・キョウに出遭った時は、ふたりの別離は避けられるかもしれないと思ったけれど...。

・
・

「それじゃ...」

車を降りようと、響がドアに手をかけたとき、

「――ヒビク先輩」

と、淳子は呟いた。

「え...？」

響は驚いた目を淳子に向けた。

「一昨日、アパートで倒れてたヒカルさんがずっと呼んでいた名前」

「ヒカルが...？」

「あの時ヒカルさんの意識はなかったから、無意識の中で本当に呼びたかった名前なのね、きっと」

――ヒビク先輩っ！

自分をそう呼ぶ、幼いヒカルの声が心のどこかで聴こえた。同時に見えたのは、明るい光の下でハツラツと笑う太陽の笑顔だ。

突然胸を激しく掴まれる感覚が走った。身体の底から見えそうで見えない記憶なのか、意識なのか、とにかく意識の下が覚えている何かが込み上げて来て、その胸の痛みに響は激しく咳き込んだ。

「...大丈夫？」

淳子が響の背中を軽くさすると、やがて咳はすぐに治まった。だが、さっきよりも蒼白になった響の顔がそこにある。

「彼女の無意識がどうしてこの名を呼んでたのか私にはわからないけれど...、あなたにはわかる...、のかな」

淳子は響の蒼い顔を見つめた。

――ヒカルは無意識...。

響はしばらく考えていたが、そのまま言葉を返さずにドアを開けて車を降りた。

淳子はさっき響がずっと見ていた空の彼方を見つめながら呟いた。

「...今頃、飛行機の中でヒカルさんは...、」

泣いてるわね、という言葉は、ドアが閉まる音に消された。

◇

「今日はずいぶん早い入りだな？」

一回目のステージまではまだ1時間以上もあるのに、着替えまで済ませている響にマネージャーが言った。テーブルに広げた五線譜に思いつく音符を書き込んでいた響はチラリと顔を上げ、

「...出先から直行してきたから」

と、簡単に答えたあと、再び視線を楽譜に戻した。もうずいぶん前から、流れる血液に溶け込んでいるように身体の中を走っている旋律があった。

一度はその旋律を見失ったが、さっき、最後にヒカルを抱きしめた時に全身に脈打つリズムと旋律が聴こえていた。

――手の中に戻って来たはずだ。確かに...

だが、繋がらない。

目を閉じ、リズムを感じ、メロディを繋げようとしてみても、音符を五線譜の上に並べようとするとそれは遠く遠く逃げて行く。

遙か昔から知っている旋律のようで、新しい未知のメロディのようで、懐かしいけれど斬新な闇の中の一点の光を追いかけるイメージだけがぐるぐると駆け巡る。

見えているのに手を伸ばしても届かないもどかしさに、響は新しい五線譜を何枚も無駄にしていた。

「新曲...か。キョウにしては珍しく苦戦してるようだな」

激しい筆圧で `x、を引かれたメロディの残骸を手にしながらマネージャーは呟いた。

――新曲...？

出来上がればきっとそれは新曲だろう。

だが、このメロディは次々に生まれてくる他の曲たちと同じ `新曲、という言葉でくくってしまえるものじゃない。まだワンフレーズも繋がっていないが、それだけは今、身体の中を走っている旋律が自分に教えていた。

「ま、何にしてもキョウが弾くメロディを客たちは待ってる。新曲でもストックでもカザマ・キョウのピアノが聴けるのはもうあと3ヶ月なんだからな」

マネージャーは響の側に珈琲カップを差し出した。

響の契約は11月いっぱいまで。

その先の契約までを交わして欲しいというマネージャーの申し入れを、響は日本に帰るから、と断っていたからだ。

「せめてその3ヶ月、『Shine』をプレイナンバーに入れてくれないかねえ...。そうすりゃ俺もこれ以上客に文句を言われずにすむかもしれない...」

マネージャーは情けないため息を吐いた。ボストン中でカザマ・キョウのピアノが聴けるのはこのライブハウスが唯一だ。『水曜日の雨人』と呼ばれていた頃から響のピアノを聴き続けている客も多くいる。

芸術祭後からは、いつかここからカザマ・キョウが世界に向けて大きく羽ばたいていく日が来るだろうと期待をしていたファンも少なくない中で、3ヶ月後には日本に帰国するという意思を

響がメディアに表明した後、カザマ・キョウファンの落胆と非難は契約続行を成功させられなかったこのマネージャー一身に向けられていた。

「Shine...」

響は呟いた。

ヒカルへの想いをひとつひとつ、言葉の代わりに繋いだメロディが『Shine』だった。

ヒカルがいる場所で、ヒカルに届けるためだけに奏でていきたいと決めていた曲だったが、

――あなたが奏で、人々の心を震わせる『Shine』と共に、どこまでもヒビクらしく、ヒビクの音楽を響かせて。

ヒカルから届いた最後のカードにあったメッセージが、学生時代のままの丸い文字とともに見えた気がして、それと同時に凜と背筋を伸ばし振り返らずに搭乗ゲートをくぐっていったヒカルの後姿が、焼きついてる心の中から浮かび上がった。

――俺は、大丈夫……。ヒカルとの別れを自分のマイナスにはしない。

「わかった。今日から契約最終日まで、『Shine』はプレイナンバーに入れるよ」

マネージャーは最初、響の言葉を何気なく聞き流したようだ。一瞬の間、何のリアクションも返さずに響に入れた珈琲を勝手にすすっていた。

そして突然、

「.....ああっ?! やってくれるって?!」

と、立ち上がって叫んだ。

「ああ...」

「何で?!」

「...あんたがやれって言うからさ」

「そりゃそうだけど...、こんなにあっさり承諾されると調子狂うぜ? 『Shine』はキョウにとって大切な一曲なんだろう?」

マネージャーの目が驚きのために丸く動いている。

――ヒビク先輩。

.....と、自分を呼んでいた頃のヒカルへの想いを全て、ひとつも余さずこの一曲に注ぎ込んだ大切な一曲、。

そして、

――ヒビク。

.....そう、自分を呼ぶヒカルが昨夜弾いた覚悟の一曲。

想いと覚悟――。

ヒカルの無意識が自分をかつての呼び名で呼んだ想いが、今、わかったような気がした。
いや、本当はずっとわかっていた。わかっているながら、きっと自分の無意識が目を瞑っていたのだ。

――恋人としてではなく、甘えられる立場で本当の望みをわがままいっばい、俺にぶつけたかったヒカルの真実の想いに...！

.....だから、マイナスにはできない。この選択を意味のあるものにするには、これも自分自身への勝負。

「――大切な一曲だからこそ、お客さんに聴いてもらわなきゃってことにやっと気がついたってとこかな...」

と、響は呟いた。

そして、空港からずっとリピートしている言葉をまた繰り返す。

――ヒカルと、一緒に生きる未来はもうない。

俺がやらなきゃならないことは、ここで――から、まっさらな俺からのスタートを切り出すこと。

ここで。

この場所で――。

ステージから見渡すフロアは客でいっぱいだ。

座席を確保できない客たちはテーブルの間の狭い通路に立ったまま、30分の演奏に耳を傾け、一曲が終わる度に歓声と拍手で賛嘆の意を表してくれる。

その、当たり前の空間の中でピアノを弾いてはいるが、指に伝達していくものが己の中には何もなく、無意識にただ鍵盤を触っているだけの自分に響は愕然とする。

バックヤードからフロアに入り、いつもと同じステージから客で埋め尽くされた空間を見渡して、そして鍵盤に指を乗せた瞬間、突然自分の中が虚無になった。

何を感じてメロディを奏でればいいのか、どうやって今までそれをしていたのかとっさに思い出すことが出来ず、頭の中は真っ白になって鍵盤に指を置いたまましばらく次のアクションに移れなかった。

そして今、ピアノに向かっていながら己がどこも機能していない。それを自覚して意識を探し、またしばらくして虚無に覆われてる自分に気がつく。

――あんまり大丈夫って感じでもないわね…。でも、当然か…。

淳子の弦きが聴こえ、すぐさまそれを否定する。

――俺は、大丈夫。

探す意識はこの言葉だ。

その後、奏でるのは楽譜を無視した激しく鍵盤を叩く曲になる。そんなことを繰り返している今夜のライブだ。

『水曜日の雨人』と謳われていた芸術祭前までと、カザマ・キョウの名が広がるようになったその後では作曲し演奏する曲の調もずいぶん変わり、カザマ・キョウのイメージも物悲しい雨から別の何かに変わりつつある中で、せつないだけじゃなく激しい旋律ばかりが次々と弾き出される今夜のライブには、聴衆たちもどこかで違和感があるようだ。いつもなら起こらないざわついたりよめきが、曲が変わるたびにフロアの中に零れる。

だが、客のそんな反応すらも心に留めることが出来ない。いや、留めようと意識してはいるのにそれが自分自身にリバウンドしてこない。

――目を覚ませっ！

覚醒しない細胞たちを叱り付けるような気持ちで何度も己を喝っする。

ピアノに向かった途端に起こったこのイレギュラーに自分が困惑したまま、曲目はラストナンバーを迎えた。

ステージ開始からずっと、激しいメロディーばかりを息つく暇もなく聴かされていた客たちが、ラストに何が出るのか、不安と期待を込めた眼差しで自分を見つめている。

――……、

最初の音に指を置いたとき、心のどこかがきしんだ。間を置いて何かが胸の中に落ちてきたらまた次のアクションに戸惑いそうだから、響はそれ以上を考えずにすぐさま前奏を弾いた。

激しいメロディーが続いたあとのしっとりとしたその前奏が『Shine』だと気がついた客たちは、一瞬の静寂のあとに大きな拍手と歓声を上げた。

『Shine』を公前で演奏したのは今までにたった三度だ。

初めて弾いたのは4ヶ月前のニューヨーク芸術祭。そして二度目は3週間前、ヒカルをここに招待した日に。そして3度目は昨夜、あのドアの前に佇むヒカルを見つけて突発的に。

ヒカルへの想いから生まれヒカルに捧げるためだけにたった三回弾いただけのこの曲を、何故客たちがこれほどまでに切望するのか、響には分からない。

いったい客たちはどこでこの曲を知り、この曲の何を聴きたいというのだろうか？ジャックの代わりに立った芸術祭のステージで弾いた曲だからか？評判に対するただの興味か？

努めて淡々と巡らす思いからは淡々としたメロディが弾き出される。

――別に何だっていい…。

ただ、求められるメロディを奏できればいいだけ、奏でていけばいいだけ、だ。

四度目の『Shine』を弾きながら響は、条件反射で真っ直ぐヒカルに向いてしまう想いを精一杯遠ざけ別のことを考える。

虚無感に覆われ、同じ沈滞と覚醒を繰り返すこの時間から早く解放されたかった。

◇

「いったいどうしちゃったの、今のステージ！」

ワンステージが終わり、バックヤードに戻った途端、後ろから追いつくようにマネージャーが飛び込んできた。

響はテーブルの上に楽譜をパサリと投げ出し、力なく振り返った。今まで自分がこの壁の向こう側でどんなステージをやっていたのか覚えていない。楽譜を持ってここを出た30分前から、再び同じ場所に戻った今までの時間の流れが感じられなかった。

30分前までの決意していた自分と、ピアノに向かった瞬間の現実があまりにも開きすぎていた

。今、感じているのは虚脱感だけだ。

「...すまない」

響はひとこと呟いた。それしか返す言葉がなかった。マイナスにはしないと心に刻んだのはたった30分前だ。

そのしょっぱなから自分のステージで自分のピアノを弾くことができず、ただただ空ろな時間をやり過ごした。

空ろな心で弾くピアノには何も無い。さっきのステージはピアニストカザマ・キョウではなく、傷んだ同じ場所を行っては戻ることを繰り返す、ただの壊れたレコードだった。

「次のステージはちゃんと弾く...」

マネージャはきょとんとした顔でしばらく響を見つめ、

「何、謝ってんの！」

と、その背中をぽんと叩いた。

「激しい雨が降り続いたあとの『Shine』、いい演出だったぜ？雨に打たれ続けた客たちは救われない想いの中での最後に憧れ続けた光を見ることが出来たんだぜ？」

激しい雨？と、響はステージに持ち込んだ楽譜たちをパラパラとめくりながらマネージャーに聞き返した。『Shine』以外に自分がどんな曲を弾いたのかさえも覚えていなかった。

「おいおいキョウ？大丈夫か？」

——あんまり大丈夫って感じでもないわね....。

淳子の言葉がまた聴こえ、響は、

「俺は、大丈夫」

と、やや強い口調で答えた。

——大丈夫....。

「キョウには雨人が似合ってるぜ。けど、もう繊細なしとしと雨じゃなく豪快などしゃぶりさ。激しく激しく打ち付けてこれでもかっでぐらいに濡らしてやって、最後に溢れる光で救い上げる。これで客はイッチまう」

響は答えずに珈琲メーカーに沸いている珈琲をカップに注いだ。

「こないだ弾いたジャズもよかったさ。最近のメジャー進行の曲もいいさ。けど、やっぱりキョウは`雨、だな。水曜日の雨人って名はキョウのピアノを聴いた客がそう呼び出したんだ。客がキョウに求めているのは雨人のピアノなんだよ」

「雨人の...」

響は呟いた。

「だから今のライブはバッチリさ。『雨人』と『Shine』、客の欲しいものが揃ったステージだったからな。次も頼むよ、キョウ！」

朗々と話し終えたマネージャーは控え室を出て行った。

「...あんな、壊れたレコードが...」

声に出して呟き、響は苦しげに笑った。

客が求める二人のメロディと『Shine』を、何も感じることが出来ない虚無の中で弾いていくことがこの場所でのまっさらなスタートなのか――？

口元に持ってきたカップに注がれた珈琲の中に自分の顔が映っていた。

軽く手を揺らすとカップの中の風間響は儂く拡散された。そこに、さっきステージに立っていた自分そのままを見たようで激しい怒りが込み上げてきた。

――俺のピアノって何だ...？

湯気の立つ珈琲を一滴も残さず一気に飲み干したら喉も胸も灼けるように熱い。

むせて激しく咳き込んで、熱さが鈍痛に変わりその痛みが和らいでいくまで、響はテーブルの上に上半身を伏せ、やがて静かに目を閉じた。

・
・

――ヒビク先輩、大好きっ！

ヒカルが、そう叫んでくれたのは4年近くも前の粉雪の卒業式。

先に言われちゃったその言葉、あとで何倍にもして返したいと思い続けながらピアノを弾いてきた3年半。

想いは『Shine』に閉じ込めて、その詞が言える俺になった時に伝えようと。

そして、

――ヒカル、愛してる。

そう、やっと告げたのが4ヶ月前。

約束どおり、ヒカルの元に帰って抱きしめて二度と離さないって思ってた。ヒカルが誰かに奪られちゃまわないうちに、さっさと自分を磨いて日本に帰る、それが、ここに来た理由だったから。

誰かに奪られちゃまわないうちに...、さ。

あの時――、

魔よけの笑顔と3年半俺を待っててくれたヒカルの想いに壊れかけた俺は救われた。けど、ここにもうひとつ隠れてた想いを見つけた。

どうしようもなく心が騒いで、今すぐ逢って抱きしめなきゃって焦った。
俺だけの宝の箱に閉じ込めてしまおうと。

ヒカルは...拒む代わりに涙を一粒こぼした。

あいつが撮った笑顔と、あいつが撮った時間は目がくらむほど光溢れて...。
俺がここで勝負にこだわったのは...あいつに。
あいつに――。

そろそろ次の準備を頼むよ、とドアの外で叫ぶマネージャーの声で、テーブルに伏せていた響は顔を上げた。頭はぼんやりと霞み、目の前の景色もぼやけてる。

「...寝てたのか...？」

時計を確認すると、ほんの10分ほどしか針は進んでいなかった。飲み込んだ珈琲の熱さもまだ少し胸につかえたままだ。

そして、さっきまでのそのつかえに加え、鈍くて重い塊が胸の奥にある。

――今、俺は何を言ってた...？

覚えていない。

ただ、重く苦しい意識が充満しているだけだ。

「おい、キョウ？」

扉が開いてマネージャーが顔を出した。

「顔色よくないぜ？」

「ああ。大丈夫だ。準備は出来ている」

響は楽譜を持って立ち上がり、軽く首を回して扉を目指して歩く。出口のところでマネージャーはキョウの腕を引き、

「気をつけろ。あいつが来ている」

と囁いた。

――あいつ...？

思い出せない夢の一部が見えたような気がした。

「あいつって...？」

今まで自分の中にいた `あいつ、は誰だったか....。

「BTMのジェームスさ。ちゃんとチケット持って来やがったから追い出せない」

「……そうか」

一昨日、メディカルセンターで会ったジェームスのイヤミな顔を思い出し、響はため息を吐いた。だが、同時に安堵のようなものも感じてる。

その、説明のつかない感情に戸惑う一方で、一昨日のジェームスの言葉が脳裏を横切る。

「ま、もうキョウにとってもジャックにとっても悪い記事は書かないだろうから心配することもないかな。しっかり『Shine』を宣伝してもらってあと3ヶ月客が喜んでくれりゃそれでいいさ」

「……そうだな」

響は呟いてバックヤードを後にした。

◇

見つけたくもないジェームスの姿はステージに立った瞬間に確認できた。一番に、無意識に目が行ってしまったその場所は昨夜ヒカルが立っていたドアの前だ。

薄暗いスポットがたったひとつだけ当たっているステージからは、まだ照明の落ちていないフロアで不適な笑みを浮かべこちらを凝視してるその表情までもがしっかりと見える。敵意に満ちたたったひとつの空気は、多くの聴衆の歓喜の拍手の間を縫って響の元に届いた。

全てのステージを終え裏口から通りに出ると、向かい側の建物の壁際から、パチパチと間延びした拍手と共にジェームスは姿を現した。予想はしていたから特に驚きもせず、かと言って愛想をふりまく義理もない響はいつものように無視して歩き出した。

「つれないですね、ミスターカザマ。今夜私はひとりの客としてあなたのライブを聴いたんですけどねえ」

先を歩く響を追いかけ横に並び、ジェームスは言った。

響はピタリと立ち止まりジェームスに体を向け、いつも客に向かってするように大仰なお辞儀をしてみせた。そして、

「…けど、今あんたはBTM記者のジェームス・Tだ」

と、ジェームスの首に提げられてる社員バッジを指差し再び歩き出す。ジェームスは首をすくめ、フン、と鼻で笑い、また響の横に並んだ。

「まずはあなたに祝辞を申し上げますよ」

「…祝辞？」

「ええ。今夜のライブはあなたのスタート、いわば入学式のようなものだったでしょう？」

響は足を止めジェームスを睨んだ。

「浅倉ヒカルさん、今日帰国されたんですねえ」

響は答えずに再びゆっくりと歩き出す。

「一昨日はメディカルセンターにいた浅倉ヒカルさんなのに、何故こんなにも急に帰国されたんですかね？そして、今夜カザマ・キョウのライブは『Shine』ですか。どういう風の吹き回しでし

ようね？」

ジェームスも響から離れずについて歩く。

「まあ、あなたには答える義務はありませんから勝手に憶測すれば、浅倉ヒカルさんとカザマ・キョウは別れ、それは浅倉ヒカルさんがあなたの未来を考えた、というところでしょう」

響の歩調は速くなる。

「身を引くって言うんですか？しかし、日本の女性というのは愛が深いですねえ。あなたのママにしても浅倉ヒカルさんにしても、それほどまでにして愛して値する男なんでしょうなあ、ジャックやあなたは」

鼻で哂うジェームスに、響は拳を握り締めた。

「あなたは浅倉ヒカルさんの想いに甘えないと自らの足だけでは自分の未来にさえも歩き出せなかった。けどまあ、浅倉ヒカルさんが身を引く犠牲に立ってくれたおかげであなたがここでピアノを弾き続け、世界を目指していくレールに乗っていくことが出来るのは確かです。だから、私は祝辞を申し上げに来たんですよ」

いくつもの皮肉で構成されたジェームスの言葉に握った拳が震える。だがそのまま何も言葉を返さずに歩き続ける。

「まあ、浅倉ヒカルさんも聡明でチャーミングなお嬢さんでしたから、心配しなくても誰かが幸せにしてくれますよ」

「...何が言いたい？ジェームス...？」

とうとう響は立ち止まり震える声を絞り出した。

「『Shine』はあなたが恋人...ええ、浅倉ヒカルさんへの想いをメロディにした曲、ということは芸術祭以後広まりましたよねえ。十代後半だったあなたが、その純粋な想いでメロディを繋いだ名のおり光溢れる名曲だ。あなたが3年半前にボストンにやって来てアカデミーに入学したのも浅倉ヒカルさんが無関係ではない...ということは調べてありますよ。あなたは近年、浅倉ヒカルさんを中心にご自身の人生を決めて来られた。それは一昨日までそうだった。あなたは日本に帰国する予定でいたのではありませんか？」

響は唇をかみしめジェームスを睨む。

「私は先日、`あんたには興味がないけど仕事だから仕方なく追いかける、と言いました。けれど、これは今撤回します」

「...なに？」

「浅倉ヒカルさんがいなければひとりで立つことも出来ないほど、彼女に精神的に依存しているベイビーがあえて乳離れを選択したというところにひとつ敬意を表します」

ジェームスは響に顔を近づけ、その鼻先で哂った。

「...なんだと？」

「これでも応援してるんですよ、私はあなたをね」

響はジェームスから視線を大通りに移動させ、

「...ハッ...。それはどうも」

と、言い捨てた。

「今後、カザマ・キョウって人間の真実を見させてもらうことにしましたよ。浅倉ヒカルさん無しのあなたが、どんなあなたに変化していくか、興味、がわきましたのでね。浅倉ヒカルさんに捧げるためだけに奏でてきた名曲をあなたは今夜の全てのステージで弾いた。そしてこれはおそらく明日もあさっても、毎日のステージに組み込まれているのでしょう。あなたの手から離れたあなたの『Shine』がそれぞれの行き先でどんな意味を持って光り輝いていくのか興味がありますしね」

通りかかったタクシーを響は止め、すばやく乗り込んだ。

「先日と同じことをもう一度言いましょう。これからカザマ・キョウ、をじっくり見せてもらいますよ！」

――これからのカザマ・キョウ…。

走り始めた車の中で響はジェームスの最後の言葉を繰り返した。

◇

アパートのドアを開けた瞬間、石鹸のような柔らかな香りに胸の一番奥まで貫かれた気がして、響は次の一歩を出すことが出来ずに立ちすくんだ。

「…ヒカル？」

思わず名を呼んでみたが、部屋の中にその人はいるはずもない。

昨日までピアノの譜面台に立てかけたままだった『げんき』の楽譜も、壁のハンガーにかけられていたカーディガンも持ち物は全て消えている。だが、3週間の間、ここで一緒に暮らしたヒカルの匂いは部屋の中にその跡を大きく残していた。

大きな深呼吸をひとつして足を踏み入れ、響はゆっくりと部屋を見回した。

ソファもテーブルも揃い、壁には癒しのラベンダー畑も広がっているというのに、3年半の間グランドピアノひとつだけしかなかったほんの3週間前よりも殺風景に見える自分の部屋。確かにここにヒカルがいた証の残り香が漂っているだけに余計にそう感じる。

長い一日だった――。

ベッドに沈み目を閉じた時、昨夜まで抱きしめていたヒカルの素肌の感触が腕の中に蘇り、思わずいるはずのない人をきつく抱きしめた。

――浅倉ヒカルさんがいなければひとりで立つことも出来ないほど、彼女に精神的に依存しているベイビー。

ジェームスの言ったことは全て間違っていない。

そうじゃないと、大丈夫だと、これは自分で決めたことだと己に言い聞かせていなければ、何

が真実で何を決めたのか分からなくなるほどに、その言葉たちは鋭利な剣のように胸に突き刺さった。

『心配しなくても誰かが幸せにしてくれますよ』

——誰が…。あいつがか…。

響は目を開け、グランドピアノの上にある`魔よけ、を見つめた。

春の柔らかな光の下で、あまりにもヒカルらしいナチュラルな笑顔を輝かせている、群竹颯士（あいつ）が撮った写真——。

——あいつは決して自分のものにはならないと知っているヒカルへの想いを、あのギャラリーの写真たちの中で光輝かせていた。

自分は何も求めずに。

そして、ヒカルの全部を手に入れた俺が無意識の中で真っ先に考えたことは、

——`悪いな、群竹…、。

あいつに対しての勝利宣言だった。

あいつは何も求めちゃいないのに、その魂さえもが悔しかった——。

男として、何かを生み出す人間として、生み出すときに感じて命に取り込む相手が同じ人だから。

颯士が撮ったヒカルとの時間が輝きすぎていて、自分の知らないふたりの穏やかな時間に猛烈に妬けた。自分で自分をコントロールできないぐらいに妬けて仕方なかった。

ここでヒカルを手に入れて、これまでに颯士と過ごしてきた全ての時間を、自分との時間で上書きしてしまいたかった。颯士が撮ったもの、歴史、高校時代から繋がって来ているふたりの何もかも全てを——。

——3年半前から俺は何も変わっちゃいなかった。

`俺のピアノ、。

`俺らしく響く、。

それはわかっている——。

だが、これからの`カザマ・キョウ、…。

自分のピアノって何だ？

今日のライブが自分のピアノなのか？

ヒカルがどこにもいないこれからの自分は、どんな音楽を奏でればいいのか。どんな一一、と、響の思考は絡まってゆく。

響は窓を開け放った。

部屋に染み込んだ香りもすっかり冷たくなった外気と混ざり、やがては消えていくだろう。

「ヒカル...」

星空を見上げ、響はもう一度その名を呼んだ。

ボストンはこれから一気に秋に向かっていく一一。

ライブハウスを訪れる客たちがカザマ・キョウのステージで『Shine』を聴けるようになってから2週間が経った。

その間響は、ライブハウスやアカデミーで待ち伏せしている数名のマスコミ関係者から取材を受けたが、彼らに対する姿勢は以前と変わらず、あくまでもノーコメントでやり過ごしてきた。

3日前にはBTM社が毎月発行しているローカルマガジンの新月号が発行され、ジェームスの言葉どおり、ヒカルが運び込まれたメディカルセンターでの一瞬を撮影された写真がトップページに使われた。それだけでなく、カザマ・キョウを扱った記事が数ページに渡って掲載され、恋人と別れ帰国を取りやめたと、ライブで『Shine』を演奏することになった経緯をジェームス的に言い切った記事が掲載された。

カザマ・キョウのピアノが聴けるのもあと3ヶ月、と憂いていたファンはこのニュースに湧き上がった。

「キョウの一日も早い全米デビューを望んでる」

「これからもここでキョウを応援していく」

ノーコメントの響に代わり、ライブハウスに集まる客たちが取材に応じたビデオもケーブルTVで流され、その中にはニューヨークの芸術祭でカザマ・キョウのピアノを聴き、以来毎週ニューヨークからボストンまで3時間半の列車の旅をしてピアノを聴きにやって来るというファンもいた。

「3時間半...か。大変だな...」

着替えを終え、ロッカーを閉めながらTVを振り返り、どこか他人ごとのように響は呟いた。

今夜もワンステージ目から満席だった。

マネージャーが言うように、客が二人のピアノを望んでいるのならそれを叶えるまでと、この2週間のステージは打ち付ける激しい雨と救いの光で構成している。

そこに己の魂が入っているかといったらたぶんそうじゃない。それを求められているから弾いている、という受動的な演奏を毎日繰り返しているだけだ。だがそれが、`これからのカザマ・キョウ、への一步に繋がるひとつの道であるのなら、その道を歩き出すしかない。

もう、ヒカルはどこにもいないのだから――。

そんな思いで弾くピアノでも、客は満足して次のチケットを予約して帰る。2ヶ月に一度の契約更新を継続させるために必死になって、胸に太陽の笑顔を思い描きながらそれを支えにしてピアノを弾いていた、ほんの半年前からすれば夢のような`現在（いま）のカザマ・キョウ、だ。

「ずいぶん白けた言い方だな？お前のライブを聴きに来るファンだっけのに」

ソファーに座り正面のTVを見ていたサムが響に振り返って言った。

「何にしても、キョウがここでさらなる高みを目指していく決断に出てよかったよ。このまま日本に帰っちゃうなんて冗談だろ？って思ったからさ」

響の着替えを待っていたサムは、帰り支度を整えた響を確認して立ち上がりながら手にしていたリモコンでTVを消した。ラストひとつ前のステージを恋人のニコルと共に聴いた後、ふたりはバックヤードに下がる響についてそのまま控え室に流れ込み、ステージを終えた響とこれから一緒に食事に出ようという話になっている。

「ニコル、何してんだ？行くぞ？」

ふたりが控え室を出る準備を万端に整えているというのに、ずっと同じ姿勢でソファーに座ったまま、消えたTVを見つめて動こうとしないニコルに、サムがやや苛ついた口調で言った。そして、

「ニコルのヤツ、相当怒ってるぜ、お前のこと」

と、響に耳打ちした。響は、背を向けたまま動かないニコルを見つめ、

「...そうか」

と、ひとこと呟いた。

日本に帰らずここで愛も夢も手に入れろ、というサムに対し、それは男の身勝手だ、と反発したニコルがこの控え室で激しく言い合ったのはついこの間のことだ。あの時ニコルが言った言葉が、今再び心を貫く。

――キョウがピアノを弾いてたのはずっとあの子のためだったじゃない。

「...ニコル、行こう。じきにここは閉められちゃうから」

響が力なく声をかけると、ニコルはゆっくりと立ち上がって振り向いた。だが、その顔は響に対して明らかに不満と怒りをむき出しにしていた。

「おいおいニコル、そんな怖い顔をしてやるなよ。お互いに忙しい身で中々こういう時間もとれないんだからさ」

と、サム。

「.....別れたのね、あの子と」

サムの言葉は無視して、ニコルは顔色を変えないまま響に言った。

「ああ。別れた」

響はあえて間髪をいれずストレートに答えた。そして答えてから、改めて現実を無意識に自分に言い聞かせていることを知った。

そんな響に、ニコルはさらに険しい目を向ける。

「ニコルの言いたいことはわかるよ。けど、今それを聞いたところで現実は何も変わらないから...」

もうそのことには触れないでくれ、という言葉は口に出さずに、

「...行こう」

響はもう一度ニコルを促した。

「2週間前の夜、歩道の隅っこの方で頼りなく佇んでいるあの子を見たとき、直ぐにキョウの恋人だって分かったよ...」

響の心の弦きに反してニコルはその場で言葉を続ける。

「彼女、目の前で列を作ってるたくさんのあなたのファンたちを呆然と見つめてた。私が声をかけた時、チケットがないんだって寂しそうに笑ってたよ...」

ヒカルはその微笑が目に浮かぶようで響の胸は締め付けられた。

「チケットも持たずにあなたのピアノを聴きに来たあの子の想い、キョウには本当にわかってた？」

「...だから、ニコル...」

今さらそんな話をしたところでヒカルはもう遠い海の向こうだ。そして自分はここで、`これからのカザマ・キョウ、を目指していかなくてはならない。それが、ヒカルと交わした言葉にはしていない最後の約束でもある。失ったものの影を追い、ここで立ち止まってははいられない。精神的にも行動的にも。

「今の俺は、ここから前に進んでいくことしか考えていない」

そう言って、響はドアに手をかけた。

「ほら、ニコル。いつまでも子どもみたいにすねてるなよ？キョウが決意したんだ。それでいいじゃないか」

サムはニコルの手を引きながら、なだめるようにして肩を叩いた。

「...キョウの目指すところって何なの？サムが言うさらなる高みって何なの？」

サムの手を振り切ってニコルはさらに話を続ける。

「それはもちろん認めてもらうってことだろう。ボストンだけじゃなく、アメリカ全土、さらには世界中にカザマ・キョウの名前と音楽を轟かせること。曲が売れること、だよな？」

な？とサムに問われ、一瞬の間響は返事に詰まった。

――キョクガウレル...？セカイジュウニ.....？

「多くの人に曲を聴いてもらう、または弾いてもらう。CDなり楽譜なりを買ってもらうってことさ。そして、世界中の人たちの傍にカザマ・キョウの音楽があるっていう日常を現実にする。形にする。それが、さらなる高み、だよな？」

――そうなのか...？

「キョウには今そのチャンスがあるんだ。才能もあるしバックもある。あとは勝負するかしないか、だったろ？それをキョウは、する、と決めたんだ。だから俺たちはキョウの成功を祈り、ただ応援してやればいい。そうだろ？ニコル？」

響を睨んでいたままの目で、今度はサムを睨みつけたニコルはゆっくりと首を振った。

「それが、キョウが目指している本当の高みだとしたら、あの子と別れてまで手にしなきゃいけないものがそれだったのだとしたら...私はもうキョウを応援出来ない」

「おいおい、ニコル...」

サムが、困った、といったように首をすくめて響に苦笑いを見せた。

「他のアーティストはそれでいい。でも、カザマ・キョウの音楽ってそうじゃないよ...」

「俺の...音楽...?」

響はドアから手を離し、ニコルの言葉を繰り返した。

ほんの一瞬、絶え間なく流れ続けているひとつの形にならないメロディーが、頭の中でどこかに繋がるイメージが浮かび上がり、また沈んでいった。

「この雑誌に書いてあることが全部事実だとは思わないけれど、『自らの核を失い、その中から`Shine、と共に世界を目指していくこれからのカザマ・キョウに期待する』っていうこの一文には同調できないわ」

そんなマジメな記事をジェームス書いたのか、と、雑誌を見ていない響は思った。2週間前、ジェームスから実際に浴びせられた言葉は容赦のカケラもなかったからだ。

——浅倉ヒカルさんがいなければひとりで立つことも出来ないほど、彼女に精神的に依存しているベイビーがあえて乳離れを選択したというところにひとつ敬意を表します——。

ベイビー...、と響は小さく呟き、軽く拳を握りしめた。

「今までのキョウもこれからのカザマ・キョウも同じキョウでいいわよ。同じでなきゃダメよ...」

サムは、まったくニコルは...、とぶつぶつ言いながらも、最後まで喋らせなければ収まらないと諦めたのか、一旦はドアに向けた足を引っ込めて元のソファに座りなおした。響はドアの手前に立ち尽くし、ニコルは最初から同じ場所に立ったままの睨み合いだ。やれやれ...、と首をすくめ、サムは煙草に火を点けた。

「...さっき、3時間半かけてニューヨークからキョウのピアノを聴きに来るって言っていた人、その人がどうしてそんな時間とお金を使ってまで毎週来るのか...、自分のピアノのためにそこまでしてくれるファンにキョウは全然興味がなかったようだけど、それはその人がヒカルさんじゃないから、よね?」

「...なっ!?!」

言葉にならない小さな叫びをもらし、響は絶句した。

「たとえ、地球の裏側からあなたのピアノを聴きに来るっていうファンがいたとしても、それがヒカルさんじゃなければきっと同じように、大変だな...、のひとこと以上は出てこないわよね?」

言い返せない自分に響は呆然とする。

ニコルが言うとおりの、自分のピアノを聴いた客が何を感じようとしてどうであろうと、そんなことに興味はなかった。

「それは...、カザマ・キョウのメロディ全部がヒカルさんのためにあるからよ。今までも、これからだってずっとそうだと思う。だってそれがあなたの、カザマ・キョウの音楽なんですよ...！」

響は、俺の音楽...、という呟きを固唾と一緒に呑みこんだ。

粉雪の卒業式での誓いからヒカルに繋がるまでの間に弾いてきた、全ての音符に込めた想いが突き上げてくる。

――ヒカルのためにあった、いくつもの俺のメロディ...

どこか遠いところを見つめる響に、ニコルは言葉を続ける。

「...私は、さっきサムが言ったような未来をキョウが心から望んでいるとは思えないよ...。芸術祭の前もその後も、キョウが大切に抱きしめていたのはあの子への想いだけだったよね...？私がどんなに...、」

後の言葉は、サムを気遣って凍結させたニコルだ。

「...芸術祭で聴いた『Shine』には、キョウの言葉が海を越えた日本にまで届くぐらいの深い愛が込められていたよ。あれからこんなにも『Shine』とキョウを求める声があるのは、あの会場でああなたのピアノを聴いた人たちひとりひとりの心に染みこんだキョウの言葉が、その人たちの口を伝って広がっているからだよ...」

芸術祭のステージの上から、真っ暗な客席の中に見えた一点の光を響は思い出した。

敵意と興味と嘲笑に満ちた何千もの視線と重圧の中で、心の底に描いた笑顔が映し出されたその光に向かって一直線に、心を裸にして、そこにいるヒカルに語りかけるようにメロディを紡いだあのステージ。

――あれからいったい、俺の何が変わったのだろう...

ふと、心の中で呟いた自分の言葉に響はまた呆然となる。

何かは分からないが、どこかが変わったのだと、無意識が認めている証――。

「私はあれから毎週キョウのライブを聴いているよ。それまでとは違った想いでキョウのピアノが好きになったから。知らなかったでしょ...？」

客席のことなど気にしていなかった響は、

「...ああ」

と、呟いた。

ニコルは小さなため息を吐いたあとに再び話を続けた。

「...さっきのニューヨークから来る人にもここで何度も会ってる...。あの人は芸術祭の1年前に恋人を亡くしたの。恋人が不治の病だったことを知らされずに恋愛していて、亡くなった彼をずっと恨んでたんだって。彼から告げられたいくつもの愛の言葉が苦しくて仕方なかったのよ。」

でも、芸術祭であなたのピアノを聴いた時……、」

「キョウのピアノが恋人の言葉に聴こえた…」

ニコルの後を繋いだのはサムだった。さっきまでのやれやれ、といった態度から一転し、煙草も途中でみ消したサムは、あの日の響のピアノに想いを馳せるようにして遠くを見つめていた。

ニコルはうん、と頷いた。

「彼の言葉と一緒に過ごした時間が、とてつもなく美しいものとして蘇ったって言ってたよ。恨む気持ちに吞まれて過ごして来た時間を取り戻すために3時間半もかけてあなたのピアノを聴きに来てるのよ。キョウには関係ない、あの人の事情と想いだけど、キョウがあの子を想って紡いだメロディが、あの人の心に再び愛の光を灯したのは事実…。あなたに愛がなければあの日の『Shine』は聴けなかったし輝かなかった。あの人は今も亡くなった恋人を恨んでたかもしれない。そして、私も…。ただ、それだけのことよ。でも、だからこそ…、」

ニコルは一旦言葉を切って呼吸を整え、

「日本に帰って、キョウ」

と、言い切った。

「…ニコル」

響は目を見開きニコルを見つめる。

「何を言い出すんだよ、ニコル…！」

サムは恋人が放った暴言に対し、目を丸くして叫んだ。

「お前にキョウの何がわかる？キョウと彼女が決めたことなんだぜ？」

ニコルはサムを一瞥し、

「サムこそキョウの何がわかるっていうの？」

と、冷やかに言った。

「ヒカルさんがあなたに何を言ったか分からないけど、きっと本心じゃないわ。彼女は悲しい覚悟をただけよ。女が覚悟を決めたときはピリオドを打つしかないんだもの！ボストン中の人たちが落胆するかもしれないけど、本当にあなたの音楽を響かせたいのなら、あの子と一緒に生きなきゃダメよ。今すぐ日本へ帰って。ヒカルさんの元に…！」

——今すぐ日本へ…。ヒカルさんの元へ…。今帰れば、俺の居場所はまだあるのか？ヒカルと共に生きる未来がまだ……。

「それはできない…」

力なく首を横に振り、響は言った。

「あいつとの別れを俺のマイナスには決してしない。俺はここでピアノを弾く。今はそれだけだよ、ニコル」

「うそ。もうマイナスになってるわよ！あなたの隣にヒカルさんがいないということがカザマ・キョウにとっての最大のマイナスよ！」

「――それ以上、何も言わないでくれっ！」

とうとう響は叫んだ。

突然の響の大声に、ニコルもサムも息を呑み、時間が止まったように流れが消えた空間の中で三人は立ちすくんだ。

「...悪かった」

自分の大声に自分自身が驚いている響だ。

「キョウ...動揺してる...」

「...してないさ」

「どうして誤魔化するの？してるわよ...」

響は肩を下げ大きく息を吐く。まったくニコルの言うとおりに、さっきから自分の心臓の音が聞こえるぐらいに鼓動が速くなっているし、

――ニホンニカエル...。イマ、スグニ...。

頭の中では自動音声のような言葉が幾度となく繰り返されている。それを振り払おうと、己の脳細胞はめまぐるしく働いている。

「ねえ、キョウ」

ニコルは響の顔を見上げ、その瞳をしっかりと捉えながら言った。

「.....あなたの夢はここにしかないの？日本でヒカルさんと一緒に夢を見ることは出来ないの？」

一瞬の間のあと、響が呑んだ固唾の音が張り詰めた空気の中を泳いだ。

ふたりは、黙って目を見開く響に注目する。

――ニホンデ、ヒカルト...。イマスグ、カエレバ...。

脳細胞は自動音声を振り払う作業に失敗し、さっきから同じコトバが頭の中を駆け巡っている。

けれど――。

乾いた唇を開き、響は呟いた。

「...それは...、」

出来ないと思っていた。

帰ると口では言っていないながら、言葉どおりに帰国した自分が日本でヒカルと共にいるイメージが持てなかった。

もしも、田村の結婚パーティーで一時的な帰国をしていなかったら、芸術祭のステージに上がった日のままの自分だったら、此処（ボストン）でのタスクを終えた12月には迷わず日本に帰っ

ていただろう。そして、高校時代に遂げることのできなかった想いをヒカルに繋げ、恋人としての未来をふたりで生きようとしたかもしれない。

でも、ヒカルが傍にいても毎日抱きしめることが出来たとしても、遅かれ早かれ同じ苦悩を知ることにはなった。

変わろうとして、変わったとっていて、昔から変わっていなかった自分だったのだから――。

「日本に俺の居場所はない…」

呟いた声は、自分でも驚くほどに冷めた響きをもって部屋の中に浸透した。

「言ってる意味がわからない。日本はキョウの故国じゃない」

ニコルはやや呆れたように言い返す。

――呆れるほどの理由さ。

日本にはあいつ…、群竹がいる。

あいつの視界からヒカルを隠したかったからボストンに呼んだ。

あいつが隣にいるからヒカルを帰したくなかった。

あいつの想いに勝りたかったから、己の結果にこだわった。

ただ、それだけ。

裸の俺は最初から、それだけ。

あいつの想いが熱くて痛くて悔しい。

ただ、それだけだ……。

「キョウ…、大丈夫か…？」

うつろな薄笑みを浮かべながら放心する響に、サムがやや慄いたように声をかけた。

響は顔をサムに向け、

「俺は――、」

と、呟いたまま次の言葉を凍らせた。

――あいつがヒカルの傍に存在する限り、ヒカルの全てを独占することは出来ない…。

今の自分のままでいる限り、満たされない思いからの苦悩は続く。

それが、ヒカルが切り出した別れを受け入れた真実の理由――。

待てないと、もう約束はしないと、ここで夢を叶えろと言った、まるで母、ユリの愛と同じヒカルの想いはわかっていた。

どれほどの想いを越え、さよならの言葉を打ち込んだのかということも覚悟の哀しさも、そして、それでも日本で共に生きる未来を願っていることがヒカルの真実だったということも。

——それでも、俺は受け入れた。ヒカルをひとりで日本に帰した。別れを現実のものにしたのは俺の方だ……。

「——俺は、大丈夫…」

——たぶん…。

「ここで…ピアノを弾いていくさ。日本には帰らないよ、ニコル」

——俺はここでもっと音楽とともに磨かれなければいけない。あいつのことなど気にならなくなるまで、もっと。

「…キョウ…！」

「もう、この話はやめよう。俺は前に進みたい…。明日はジャックに会って今後のことを話すことになっている。ヒカルが傍にいらなくても俺のピアノが弾けるようなピアニストを目指さ…」

「そんなの…っ、」

「ニコル、もうやめだ！」

さらに続けようとするニコルを、サムが強く制した。

「どうかしてるぜ、ニコル？何でそんなにむきになる？」

「…キョウのピアノを弾いて欲しいからよ」

「キョウがああ言ってるんだぜ？信じろよ！」

腕を強く握るサムの手の上に、ニコルは自分の手を重ね首を振った。

「…もう、芸術祭で聴いたようなピアノは弾いてはくれないわ…。サムの心までを溶かしてくれた…あの優しい愛に満ちたキョウのピアノ…」

ニコルは右手をサムの手の上から離し、左手の薬指で輝く指輪に触れた。その細い手が移動した先を見つめていた響の脳裏に、芸術祭のステージの上から見た光の一点が再び思い描かれた。

見えているのに手を伸ばしても届かない。

闇の中で輝くひとつの光を追いかけるイメージ。

それは体の中を駆け巡る繋がらないメロディに見えるイメージと同じだった。

刹那、心に触れた何かがあり、消えないうちに掴もうとしたけれど、一瞬の間にまた奥底に沈んでしまった。

——届かない…。

大きなため息をひとつ吐き、響はドアを開けた。

ジャックのハーブ園でラベンダーが風にそよぐ。

その薄紫一色の中で、どこか寂しげな微笑を浮かべて立つヒカルがこちらを見つめている。

あれは....

「ヒカルの...」

——ヒカルさんは悲しい覚悟をただけよ！

「...覚悟」

瞬きをした瞬間には消えてしまう幻だとわかっている、そのあまりにもリアルな幻像に胸をえぐられ、それでも消えて欲しくない想いが響に瞬きすることを拒ませていた。

昨夜から、振り払ってもまた戻ってくる衝動は、今この場所にいる自分の目的とは大きく相反している。

親子で過ごす休日なんかじゃなく、ジャックと事務所の力を借りて世界を己のステージにする第一歩を踏み出すため、プロデューサージャック・ベリーとの打ち合わせに今日はここに来たというのに。

昨夜ニコルに言われなくても、ヒカルが乗った飛行機が飛び立った直後からずっと、後を追いかけていたい衝動と闘っていた。うねる想いを激しい旋律に変え、あえてヒカルがどこにもいない未来をイメージしたその幻像を鍵盤の上に転嫁することで、己の中でのたうちまわる矛盾を無意識の中で沈めていたのだ。

——今すぐ日本に帰れば、瞬きをしても消えないヒカルがいる。

幻などではなく、光溢れる現実の中でもう一度この手で抱きしめて——。

——光溢れる.....。

突如浮かんだ光に満ちたイメージに、震えるほどのジェラシーが燃え上がった。

開いたままの乾いた瞳に涙が滲む。

くうん...

...と、傍らでおとなしく伏せていたゴールデン・レトリバーのリリイが小さく鼻を鳴らし、視線をリリイに向けた一瞬にラベンダー畑の幻は消滅した。

——ヒカル...ッ。

何度瞬きを繰り返しても、もうそこには薄紫色が風に揺れているだけ。

響は浅いためいきをひとつ吐いてからゆっくりと腰を落とした。いつもは熱い愛情を全身で現してくるリリイが、今日はずっと横で伏せたまま時々尾を振るだけだ。

「...ヒカルが言ったこと、まだ守ってるのか？」

そっと頭を撫でながら言うと、リリイは、くうん、とせつなげに鳴いた。

——リリイ、お願い。ヒビクを私に返して？私とヒビクはね、もうあんまり時間がないんだ...

またひとつ見えたヒカルの覚悟の断片。

それを遮断するように固く目を閉じた時、ガーデンテラスの扉が開きジャックがマネージャーのビリーを伴いやって来た。

「待たせたね、キョウ」

「いや...」

ゆっくりと立ち上がり、響はジャックに顔を向けた。ジャックはハーブ園が正面に望める側の椅子を引きながら、

「ラベンダーもそろそろ終わりだよ。またしばらく花のない庭になってしまう」

と、小さなため息のあとに微笑んだ。

響は再び薄紫色の庭を振り返った。

3週間前、ヒカルを連れて訪れた時よりも薄くなっている紫が、少しずつ色を消していくイメージが見えた気がした。

「久しぶりだったね、キョウ」

ビリーが響に右手を差し出した。ビリーに会うのは芸術祭の後、デビューの準備を進めていた事務所にその意思はないと告げた7月以来2ヶ月ぶりだった。

「アカデミーもあるし、これからスケジュール的に大変かもしれないけど僕がしっかりマネジメントするから安心して」

「よろしく、ビリー」

響がビリーの手を握り返すと、それじゃ早速いいかな...、と言いながらビリーはテーブルの上に一枚の紙を置き、そこに記されている当面のスケジュールについて説明を始めた。

「これは大まかなもので、まだこれから追加されていくけど見てくれ」

紙面の上にはもう既に10月までの響のスケジュールが時間単位で小刻みに設定されていた。

アカデミー、ライブハウスなどのいつものスケジュールに、レコーディング関係者や音楽メディア関係者たちとの会合が加えてセッティングされており、レコーディングは10月から開始される予定になっていた。

そして、

「12月8日...？」

紙面の一番下に赤いインクで書かれた日付を見て響は呟いた。

ビリーは、ん？と響を見て、

「ああ、この日付はあくまでも予定。委細はこれから詰めていくけれど順調に進めてこの辺りで発表できれば、年末から来年にかけてのイベントを利用してセールスプロモーションを展開出来るから」

と、説明を加えた。

「レコード会社とも相談して、ここに照準を定めて今後の君のスケジュールを管理して行こうと思ってる。その辺は僕に任せてくれ。キョウはハードなスケジュールに備えて……、」

続くビリーの淡々とした説明を聞きながら、響の視線はテーブルの紙面から離れ、再びラベンダー畑に注がれた。その視線をたどるようにして今まで響の横で伏せていたリリイが畑の奥に駆けて行った。

12月8日は、日本に帰るとヒカルに約束をしていた日だ。

その日の帰国に照準を合わせ、ライブやアカデミーの課題をこなしていた自分だったというのに、今度はまったく反対の目的に合わせていくのか、と響は苦い笑いをかみしめる。

「…キョウ、聞いているか？」

ハーブ畑で走り回るリリイをぼんやりと見つめる響にビリーは言った。

「ああ…。聞いている」

視線をテラスに戻した時、自分を見つめているジャックの目とぶつかった。

――親父…？

いつもの穏やかな眼差しの中に、さっき幻で見たヒカルと同じ色が見えた。

「そう？さっきからどこか空ろな感じだぜ？」

ビリーの言葉に我に返り、

「…そ、そんなことないさ。ただ、思っていたよりも早い展開だからちょっと驚いてるだけ」

響はジャックから目をそらし、やや言い訳がましく言った。

「キョウを売るシナリオは芸術祭直後から出来ていたからね。君の戸惑いはわかるけどこれも勝負のうちだ」

「勝負…」

「これから忙しくなるから健康管理には気を使ってくれよ？キョウの体に何かあったらこれらの予定がパーになってしまうからね」

「わかってる」

「じゃ、僕はさっそく予定の委細を詰めてくる」

ビリーはジャックとひとことふたこと話をしてから、慌しくガーデンテラスを出て行った。

「…驚いたね。ビリーは仕事が速い」

ビリーの背中を見送りながら響が呟くと、

「彼は、世界のジャック・ベリー、のマネージャーだよ？以前の私は彼のおかげで寝る暇もなかったさ」

と、ジャックは笑った。

「...そうだった。忘れてたよ。俺、寝させてもらえるかな...」

首をすくめながら響が笑いを返すと、ジャックは微かに首を横に傾け、

「...今もたいして眠れていないって顔をしてるよ、キョウ」

と、言った。

ひきつった笑いを顔に貼り付けていた響は、そのまま息を飲み込んだ。

「...いやな気はしてたよ。あの日のヒカルはまるで昔のリリィ...ユリと同じ顔をしていたからね」

「ジャック...」

ジャックは響の傍らに立ち、そっと肩に手を置いた。

「これでいいのかな、キョウ？」

穏やかなジャックの声が、だからこそ胸に迫る。再び、振り払っても戻ってくる衝動に突き動かされそうになり、返す言葉を持たず響は口を結んだままジャックから視線を外した。

庭一面で揺れているラベンダーは、ジャックが母ユリの面影を胸に抱きながら育てたものだ。

長い年月を経てもなお、母へのジャックの想いがこの薄紫色に象徴されている。言葉は少ないが、ジャックの言いたいことが響にはわかった。

――これで....

「――いいんだよ、親父」

響はラベンダー畑と、そこで走り回るリリィを見つめたままやっと言葉を繋げた。

「俺はここで、ジャック・ベリーを越えるピアニストになりたい。それが俺の真実で、それしか...、」

――無い....

「キョウとヒカルが決めたことなら私に言うことは何も無い。キョウが目指す道を歩く上で私にできる手助けをしていこう」

「...ありがとう。ジャック」

「だが...、」

ジャックは次の言葉を濁し、テラスから庭に下りた。

そして、ゆっくりとラベンダー畑の中を、愛しいものを見つめるようなまなざしを紫の花に向けながら歩く。

そんなジャックをしばらくの間ただ見つめていた響も、やがて同じように庭に下りた。

外から眺めている時とは違う、身近に花とその香りを感じたとき、響はここに母がいることを

実感した。

母の声、母の微笑み、母の匂い。このラベンダー畑はジャックが愛した風間ユリそのものだ。言葉を失くし、立ちすくむ響にジャックは言った。

「懐かしいかな？」

「...ああ」

胸が痛くなるぐらいに懐かしい母の面影がここに見える。

「私が得たものの大きさは、失ったもの以上ではなかった」

そよぐラベンダーを手のひらでなぞり歩くジャックの背中を響は見つめた。

「未来に繋がる道はひとつだけじゃない。いつかキョウも気づく時が来るだろう」

——その時はその時の自分がその現実を受け止めるだろう。今の自分がこの現実を受け止めようとしているのと同じように。

「...今の俺はこの道を歩くしかない。もう後ろは振り返れないから」

振り返ることができればどんなにいいだろう。そして、欲しいものを欲しいと子どものようにダダをこね独占し、`これは俺のものだから誰にもあげない、と宣言できてしまえたら。

高校3年だった冬、渡米の決意を田村に話すと、田村は、

——カッコつけんのもいいかげんにしろよ！

と、怒鳴った後に、

——俺たちまだ高校生だぜ！人生悟り切った大人じゃないんだ。欲しいものは欲しいって素直にダダこねてもいいだろう？！

と本気になって叫んだ。

人生悟りきった大人にはきっと一生かかってもなれやしないだろう。だが、素直にダダをこねられるほど子どもでもない。

なのに沸々と燃え上がるのは独占欲と嫉妬とそれに伴う競争心と、そして絶望と——。

それらは、頭では分かっているのに自分ではどうすることも出来ない醜い感情だ。

——群竹は...、自分の手には入らないとわかっていながら、光への...、ヒカルへの想いと憧れをあれほどの写真に出来るというのに...

まばゆいほどの光と愛に溢れたあのギャラリー。

ヒカルがそこにいなくても、ヒカルを力いっぱい抱きしめていたあの写真たち。思い出すだけで、全身の毛が逆立つほどに募るジェラシーで気が狂いそうになる。

ボストンに呼んだのも、帰したくないと思っていたのも、ただただ、颯土への嫉妬と対抗心だけだったというのに、こんな身勝手な自分の未来と夢を考えたヒカルは、さよならの覚悟を決めるまでの間に急性胃腸炎になるほどに苦しんだ。

悩むことなんかなかった。苦しむこともなかった。

――こんな俺なんかのために…。

田村がここにいたらきっとまた、カッコつけやがって！と怒るだろう。自分の想いを偽るな、と怒鳴るだろう。

でも、今はこの道をいくしかない。この道の先にしか自分の居場所はないのだ。もう再び手にいれることの出来ない絶望の中から己の結果を出してみせる。

――あいつ以上の…。

「…だから、ジャック…」

響は前を歩くジャックに追いつき頭を下げた。ジャックは響の両肩に手を置き、ゆっくりと頷いた。

「どんなことにも結果はある。良くも悪くもその結果をどう受け止めて次のことへの踏み台に変えていくか、人生はそこが勝負かもしれないな、キョウ」

母の風の中で聞いた父の穏やかな言葉がまた心に響いた。

「…じゃあ、今日はこれで帰る。これからライブがあるから」

「キョウ」

「…ん？」

「現在（いま）、キミのピアノを聴いてくれる人たちを大事にしていきなさい。彼らはこれからのキョウを支えてくれる」

父の言葉に頷き、響は屋敷を後にした。

◇

屋敷の門を出たところで待ち構えていたのは複数の記者とカメラマンたちだった。

彼らに取り囲まれた響はいくつものマイクをつきつけられ、ジャックと何を話したのか、これからどうするのか、スケジュールはどうなっているのかを訊かれた。それぞれがいっぺんに自分勝手な言葉を投げつける、こういう取材をまともに聞くことが出来る人間がいるのだろうか、と響はいつも首を傾げている。面倒だから今まではどんな取材にもノーコメントでやり過ごして来たが、これからは彼らを利用していくのもひとつかもしれない、と取材の受け入れ態勢を整えようとした時、嫌な空気を察知して顔を向けたところに立っていたのはジェームスだった。半ばあざ笑うかのようないつもの笑みを浮かべ、他社の記者たちからは一歩下がったところで余裕を示

した態度でそこにいる。

響は、条件反射のように体が強張り拳を握り締めている自分に無性に腹が立った。

たかが記者だ。

売れる記事を書くために生きてる男だ。

数々の非礼も挑発も、全てはその売れる記事になるネタを引き出すための陽動作戦でしかない。そんなただの記者ひとりに、何故こんな気負いを感じなければならないのか。

取材を受け入れようとしたことが急にバカバカしくなり、響は今までと同じようにノーコメントで群がる人間たちの間を縫って歩き出した。

「成長しませんなあ、あなたも」

ジェームスの横を通り過ぎようとした時、いつものイヤミな声があった。

「まあ、これからですかね。まだ乳離れをしたばかりですし。いや？本当はしてないのかな？」

挑発に乗るな、と自分のどこかに戒められ響は顔色を変えずに無視をした。そんな響のあとを彼らはマイクを前に差し出しながらぞろぞろとついてくる。放っておいたら駅まで追いかけてくるだろう。

追いつがる記者たちを振り切るため、早足がやがては駆け足になった。静かな住宅街には隠れる場所などなく、記者たちも自分たちの仕事を遂行するためにどこまでも追いかけてくる。

響は家の庭先に停まっている『スマイル家電』と派手なロゴとマークが描かれたトラックの陰に身を寄せ、追いかけてくる取材陣たちが気づかずに行ってしまうまでその場にうずくまったまま息を潜めていた。

まるで、映画のワンシーンのようだ、と自分の行動に冷めた笑いが込み上げて仕方がない。それ以上にこんな見通しのいい場所で目標を見失い、道の先に自分を追いかけて行く取材陣たちも可笑しくてたまらなかった。

彼らが通りを曲がって行ったのを確認してから、来た道に戻ろうと立ち上がった時、どこからか歌声が聴こえてきた。あたりを見回すと、道を挟んだ斜め向かい側の家の庭に人がいる。どうやら歌はその庭の人間が歌っているらしい。

まるで歌声に引き寄せられるように足が向いてしまったのは、誰もが知っているはずの童謡『メリーさんの羊』が...

「...音痴だな」

ずいぶんと原曲からはかけ離れた音程で唄われていたからだ。

庭先の木にぶら下がっているブランコを押しながら気持ちよさげに『メリーさんの羊（らしき歌）』を唄っていたのは、子守りを任されてる様子の少女だった。ブランコには3、4才ぐらいの幼女が乗っている。

アツパレなほどの音痴とハツラツとした笑顔のその少女に、ついヒカルを重ねて見入ってしまう。きっと高校生ぐらいだろう。ヒカルよりは幼く見える。

少女は時折ブランコに乗る幼児に優しく語りかけ、また音程の外れた『メリーさんの羊』を唄いだす。

――ヒカルの先生もあんな感じなんだろう…。園児を見ながら音程の外れた歌を元気に唄ってさ…。

胸の底から湧き上がる愛しさと強烈なノスタルジーを感じて、その場から立ち去ることが出来ない。いつまでも音痴な少女を見つめていたかった。

そのうち、隣の家から少年が出てきた。

肩にバッグを提げ、自転車で通りに出て行こうとする少年に気がついた少女が、「ハイ！ ケリー！」と、呼び止めた。少年は面倒くさそうに立ち止まり、「やあ、ジェニー…」と口ごもったように返す。

ジェニーと呼ばれた少女はケリーと呼んだ少年を捕まえて一方的なお喋りを始めた。ハツラツとした少女に照れを隠して面倒くさそうに装う少年。ふたりの間に流れる当たり前でいて輝かしい空気は、ふたりのことを何も知らない自分がこんな場所からただ眺めているだけでも愛しく感じる。

その愛しさが、一瞬の後には猛烈な嫉妬に変わって行った。こんな風に穏やかで満たされた時間を、昔から過ごしているのはヒカルと颯土。ふたりを知らない人間が垣間見たとしても、温かなものが心に流れるぐらいの優しい日常と光溢れた光景。

この静かな住宅街の一角は緑の芝が敷き詰められた上で、澄んだ空気の中「毎度どうも！」という陽気なスマイル家電の配達員の声が響くありふれた時間を穏やかに流している。

隅田川のほとりで同じような日常を、ただ己の思いひとつだけであの写真に表す颯土。

悔しさと情けなさで握った拳が震えた――。

少女と少年ふたりを見ていることに苦痛を覚え、踵を返そうとした時、

――ブランコ…？

幼女が乗っていたブランコが揺れていた。

とっさに辺りを見回すと、ブランコに乗っていた幼女がひとりで通りに出ようとしている。さっき、自分が隠れていたトラックが方向変換をするためなのか、バックで動き出していた。

少女と少年は幼女の行動に気づかずにまだそこで話をしている。

――何やってんだっ！！

どうしようもなく怒りが込み上げ、

「おいっ！見てみろっ！！」

響は思わずふたりに向かって叫んでいた。

ふたりが幼女に気がついたときは、トラックがもう幼女の目の前まで迫っていた。幼女は身に迫る危険を感じていないのか、道の真ん中で自分を押しつぶそうとしているトラックのテールラ

ンプを見つめながらぼんやりと佇んでいる。

「キャーッ！！」

少女が叫んだ。

少年が飛び出した。

だが、それよりも先に響が幼女を包むように抱きかかえて道の反対側に転がっていた。

惨事を逃れて安心したのもつかの間、事態に気がついて急停車したトラックの荷台から、今積んだばかりの大型冷蔵庫が、道の上に転がったままの響と幼女の上に落ちて来た。

・
・

——あいつの側で笑うなよ。あいつに声をかけるなよ。あいつの元へ行くな、ヒカル……っ。

・
・

声を上げて泣き出した幼女の声が住宅街に響き渡った。落ちてくる冷蔵庫を全身で受け止めたのは響で、幼女は甲羅に守られるようにして響の中にいた。

「大丈夫か！？」

スマイル家電の配達員がうずくまっている響に駆け寄って冷蔵庫をどかした時、一瞬の間どこかに飛んでしまっていた意識が返ってきた。

「…ちゃんと固定してから動けよ…」

つぶやくように響は言った。日本でこんな積み方してたら即逮捕だぜ、と毒は心の中で吐く。幸い、体に受けた冷蔵庫の直撃はそれほどの衝撃ではなかったがそれよりも…、

「あ…、ありがとうございました…っ」

さっきまでのハツラツとした笑顔を、すっかり青ざめた泣き顔に変えた少女が、響の両手を取って包まれた中で泣いている幼女を引っ張り出した。

少女に手を取られた瞬間に走った左指の激痛に顔を歪めながら、響もようやく立ち上がった。

——ヤバイ。指をやっちゃった…。

幼女の頭を包んでいた指が、道路に転がり打ち付けられた衝撃と、さらに体が受けた冷蔵庫の重みでコンクリートに押しつけられて、幼女の頭を守った代償を食らったようだ。

「怪我してる。手当てしなきゃ…っ！どうしよう…っ」

少女は血が流れる響の額や腕を見て半分パニックになり、その場であたふたと足踏みをしている。

「…どうもすみませんでした…」

少年の方がパニック状態の少女に代わって響に頭を下げた。そのふたりの呼吸にまたわけのわからないジェラシーが沸く。

「手当てなんかいい。そんなことより、子守してたなら責任持って見てろ...っ！」

響は、自分でも驚くほどの冷たい言い方をして、ふたりの少年少女を睨みつけた。

「はい。ごめんなさい...。でも...。ほんと、どうしよう...っ。怪我が...、血が...っ！」

おろおろしたままの少女には苦笑するしかない。いつまでもこんなところにいたら、せっかく
まいた記者たちが戻って来てさらに面倒なことになってしまうしライブにも間に合わなくなる。

家で手当てを、という少女を断り、響は来た道に戻り始めた。

歩きながら服についた汚れを払い落とそうとした時、また左指に激しい痛みが走った。

アパートに戻り、汚れた服を着替えた。

子どもを抱えたままコンクリートに転がり、さらに冷蔵庫の直撃を受けた響の真っ白だったシャツは見るも無残な木綿の残骸と化しそのままゴミ箱行きの運命をたどった。

シャツがゴミになったぐらいどうってことない。肘や額、他にもあちこちにできた血が滲むすり傷も2、3日すれば新しい皮膚に生まれ変わる。微かな風が触れただけでも全身を貫くほどの痛みが走る、この左中指以外の傷は。

ライブハウスに向かう仕度を整えながら、響の脳内はこのピンチをどう切り抜けるかの策を猛スピードで考えていた。

鍵盤に中指を当てると激痛はもちろんのこと力が入らない。動かすことも出来ない。痛みだけを耐えるぐらいならいくらだって可能なことだが、動かないとなると問題は深刻だ。

もう一度鍵盤に両手全部を乗せ、思いついたメロディーに指を運んでみた。左手は動かない中指を飛ばし、指使いを無視した方法でメロディを刻む。

不自然な音の切れは慣れればどうにかなるだろう。指の動きに伴い走る痛みは意識の底に沈めてしまえばいい。とりあえず、今夜のライブはこれで弾くしかなさそうだ。

――あんなことでムキになって...これはその報いか....

鍵盤に指を置いたまま、響はコンコードの住宅街で見た音痴の少女と少年の姿を思い出していた。

通りすがりに見かけただけの少女の前に、あの少年が現れたことがあんなにも許せなかった。ただ少女に呼び止められそこで話をしているだけのあの少年に激しい憎悪を感じ、やがてそれは颯士への憎しみに形を変えた。ほんの些細なキッカケで、こんなにも自分の中にいるもうひとりの醜くちっぽけな風間響が顔を出す。沈めても沈めても、もがき手足をばたつかせながら浮かび上がってくる。そして一旦浮かび上がってしまったらその暴走を止められない。

――こんな...くだらない想いにふりまわされてる場合じゃないだろ...!

じんじんする指に氷水に浸したガーゼを当て、響はアパートを出た。

店の前に到着すると、コンコードでまんまと響にまかれた報道関係者たちが裏口に集まっていた。響は指に巻いたガーゼを取り払い、意を決してから彼らの中に飛び込んだ。

ジャックと何を話したのか、これからどうするのか、スケジュールはどうなってるのか、数時間前と同じ質問を同じように投げつける記者たちはコンコードの二の前を踏まないようにながち

りと響の四方を囲み、ほんの数メートル先の入り口に到達するのに何十分かかるかわからないほどだ。人の圧力と熱気で、痛む左指はそこだけが別の感覚になっているように浮き上がり、気が遠くなっていく。

「今は時間がないから後でちゃんと話す…」

額に浮いた汗をぬぐいながら響は呟いた。

「後とは、今夜のライブの後ですか？」

初めてまともに答えたカザマ・キョウの言葉を聞き漏らすまいと、記者たちはさらに四方を固め響の身体に圧力をかけた。

「…ああ、ああ！今夜、ここでちゃんと話す！だからそこをどいてくれっ！」

叫びに近い声で訴えると、人の波がサッと引いた。

「どうしました？顔色が良くないですよ？」

切羽詰ったような響の叫びに、一瞬の間息を呑むように沈黙した記者たちの中から、ジェームスの声が不気味に響いた。

響はとっさに左手をパンツのポケットに突っ込み、

「…こんな状態で顔色鮮やかにしてもらえるヤツがいたら見てみたいもんだ」

と、自分の周り360度を見回しながら言い返した。ジェームスはニヤリと笑い、それ以上は何も言わなかった。道を塞いでいた記者たちがゆっくりと引き下がりながら歩くスペースをあけたので、響はやっと裏口の取っ手に手をかけた。

◇

ステージには、もう既に熱を持ちながら紫色に腫れている指がこれ以上醜くならないように客に悟られないように、直前まで冷水に浸してから立った。

それでも打ち付ける激しい雨の旋律は、使っていないはずの中指にも大きな衝撃を与え、そのたびに響の顔は苦痛にゆがんだ。

その自分の表情が客観的に見えるようで、今日は今までになく客の反応が気になって仕方がない。

痛みを意識しないように、頭は懸命に別のことを考えようとするが、彷徨う闇の中で見えるのはヒカルの顔と、それに伴う胸の痛み、そして途方もないジェラシーばかりで余計に始末が悪い。一曲が終わるごとの拍手に普段との変化を感じないことだけが救いだった。

全身からは脂を含んだ汗が噴き出し、意識も時々途切れそうになりながら、とにかく今夜を無事に終わらせなければ、という気力だけで響は四つのステージを弾いた。

「どこか身体の調子でも悪いのか？」

ひとつのステージが終わる度に水道の蛇口をひねり、流れ出る水に顔を濡らしていた響にマネージャーが心配気に言葉をかけた。

「いや...」

腫れた左指はマネージャーの目に入らないように隠し、青白い顔にタオルを当てながら響は答えた。

「今夜のピアノにはいつものパンチがなかったぜ？どしゃぶりも半分ってとこだった」

マネージャーの言葉に、響は内心ギクリとしながらも顔は平静を保ち、何も変わっちゃいないさ、と呟きながら無意識に左指を右手で包むと、全身がむき出しの神経になったような痛みが走った。

――俺は何も変わっちゃいない。ただ、指がちょっと腫れちまってるだけで...

指を一本まるまる使わずに弾いたあんな演奏でも、客はいつもと同じ拍手と声援を惜しみなく差しだし満足して帰って行った。

所詮この程度。最初から本物も偽者も聴き分けてなんかいない。それが普通の客だ。

「...俺のチケットはいつの分まで売れてる？」

唐突に響が訊くと、マネージャーは、

「今さら何言ってんの？契約最終日、11月30日まで売ってるぜ？」

と、サラリと言った。

「最終日までか...」

響は右手の中にある膨れ上がった左指を見つめた。

11月30日まで、まだたっぷり2ヶ月以上ある。そして、来月からはアルバムのレコーディングが始まる。

――くそったれ...っ！

忌々しい左指に心の中で悪態をつく。

「そういえば、ずっとあっちで連中が待機してるぜ？」

マネージャーは裏口の方向を顎で差しながら言った。響は、わかってる、と手短かに答えてバックヤードを後にした。

彼らは驚くほど行儀よくマイクを向けてきた。

一度にガヤガヤと質問を浴びせることも我先にと押し合うこともなく、裏口のドアの前に立つ響を半月型に囲んで穏やかなインタビューが行われた。

「来月からデビューに向けての活動が開始されるわけですね？」

――そうです。

「アカデミーやここでの演奏はどうなるのですか？」

——ビリーがスケジュールの管理を万全にやってくれます。

「いよいよボストンのカザマ・キョウも世界に向けて歩き出すということですね？」

——そういうことです。

「私生活では色々とあったと思いますが、乗り越えられそうですか？」

——...乗り越えなきゃならないでしょう。

「ジャックさんは何とおっしゃられましたか？」

——ジャックは....

インタビューに応じることなど、至極簡単なこと。

コンコードで素直に彼らのインタビューに答えていたら音痴の少女に出逢うことも、子どもをかばってコンクリートに転がることも、冷蔵庫に指を押しつぶされることもなかったかもしれない、今さら悔やんでも仕方のないことが左指の痛みを増幅させた。

「...話せることは今の時点ではもうない。まだ何も始まってないのだから」

顔をしかめながら言葉を搾り出し、響は記者たちの間を縫って歩き出した。とりあえずインタビューが取れた記者たちは執拗に追うこともなく道を開く。ジェームスだけが響の行く道を塞ぐように立ち尽くしたままだった。

響は立ち止まり、怪訝な顔をしたジェームスと睨み合った。

「...その傷はどうしました？」

響の額に見覚えのない新しい傷跡を見つけたジェームスが唐突に言った。

「キッチンの収納棚に打ちつけたんだ。背が高いんでね」

口元に笑みさえ浮かべたポーカーフェイスで答えながら、ポケットに入れた左手はじわじわと汗が滲む。

ジェームスは何も言い返さず、疑わしそうな目つきで響の顔を見回した。

「...もういいだろ？道をあけてくれないか？」

かすれた声で言うと、ジェームスは響を凝視したままゆっくりと道をあけた。

「傷早く治るといいですねえ。顔も商売道具のうちでしょうから。お大事に」

含みがある言葉に聞こえたのはもちろん気のせいだ。だが、ジェームスの言葉はいつまでも響の心に暗い影を落とした。

◇

「中節骨の骨折と剥離骨折も見られます」

医師の淡々とした説明を響は半ばうつろに聞いていた。

「ピアノを弾かなくてはならないのです」

「無理ですよ。たかが指の骨折だと侮っていると指の変形などの後遺症の原因になります。しっかりと固定して動かさずじっくり待たなくてはなりません」

「それはどれぐらい...？」

「骨がついて安定するまで約5週間、その後様子を診ながら、少なくとも2ヶ月は安静が必要です」

医師はナースに指示を出し、ナースは手際よく響の左中指を副子で固定した。診断の予想はしていた。一晩中続いた激しい痛みと発熱が予想を確信にも変えていた。

だが、今日、メディカルセンターに来たのはこんなふうに当たり前の処置をしてもらうためではない。

「痛みがひどくて夜も眠れないんです。強めの鎮痛剤を処方してください」

響は大きめに訴えた。

「そりゃ、骨折を一日放っておいてさらにピアノなんか弾いたら痛むでしょう。無茶をしましたね」

医師はカルテを書きながらやんわりと言う。

「麻酔性の鎮痛剤を処方しておきましょう。劇薬だから使用量は指示を守るように」

「もちろんです」

響は静かに答えた。

アルミニウムの副子にしっかりと支えられた左指は、やっと落ち着く場所を得て安心したようだった。昨日まで大暴れしていた痛みも引き、このままおとなしく待っていれば2ヵ月後には何事もなかったかのような左中指になっているに違いない。

――このまま2ヶ月待っていれば.....。

薄暗い蛍光灯が灯るメディカルセンターの洗面室で、鏡に映っているのは魂の抜け殻のような蒼白な顔だ。

「――指を骨折したからピアノが弾けません...ってか...」

予定されている全てのスケジュールをストップさせる原因は指の骨折。そしてその原因の根底にあるのは己の醜い感情。体に何かあったら予定が全部パーになるとビリーに言われたのはつい2日前のことだ。

「...は...っ！」

あまりにもばかばかし過ぎて笑いが込み上げてきた。声を殺して笑う肩が震える振動から、治まっていた指の痛みがじわじわと再発した。

それは、左指だけじゃない。もっと深いところまでどこまでも追いかけてくる鈍く醜く薄汚い痛み――。

自由が利く右手が無意識に固い拳を握った。たった今まで抜け殻が笑っていた顔はみるみるうちに陰を作り、蒼白の中で深い緑色の瞳だけが鋭く燃えるように光っている。沸々と湧き上がる

、どこにもぶつけることの出来ない怒りに噛んだ唇が震えた。

――ここで立ち止まってなんかられない。

響は左指を固定している副子を取り外した。ピアノを弾くように動かそうとすると、せっかく安息の場所を与えられていた左指は、その行為に抗議をするかのように再び鋭く暴れ始めた。

――ここで立ち止まったら負ける。自分にも、あいつにも。

もらったばかりの鎮痛剤を口の中に放り込み、蛇口の水で喉の奥に流し込んだ。

生ぬるい水道水の匂いと薬の苦味が混ざり合う不快な後味をかみしめたまま、響はメディカルセンターを後にした。

薄暗い白熱灯の光が注ぐフロアに物悲しいピアノのメロディが流れる。

一曲、二曲、三曲と、メロディは次々とノンストップで変わっていく。

片隅のステージで何かに取りつかれた様に一心不乱に、次々と別のメロディーを弾（はじ）き出す金色の髪の良い青年は――。

◇

指先に走る痛みを使用限度を越えた鎮痛剤で誤魔化し、代わりに襲われる倦怠感と意識の拡散と激しい眠気と戦いながら、心のどこかではその身体の状態を受け入れている響だった。

指の痛みよりも始末が悪いのは己自身を侵食していく闇だ。日にちが経てば経つほどに、それはじわじわと満月にうす雲が覆い重なっていくがごとく広がっていく。

客席は静かだ。

客たちは瞬きもせず、動きもせず、ステージの一点を見つめながら耳を澄ましている。

演奏に聴き入っているからなのか、それともカザマ・キョウの何かを探ろうとしているからなのか、ステージの上でピンライトの中の真っ白な世界にいる響にはわからない。たとえ客席が見えたとしても考えをそこに及ぼせることは出来ないだろう。覚えている鍵盤の位置に己の指をただ運ぶ、それが今のカザマ・キョウの全てだった。

――まるで、パンチドランカーだな…。

バックヤードに下がり、鏡に映る覇気のない青ざめた自分の顔を見て響は呟いた。自分を見つめる視線がどこか客観的で、自分の中に己の感情がないような気がした。

少し前までいつも囚われていた虚脱感さえ沸いてこない。鏡に映る風間響は、自分とは別の世界に住むカザマ・キョウだと、ぼんやりとした頭で考えている時、カチャリと扉が小さな音を立てて開いた。神妙な顔をして入ってきたのはマネージャーだった。

「もう、次？」

「いや」

マネージャーは一瞬の間その場に佇んだあと、窓際へとゆっくり歩みを進めて珈琲メーカーから二杯の珈琲をカップに注いだ。

響は今夜既にここで、各ステージの後に一杯ずつの三杯のブラックを飲み干していた。痛みを和らげるために鎮痛剤を飲み代わりに襲われる眠気を珈琲で覚醒させる。すると鎮痛剤の効力はなくなり胃の中は荒れて別の痛みにさいなまれる。この1週間、ずっとその繰り返しだ。

だが、そうしなければピアノは弾けない。ピアノを弾かなければ己がここに存在している意味がなくなる。無意味なカザマ・キョウにだけはなるわけにはいかなかった。

「キョウ、こっちへ...」

マネージャーは洗面台の前に立つ響に、テーブルに着くようにと目と手で合図しながら呟いた。
いつもとどこか様子が違うマネージャーに首をかしげながら、響はゆっくりと椅子を引いた。
マネージャーは響に珈琲カップを差し出す。響は素直に受け取りさっそく口をつける。苦味が口の中から全身に伝わる気がした。

「水曜日の雨人...」

響を見つめながらマネージャーが呟いた。

「水曜日の雨人...？」

響はカップをテーブルに置き、マネージャーの言葉を反芻した。

「いや、あの頃のキョウを思い出してさ...」

「...なに？どうした？」

ゆっくりと目を自分に向けるマネージャーに響は訊く。

一瞬。

映像の画面が変わるときのように、ピリッとした電流のようなものが身体の中を走った。

己を真っ直ぐに見つめるマネージャーは小さなため息をひとつ吐き、意を決したように言った。
。

「...キョウ」

「...なに？」

「もう限界...だろ？そろそろ目を覚ませ」

響の目を見つめていたマネージャーの視線はテーブルの下に隠された左手に移る。

ごくん。

珈琲の苦味を含んだ固唾を飲み込むと同時に、小さなうめき声を発した後、

「...知ってたのか」

と、響はうつむいた。

「俺を誰だと思ってる？プレイヤーの状態ぐらい一瞬で見抜いてるさ」

「じゃあ最初から...」

「ああ」

「人が悪いな...」

「どっちが人が悪い？俺は、いつキョウが話してくれるかとずっと待ってたさ。いや、俺だけじゃない。客たちもだ」

え...？と、響は顔を上げた。

「キョウ...、前にも言ったがここの客たちは耳が肥えている」

ああ、わかってる...、と響は呟いた。

「わかっちゃいない...。キョウは客も俺のこともなめてるぜ」

「何を言い出すんだ？そんなことがあるはずないだろう...」

マネージャーは首を横に振り、

「左指、どうなってる？」

と訊いた。響はテーブルの下にあった指をゆっくりと持ち上げ、マネージャーの目の前にさらした。そこだけ青白く変色し、第一関節から外側に不自然に曲がった長い中指を一一。

「...中節骨を骨折。剥離骨折も...」

「全治は？」

「2ヶ月だと医者には言われた」

ふう...、とマネージャーはため息をついた。

「無茶しやがる...」

「黙ってたのは悪かった。別に誤魔化そうとしたわけじゃない。ただ...」

「ただ？」

鋭い眼光で真っ直ぐ射抜かれ、響は一瞬息を呑んだ。

「...骨なんかほっといたっていつかは自然にくっつく。今俺は一一、」

「キョウ...」

続けたい言葉を遮ったマネージャーの鋭い目の中に悲しみの色が重なったように見えて、今度は違った意味で息を呑んだ響だ。

「...プロじゃねえよ。ただのガキだ」

「...ガキ？」

響はマネージャーを見据えた。

「風邪ひいて熱が40度もあるのに皆勤賞を目指すんだと無理して学校に行くガキと同じだってことだ。そんなヤツが来てみる？教師は授業どころじゃないしクラスメートにだって伝染しちまう。皆勤賞っていう自分の目標のために他人を巻き込むだけ巻き込んで、自分もさらに悪化させるだけ。何もいいことなんかない。そればかりかことはもっと大きくなっちまう。そうなった時は後の始末が自分じゃつけられない。ただ意地を通しただけで終わり。ようするに自分のことしか考えてない、そーゆーガキと一緒にだってことだよ、キョウ」

「.....」

「指を傷めたピアニストが弾くピアノなんて一発でわかる」

マネージャーは響の左手を取った。その振動で響の顔は苦痛に歪んだ。

「痛々しいほどにわかるんだよ...！客が何も言わないのはキョウを信じてるからだ。嘘つきな兩人のピアノを聴きながら心の中で本物の雨を降らせてるんだぜ？ピアニストが指を痛めること自体、まずプロ意識がねえってことだけど、それを隠して誤魔化して客を騙して裏切ってるんだ、キョウは。わからねえってわけじゃないだろ？」

――プロ意識…。

「指をやっちゃいました、ごめんなさいって…、どうして言えない？自分の立場やこれからのことや抱えてるいろんなことを考えるのはキョウの勝手だ。そんなの客には関係ない。ここでは客あってのプレイヤーなんだ。無茶して誤魔化してチケット買ってくれてる客たちに適当な音楽を聴かせるってことがプロだと思ってたら大間違いだ。そんなに甘くはねえんだよ、キョウ…！」

マネージャーは握った拳でテーブルを叩いた。感情も強さも抑えてはいるけれど、カップの中の珈琲が飛び出した。琥珀色の飛沫が飛び散ったテーブルを響はただぼんやりと見つめるだけだ。

「悪いがキョウ、今日限りだ」

「…クビってことか？」

「そうだ」

響はフーッと息を吐いてかたく目を閉じた。

「その指で弾かせるわけにはもういかない。これ以上客を騙すことはマネージャーとして許せるわけないし、完治を待ってるうちにキョウとの契約は切れる」

「…だな」

――…限界。

意味あるものがじわじわと無意味に覆われ、自分のどこかから何かが剥がれ落ちたような気がした。

マネージャーは一枚の紙をスッと響の前に滑らせた。

「契約不履行の損害賠償…。店からカザマ・キョウに請求させてもらう」

「契約不履行…」

響は紙を手を取った。そこに記されていたのは響がここで1ヶ月弾いて得る報酬の数倍の金額だった。

「…は。すげーや…」

響は力なく呟く。

「キョウが毎回サインしてる契約書にちゃんと書いてあることだぜ？こういうことひとつ取っても甘くはないんだよ、プロってのはさ」

――プロ…。

「俺も随分考えたさ。でも、やっぱりこうするしかない。その指だって放っておいていいわけないだろ？」

「…ああ」

「どこを見てるんだ？あまりにもストイックすぎやしねえか？音楽じゃねーところにさ...」

響は力なくマネージャーを見つめる。

「次のステージで最後だ、キョウ...。客に...、」

マネージャーの言葉は途中で不自然に止まり、いくらかためらった後、それ以上は何も言わず控え室を出て行った。

「クビか...」

手渡された損害賠償額通知書は社会的責任を背負わされた証。

ただピアノを弾いているだけでカザマ・キョウが存在していたわけじゃないということ突きつけられ、響は己の甘さを痛感せざるを得なかった。

それでも――。

最後のステージはこれまでと同じように弾いて終わった。

それがカザマ・キョウの突然のラストステージだったと客たちが知ったのは、翌日の開店前にマネージャーが店の入り口で平謝りしている姿を見た時だった。

◇

当然報道関係者たちは響のアパートに押しかけた。

「ライブハウスを解雇されたとはどういうことですか？」

「指を怪我したのは何故ですか？」

「全米デビューの準備をされてるんじゃないんですか？」

頑なにドアを閉ざし、部屋から一步も出ない響の部屋のドアの前で記者たちはわめく。

――クビになったのはガキだから。

――怪我をしたのもガキだから...

――こんな甘ちゃんのお子様ランチが全米デビューするなんて笑い事だぜ...？

グランドピアノの足に背を当てて座り込み、普段は吸わない煙草をくゆらせながら響は記者たちの問いの答えを呟いていた。

灰は床に無造作に落ちていくばかり。無くなってはまた新たに火を点け、そのほとんどがただ灰になって落ちるだけ。

――プロ意識が全然足りないな、キョウ。

さっき、電話口で冷たく呟いたのはビリーだった。

――ピアニストってのは何をする？キョウはピアニストとしてデビューするんじゃないのか？

指の負傷が明らかになり、予定されていたレコーディングのためのスケジュールは全てキャンセル。ピアニストカザマ・キョウ、全米デビューのプロジェクトは振り出しに戻った。

――ベイビー。

――ガキ。

立ち止まりたくなかっただけだ。ヒカルとの別れを己のマイナスにしたくなかっただけだ。己の中でのたうちまわっている醜い感情に支配されたくなかっただけだ。

別れから今日まで、ただその想いだけでピアノを弾き全米デビューも決意した。これがこれからのカザマ・キョウだと自分自身に知らしめるために。ヒカルが傍にいらなくても、カザマ・キョウの音楽を響かせるために。ゼロ以下の己から光溢れる何かを生み出すために。

――あいつ以上の…。

自分を取り巻く諸悪の根源はジェラシー。支配されたくないという焦りに完全に支配されてしまっている修羅の心。

わかっているのにどうすることも出来ない。

傷めた指のせいでプロジェクトが座礁したことも、来月までチケットを買ってくれていた客のことも、世話になったマネージャーのことも、『水曜日の雨人』と謳われ、1年弾いてきたライブハウスを追われた現実も、もっと真摯に受け止めなければいけないはずなのに空ろな出来事としか捉えることが出来ないのは何故なのか。

――響かない…。

何処にも何も響かない。

響かせたいとも思えない。

何故ピアノを弾かなければならないのか。

ここで。

どうしてここでひとりで――。

もう、何もかもがわからなくなった。
限界点にはもうずっと前にたどり着いてしまっていた。
ヒカルがこの部屋からいなくなった8月の終わりから。

ジェームスの言うとおりに、ヒカルが傍にいないればひとりで立っていることも出来ないベイビー。

マネージャーが言ったように、意地を通すだけで自分のことしか考えていないガキ。
ビリーに言われた通り、ピアニストの意味を知らないただの風間響。

目の前でゆらゆらと立ち込める煙草の煙と同じだ。真っ直ぐに上っていきと見えて、ほんのわずかな空気の乱れでたちまち揺らいで拡散される。カザマ・キョウの音楽も、プロへの意識も、ピアノに込めていたはずの魂も煙のごとく儚く、ほんの些細な揺れに拡散されやがては消えてゆく。ただ、それだけのものだった。

最初から音楽が己の全てではなかった――。

だから、響かない。響かせられない。

ライブハウスの客がどうなろうと、ファンがどう思おうと、プロジェクトがどうなろうと別にかまわない。

自分にとってそんなことはどうでもいいことであり、大事だったのはヒカルを失った今この場所から、`あいつ、以上の結果が出せると信じていた、己が歩いていく唯一の道がここにあったということだけ。

ただ、それだけ――。

――苦しい...ぜ...。ピアノが、音楽が...！

新しい煙草に火を点けてはすぐに灰皿に押しつぶし、また点けてすぐにつぶす。
意味もなく幾度も同じ行為を響はただ繰り返した。

「ファンの人たちに何か言葉はないのですか？」

「何とか言ってくださいよ！」

外では相変わらず記者たちが喚いている。もう、このアパートにもいられないだろう。ライブハウスにかけた迷惑料を支払ったら、手元に残ったものはほんのわずか。唯一の職を失いピアノ

も弾けない今、もうアカデミーにもいられない。アパート代はもちろん払えない。だが、ちょうど成田への航空チケットと交換は出来る。

――日本へ……。

「ヒカル…」

空になった煙草の箱を壁に投げつけて、ころん、と床に転がった。

コンクリートの冷たい感触が全身に伝う。

「ヒカル…、ヒカル…」

ただ、ただ…、

――会いたい。抱きしめたい。もう一度君を…！

「ヒカル…」

床の上で膝をかかえて丸くなり、響はその名を何度も何度も呟いた。

車窓に広がる風景は、葉を紅くした木々の林と反対側に広がる海。

窓に肘をついてただぼんやりと、移ろいながらもほとんど変わり映えのしないその風景を響は見つめていた。そろそろ到着だと車内放送が入り、乗客たちは下車の仕度を始める――。

・
・

手元に残った全財産で成田行きの航空チケットを買った。

搭乗時間が迫り、いざゲートを潜ろうとした時に見えたのはひと月半前、この同じ場所から旅立って行ったヒカルの後姿だった。

背筋を伸ばし、肩の上で髪を踊らせ、一度も振り返らずにこのゲートの向こうに吸い込まれるように――。

――ヒビクはここで夢を叶えて。

あの凜とした後姿は、互いに振り返らずに前に進もうというヒカルのメッセージだと受け取った。

そして、あの時己の心に刻んだことは、

――ここで一から、まっさらな俺からのスタートを切り出すこと。

それがこのザマだ。

指は傷める、ピアノは弾けない、ライブハウスはクビになり、全米デビューもパァ。

社会的責任能力がまるでない、ただ周りに迷惑をかけ混乱を引き起こすだけのトラブルメーカーという、最悪なスキャンダルの渦中の人に再び堕ちて、付きまとうマスコミ関係者たちから逃げ回る `ただの、風間響。

何が一からのスタートだ、と自分自身に毒を吐き、足は成田に向かって一歩を出そうとした。

だが。

浮かび上がるのはやっぱりヒカルの後姿だ。

往きたい気持ちと留まろうとする思いが、ひとつの心の中で激しく交差する。

ゲートの前で立ち止まったまま、前に進むことも後ろに戻ることも出来ない長い逡巡の後....、

――どうすればいいんだ...！

.....結局チケットを破り捨て空港を飛び出した。

秋が深まる10月初めのボストンの街――。

3年半ここで暮らし、4度目の秋も同じようにこの街の景色を紅色に変えている。斬新な息吹と古風な歴史を同じ場所に携えた街の趣きは優しく、その全部で駆け出しピアニストカザマ・キョウを受け入れてくれていた。

だが、アパートを引き払いアカデミーも辞めた今、もうボストンにも居場所はない。ただの風間響にこの街は用は無いのだ。

あてもなくふらふらと街を彷徨い歩き、行き先を確認しないまま目の前に停車していたシャトルバスに乗り込んだ。

ボストンを出発したバスは北へ向かった。

州を越え、秋の林がひたすら続く道を走るこのバスは、アメリカの最端がその終着点らしい。

・
・

ボストンから北へ200マイル。

4時間ほどのドライブではあったが、降ろされた街はもう秋を通り越し冬に向かっていた。近くに見下ろせる海に幾艘ものヨットや漁船が停泊しているこの町は、どうやら漁港町のような。

「...ここは」

ほんの数十歩歩いた先はもうカナダ、というその場所で響は辺りを見回してみる。

町はずいぶんどこじんまりとしている。夕暮れ時のこの時間でも人はそれほど多く歩いていないし、町全体が静かだ。

――最果ての町...。

偶然にたどり着いた知らない土地の知らない町――。

「まさら...か...」

何もかもなくなった今、まさらもいいところだ。だが、頭を冷やすにはアメリカの最端州の、寒いぐらいのこんな町がちょうどいいのかもしれない。

遠くにレンガ色の塔が見えた。

どこに向かえばいいのかもわからない町で、響はその塔を目指して歩くことにした。

◇

海風に揺れる停泊中のヨットたちを左手にしなが、海に沿って続く道を南に向かって歩く。目標のレンガの塔は、田園を越え緩やかに傾斜した丘の上の街中に建つらしい。

途中の分かれ道からは海を背にして丘を上り、海風に背中を押されるようにして歩いた。たとえそれが冷たい風であったとしても、自然と足を前に出せるキッカケがあることはありがたい。

ふと立ち止まり、後ろを振り返ってみる。坂の道の下の方で薄紫色に染まった港が見えた。

しばらくの間、振り返ったままその景色を見つめた。

己の限界を無視して、とにかく前へ前へと歩こうとしてきた、このひと月半あまり。

立ち止まったり振り返ったりすることが一番の恐怖だった。一瞬でも立ち止まったら、そこから無意味な風間響への道へと転がり落ちていきそうで、焦って焦って焦った。

それでも、自分が今ここに出した結果は無意味な風間響だった。もう、昨日までと同じ夢を見つめた道を前に向かっては歩めない。目標を失い、魂を失い、己自身も、それら全てに付属していたありとあらゆるものたちを失って、振り返り立ち止まることしか出来ないこれからのカザマ・キョウ。

――これからの...

.....カザマ・キョウをじっくり見させてもらいますよ、と言ったのはジェームスだ。

――じっくり見る間もなかったな...

せせら晒うジェームスの顔が目浮かび、その不快を振り払うようにして、響は再び前を見て歩き出した。

しばらく道なりに坂を上っていくと、古きよきアメリカ時代の建造物が建ち並ぶ通りに出た。たぶん、ここがこの町のメインストリートなのだろう。今まで歩いて来た界限とは違う街らしい活気がある。

そして目指す塔は――。

通りの路地に入り、家が立ち並ぶ小道をしばらく歩いて、ようやく赤い煉瓦造りの塔に到着した。どうやらここは展望台になっているらしい。ただ、それだけの塔だった。辺りはもう暮れ、展望台の営業時間も終わっていて登ることも出来ない。

響はやや失望した。この場所に何かを期待していたわけではないが、普通の住宅街の一角に建っているだけの塔の前で、次はどこへ行けばいいのか考える。財布の中身は、

「...100ドルか...」

これが全財産だった。あまりにも心もとない。1日宿に泊まったらもう終わりだ。

グーッと腹の虫が鳴った。そう言えば、朝から何も食べていないことに気がついた。

「金はない家はないでどーすんだ、俺...」

先のことは何も考えていなかった。だが、今はそれよりも暴れ出した腹の虫を鎮めることが先決。ただの風間響のサバイバルプランはその後でゆっくりと考えればいい。時間だけは腐るほどあるのだから。

「こんな、住宅しかないところじゃメシを食うところもねーや...」

レンガの塔を目指してここまで来たことを今は後悔していた。店が立ち並ぶ中心街まで戻る

には、またしばらく歩かなくてはならない。さっきのメインストリートでとどまっていたらよかったのに、律儀にこの何でもない展望台までやって来てしまった、その理由は自分でわかっている。

——最初にここを目指したから…。

偶然でも、目標を持って歩き出した道を最後まで行きたかった。ただ、それだけだった。

「さて…」

長い坂道を登り続けて棒のようになってる足を叩いてから再び来た道に戻る。辺りは落ち着いた住宅街。すっかり暮れた寒空の中に温かい家庭の明かりが灯っている。夕食時だから狭い小道には家々から漏れる料理の匂いが漂っている。きっと無意識に嗅いでいたこの匂いのせいで、急に腹の虫も暴れ出したのだろう。

塔を数十メートル離れた路地の角まで来た時、ちょうどその角にある建物のドアがバタン！と開いた。

「俺の勝手だろ…！」

「待てよ、トム！」

「追いかけてくんなよ！」

言い合いながら若い男がふたり出てきたと思ったら、ひとりには逃げ、ひとりにはそれを追いかけて明るい街の方へと走って行った。自分の真横を通り過ぎて行った彼らを響はしばらく見ていたが、ふたりが出てきた建物に目を戻すとそこには、

『Inn&Bar』

の看板がかかっている。

ずいぶんとくたびれた風のたたずまいであるが、こんな路地にある宿屋なら街のホテルよりは割安であろう。街に向いていた足の方向を変え、ふたりの若者が飛び出してきた扉の前に立つ。

『Inn&Bar Fermata』

「フェルマータ…」

響は看板にある店の名を呟き、ペンキのはげた扉を開けた。

◇

そこは不思議な空間だった。Barのフロアには数人の客がいて、フロアに据えられたテレビの野球中継を見ながら大いに盛り上がっている。たぶん常連客で構成されているメンバーたちなのだ

ろう。ジョッキを手にしたままテーブルの間を行ったりきたりしてる客もいた。

そして、縦長になっているフロアの一番奥ではバンドが演奏していた。だが、客たちはそのバンドには目もくれていないし、バンドも聴かせようとしてるわけじゃない。ライブをやっているというのではなく、まるで練習でもしているようだ。

テレビも演奏もそれぞれが騒音。それに加えて野球観戦をする客たちの歓声。バンドも客も互いを干渉していないのが不思議なぐらいだ。まるでまとまりがなく、ただ見た目も音もガチャガチャとした空間がここにあった。

フェルマータ——音楽用語で伸ばす、休む、という意味を持つ言葉だ。休符とは違う、一時的に自分の意思で微妙に伸ばしたり休んだり、メロディに表情をつける時に使う記号。

フェルマータの記号と言葉に持っていたイメージと、同じ名がついたこの場所とのギャップに多少戸惑いながらも、響はフロアの中に足を踏み入れ空いていたカウンターの椅子を引いた。

「あ～、いらっしゃいませ！ちょっと待ってくださいね！」

フロアの客たちに注文の品を運んでいるウェイトレスが響を振り返って言った。カウンターの中は空っぽで、見る限り店の人間はそのウェイトレスだけのようだ。とりあえず座ることが出来た響は、それだけで半分気分的にも落ち着いたので、ウェイトレスの手があくまで黙って待つことにした。

フロアのテーブルと奥のバンドのちょうど真ん中に位置するカウンターは、双方の音がまとまって集まるのか耳栓が必要なほどの騒がしさだった。

カウンターに両肘をつき、両手をさり気なく耳に当てながらオーダーを取られるのをひたすら待つ。アメリカンリーグはボストンレッドソックスとニューヨークヤンキースの試合らしく、フロアの客たちは全員一致でレッドソックスを応援しているらしい。そう言えばレッドソックスのホームタウン、ボストンでもシーズン中は随分と盛り上がっていた。が、響は野球には興味がないのでそこに便乗はしたことがない。野球ひとつでこれほどにも盛り上がれる人間が不思議とさえ思う。だからなのか、塞いでいるとはいえ入ってくる騒音を無意識に聞き分けているとしたら、神経は奥のバンド演奏に向いているようだ。それも、恐ろしく下手くそな演奏だ。

楽器はベース、ドラム、ピアノ。ジャズではよく組むトリオだが彼らの音楽はロックなのかポップスなのか、とりあえずジャズじゃないことだけは確かだ。

リードギターもボーカルもないその演奏はかなり中途半端だし、そもそもギターのチューニングが合っていない。ドラムはリズムがバラバラだしピアノに関しちゃたどたどしすぎて問題外。まだヒカルが弾くピアノの方がマシだと言える。

聴いていてイライラする。そこはそのコードじゃないだろ、と突っ込みたくなる。

けれどひたすら我慢して、なるべくその不協和音を聴かないように精神的耳栓をする努力をしながら、そろそろ空腹も限界に達した頃、

「すみません、お待たせしちゃって！ご注文をどうぞ！」

ようやくカウンターの中に戻ってきたウェイトレスが、そばかすを顔中に散りばめたチャーミ

ングな笑顔でオーダーを訊いた。

ついついの癖で、

「珈琲と....、」

と言いかけたとき、ウェイトレスが、はぁ？というような顔をした。そう言えばここはBar（酒場）だった。指を折ってからアルコールは痛みを増幅させるのでやめていたが、もうピアノを弾くわけでもないし....、

「いや....、バドワイザーと、あと食事がしたい」

「お食事はロブスターでいいですか？」

「なんでもいい」

「お客さん、旅の人？ここはロブスターの名産地なんですよ！あの人たち、みんなロブスターを獲ってるロブスターマン」

そうなのか、と響は後ろで騒ぐ男たちを振り返る。言われてみれば、皆武骨そうな漁師らしい風貌だ。

「ここのロブスターは身がプリッとしまっていてイカシてるぜ？に一ちゃん食ったことねーのか？」

客のひとりが大声で言った。

「あ、ああ...ない」

「アイダホはポテト、メインはロブスターってな！絶品べっぴんのカノジョたちをたんとご賞味アレだ！...あ！ちきしょー打たれやがった！」

ロブスターマンは陽気に騒いだ後、野球中継の観戦に戻った。

「他にご注文は？」

ウェイトレスはテキパキと動き、ジョッキをカウンターに置きながら言った。

「あ...、今晚宿も頼みたいんだ」

出されたジョッキを手にしながら当たり前のように言うと、

「え！？宿ですかぁ？泊まるの？」

ウェイトレスは驚いたように訊き返して来た。

「だって...Inn（宿屋）って外の看板に...」

泊まるの？と訊かれるとは思ってもみなかった響は啞然として訊き返す。

「宿じゃないの...？」

「いいえ、宿ですよ？でも夏以外にお泊りのお客さんはないんですよ。もともと観光地じゃないし、ここはこんな路地裏のお店だし」

「でも、夏は泊り客もあるんだろ？」

「まあ...、街のホテルに泊まれなかった人がぼつぼつですけどね〜」

「.....で、俺は今日ここに泊まれるの？泊まれないの？」

「うーん...」

と、ウェイトレスは考え込む。うるさい客たちに下手くそなバンド、そして宿であって宿らしくない店。とんでもないところに来しまったな、と響はため息をついた。

「あ、そんな風のため息つかないでくださいよ！お部屋を用意するのにちょっと時間をいただければお泊りいただけますよ？夏以来お掃除もしてなくて...」

と、ウェイトレスは首をすくめる。

「時間はいくらでもあるから大丈夫。とりあえずベッドと毛布さえ貸してもらえれば掃除なんてのも適当でいいさ」

「そういうわけにはいきませんよ。お客さんですから」

だったら宿屋らしく普段から手を入れておけよ、と心の中でぶつぶつ呟いた時、

「ただいま...」

店に入って来たのは、さっき外で会った若者ふたりのうちのひとりだった。濃い栗色の髪と茶色の瞳が印象的な若者だ。ただいまってことはこの店の人間か？とドアの前に佇む若者を見たまま何気なく思ったが、

「おお、レイ！どうだった？！」

若者の帰りに素早く反応したのは、向こうで演奏をしていた三人のバンドメンバーたちだった。

「ダメ...」

首を振りながらレイと呼ばれた若者は、ずいぶんと意気消沈した様子で仲間たちの元に行く。彼らはレイを囲み、

「どーすんだよ、俺たち」

「何とかならないの？」

「参ったなあ」

と、口々に言い合っている。彼らにとっては重大な問題が勃発したようだがそんなことに興味はない。ただ、耳障りな演奏が止んでくれたことがありがたかった。

ちょうどロブスターも出てきたところで響は彼らの観察をやめ、ようやく今日初めての食事にありつけた。ロブスターマンが言うとおりに、身がしまったべっぴんなカノジョはイカシた味だった。

「レイ、取り込み中悪いんだけど、ちょっと店お願い」

あっちで深刻な面持ちでバンドメンバーたちと話をしてるレイに、ウェイトレスはあっけらかんとして言った。

「今俺たちそれどこじゃねーんだよ！進退窮まり中なんだから！」

と、文句を垂れたのはレイではなく、ベースギターを触ってた若者...というより少年だ。

「こっちもそれどこじゃないの？わかる？お客さんがお泊りになるから部屋を用意してこないとなんないの！」

「ふーん。こんな時期に泊り客なんて珍しいな」

と、少年はそばすかだらけの顔を向けて響をチラリと見た。

「そーゆーことだから、レイお願いね？」

「わかった」

レイは素直に頷き響を見た。

「お客さん、何かあったらあの子、レイに言ってくれる？」

宿は同じフロアから階段を上った二階にあるらしい。ウェイトレスはバタバタと二階に駆け上がって行った。

「...ったく、ふだんから部屋の用意ぐらいしとけばいいんだ。一応宿屋なんだからさ」

そばかすの少年がブツブツ言うと、

「お前が手伝ってやしゃーいいだろう？サラだってひとりで大変なんだ」

ドラムの少年がそばかす少年の頭をスティックでコン、とつついた。

「俺だって学校あるしいろいろやってるし時間ねーもん」

「...少しは自分の家手伝えば？」

「うるさいわい！ねーちゃんは俺よりレイを信頼してるんだからそれでいいでしょ？」

「それはお前が頼りねーからだろ...？」

一体誰と誰がどう繋がってるのか、話を聞いているだけじゃ意味不明だったが、それも自分には関係ない。

彼らは再び楽器を持ち、演奏を始めた。レイと呼ばれている少年がリードギターだったようで、他の三人よりはまあまあマシな演奏をする。だが、全体レベルで言えば全然聴けたものじゃない。楽器のチューニングが合っていないから身体がムズムズして気持ち悪いし、やはり精神的耳栓は必要なようだ。

腹は満たされたが、この騒音でか、それともビールがいけなかったのか、今度は指がじんじんする。ちゃんと固定しているにもかかわらず、だ。

医者は無茶がバレ、処方してもらっていた鎮痛剤はもらえなかった。このまま痛みが引くまで静かにしているしかなさそうだ。珈琲が欲しいと思ったが、演奏中のレイを呼ぶのは気が引ける。

――ま...、いいか...。

相変わらず野球観戦に盛り上がっているロブスターマンたち。

耳障りな演奏を好き勝手にやっているバンドマンたち。

――フェルマータ...か。

妙な店で妙な客やバンドたちと、妙な時間を共有していることがおかしくて笑いが込み上げてきた。

こんなひと休みも有りだ――。

案内された部屋は狭く冷たく埃の匂いがした。だが、窓から遠くの下のほうに見渡せる港の景色は悪くない。

遠い昔、母が読んでくれた物語の世界を頭に描く時の風景はこんなものではなかつたらうか。

暖かく懐かしく――。

ベッドに転がりすぐに目を閉じた。階下でまだ続いているバンド演奏が微かに聴こえる。

その音はA7だろ。

そこはF#m7だろ。

微妙な音の違いを心の中で突っ込みながらそのまま眠りに落ちた。

だからなのか、高校時代、田村たちとやっていた軽音楽部バンドの夢を見た。

『その音はF#m7じゃねえか？』

『あ？そう？そっちのがいい？』

『いいも何もF#m7なんだよ。それしかないの』

『...別にF#mでもいいと思うんだけどな？たいして音変わんねーし...』

『絶対音感のヒビクが言うんだからそこはF#m7なんだよ』

『次郎くん、アバウトすぎ...』

『F#mとF#m7じゃ全然音が違うだろーが、バカめ』

『うるせー！おめーだってたまに外すだろーが』

『たまに、だろ？次郎はいつも！』

『...おいおい、兄弟喧嘩してる場合じゃねーだろ？ライブは来週だぜ？』

『んじゃ、もう一回最初から！』

・
・

目覚めた時、響は一瞬ここがどこなのかを思い出せなかった。音楽室にいたはずなのに目の前にあるのは見覚えのない茶色の壁。一緒にいたはずの仲間たちも消えている。

「...いや、そうじゃない」

まだぼんやりした頭を一生懸命働かせ、光が射し込む窓の外を見た。そしてようやく、昨夜この部屋で寝たいきさつを思い出した。

ボストンで――。

アカデミーのアパートを解約し、そのまま空港へ行った。成田行きの便に乗るつもりだった。飛行機はもう目の前にあり、そこには自分の座席が確保されていたのに。

――どうしてチケットを破り捨てた...？

もう、ここに留まる理由などないはずなのに。

空港を飛び出し、街を追われるような思いに駆られて行き先もわからないシャトルバスに乗り込んだ、その結果が今ここで目覚めた自分だ。

名前も知らない町の路地裏にある『Inn&Bar Fermata』の埃くさい小さな部屋。昨夜はいつまでも賑やかだったが今は静かだ。人の気配も感じない。泊まり客は他にないはずだから、宿になってこの二階にはたぶん人が居ないのだろう。

午前10時。

もう冬がそこまで来ているこの町の朝は、部屋の中でも吐く息が白くなるほど寒い。身支度を済ませたあと、響は部屋を出て階下に下りた。

Barに客はひとりもいなかったがフロアには暖房がきいていた。

「あ、おはようございます！」

階段を下りた場所で脚立に乗って天窓ガラスの吹き掃除をしていた昨夜のウェイトレスが振り返った。

「お食事どうします？」

「珈琲だけでいい」

響は昨夜と同じカウンターに座った。

「ほんとに？サンドイッチでも作りますよ？」

ウェイトレスは窓拭きを途中でやめてカウンターに戻ってきた。

「...朝は珈琲だけでいいんだ」

朝食摂らないと力出ないですよ、と言いながらウェイトレスはカウンターの中をテキパキと動く。やがて、香ばしい珈琲の香りが石油ストーブの匂いに混ざってフロアに充満した。

昨夜、バンド演奏をしていた場所にはドラムやキーボード、ギターなどの楽器が無造作に放置されている。その片隅に金色のサク스가あった。

——サクスなんて使ってたか...？

いや、騒音の中にサクスの音は混ざっていなかった。誰が吹くのだろう...と何気なく思ったが、

「珈琲どうぞ」

カウンターの上に珈琲を差し出され、響はサクスのことは忘れてすぐに手を伸ばした。昨夜から飲みたくて我慢していた珈琲だ。

「昨夜は眠れました？」

「...まあ」

ずいぶんと煩かったけど、と心の中で付け加えると、まるでその心を読んだように、

「バンド、煩かったでしょう」

と、ウェイトレスが言ったので、...そうだな、と、正直に答えた。

「すみませんね～。ここは常連さんしか来ないから夜はいつもあんな感じなんです」

「あのバンドはここでライブを？」

「いいえ。あの子たちはここで練習してるんですよ。来月の感謝祭に街で行われるフェスティバルのコンテストに出場するんですって」

「...コンテスト...ね」

あれじゃ結果は知れてるな、と、響は昨夜の不協和音を思い出した。

「まあ、実力はあの程度だし結果は知れてるんですけどね～。お客さんもそう思うでしょ？」

ウェイトレスはまたもや心の中を読んだ発言をする。響は少々バツが悪く、軽い咳払いで誤魔化した。

「でもあの子どもたち、ものすごく真剣にやってるから応援してるの。常連さんたちもたぶん...、」
「たぶん...？」

「いえ、常連さんたちも彼らを応援してるの。だから煩くても耳障りでも文句言わない。それにあの常連さんたちの中にはあの子どもたちの親もいたりして」

ウェイトレスは首をすくめて笑った。

「なるほどね...」

だから互いの騒音に干渉し合わないわけか、と響は納得した。

「でも、お客さんには迷惑かけちゃいましたね！」

「...いや、いいさ。俺も...、」

――昔、あんなバンドをやってたから...

ふと、夢で見た風景が目に浮かんだ。

いや、あれは夢じゃない。記憶だ。

あの時、たぶん意識は目覚めていた。昨夜の演奏がきっかけで引っ張り出されてきた昔の記憶を、まどろんだ意識の中で思い出していただけた。

自分はボーカル、リードギターは田村、ベースをやってたのは松山太郎という女好きで軟派なヤツだった。その双子の弟次郎はサイドギターを、ドラムを叩いてたのは秀才の柏木。ピアノはこの間田村と結婚した後輩のあかね。そして、ヒカルは跳んだマラカスを――。

7人で構成されたバンドの名はブックキャッスル。母校の本城という名をそのまま英単語を並べてつけただけの名だった。今から思えばそれは随分と滑稽で意味のない名前だ。その無意味なバンドと音楽を、あの頃は毎日マジメに仲間たちとドタバタしながらやっていた。放課後の音楽室に集まることが学校に行っていた全てと言ってもいいぐらいに。

――ヒビク、ピッチずれてるぜ？

――俺のせいじゃない！ヒカルのマラカスがおかしいからだよ！

――何であたしなんですか！？

――国宝級音痴だから！

卒業後はほとんど思い出さずにいた4、5年前の記憶たちが押し寄せる。そして、それに伴って湧き上がるのは仲間たちへの想い。

まさかこんなところで突然に、こんな記憶に再会するとは思ってもいなかった。苦しくなるぐらいに懐かしい、仲間たちと過ごした時間の記憶に――。

「あら？指どうしたんですか？」

ウェイトレスは響の指に目を留めて言った。

ついこの間まで過酷を強いられていた、今はちゃんと固定した左指がカウンターの上にある。左指は、昨夜の痛みは引いて今はずいぶんと落ち着いている。

響はウェイトレスの真ん丸い目を見てふっと笑い、

「...大型冷蔵庫の下敷きになった」

と、呟いた。

「えええ?!ほんとですかあ?!」

「ああ、ほんと」

どうしてそんな...、とウェイトレスは痛々しそうな顔をして指を見つめる。

「大丈夫なんですか?もう痛くないの?」

「...たまに痛むけどまあ平気。2ヶ月もすれば治ると医者にも言われてるし...」

――骨はついても指が元通りまっすぐになる保障はできませんよ、とも言われたけどな...

でも指がちょっと曲がってるぐらいなんてことない。もう、ピアノは弾かないのだから――。

「そんなふうに固定されてると不便ですね?」

「利き手じゃないから字は書けるしフォークも持てるし珈琲も飲める」

響は珈琲カップを口にして笑った。珈琲はずいぶんと濃かったがおかげですっかり頭も冴えた。そういえば、朝から人と話すのも久しぶりだった。知らない町の宿で、若いそばかす顔のウェイトレスとたあいもない話をする朝は、ただそれだけのことなのにあまりにも新鮮で優しい。

「それじゃやっぱり栄養つけなきゃ。サンドイッチぐらい作りますよ?」

「...いや、」

響は一度は首を横に振ってから、

「...でも、じゃあ...サンドイッチは包んでもらえるかな?」

と、言い直した。

「中身は何にしますか?」

「あ...うん、まかせるよ」

はい、と元気に返事をしてウェイトレスはしゃがんでカウンター下にある冷蔵庫を開ける。響はウェイトレスの仕草からぐるりと店の中に視線を流してみた。

木の壁はところどころペンキが剥げ、格子のガラス窓は曇っていてお世辞にもキレイな店だとは言えない。フロアの真ん中にある丸い石油ストーブの上ではヤカンの湯が沸いている。さっきウェイトレスが拭いていた天窗から射し込む光の筋の中で埃たちが漂い流れ、それはいつの間にか野球観戦用のテレビやテーブルに積もっていく。雑然としたものの中に見えるのは飾りのない生活観だ。

「フェルマータ...、この店の名はフェルマータだったよな?」

「ええ、そうですよ」

「意味は?」

「はい？」

ウェイトレスは首をかしげて訊き返した。

「いや、フェルマータという名の意味...」

「ああ、店の名前の由来ですか。父がイタリア人だったんです。フェルマータはイタリア語で停留所とか休憩とかという意味なんです」

停留所...、と響はウェイトレスの言葉を繰り返し、もう一度店内を見回した。

「この店は...君がひとりで？」

「はい。今は私の店です。両親はもういませんので」

少し驚いた。

自分より年下に見える彼女が、たったひとりで宿屋と酒場をきりもりしてるということか。だから、いささか手抜きってわけだ。なんにしてもウェイトレスじゃなくlandlady（女主人）てことだな、と響は考えを改めた。

それで、

「女将（おかみ）、」

と呼ぶと、呼ばれた方は手を止め、

「女将！？やだなあ！サラでいいですよ！」

素っ頓狂な声をあげてケラケラ笑った。あまりにも可笑しそうに無邪気に笑うサラに被るものはたったひとつ。全身に染み付いている忘れられない人の面影だ。丸い石油ストーブと石油の匂いは忘れていた高校時代の冬を思い起こさせ、その記憶の中にいる制服姿のヒカルが笑う。

——国宝級音痴だから...それひどいっ！あたしだって一生懸命やってるのに！

——あ～あ、いじけちまったよ？どうするんだヒビク？

——.....まあ、そうむくれるなって。あとであんまん買ってやるからさ。

——ほんとですかあっ！ヒビク先輩、だ～いすきっ！！

——だったらヒカルよ？もうちょっとマシなマラカスやろうぜ？

——あんまんのためなら何でもやります～！

——ヒカルだよなあ...。

——はい！あたしですから～！

からかって怒らせても最後は笑う。そして一旦笑い出したら止まらない。いつまでもひとりでケラケラと笑っていた放課後の部活動。

ふと、もう一度奥の楽器たちに目が行った。

——ヒビク先輩、だ～いすき。

ヒカルの声が聞こえたような気がして胸が痛んだ。それは、ついこの間まで聴いていた大人の声ではなく、昔の、高校生のヒカルの声だ。

――ヒビク先輩、と毎日のようにハツラツと呼んでくれた、ヒカルの声…。

その記憶を連れてきたのはサラの笑顔と目の前の楽器たちだ。どこに行っても何を見てもヒカルを連想してしまうのはもう癖になってしまっている。太陽、光、野原や草花、透明な空気さえもその中にヒカルの幻影を見出して。

――航空チケット……。

破らずに飛行機に乗っていたら今頃は丁度成田のはずだった。そして、そのまま空港駅から隅田川のほとりのあの街へ向かっていたら、そこにはこんな偽者の幻影などではなく、本物のヒカルの笑顔があったはずだ。会って抱きしめてしまえばヒカルが自分を再び受け入れることは間違いのないことで、当然そのつもりで航空チケットを買った。

それなのに、今自分はこんな辺境の土地にいる。この辺境地の酒場の女主人の止まらない笑いのなかに、はるか彼方の愛しい人の面影を見ている。

――まわりくどすぎる…。

現実を自覚した時、自分で呆れた。いったい自分はこんなところで何をしているのだろう…。

――でも、ここはフェルマータ。停留所…。

「サラ…、」

笑い苺でも食べたかのようにいつまでも止まらない若い女主人の笑いを名を呼んで止めた。

「はい？」

「ここは100ドルで何泊出来る？」

「お食事つきですか？」

と、言いながらもサラはまだクスクス笑っている。響は半ばうんざりとしたように、ため息と一緒に頷いた。

「あ、お客さん、そんなふうにため息をつかないでくださいって！ごめんなさい。真顔で女将なんて呼ばれたことなかったからつい可笑しくて…。100ドルで食事つきですね？えっと…、シーズンオフだし部屋があんなんで…、二泊はできますよ？」

サラは微笑だけ残して笑いをおさめ、手元で手早くサンドイッチをこしらえながら答えた。

「これからちょっと出かけてくるけど今夜も同じ部屋に泊まりたい」

「かしこまりました！お客さん、ここにはお仕事か何かで？」

出来上がったサンドイッチが丁寧にラッピングされ響に手渡された。

響は答えずに、

「...それじゃ、今夜また...」

サンドイッチを受け取って店を出た。

◇

この町のメインストリートは小さい。店が立ち並んだ通りを最後まで歩ききると、その先はもう港に続く田園風景になる。もちろん渋滞している車もなければ騒音もほとんどない。散歩でもしているような人々がのんびりと歩く田舎町だ。

とにかく。

もう、行くところはない――。

かろうじてあと1日は『Fermata』に滞在出来るが、明日からは生きる術も糧もない。野垂れ死にすることをこれからの選択肢から外すならば、財布の中身はもうゼロに等しいわけだから、ここで生きるための道を探さなくてはならないのだ。

町に住所を持たない響は、日当を日払いでもらえるバイトをしながら『Fermata』に滞在することにした。他の方法を考えたわけじゃないが、たった今そう決め、ウェイターや店員など店先にアルバイト募集の広告がされているところを職種を選ばずに訪ね歩いた。

だが、そんな都合のいい、住所不定の外国人が働ける職場がすぐに見つかるはずもない。一件、二件と行く先々でけんもほろろに断られ、三軒目に適当に飛び込んだ『墓石屋』では、「その手で墓石運べるの？」

と、包帯を巻いた左指を指摘されて、そうだった、と思い出したほどのいきあたりばったりな職探しだった。

――腹へった...

遠くの方にレンガの塔がそびえて見えた。

建物の壁を背もたれにしてその場に座り込み、サラが作ってくれたサンドイッチの包みを開けた。ベーコンに野菜に卵。すりつぶした白い身はロブスターだ。

「ずいぶん贅沢なサンドイッチだな...」

がぶりとかぶりつき、夢中で食べた。明日はこの食事でありつけるかわからない、という思いをかみ締めながら食べるサンドイッチの味は、この世の中で一番の美味だと感じた。

そして一日中メインストリートから路地裏、住宅街や港の方まで街中を歩き回り、日が翳って寒くなってきた外気に薄着の身をさらしながら、

「こりゃ、マジで野垂れ死にもありえるな...」

と、思わず口に出た。

『Fermata』に滞在するのもバイトを探そうと思ったのも突然決めたことだし、だいたいにおいて行き当たりバッタリすぎるのは十分自覚している。今、ここに居ること自体からしてイレギュラーなのだ。暴走魔と田村たちにはよく言われたが、これまでの暴走には自分なりの理由が存在した。こんなにも後先のことを何も考えずに、自分の行動に理解しかねながら暴走したのは初めてだ。

――しょーがねえな…。

指の包帯を外して多少の痛みを我慢すればボストンのライブハウスで弾いていた程度のピアノは弾けるだろう。いい加減なピアノだろうが誤魔化しの演奏だろうが別にかまいやしない。どっちみちもう、音楽に対して熱も魂もないのだ。3年半の苦行で身につけた技術、生きるために酷使してどこが悪い。クラブ喫茶か安酒場で適当にピアノを弾けばいい。一回弾けば1日の宿代ぐらいは稼げるだろう。そう思い、響はさらに街中を歩く。

けれど……、

「ねーじゃんか、クラブ喫茶…」

ボストンにはいたるところにあるようなクラブ喫茶もライブハウスもここには存在しない。

「とんでもねえ田舎町だぜ……」

口に出して呟いてやたら可笑しくなった。まさか、こんなサバイバルを体験することになるとは、全米デビュー寸前だったカザマ・キョウからすれば思いもよらなかったことだ。

でも――。

この状態を受け入れている。

焦りはほとんど感じていない。

もうどうにでもなれと投げやりになっているのか、なんとかなるさと舐めてかかっているのか。

――たぶん、その両方だな…。

自分の感情が理解できないままふらふら歩き回って日も暮れた頃、レンガ色の展望台の下まで来ていた。

何気なく立ち止まり、てっぺんを見上げる。

塔の高さはせいぜい5、6階建てのマンションほどでそれほど高くはないが、丘の頂上にあるからか町のどこからでも高くそびえて見える。古臭いデザインはこの町によく似合っているし、路地裏の住宅街にも馴染んでいた。

普通に考えたら今の状態は窮地だ。万事休すと言ってもいい。帰る家もなく金もなく生きる目標すらもなくどうしたらいいのかもわからない。

意味も持たずに、ただここにいるだけ。中途半端以下の、明日のこともわからない根無し草。

それなのに――。

決して楽しんでるわけじゃないが悪くはないな、と思ってる自分が不思議でならなかった。少なくとも、航空チケットを破り捨てたことを今ここで後悔はしていないのだ。

塔の向こう側、下の海が見事な夕焼けに染まっていた。

今ここで塔に上ったらさぞ素晴らしい景色が展望できるだろうに、営業時間は1時間も前に終了している。

「やる気あんのか、この展望台...」

しっかりと入り口の門が閉じられている塔に向かいそう呟いた時、

「やる気はねーよ！」

と、誰かが答えた。

「そうだな...」

と相槌を打ちながら、言葉の発信源を探ってあたりを見回したが人影は見当たらない。

「しつこいんだよ、レイ！もう俺にかまうんじゃねえよ！」

...レイ？と響はその名を心に止めた。

「そうはいかないだろ？！なんだって今頃になって抜けるなんて言い出すんだよ！コンテストは来月なんだぜ！？」

「だから抜けるんじゃねーか！」

ここからじゃ姿が見えない彼らは塔の死角で言い争っているらしい。

塔の周囲にそってゆっくりと歩みを進めると、レイともうひとりの少年がいた。ふたりは肩から大きな鞆を提げている。おそらく学校帰りなのだろう。レイは相手の腕を掴み、相手はその手を大きく振り払おうとしていた。その弾みで相手の鞆が道にドサリと落ちた。

「やっぱりスティーブたちのバンドに引き抜かれたって話は本当だったのかよ...？」

「引き抜かれたんじゃないさ。俺の方から行ったんだ」

「何で！」

「お前たちがド下手、だからだよ！」

少し離れたところからふたりを観察していた響は、ふたりが何故昨日からもめていたのかを理解した。実力の無い仲間をさっさと見限って別のバンドに鞍替えする少年と、彼を引き止めたいと思うレイたちの間に心の交わりがないということだ。

「もう俺にはかまうなよ！俺は俺のやりたいようにやる。お前たちはお前たちで好きなように音

楽やってりゃいいだろが！」

「トムがいなきゃ...！」

「甘いんだよ、レイ！ド下手を俺でカバーしようなんて冗談じゃないぜ！？俺はまともな音楽がやりたいんだ！ままごとはもううんざりなんだよ！」

確かにトムという少年の言い分には一理あるし、おそらく自分でもそう思うだろう。

がしかし...、と響はさらに観察を続ける。とりわけ、レイという少年を。

「...トムがいなきゃ、アンが...」

「アン？関係ねーだろ！」

「もう一度考え直してくれよ！頼む！頼む！」

レイはトムの腕を掴んだまま懇願した。勝ち目はないだろ、と心の中では冷静に思いながらも、なりふりかまわず頼み倒すレイの姿にどこか惹きつけられる響だ。

「しつこいぜ！いいかげん放せよ！」

あくまでも食い下がるレイに堪忍袋の尾が切れたのか、トムは空いている片方の手を大きく振り上げ、そのまま振り下ろした。

「待て待てっ！！」

トムの手がレイを打つ寸前に響はふたりの間に飛び出した。レイは打たれずにすんだが代わりにパンチを食らったのは...

「あ、あんたは...！？」

「誰だよ、おまえっ！？」

突然飛び込んで来たと思ったらあっという間にノックアウトされて道に倒れこんだ見知らぬ金髪男を、ふたりは呆然と見下ろした。

「いて一なあ...」

打たれた頬を撫でながら、響はゆっくりと立ち上がりそのままトムを睨みつけた。その、凍るような鋭い目にトムは足がすくんだようだ。

「お、お前が勝手に飛び出して来たんだろ...?!俺は知らねーよ！」

と吼え、道に落ちた鞆を素早く掴むとそのまま逃げるようにして坂道を駆け下りて行った。

「トムッ！」

レイは彼を追いかけようとする。

それを響は、

「おい、お前？トムよりこっちだろ...。歯が折れたかもしんねー...」

と、血が滲む口元をぬぐいながら制し、ニカッと笑った。

「イテテッ！」

サラが、響の切れた口元をピンセットで挟んだガーゼを当て消毒してくれているのはいいのだが、痛いのは傷ではなく...

「サラ、それピンセットの先がもろ当たってる...。ってというか、刺さってる...」

と、傍らで見守るレイの言葉どおり。

「ご、ごめんなさい！あたし、こうゆうの苦手で！手が震えちゃって鳥肌立っちゃって...！」

「い、いい！自分でやるから！」

ほとんどすくんだように身を硬くしているサラの手からピンセットを奪うようにして取った響は、自分でガーゼを口元に当てた。

『Fermata』ではもうすでに数人のロブスターマンたちが、一杯やりながら今日の漁の話や昨日のアメリカンリーグの話、そしてこれから始まる試合の話で盛り上がるために集まっていた。バンドメンバーたちも次から次へとやって来て必然的にレイの傍に集まり、悲惨に腫れた響の顔を見ることになった。

「トムが殴ったそうよ？」

サラが思い切り痛々しそうに顔を歪めた。

「トムが？何でこの人を？！」

「トムが殴りたかったのは俺のこと。この人は止めに入ってくれたんだ」

大げさなアクションで響とレイの顔を見比べながら叫ぶそばかす顔の少年に、レイは展望台の下でのことを説明した。

「...おかげで俺の甘いマスクが福笑いみたいな顔になっちゃったぜ...」

響はサラに手渡された手鏡を覗き、ガーゼを当てながら呟いた。そして、

「けど、歯は折れてねーみたいだ」

と、レイを見て笑った。レイはよかった...、と呟いて肩を落とした。

「あんたにはすまないって思ってる...。俺が殴られてたはずなのに...」

「まあ、成り行き上しょうがないさ。あんな場面に飛び込んで行った俺もマヌケだったってことだ。どうせ内輪の揉め事だったんだろうし」

言いながら、響はまったくその通りだ、と思っていた。彼らの揉め事に自分は何も関係なければ興味もないはずだった。それは今でもそうだ。なのにレイの代わりに殴られてやっただけじゃなく、トムを追いかけようとしたレイを引きとめたりして、いったい自分は何がしたかったのかわからない。昨日の空港からの自分には戸惑うばかりだ。

——こんな顔じゃ就職活動もできねーなァ...

指はダメ顔はダメで未来は絶望。明日からは袋小路の角か公園のベンチをねぐらにして、落ちてる木の実を拾うか海で密漁でもするしかなさそうだと響はため息をつく。

サラはロブスターマンたちに呼ばれてフロアに駆けて行った。次から次へと常連たちが集まり出した『Fermata』は昨夜のような活気を帯び出した。一度に何人もの客を相手にフロアと厨房を行ったりきたりするサラはもうレイたちの話にかまってられなくなり、響の怪我のこともすっかり忘れてしまったようだ。ちょっとそこどいて、と通り道にたむろしている連中のかたまりをまとめて隅の方に追いやった。何故かその中に自分も入っていることが腑に落ちない響だが、サラの邪魔をしないように素直に場所を移動した。

「でも、トムはどうしてレイを殴ろうとしたんだ？」

楽器が放置されている場所に落ち着き、ギターを手にしながらそばかす少年が言った。

「俺がしつこく引きとめたからだろ。トムは俺たちとのままごととはもうたくさんだってさ...」

「ままごと...!? あいつ、そんなこと言いやがったのか?!」

でもそれは事実だろ、と響はカウンターが一番端、バンドのすぐ側の椅子を引きながら心の中で呟いた。あの音じゃ何言われても文句は言えねえよ、とも付け足して。

「じゃあトムはもう戻って来ないのね...？」

キーボードの前に佇んだ少女がレイを見て呟くと、レイは言葉に詰まったように沈黙した。

「...レイ？」

少女がすぎるようにレイを見ていると同じように響も彼に注目した。さっきもそうだったが、レイの仕草や姿にはどこか惹きつけられるものを感じる。ついつい見入ってしまうのだ。

「ねえ、どうなの？もうあたしたち、トムとは出来ないのね...？」

「ああ。そうだよ、アン...。トムはスティーブたちのバンドで歌うらしい。あの調子だと気持ちは変わらないだろう...」

アン...? どこかで聞いた名だ。響はアンと呼ばれた少女を見る。赤いウェーブのかかった髪をポニーテールにして結んでいる健康的な少女に見えた。

「スティーブたちのバンドで...? じゃあ、あの噂は本当だったんだ...」

「ああ...」

そうか、とアンだけじゃなくドラムの少年もレイ本人も揃って床まで届きそうな大きなため息をつく。

あっちではロブスターマンたちが昨夜と同じように盛り上がりつつあるというのに、ここに集まっている響も含めたカウンター組たちはまるで通夜だ。バンドマンたちは進退窮まり、響も進退窮まりー。

「俺たちのどこが気に入らないってんだよ！冗談じゃねーぜ?!」

ひとりだけ怒鳴る元気があるのはそばかす少年だ。

「鼻垂らしたガキの頃から一緒に遊んでやったのに裏切りやがって！レイもレイだ。何で黙って引き下がってくるんだよ！」

「だから何度も引きとめたさ！」

「詰めが甘いんじゃないの？レイは優しすぎるんだよ！俺が行って来る！行ってぶん殴ってきてやるっ！」

「無駄だよ、マーク。いいからちょっと落ち着けよ！」

ドラムの少年に腕を取られ、今にも飛び出して行きそうだったそばかす少年の勢いが止まった。ツバを飛ばしながら喚くこの少年を見ていると、昔の仲間のひとりと重なる。いつもにぎやかに喚いていた双子の兄の方だ。そういえば、彼もベースギターだったな、とそばかす少年の手にあるベースに目をやった。そして、

「昨夜気になったんだけど、お前のそのベース、チューニングが合っていないぜ？」

そうひとことだけ言ってまた黙った。口を開いたら切れた口元がヒリヒリしたからだ。

あ？とそばかす少年は目をまんまるくして弦を撫で音を確認する。そして、首をかしげた。

「...わかんない...？」

素っ頓狂な顔で自分を見る少年に、響は呆れたように言った。

「三弦がズレてるだろ？」

え？と少年はまた首をかしげる。

「貸してみろよ」

響は少年からベースギターを受け取り、いいか、この音はこうだ、と言いながら音を合わせてやると、レイが横でじっと自分に注目している視線を感じた。

「お前のギターも貸せよ...」

しょーがねえな、と言いながら響はレイのギターの音も合わせる。チューナーを使わず自分の耳だけで音を合わせている響にみんなは、

「すげえ...」

と感嘆の声を漏らした。

「演奏前の音合わせは基本だぜ？」

ほらよ、とギターをレイに返すとレイは弦をポロンと鳴らした。そばかす少年が、音変わったか？などとドラムの少年に言いながらまだ首を傾げている。F#mとF#m7の違いを分からずに弾いてる連中なのだから、微妙なズレにも気づかないで当然か、と響は苦笑した。

「...じゃ、続きをどうぞ？」

仲間内の話し合いが中断しているレイたちに、響は続けるようにと促した黙った。

とにかく今はこいつらのことより自分だ。一日街を歩き回って温かな部屋に戻り、この温もりも今夜が最後で明日の夜は寒空の下...と思った時、やっと焦燥感を覚えた。今からでも再び街に出てピアノが弾けるクラブを探し歩いたほうがいいたろう。昼間は気づかず素通りしたクラブや酒場に今なら巡りあえるかもしれない。

そう思い、ヒリヒリする口角を小指で押さえながら立ち上がりかけたとき、

「...トムの気持ちが変わらないならいつまでもこうしてたってしょうがないし、俺たちで何とかやってく方法を考えないといけないよ。そうだろ？」

ドラムの少年が意見を出しバンドたちの話し合いが再開されるので、何となく立ち上がる機会を逃した。

「それはそうだけど...」

レイは煮え切らない。レイだけじゃなくアンという少女もさっきから一度も顔を上げずうつむ

いたままだ。

「ボブの言うとおりでせ？もう俺たちだけでやってくことを考えようぜ？仲間を裏切って他のバンドに行っちゃうヤツなんてこっちから願い下げだぜ！」

「そんな言い方しなくてもいいじゃないよ、マーク…」

感情を抑えたような声で少女が言った。だが、その言葉は仲間たちには無視された。

「…でも、誰が歌う？」

レイが呟いた。そうだよな、と一同は再びため息の底に沈み思案に暮れた。場が沈黙したので、響は今度こそ立ち上がろうとした。が、

「レイが歌え！」

という突然のそばかす少年の言い切った叫び声にまたもやタイミングを外してしまった。

「無理！」

間髪をいれずにレイは答えた。

「リード取りながら歌は歌えない！音痴になっちゃう！」

レイの言い訳を小耳で聞き、おまえもそうか、と響は笑った。

田村がそうだった。ギターは上手かったが歌が入るとまるでダメ。音と声は全然一致せず、弾きながら歌うとヒカルに近いほどの音痴ぶりを発揮していた田村だ。

——頼む田村！ギターだけ弾いててくれ！

——ハモリは俺たちに任せろっ！

——ひたすらギターに徹してろ！

双子の兄弟によく突っ込みを入れられて慥然としていた田村だった。

バンド連中は再びうつむいて思案する。俺は歌えねえしアンもダメだし…、とそばかす少年がブツブツと言っている声を聞きながら、過去の記憶と目の前の現実が脳内でクロスする。目の中に入ってくるのはレイやそばかす少年たち、昨夜初めて出会ったアメリカ少年なのに彼らを通して心の中に見えてくるのは昔の田村や他の仲間たちだ。

「俺たちも誰か歌えるやつを引っ張って来ようぜ？」

「それよりもやっぱレイかマークが歌うのがいいと思うよ？」

「あたしはトムに戻ってきて欲しい…」

確かにロックやポップスバンドだとしたらボーカルがいなきゃ話にならないだろうが、それ以前に彼らは——。

——大丈夫なのか、こいつら…。

ふと、いつの間にか心配している自分に気がついて可笑しくなった。下手なバンドにかまって

る場合じゃないというのに。

「あの...、」

半ばぼんやりしながら彼らを見つめている響にレイが小さく声をかけた。

「あ？」

ただ彼らを見つめあやふやな思考の海に沈みかけていた響が、ぼやけていた目の焦点をレイに合わせながら答えた声は妙に間が抜けていた。

「...どう思います？」

「あ？」

どう思います？とはどういうことだ？と響はレイに訊き返した。

「俺たちどうすればいいと思いますか...？」

「はぁ?!」

思い切り口を開けたらまた傷がピリッと痛んだ。いてっ、と口元を押さえながらレイを見ると、茶色の瞳が真っ直ぐに自分を捉えていた。

「さっきの様子からして音楽に無関係な人じゃないなって思ったから。それにさっきからずっと俺たちのこと見てるし」

「俺の意見が聞きたいってわけ？」

響がバンドメンバーを見回すと、うつむいたままのアンを除いた三人は首を縦に振った。

「大人の意見が聞きたい」

はっ、大人ね...、と響は笑った。

——ボストンじゃさんざんベイビーだとかガキだとか言われてた俺なんだぜ？

「お前たちのこと、全然知らねー俺なんかの意見を聞いたってしょーがねーだろ」

響はヒリヒリする口元を押さえはっきりしない発音で喋った。

「知らないからこそ...」

どこかせっぱつまった様子のレイを響はじっと見つめる。

「大人の意見ねえ...。でもまあ...、お前の代わりに殴られちゃったわけだし、全くの無関係ってことでもねーか...」

彼らに関わる正当な理由を言い訳するように呟いていることが可笑しくてまた笑いが込み上げる。それを必死に沈め、

「んじゃ、俺も忙しいから簡潔に述べさせてもらうぜ？」

と、咳払いとともに言うと、

「忙しいんですか...？」

レイが澄んだ茶色の瞳を丸くした。どう見ても、ぼんやりのんびりまったりとここに居るように見えるのだろう。確かにその通りではあるのだが、

「お、おお。これからちょっと出かけるよ。そんな顔して見るなよ。大人には色々あるんだから」

と、立ち上がり、響は彼らに何か演奏してみろと言った。いきなりのものでバンドたちは戸惑いを隠さずにうろたえた。

「ちゃんと聴かなきゃ意見もできねえよ？それともいい加減なこと言ってもいいの？」

響がいたずらに睨むと、バンドたちはまるで先生の前に立たされた生徒のように背筋を正した。

「お前たちのジャンルは何？」

「今はビリー・ジョエルとケニー・ロギンスのコピーやってる...」

なかなか渋いねえ...、と呟いた後響は、

「じゃ、ロギンスの『デンジャー・ゾーン』やって」

と、有名どころを出してみた。それはまだ練習中で...、というそばかす少年の言葉は無視し、レイはドラムの少年と目で合図を取り合い演奏を始めた。そばかす少年も仕方なく少し出遅れて加わり、キーボードのアンも急いでスコアをペラペラ探した後に加わった。

響はカウンターの端に背をもたれながら腕を組み目を閉じて、昨夜と変わらないそのスチャラカな演奏に聴き入る。しばらくはただ黙って聴いていたが、そのうちにマイクなしでボーカルをとって見た。

「お？トップガンだね！？」

今までバンドの演奏には無関心だったロブスターマンが、聴きなれないボーカルを耳にしたからなのか、野球中継から目を放してこっちに寄ってきた。これにはメンバーたちが戸惑ったようで演奏をしながらチラチラと顔を見合わせている。

そのまま響のボーカルを入れて一曲を演奏しきったあと、客たちに嘘のような拍手をもらい大いにテレまくるバンドマンたち。

「俺たちってすげえじゃん！？」

と、舞い上がるそばかす少年に響は、

「今の演奏じゃはっきり言ってバンドじゃねーな！」

と、すかさずダメだしをした。

「まずベース、そばかすのお前だよ！ひとりで先走りすぎ。ベースの役目を果たしてないな。そしてドラムはこいつの素っ頓狂な演奏につられちまって本来のリズムを刻んでない。ベースとドラムは夫婦の関係って言うぐらいなんだぜ？お前らは離婚寸前ってとこだな。そしてギターとキーボードは同じリードを取ってるだろ？全然意味ない。どっちかでもいい。実力的に見てキーボードは怪しいところがあるからリードはギターに任せるのがベストってとこだな。とにかく、全部の音がまとまってねーんだよ。たぶんひとりひとはそれほど下手ってわけでもないんだらうけど全部が...、」

ド下手...とバンドたちは声を揃えて呟き肩を落とすが、響はそんな彼らをチラリと見ただけでかまわず話を続けた。

「...全部が集まるとただの騒音になっちゃう」

騒音かよ...、とそばかす少年。

「お前らみんな、自分本位の演奏をバラバラにやってるだけで仲間がいるってことを忘れてるんじゃないか？俺は歌いづらくてしょうがなかったぜ？演奏が信じられないってのはボーカルにとっちゃ致命的なんだ。トムってヤツが抜けた気持ちも頷けるぜ」

う...、とバンドたちは絶句し、そばかす少年はチッと舌を打ち鳴らした。

「独奏じゃねえバンドで音楽をやっていくつもりなら、お前たちはまず仲間を信頼することされること、仲間を気遣った演奏が出来るようになることが先決だな。そのためには、やっぱそれぞれがそれなりの技術をつけねえと。音が狂ってたりトチったりリズムが合っていない仲間の演奏じゃ信頼できねーし、仲間が演奏しやすいようなリードやベースやドラムやキーボードを奏（や）るってことが気遣いだ。トムってヤツがどうするかは俺は知らねーけど、そんなことよりもまず自分らの技術を磨け。このままじゃ他からボーカル連れてきたってすぐに逃げられるのは必至だろうよ？以上！」

と、響は毒舌評を締めくくった。歌ったり喋ったりしたおかげでまた傷口から血が滲み出してガーゼを当てる。

バンドたちはうつむいたまま顔を上げない。おそらく、ここまでの酷評を受けたこともなかったのだろう。いつの間にかロブスターマンやサラまでもが息を飲み込んだように言葉もなくフロアの片隅を見守り、テレビの実況解説が取り残されたように空しい中継をしている。

「そこまで言わなくたって...。みんな拍手してくれたのに...」

と、ベソをかいて酷評に抗議するアンの肩にレイは手をそっと置いた。

「いやいや、このに一ちゃんの言う通りじゃねーか、アンよ？俺には音楽のこたあわかんねーけど、今のはに一ちゃんの歌に助けられた演奏だったと思うぜ？」

ひとりのロブスターマンが言うと、

「んだなあ。トムが歌ってた時よかマシに聴けたのは、このに一ちゃんがべらぼうに上手いからじゃねーか？」

「んだんだ。間違ってもおめーたちが凄かったってんじゃないよ、マーク」

ぶわははは、と酔っ払いの陽気なロブスターマンたちはジョッキを手にしながら大声で笑う。

「...あんた何者だ？」

ムツとした顔を隠さないまま、そばかす少年が響に訊いた。

「俺？俺は元...、」

ピアニスト、と言おうとして飲み込みとっさに、

「...ボーカリスト」

と、答えた。

え？！プロの！？と、そばかす少年が飛び上がった。

「いや。お前たちみたく学生時代に仲間たちとバンドやってたことがあるってだけ。けど絶対音感ってヤツが俺にはあるんで音が言葉みたく聴こえちまうわけだ」

響はツカツカとアンの側に歩み寄りその耳元で、

「君は俺に抵抗しながら弾いてたろ？合わせたくないってのが見え見えだったぜ？」

と、囁いた。

その声はアンの側に立つレイには届いたようだ。言われたアンよりも強くショックを受けたような顔で響を見つめて立ち尽くす。

「さて。じゃあ、俺は出かけるから」

響はトレイを抱きしめたまま突っ立っているサラに向かって行った。

「え？これからお出かけなんですか？」

「ああ。この辺りにピアノ演奏があるようなクラブか喫茶はないかな...？」

響は左指の包帯を解きながら訊いた。サラは響の問いに答えるよりも先に、

「ああ～、それ取っちゃマズイんじゃないですか!？」

と、響に駆け寄った。

「...これやってると探せないんだ」

「探すって何を？」

サラの言葉には答えずに、響は同じことをレイに訊いた。

「酒場でもなんでもいい。ピアノが弾けるところを探してるんだ」

「あんたもしかして...、」

「...そ。バイト探し。日当をもらえるところがいい」

バイト...、とレイは呟いた。

「しばらくここに泊まりながら、町のどこかでバイトしたいと思ってるんだけど...」

響はサラに目をやって確認した。サラは、あんな部屋でよければ...、と呟くように答えた。

「ピアノが弾けなきゃダメなわけ？この町にはそういう洒落た店はないよ？酒場はみんなこのおっちゃんたちみたいな漁師がたむろしてメジャーリーグで盛り上がってるような煩いところばかりだ」

言ったのはそばかす少年だった。

「...やっぱそうか。昼間歩いて何となくそんな気はしてたけど...」

と、響はため息を吐く。

「でも、バイトならあるよ？」

そばかす少年は続けて言った。

「『Fermata』...。ここ...」

答えたのはサラだった。

——え？と響はサラを振り返る。

「...外の貼り紙に気がつきませんでした？手伝ってくれる人をずっと募集してるんです。毎日てんてこまいだし、高校生のこの子たちをBarで使うわけにはいかないし」

使ってるくせに...、とそばかす少年が呟いたと同時に響は外に確認に出た。確かにあった。

もう、ずいぶん前に貼り出されたものらしい変色したバイト募集の広告が、ベージュの壁の色とほとんど同化して目立たなく——。

「気づかなかったぜ...」

貼り紙を見つめながら呟く響の横に店の中から出てきたレイが並んだ。

「あの...、」

レイはもじもじと落ち着かない様子だ。

「ん？」

「ここでバイトしてください。そして...、」

「そして...？」

「ボーカルやってください...！」

なっ！？と響はその場に固まった。目の前でレイはさっきと同じ目で自分を見つめている。

「ちょっと、待て！」

バイトをするのは願ったりだ。だが、それにバンドのボーカルというオマケがつくのは...、

「冗談はやめようぜ、レイ？お前たちいくつだ？俺はもうすぐ23才だぜ？いくらなんでも...」

「俺たちは16才と17才だけど音楽に年なんか関係ないでしょ？さっきのあんたの話を聞いて何となくけど今までとは違ったやる気が出て来たんだ。でも、俺たちだけじゃどうしたらいいかわからない。色々教えて欲しいんだ。音楽のこととかバンドのこととか...他にも色々...」

最後の言葉を濁してレイはうつむいた。中途半端に解けた指の包帯が風に泳いでレイの手に触れた。

ついさっきまで、この包帯を外して傷めた指でいい加減なピアノを弾こうとしていた。音楽への想いなんて何もあやしめない自分がレイたちに教えられることなどあるはずもない。

「レイ、気持ちはわかるけど俺じゃ無理だ」

レイの両肩に手を乗せて響は言った。

「この指は折れててさ、本当はろくに動きもしね一くせに誤魔化してピアノを弾いて金を取ろうとした俺だぜ？純粹に音楽やろうとしてるお前たちに教えられることなんかね一よ...」

「...じゃあ、技術だけでも教えて欲しい！俺たち上手になりたいんだ。上手くならなくちゃダメなんだ！」

潤んだ茶色の瞳で見つめられ、響は返す言葉を持たない。

「レイ」

声に振り向くといつの間にか他のメンバーと一緒にサラが扉をまたいだ向こう側に立っていた。

。

「これはもういいわね」

サラは壁にあった貼り紙を外した。

「面接はオッケーですよ？あとのことはこの子たちと話してくださいね？」

「ちょっと待って！バイトとこいつらの面倒はセットなわけ?!」

ええそうよ？とサラは笑い、貼り紙をくしゃっと丸めてゴミ箱に投げ入れた。ストライク！と客のひとりが笑った。

「妙な展開になっちまったぜ...」

と、ぼやきながら響は店の中に戻った。

「16才と17才？お子様ランチのしょんべんガキじゃねえか...」

——ガキはガキどもと仲良くやってろってか.....。

「コンテストはいつ？」

「来月、28日の感謝祭の日」

あとひと月余り。

期間的には長くもなく短くもなくちょうどいい。これからのことがまったく見えない自分にとってはいい時間つぶしにはなりそうだ。それに、バイトとセットというのが条件なら仕方が無い

。

「...じゃあ契約はそれまでということでボーカルと技術指導を引き受けてやる...」

——まあ...、進退窮まってる者同士、手を取り合うってのも美しいだろ...。

「あ...、ありがとう！」

俺マーク、俺はボブ、と、そばかす少年、ドラム少年は自分の名を紹介した。

「あんたの名は？」

レイが響に訊くと、そうそう宿帳も書いてもらわなきゃならないし！とあっちの方でサラも言った。

響は、

「俺の名は....、」

——俺は....、

「ヒビク...」

と、呟いた。

昨日、サラが脚立に乗って拭いていた天窓は響が手を伸ばして掃除した。

夏以来手を入れていないという客室も、壁から床から家具から全てピカピカに磨き上げ、いつ泊り客がやってきても慌てなくてすむようにしたのは響だ。

「驚いたあ。ヒビク、お掃除上手なのねえ...」

サラは客室をぐるりと見回して目を丸くしている。手に持っている珈琲は、もくもくと掃除に勤しんでいる響のために淹れてきたものだが、それを渡すのも忘れるぐらいに完璧に磨かれた部屋に驚いているようだ。

「あたしが普通にやってもこんなにキレイにはならないのに、ヒビクは右手だけでここまでピカピカにしちゃうなんて...」

「それは普通にやってるからでしょ？俺は頑張ってるから...」

響は包帯の左手に被せていたビニールを外し、サラの手にある珈琲カップを取った。

「これはバイト代から引かれるの？」

「まさかあ！珈琲は飲み放題でいいわよ。お酒は引くけどね！」

はっ、と笑い響はカップに口をつけた。

日当から部屋代と食事代を引いたわずからドルがここで一日働いてもらえるバイト料だ。

仕事は店が開く夕方からでいいということになっているが、初日の今日は朝からサラの掃除を手伝った。おそらくこれからもこんなふうに時間外労働を自然にやらなくてはならない羽目になりそうだ、という予感は大いにある。

レイたちは町のハイスクールに通っているため当然昼間はいないし、ロブスターマンたちも漁に出ている時間だ。店の外、路地裏の界隈も静かで人もほとんど歩いていない。昨日街を歩きながらも感じたことだか、狭い面積の一箇所に街の機能が集約されているわりに人があまりにも少ない。

「ここはアメリカの一番端っこの忘れられたような小さな町でしょ？大学もないし若い人たちのほとんどがハイスクールを卒業したらみんな町を出て行ってしまっ、残るのは漁師を継ぐ子どもたちがほんの少しよ。大人たちはここで生計を立てている街の人と漁師たちしかいないし、よそから来る人もめったにいないから昼間は閑散としてるのよ」

一番近い大きな街までは30マイルほど南下しなければならないらしく、サラは週に一度その街の間屋まで仕入れに行っているらしい。

こんな辺鄙な場所で営まれているこの店は、維持費を差し引いてやっていけているのだろうか、と響は少し心配になった。部屋代食事代を勘定に入れて雇ってもらえたが、もしも日当をまるまる貰っていたとしたら...

「たぶんウチはつぶれちゃったかも！」

と、サラはケラケラ笑った。

「実はあの貼り紙してあったこと、あたしもずっと忘れてたの！あれを貼ったのは3年前の夏。ひとりじゃどうにもならなくて...、」

ふと、サラの表情が翳ったように見えて気になったが、どうやら窓から入る光の加減だったようだ。

「今もてんてこまいけど、マークやレイたちが多少大きくなって手伝ってくれるようになったし、何とか回ってたからすっかりと昨夜まで！」

と、言ったサラはそばかすの顔を明るく輝かせて笑っていた。

「...思い出してもらえてラッキーだったな」

サラの笑顔につられるようにして響も笑った。

「うちもラッキーよ！ヒビクみたいに掃除が得意な人に来てもらえて！あたし、そっち関係全然ダメだから」

それは一昨日案内された部屋を見て一発でわかった。あとで自分の部屋も磨いておこう、と響は思った。

「それから、あの子たちのこともよろしくね！」

「それぞれ！」

響は思い出したように言った。

「あいつらが来るのは夕方からだろ？店が開くのも夕方からだろ？俺、身体ひとつしかないぜ？」

バイトしながらバンドやるなんて出来ないだろ、と響。

「そんなの臨機応変でいいわよ！一応あの子たちの面倒もバイト料に含まれてるってことにしとくから」

サラはあっさりと言ってまたケラケラ笑った。そこまで肩入れするほどのあいつらなのか？と頭に疑問符がたくさんついたが、さすがにそれは言葉には出さなかった。だが、サラは響が珈琲じゃないものを飲み込んだことを見抜いたようで、

「なによ、ヒビク？何か言いたそうだけど？」

と、腰に両手をあて、上目遣いに響の目を見ながら訊いて来た。

「いや？別に何も...」

サラに対する印象は昨日までとはずいぶん違っている。客から従業員になったわけだからサラの自分への扱いがそれなりに変わったのは当然ではあるがそれにしても、だ。

今日はバイト初日で実労働は店が開く夕方から、ということだったはずなのに朝は普通に、
――はいヒビク、これ雑巾ね！

と、天窓拭きからやらされた。その後は、

――ストーブのすす取りもやっというて！

――客室の掃除もまかせたから！

と、アッサリ掃除関係ばかりを命令されてこの時間だ。たぶん、自分の不得意分野を都合よく押し付けたのだろう、とは今気がついたことだ。

――まあ...、拾ってもらった身だから文句は言わないけど...案外小生意気なヤツ...

というのが、今日になって改めたサラの印象だ。

「あれでもあの子たちなりに色々戦ってるのよ」

サラは上目遣いのまま言った。

「...戦ってる？」

「そ。子どもにも子どもなりにいろいろあるのよ。それじゃ、夕方までゆっくりしてていいから！」

サラは空いたカップを響の手から受け取り、小走りに客室を出て行った。

「子どもね...」

自分を大人だと意識しないと出てこない言葉だ。ふらふら迷ってばかりの根無し草に比べたら、若くてもサラのようにしっかりと自分の居場所を確立して生きている人間は確かに大人だろう。

ベイベー。

ガキ。

ボストンでつけられたカザマ・キョウのありがたくもない呼び名だ。

大人だったらどうだったというのだろうか？別れた恋人に想いを馳せることもなく、身を焦がされるようなジェラシーに苦しむこともなく、あいつ以上の結果にこだわる意地もなく、全てのネガティブな感情に囚われることもなく、ただただ己の夢や野望のためだけに生きていけたのだろうか。そして、そういう自分がたどり着いたピアニストはどんな音楽を奏でたのだろうか――。

――やめた。

考えたくない。

激しく首を振って、今まで考えていたことを振り払った。ボストンのこともピアノのことも考えたところでもう何も変わらない。ここにいるのはカザマ・キョウではなくただのヒビクだ。昨夜、レイに名を訊かれ、とっさに口に出たのが「ヒビク」だった。そして、今まで自分をこの名で呼んだのは世界でたったふたりだけだ。

――そうか、だから...。

ヒカルと田村以外の人間に呼ばれたことがないから、サラが自分をそう呼ぶことにどこかで違和感があり、それがサラへの印象の変化にもなったのかもしれない。

店が開くまであと2時間ほどある。これから自分の埃くさい部屋も磨こうかと思ったが、さすがにもう雑巾を見るのも飽きた。

汚れた雑巾をバケツに放り込んでそのまま床に座り込む。たった今ピカピカに磨き上げた床に

はチリひとつ落ちていない。高校時代は掃除サボリの常習犯でいつも女子たちに怒られていたというのに、こんなところで掃除が上手と褒められるとは思ってもいなかった。

最果ての地。限界の町に限界のままたどり着いて驚くほど馴染んでいる。

町に流れ着いた時から、干渉されずに見放されているわけでもない、自分にとって欲しくないものと欲しいものが自然にバランスよく調合されていると言ったらいいのか。

サラは自分が使う従業員について、どこから来たのかとかどんな人間なのかなどといった詳細は一切訊いて来なかった。1日ここに泊まり、ちょっと話をしただけの自分をどこまで信用しているのかはわからないが、未知のヒビクをサラやレイたちは受け入れただけでなく必要としてくれた。ここはピアノを弾かなくても生きていていい場所なのだ。

――ピアノを……、

弾かなくても…――。

もう、あの醜い苦しみを思い出すこともないかもしれない、と窓からの景色を見て響は思った。

このまま、灼け付くほどのジェラシーも絶望も忘れて、穏やかに月日が過ぎ去ってしまえばいい。そして、

「――ヒカル」

目を閉じても閉じなくても心を占めて浮かんでくるヒカルの笑顔も最後の後姿も、思い出さなくなるぐらいに薄れてしまえば…。

――最後の、後姿…。

背筋を伸ばし、肩の上で髪を踊らせ、一度も振り返らずゲートの向こうに吸い込まれるように――。

響は、再び目の前に見えそうになった幻像を形になる前に激しく頭を振ることで拡散させた。

◇

「『ビクトリー』（勝利）ねえ……」

ロボスターマンたちに一通りジョッキやらつまみやらを出し終えた後、指をくわえた赤子のようになっているバンドたちの元に行った響は、そのユニット名を聞いて冷ややかに笑った。

「ずいぶん勇ましい名前がついてるんだなあ？」

ほとんど小馬鹿にしたように言う響に、

「いけないですか?! これでもあたしたち、勝利を掴むために真剣にやってるんです！」

と、やや感情的に大真面目の抗議をしたのはアンだ。

「何の勝利？」

響はひょうひょうと訊き返した。

「そ、それは...色々と...」

「そんなに勝たなきゃならないことがたくさんあるんだ? 大変だなあ？」

響はからかうようにしてアンの顔を覗き込む。アンは顔を赤くして、

「い、色々あるんです! 大人には色々あるんだってあなただって昨夜言ってたじゃないですか!
! こ、子どもにだってあるんですっ！」

と、怒鳴った。

「ふーん。色々ねえ...」

響は意地悪な目をアンに向けてニヤケた。

「まあ、あるだろーね? 高校生ぐらいの`色々、っていったら、誰が好きだとか誰にフラレたとか、そんな微笑ましいことがてんこ盛りにさあ？」

「そそそ、そんなことじゃないもんっ！」

ほとんど遊んでいる。まるで、高校時代にヒカルをからかって遊んでいたように。

真っ赤になって鼻を膨らませて怒って喚いて手をあげて、でも最後は笑う。それがヒカルだったが、

「もう、やっ! あなたなんか、大っキライ！」

と怒鳴るアンは、目に涙をいっぱい溜めて今にも泣き出しそうにベソをかく。

――ヒカルの勇ましさと泣き虫あかねのミックスだな、こりゃ...。

と、響は笑った。

「ヒビクゥ.....」

興奮したアンをよしよしとなだめながら、レイが困ったように抗議の目を響に向けた。

「最初からこれじゃ困るよ。仲間を信じるのが大事だって言ったのはヒビクだぜ？」

「悪い悪い。そうだったな。つつい面白くて...」

「ひ、人を苛めて面白いんですかっ!？」

レイの腕の中からガバッと顔を上げて振り返ったアンが怒鳴った。

そのアクションで、アンの結んだポニーテールが振り回され、ちょうどいいあんばいにレイの頬をバシッとして打った。

いてっ! と顔を抑えるレイに爆笑するマークやボブたち。

「...お前たち、本当はコメディーだろ? な? そうだろ？」

泣くのも怒るのも笑うのもマジメなレイたちが可笑しくもあり懐かしくもありどこかで羨まし

くも思う、体のどこかがうずく想いを感じながら響は素直に込み上げる笑いを抑えることもなく、

「とりあえず、『ビクトリー』はもう少しお預けだな。レベル的に少しマシになるまで『なんちゃってビクトリー』にしとけ！な？」

と、完全に涙を流しているアンのおでこをちよんとつついた。レイ、どうしてこんな人を入れたのよ、と文句を言うアンにレイは、

「今の俺たちに必要な人だって直感したからだよ。頼むから仲良くやって？」

と、アンを一生懸命なだめている。

——必要な人...ね...。こんな俺がか...

レイの意図はわからないがそう言われて悪い気はしない。

「じゃ、客が落ち着いてる今のうちに少しやってみるか」

アンはまだレイに文句の続きを言っているようだが、響はマイクを持った。レイが響にナンバーリストとバンドスコアを手渡すと、

「それ、トムのだよ？」

と、アンはまたもや不満顔だ。

「トムはもう戻ってこないんだからいらねーだろ！」

と、言い捨てたのは、そばかすでサラの弟のマークだ。響はレイからスコアを受け取りエプロンのポケットからペンを出して `Hibiku、と大きく名前を書いてから、アンにそれを見せてニヤリと笑った。

「サイテイ.....」

アンは響を睨み、

「はあ.....」

大きなため息をつくレイの背中を、

「まあ、仲良くやって行こうぜ！」

バシッと音がするぐらいに叩いた響は、そのままドラムのボブに一曲目を始める合図を出した。

そしてバンドはやっぱりド下手だ。

マークもボブもアンもイッパイイッパイの演奏で周囲に気を配る余裕すらない。余裕が無いから自分本位になる。全然周りの音を聴いていないのだ。

まともに演奏ができてるのはレイだけだ。仲間の音を聴き彼らをリードするかのように合わせてようとしている。そして、今自分はそんなレイの音に合わせて歌っている。歌いながらレイに視線を送るとレイはそれを感じて受け止める。そして返って来る。交えるのは視線と音だが、そこに生まれる心の通いがある。

よく知っている空気を肌を感じた。

暴走しそうな仲間たちに気を配り、決してでしゃばらずにさり気なくリードしてくれていた友の空気だ。温かく、信頼できるその空気を肌にして強烈な後ろめたさを感じた――。

「ストップ！！」

響は演奏を途中で止めた。すでに三回目だ。

「またかよ！今、俺バリバリにノってたところだったのに！最後までやらせてよ！」

マークがうんざりしたように文句を垂れる。

「バリバリにノって音外してちゃ意味ねえだろ？マーク、お前はベース歴何年なの？マークだけじゃなく、ボブもアンもいつから自分のパートやってる？」

マークは9ヶ月、ボブは1年、アンも1年だと答えた。

「それは、楽器を初めて触ったって意味で？」

頷く全員に響はため息を吐く。

「初心者ってことね…。でもまあ、それにしても上出来ってとこだぜ？俺たちなんか形になるまで2年はかかったからな」

「俺たち？」

レイがすかさず突っ込んだ。

「あ…、昔やってたバンドのこと。中学の時から始めてその時は練習する場所もなくってさ。高校になって音楽室が練習場になるまでそりゃメタメタだったぜ。パートも揃ってなかったしさ。だから、お前らみたくこーやって練習する場所があるってのはラッキーだ。けど、いきなり合わせりゃいいってもんじゃないぜ？お前ら集まってここでやってるだけでパー練してないだろ？」

パー練ってなんだ？とマークがレイやボブの顔を交互に見比べると、レイが各自が自分のパートを個人的に練習するってことだよ、と教えた。

「だってひとりでやったってつまんねーじゃん！みんながいるから楽しいんだし」

と、マークは口を尖らせる。

「みんながいるから…、確かにそうだ」

仲間がいるからバンドは楽しい。苦も楽も分かち合える仲間たちと…。

「…でも、それはもう少し後の話だ。見えないところでの練習も大事なんだぜ？レイはたぶんそれをやってる。よな？」

レイが頷くと、お前いつの間に！とマークが喚く。

「独奏とバンドじゃ醍醐味は全然違う。けど、基本はやっぱり個人個人のレッスンだと俺は思うぜ？お前らしばらく分かれてパート練習に打ち込んどけ。1週間もやりゃ、まあ少しはマシになるだろう。そしたらもっと楽しくなるはずだぜ？」

響はマークの肩を叩き、そのまま、お前とボブはここ、レイとアンはあっち、とそれぞれセットにしてフロアの端と端に分けた。

「サラ、こっちの隅も借りていい？」

アンとレイを客席に近い二階に上がる階段下の、物置になっている空間に移動させて響はサラ

に確認をした。

「どこでも何でもかまわないわよ！それよりヒビク、こっち手伝って！」

再び活気づいてきたフロアをひとりで走り回っているサラからは、そんなことはどうでもいいから、というような返事が返ってきた。

「.....ということなんで、お前らはこっちとあっちで練習してて。相手の音をよく聴くってこと忘れるなよ」

響はレイたちに指示を出し、サラの言いつけどおりフロアの仕事に戻った。

そして、手が空くとあっちとこっちを行き来してレイやマークたちの音に合わせて歌を入れ、夜も10時になる頃にレイたちは帰り、他の店から流れてきた客と、もともとの客の入れ替えがあり、新たな客で新たな大騒ぎがあり、最後の客が帰ったのは午前零時を過ぎてからだった。

看板の明かりを落とした直後、響はカウンターの椅子になだれ込んだ。

「あら、ヒビク。若いのにだらしないなあ！」

と、サラ。

「若いのに、って何...？」

「ヒビク、もうすぐ23才だって言ってたじゃない？ってことは今はまだ22才なんでしょ？思ったより若くてびっくりしたよ？」

「...はあ？」

びっくりされてしまうほど、いったい何才ぐらいに見られてたんだよ、と反論したかったがそれすらも面倒だった。

バイト初日で12時間以上の実労働だった響は、足も腕も、もう1センチだって動かせないほどに疲労しきっている。とりわけ午前中の掃除に使った体力がこたえているらしい。

「はい、一本どうぞ？」

サラは冷えたバドワイザーをグラスとともに差し出してくれた。響はそれを手にしてプルトップを引こうとしたが確か...

「...酒はバイト代から引かれるんだったよな？」

「ええ、そうよ？」

プルトップをつまんでいた指をそっと離し、響は無言でバドワイザーをサラに差し戻した。

「いい...。酒飲むと1秒後にはこのままここで寝ちまいそうだし...」

あらまあ、と言いながらサラは一旦出したバドワイザーをご丁寧に冷蔵庫にしまった。それを横目で見ながら響は、時間外労働のお手当てにサービスよ、と言ってくれるかと期待してたのにシビアな主人だ、と半ば呆れた。やっぱり最初にサラに持ったチャーミングという印象は間違っていたようだ。

「けど、分けて練習させるなんてよく思いついたね。今までずっとあの調子でやってたあの子たちだけど、なんか音が合わさってないなあって思ったたのよね。最初からいっぺんにやるんじゃなくて分かれて練習すればよかったのよね。そういうこともきっと思いつけなかったんだろうけど」

と、言いながらサラはカウンターの中からフロアに出て、レイとアンの当面の練習場になる階段下のスペースを広く空けるために、積んであるビールケースを端に移動させた。主人が動いているのに従業員がへたり込んでいるわけにもいかず、響も仕方なく立ち上がった。

「俺はただ自分がやってたやり方をあいつらにも当てはめてるだけ。バンドは学生時代にやってただけだし、自分らがやったやり方しか知らない」

音楽室の隅と隅で組になったパートが各々のパー練をする、というのは約一名の素晴らしく音痴なマラカス奏者を特訓するために必然的に展開されたフォーメーションだった。その方法はブックキャスルには効果的であった、というだけのことだ。

サラは響が持とうとしたビールケースに横から手を出し、こんな重いのも持ちやダメ、指治らなくなるよ、と自分で持ち上げながら、

「あの子たちはそれこそ何をどうやったらいいのかもわからないんだもの、ここでヒビクに出会えたことは大きいと思うわよ。そういうことを教えてくれる先輩も大人もいないわけだから」

と、お腹に力の入った声で言う。

さんざん雑巾がけやら窓拭きをやってるのだから何をしても同じだ、と響は別のケースに手をかけ、

「...だから、俺はヤツらに教えてやれるものなんて何もないよ。バイトとセットってんならやるしかないし...、酒場でバイトしてるんだからビールケースぐらい持てなきゃしょーがないってのと一緒」

と、ビールケースを持ち上げた。

「ああ、ダメダメ！」

サラは響の手からケースを奪い取った。

「ヒビクのその怪我を承知であたしは雇ったのよ？雑巾がけも窓拭きも左手には負担かからないでしょ？でも、これはダメよ。これでもあたし、考えて仕事振ってるんだからね！」

「...だってそれじゃ、俺にとって都合がよすぎるぜ？」

「そうかなあ？ペンキの塗り替えとか電球の付け替えとか表の看板のくもの巣取りとか、右手を酷使してもらう仕事はいっぱいあるんだけど？」

「ペンキ塗り？！くもの巣取り！？」

業者に頼むと高いのよね～、とサラはわざとらしく笑う。

「それに、あの子たちがまともに演奏するの聴きたいし。そしたらここ、ライブハウスみたいになるじゃない？」

「...あいつらの演奏がそこまでなるのに何年かかるかねえ...」

「何年かかってもいいよ...。ここでまた、音楽が奏でられれば...」

――また...？

.....とはどういうことだろう？

ふと、フロアの隅の持ち主不明なサククスに目が行った。

「あのサククスは...、」

という自分の声に、

「明日はあたし、朝から仕入れに出かけるから朝食はサンドイッチを冷蔵庫に入れとくね？」

というサラの言葉が完全に重なってしまった。

「ああ。わかった」

「また適当に掃除してもらえるとうれしいなあ。厨房の中の油取りとか...」

サラはカウンターの指を指差して笑う。

「.....わかった。できる限りやとく...」

と、響はため息。

「それじゃ今夜はもういいよ？お疲れさまね！」

サラの声に送られて、響はそのまま二階の自室に上がった。

一旦ベッドに転がると、もしも今ここで天災が起こっても起き上がれないだろうと思うぐらいに体は疲労していた。だが、気持ちはいつになく穏やかで、このまま目を瞑れば安らかな眠りにつくことが出来そうだ。

「埃とススだらけなんだよな、俺...」

でも。

シャワーは明日の朝でいい。

今夜はこの穏やかな気持ちのまま眠りたい。

余計なことを考える前に。

ヒカルの幻が見える前に――。

ゆっくりと目を閉じる。

1秒、2秒と意識が遠くなっていく間に頭の中では、今日見たもの喋ったこと感じたことが断片的に蘇る。その中に鈍い光を放つ金色のサククスも見えた。

『Fermata』での1日は慌しさに押されるように終わっていく。そんな日々が1週間ほど過ぎた。

月に二回あるらしい定休日の今日もサラは週に一度の仕入れ日で、早朝から30マイル離れた町まで出かけて行った。行き際にしっかりと、扉のペンキの塗り替えを響に言いつけて。

この1週間の間に看板のくもの巣取り、厨房の壁にこびりついた油除去掃除、磨り減った床のワックスかけなどを店の営業時間外、即ち労働時間外にやって来た。

「この町で一番忙しいのはたぶん俺だな...」

閑散とした路地裏の木枯らしが吹きだまる一角で、ひたすら刷毛を上下に動かしながら響はぼやいた。のんびりと時間が流れていく町の風情に自分がかみ合っていないと感じるのは決して気のせいではないだろう。冷たい空気に手はかじかみ、刷毛を持つ手も上手いこと動かない。ペンキはすぐにムラになるから同じところを何度も塗りなおし、ずいぶん厚みが増した気がする扉だが仕方がない。

「だいたい俺にやらせるのがマチガイだぜ。ペンキなんて塗ったことねーんだから...」

次の定休日はきっとフロアの壁の塗り替えをするとサラは言い出すだろう。その時は迷わず業者に頼むことを勧めようと心に誓っていると、

「今日はペンキ屋なんだ」

背後から声をかけてきたのは学校帰りのレイだった。

「よお、レイ...」

無然としたまま響は返事を返した。

「ペンキ屋磨き屋何でも来いだ。そのうち煙突掃除屋にもなるかもしれないぜ？」

「それありえるね...。サラはまだ帰ってないの？」

「ああ。朝早くから出て行ったけどまだ来ないねえ...」

響は「朝早くから、」を強調して言いながら腕の時計を見た。そろそろ4時になるところだ。

「まあ、田舎もんの若い娘がたまに大きな街に出ればそう簡単には帰って来ねえよな」

「あはは。そうだね。そう言えば定休日に仕入れに出かけるときはいつも遅いよ。そして帰ってきたあとはものすごくゴキゲンなんだ。いつもはケチってコーラー一本出してくれないのに奢ってくれたりしてさ」

あっそう...、と響は最後のひと塗りを終えた刷毛をペンキ缶に放り込み、塗ったばかりのペンキに触れないように注意しながら扉の取っ手を開いた。

「じゃ、今日はビールが出てくるかなあ」

「たぶん出てくると思うよ」

きっと彼氏とデートでもして来るんだよ、とレイが笑うと、遠距離恋愛はムズカシイぜ、と響は冷たく水をさした。

「あ、ヒビク、経験者なんだ？」

「まあね.....。——ってというか、そうじゃなくて...！例えばの話！」

「...ふーん。何か実感もってるように聴こえたけど、まあいいや」

ニヤニヤ笑うレイに顔を背けながら響は、

「マークたちは一緒じゃないのか？」

と、話を強引に変えた。

「アンは一緒に帰ってきたからそろそろ来ると思うけど、マークとボブは生徒会の仕事をしてくるから今日はちょっと遅くなる」

「生徒会？」

ペンキと刷毛を物入れに押し込めた後、響は石油ストーブに火を入れた。レイはストーブの側に足踏みをしながら立ち、まだ点ったばかりで温まっていない火にかじかんだ両手をかざす。

「今度のフェスティバルの実行委員なんだよ、マークとボブ」

「フェスティバルってのは町の行事じゃないの？」

「そうなんだけど、主催してるのはハイスクール。今年は郡内の4校が合同で仕切るんだ」

「なんだかよくわかんねーけど...」

と言いながら響はさっきペンキ塗りの最中に配達されて、そのままテーブルの上に放置されていた備品たちを手にしてフロアをふらふらする。レイは響の手から行き先不明のリネンを取り、

「これはこっちにしまうんだ」

と、階段を上った突き当たりの収納棚を開けた。

「ここは客室で使うシーツや枕カバーを入れておくところ。客用のはぶらしや髭剃りもここにあるよ」

それからレイは、Barの備品はこっちに...、とカウンター後ろの棚や勝手口脇の収納庫に手際よく分類したものを収めた。

「ここ、お前んち...？」

あまりの手際の鮮やかさに響は半ば呆れた。下手すりゃ、あれ？どこにしまったっけ？とよく探し物をしているサラよりもよくわかっている。

「だって、ヒビクが来るまでは今ヒビクがやってること全部俺がやってたんだもん」

「ああ、確かそうだったな」

ここに来た初日もサラは弟のマークではなくレイに用事を言いつけていた。ちょっと店お願い、と練習中のレイに当たり前のように頼んでいたサラだが、それはまるで、自分に仕事を言いつける時のものと同じだったということに響は気がついた。それに反論もせず素直に応じていたレイも今の自分と同じだった。

「バイト料請求したか？」

「そんなことできるわけないじゃん。無料奉仕だよ」

「そーだよな、やっぱり...。サラってさ、人使いかなりあらいよな...？」

あはは、とレイは笑った。

「そうだね。サラの用事優先して宿題が出来なかったとか結構あったなあ。でも、チビの頃から色々面倒見てくれたしマークのねえちゃんだし逆らえない」

「マークより頼りにされてるっぽいもんな、お前」

弟のマークをこき使う、というなら話は分かるが、サラがマークに用事を言いつけているところは今のところ見たことがない。

「サラの話によると、チビの頃は俺が一番サラになつてたんだって。だからサラはマークよりも俺を可愛がって育ててくれたみたい」

「無料奉仕大歓迎！なレイくんは育てられちゃったわけね。迷惑な話だなあ？」

レイは、そんなこと...は...ないよ...?と苦笑し、俺もレイと同じ扱いだから時間外労働当たり前ってわけなのね...、と響は呟きながら`飲み放題オッケー、の珈琲を淹れた。レイも飲むか?と訊くと、いい、と首を振る。タダなんだから飲めよ、と勧めたが、

「珈琲は苦くてダメ。どうせならコーラの方がいい」

と、言うレイには思わず吹き出した。

「珈琲は苦いか？」

「角砂糖5個ぐらいとたっぷりのミルクを入れれば飲めなくはないけど...」

アメリカ人のくせに珈琲飲めねえのかよ、と響はレイにコーラを出した。

「レイはいくつ？この間16才と17才だって言ってたけど、誰がどうっていうの、そう言えば全然聞いてなかったな」

「俺は17才。マークとボブとアンは一級下の16才。でも俺たちみんな、トムも...幼馴染なんだ」

「トムってのは、この間のあいつか？」

「そう。もともとは俺とトムがふたりで組んでやってたんだ。そこにアンが入ってきたのが半年ぐらい前で、マークとボブはその後に仲間になった。『ビクトリー』はフェスティバルでバンドコンテストが開催されるって決まってから今のメンバーで結成したんだ。トムは抜けちゃったけどね...」

「なに？じゃあお前らはコンテストに出場するためにバンドを結成したってわけ？」

「...うん」

あっそう...、と響。

「コンテストに向けて一から、まっさらなところからスタートしたのが『ビクトリー』...」

「まっさらな...？」

――ここで一から、まっさらな俺からのスタートを切り出すこと。

いつかの己自身の決意の言葉が蘇り、ヒビクはここで夢を叶えてと言ったヒカルが残した後姿が目の前にチラついた。

「何のためにコンテストに出る...？」

まっさらなところからスタートは、何を意味するのか。

「俺たちの勝負のため」

レイは大真面目に答えた。

――勝負。

思い出したくない想いが胸の奥から喉元まで突き上げてきて、それを沈めるために珈琲をぐくと飲み込み、

「まあ、がんばれよ」

と、一方的に話を締めくくった。レイたちの事情は自分には関わりのないことだ。自分の役目はただ、バイトの一環としてレイたちの技術レベルをアップさせ、コンテストで歌ってやること。それだけだ。

レイから視線を外し、サラ遅いな、と関係ないことを口にしながら珈琲を飲み終えた時、レイが言った。

「ヒビクはどんな音楽をやってるの？」

レイは自分をずっと見つめていたらしい。視線を戻したときに目が合った。

「...お前らみたく学校の仲間と組んだバンドだよ。オリジナルもやってたし、ライブの時はコピーもやったし。『デンジャー・ゾーン』もレパートリーだった」

現在進行形で問われたことにあえて過去形で答えた。だが、レイは質問形態を間違えたようではなかったらしく、

「今も音楽をやってるんでしょ？」

と、正しい答えを求めて来る。響は悟られないように小さなため息を吐き、

「今は...『なんちゃってビクトリー』でボーカルやってます」

と、冗談交じりに返した。今度はレイが小さなため息を吐き、そうだよ、と呟いた。

レイはそれ以上の詮索をして来るつもりはないようだ。フロアも暖まったのでストーブの側を離れ、自分のポジションで楽器のスタンバイを始めた。そんなレイを響はぼんやりと見つめる。

ビクトリーというユニット名がつけられたバンドで、レイたちはコンテストに出場することが何かの勝負を意味しているらしい。

田舎町ののんびり暮らす高校生たちがどんな勝負に挑んでいるのかなんて想像もつかないが、彼らは自分たちの志す目標に向かって大真面目に音楽をやっているのだろう。かつての自分が、己自身を音楽で磨きたいとピアニストを目指した時のように、幼く純粋な想いひとつで。

チューナーを使いながら一生懸命音合わせをするレイの仕草が目にも痛い。

音楽に真面目に取り組むレイの姿勢が心に痛い。

それなのに気がつくといつもレイに見入ってしまっている。焦りと安堵が同座する不思議な思いに駆られ、その感情の居心地がいい。

「そういえば、あのサクスは誰が吹くんだ？ずっとあそこにあるよな？」

レイからフロアの片隅にあるサクスに視線を移して、響は訊いた。誰かが触ってるところを見たことはないが、ちゃんと磨かれているようだ。サクスはいつも輝いている。

「あれはたぶん、前にここで働いていた人のだと思うよ。ずっとあそこにあるから気にしてなかったけど」

「ここで働いてた人？」

「うん。俺たちがガキの頃からいた人。その人がよくサクス吹いてた。何年か前にいなくな

「っちゃったけどサラに訊けばわかるんじゃない？」

「まあ、別にどうでもいいことだから...」

ただ、初めて見たときから持ち主不明のサックスが存在感を持ち、あの場所で何かを訴えているような気がするだけだ。もちろんそれは気のせいに決まっている。どうしてなのか頭の片隅にあれが住み着いている、というだけで。

「その人、どんなサックスを吹いてたんだろう？」

「...さあ。俺は覚えてないけど、それもサラに訊けばわかるんじゃない？」

「いや別に...、どうでもいいことだから」

どうでもいいことなのに気になってるんでしょ？とレイに突っ込まれて響は否定も肯定もせずに片隅のサックスをただ見つめる。

「ヒビクってさ、やっぱりフツーの人じゃないよね？」

レイは独り言のように言い、パート練習にとりかかった。レイの独り言は聞こえなかったことにした。

そのうちにアンがやって来た。

定休日の今日は客も来ないからじっくりと響を独り占めして練習ができるぞ、とレイは力が入っている。パートに分かれて練習して1週間が過ぎたから今日はみんなで合わせてやってみたいとレイは言うがマークたちはまだ来ない。

「それじゃ、ヤツらが来るまでレイとアンの1週間の成果を聴かせてもらうかな」

アンは仏頂面のまま無言でスコアを開きキーボードの前に座った。レイとアイコンタクトを取り演奏が始まると、確かに1週間前よりもずいぶんと上達したようだ。技術的にアンが取れない音はレイのギターがカバーしている。違う楽器を奏でながらもアンの側にピッタリと寄り添ったレイが、アンが安全にたどれる道しるべを作っている、そんな演奏だった。

だが、そこに響が歌を重ねるとたちまちの流れは崩れ、アンはめちゃくちゃになる。まるで、それまでリンクを流れるように優美にスケーティングしていたペアが、目の前を下手くそなスケーターに横切られて転んでボロボロになってしまうようなイメージが響の頭を駆けた。

「...ストップ...」

響が演奏を止めると、アンはギロリと響を睨んだ。アン...、と小声でたしなめようとするレイにもアンはキツとした目を向ける。演奏が止んだフロアに気まずい空気が漂った。

「おかしいな...。どこで合わなくなっちゃうんだろう」

レイが首をかしげると、

「だって、ヒビクの歌だと弾きにくいんだもん」

アンがつっけんどんな言い方をした。

「ア、アン...っ！」

慌てるレイを響は制した。

「まあいいさ。とりあえずマークたちが来るまでふたりでやってて。俺は上で休んでるから」

「上で休んでるって？」

レイが心配気な顔をする。

「気を使わねーでいいよ。ペンキ塗りから休んでないからちょっと休憩するだけ。マークたちが来たら呼んで」

「わかった」

そのまま階段を上り、響は自室に戻ってベッドに転がった。真下では演奏が再開される代わりに、レイとアンが喋る声が聴こえるが何を話しているかまではわからない。たぶん、レイがアンにも気を使いなだめているのだろう。

「まったく…。愛しいヤツだぜ…」

――俺の歌じゃ弾きにくい…か…。

はは、と笑いが込み上げる。確かにそうだろう。アンに対して何も思っていない歌だし、アンだけじゃなくレイたちにだってそうだ。自分はただ頼まれたことをやっているだけで、教えることにも歌にも音楽にも心なんて何も入っちゃいない。初心者で自らの機転が出来ないからこそ敏感に感じ取るアンは、だからレイのギターには響くわけだ。

――心か…。

それでも、ありふれたその言葉を拒絶したい自分がある。それなのにレイたちには相手を思いやる演奏をしろなどともっともな講釈を垂れ、今まさにそれを教えているところだ。ふたり一組のペアにして相手の音を聴かせ、互いに思いあう演奏をさせて。それで仕上がったレイとアンを、自分の歌がぶち壊してるわけだから意味がない。

まるで、ボストンの繰り返しだ。求められるままのピアノをただ弾いて、己の心は行方不明。結局見つけることが出来ずに今、ここに居る。

心が自ら入っていかない。どこか自分で自分の袖を引いているのだ。

「田村あ…。お前ならどーするよ…」

思わず言葉に出て来た友の名に、自分自身で驚いた。

今さら何を友に頼る――？

第一田村なら何をどうするかなんて知れている。人を思う、これだけだ。音楽でもそうでなくとも。

そんなことを考えながら、いつの間にかうたた寝をしていたらしい。気がつくと、下からはドラムもベースも鳴る音が聴こえていた。

階下に下りると、階段下に分けられていたレイとアンは元の場所に自分たちの楽器を移してマークたちと合わせて演奏をしていた。それぞれのパート練習をみっちりやってきた成果は十分に聴こえるように聴こえた。レイたちの顔も、さっきまで仏頂面だったアンの顔さえも輝いて見

える。眩しいぐらいに――。

ヒビク！と、ちょうど演奏が終わったレイに声をかけられた時、
「なあに？この扉！」

扉が勢いよく開き、両手に荷物を抱えたサラが入って来た。扉の真正面の階段に座り込んでいた響はサラとまともに目が合った。

「...おかえり」

とりあえず声をかけてゆっくりと立ち上がり、
「お気に召しません...よね、やっぱり...」

と、頭をかく。言い訳をする子どものような気分だった。
「ムラになってるし液垂れしてるし...お化け屋敷の扉みたいだわ」

サラは早足でカウンターまで歩いてきて、手に持っていた荷物をドサリと下ろした。
「お化け屋敷...ですか...」

外に出て自分が塗った扉を改めて確認し、確かにな...、と思った。
「何度も塗りなおしたんだけどなあ...」

寒空の下、手をかじかませながら頑張る。
「刷毛が古かったのかも。明日ローラーでもう一回上塗りしてくれる？この、ダラッと垂れてるところなんか特に」

サラはペンキが垂れた雫の形のまま固まっているところをわざとらしく指でこすりながら言った。

「...りょうかい...」

明日もまた当たり前の時間外労働ね...、とは心の中で呟く。

「ヒビク、お掃除は上手だけどペンキ塗りはド下手だったのねー」

ケラケラ笑うサラに、可愛くねえヤツ...、と、響は口には出さずに呟いた。

「やっぱ塗りなおし？これ、笑っちゃったもんなあ」

と言いながら、マークもあっちからやって来た。

「ヒビク、一生懸命塗ったんだろなあって思ったから俺は笑わなかったけど...」

ボブも顔を歪めながら言う。その横ではアンが、ヒビクにもド下手なものがあつたんだー、と「ド下手」を強調しながら小馬鹿にしたような含み笑いを浮かべている。

――ガキに思いっきりバカにされてるじゃん、俺...。

さっきのアン以上の仏頂面をした響に、

「まあいいよ。寒い中ご苦労さま！今日はあたしが奢っちゃうから好きなの飲んでね」

と、サラが言ったので、思わずレイと顔を見合わせて笑った。

「何？どうしたの？」

「いや？機嫌いいなあ...と思って」

「やだ！別に普通だよ？」

サラは少しうろたえたように、それでもどこかで嬉しそうに、さっきカウンターに下ろした荷物をパッパと収めるべき場所に整理しながら、

「やっと...、夢が叶いそうなの...」

と、肩をすぼめて笑った。

「夢...?」

サラは首を振り、レイたちも好きなの飲んでいいよー、と言ってから忙しそうに奥の住居に入って行った。

「サラの夢ってなに？」

冷蔵庫に群がるレイたちに訊いてみたが、みんな揃って、さあ？と首を傾げる。

「夢ね...」

響は呟き、レイが冷蔵庫から出してくれたビールの缶を開けた。

町は粉雪が踊りはじめ、あと数日もすれば銀世界になる。変わらない毎日が穏やかに過ぎていく中で、バンドたちもレイを真ん中にして日に日にまとまりが出てきた。

もちろん音に関して響的に許せない妥協、例えば難しいコードを簡素化して弾いてしまうようなことはあたりはする。

「音には命があるって思えよ？妥協するってことはその命を軽く見て通り過ぎるってことだぜ？技術が伴わないならひたすらそれが出来るようになるまで練習するしかない」

ふと気がつく、まるで高校時代に田村たちに言っていたようなことをその時の気持ちのまま喋っている自分に驚く。

――まったく、他のことにはいい加減なくせに音楽に関しちゃ完璧を追うからなあ、風間は…。

とは、よく双子の兄弟に言われた台詞だ。

音に妥協が出来なかったのは、ひとつのメロディを生きた言葉だと考えていたからだった。物心がついたころから、内にあるものを外に出したいときはいつも音符にしてきた。喜怒哀楽の感情全て、言葉にするよりもメロディにした方が早かったからメロディが言葉の代わりだった。

言葉よりも大切なもの――。

だからなのか、音をいい加減に扱うことは意識の上でも無意識の中でも一番のタブーだった。それを、田村や仲間たちは音を介して理解してくれていた。言葉がなくても伝わるものが音楽であるならその通り。彼らは風間響の言葉を音楽からキャッチしていた。そして自分もまた、仲間の鳴らす音からその時の友の状態を察知した。迷っていたり行き詰っていたり、言葉にはしなくても伝わってくる仲間たちの想いを音の渦の中で感じ取りまた音の中に返す。

フィーリング――。

意識しなくても分るもの、肌で感じて吸収できる想い。

あ、うんの呼吸、と仲間の誰かがよく言っていたが、音楽が間になかったら、はたしてあの頃の自分は仲間たちを思えただろうか。

純粹に。

ただまっさらな想いだけで音楽をやっていた。

今のレイたちのように、ひとつひとつ出来上がっていくことに悦びを感じ、仲間がここにいるその時間を共有できることがきっと何よりも楽しかったはずだ。

そして、そのまっさらな想いひとつで出来上がったのが『Shine』。

好きで好きで好きで…たまらなかったヒカルへの言葉に出来ない想いを、ひとつひとつ長い時間をかけて音符にして。

ヒカルをただ見つめているだけで自然とメロディが浮かんだ。それはいつも違ったメロディだ

った。気がついてみると膨大なフレーズになっていたそれらをひとつも余したくなかったから、出来上がるのにあんなに時間がかかった。

半年という時間をかけてひとつに繋がった『Shine』を、その時の想いのままで弾いたのはニューヨーク芸術祭と....

——...いや、芸術祭だけだったな。

精一杯の愛を指先に込めて弾いたのは芸術祭の時だけ。

客席に見えた幻のヒカルに心から己の全てを捧げたかったあの時は、まっさらな思いしかなかった。

だが、本物のヒカルを目の前にして弾いた時に己心にあったのは....

——欲望...のみ....

その後、最近まで毎夜弾いていた『Shine』の中には何も無い。

いや、『Shine』だけじゃなく、全ての曲、演奏、音楽が不純だらけ。いい加減が己のタブーであったことさえも忘れ、いい加減極まりない音楽をやっていた。そのままを `これからのカザマ・キョウ、にするつもりだった。

「音に命、か...。音楽って深いなあ...」

マークが感心したように呟いた。

「そんなこと、考えたこともなかったぜ」

「でも、音楽は世界共通、言葉が通じない相手とでも心を通い合わせられるものだろ？命があって当然だって気がする」

レイは響に同意を求めるような視線をよこす。

今彼らに音は命だと唱えたのはいつの間にか過去に逆戻りしている `ヒビク、で、現実に戻ると己の口から出た言葉にしらけている。

考えてみれば、昔から口に出す言葉は不真面目であったり虚偽であったりチャカしたり、真実ではないことばかりだった。音楽がなければ風間響という人間はそんなヤツ。

だが、音楽があれば.....。

「だから大事に扱わないとなんないんだな、ヒビク？命だから！」

「ああ、そうだ...」

そう言って響は無意識にレイやマークたちから顔を背けていた。

顔色を輝かせて自分のアドバイスを素直に聞くレイたちは、教えられたことを仲間同士で話し

合いひとつの音を作っていく。譜面にある平面のスコアに自分たちで命を吹き込んでいく醍醐味を彼らはこの数日で知ったようだ。

バンドの演奏に干渉せずと同じ空間で自分たちの時間を騒いでいる客たちも、いつかの「トップガン」のように知っている曲が演奏される時は野球観戦を放って音楽に乗ってくるようになり、

「ライブハウスみたい...！」

と、サラは目を丸くして嬉しそうに言った。

「俺たちってすげえじゃん!？」

と、いつかと同じ叫び声を上げたのはマークだ。以前はそれに響がすかさずダメ出しをしたが、今は、その強気な言葉に異を唱えるものはいない。彼らなりに手ごたえを感じているのだろう。その感触が響にも伝わって来る。

「スティーブたちのバンドなんて屁でもねーぜ！コンテストは俺たちとヒビクで盛り上げてやる！」

その自信と凶々しさはマイナスにはならないだろう、と響は密かに思う。今はそうやって怖いもの無しに突き進むのがいい。そのままを受け止めて一緒に歩んでくれる仲間たちが傍にいるのだから。

「まあまあマシになってきたぜ？『なんちゃってビクトリー』から『一応ビクトリー』ぐらいまでは上達したんじゃないか？」

響はマークの肩をポンと叩いて笑った。まだ『一応』がつくのかよ、とマークはやや不満そうだ。

「ド下手が一応になったんだぜ？素直に喜べ！音楽は楽しむもんだ」

「そんなの、言われなくたってわかってるって！」

マークはそばかすだらけの鼻を指で、へへん、とすすする。

音楽は楽しむもの――。

また過去のままの自分が言って、現在の自分が苦しくなりふとマークから顔を背けた視線の先でサククスが今日も鈍く光っていた。

「あのサククス...、誰が吹くんだ？」

ちょうど、傍に来たサラに何気なく訊いてみた。いつも気になっているわけじゃないが、こうやって心に留まるとその光から目が離せなくなる持ち主不明のサククス。かつては誰がどんな音を響かせていたのだろう――。

「あ、あれはね...、」

サラが、やや頬を明るくして答えようとした時、あっちの方で客がサラを呼んだので、はい、と元気のいい返事と共に、サラはそのまま客の下に走って行ってしまった。

――やれやれ...。

また、訊きそびれた。

響の頭の中で、あのサクスが誰かによって奏でられるイメージが浮かんだ時、たまたま視界の中にいたアンと目が合った。

アンはおもむろにフン、と顔を背けた。最初にかかったことを未だに根に持っているのか、他に理由があるのか、アンは態度はずっと響に対して反抗的だ。

それは音にも顕著でブレイクしたりリットしたり、ボーカルと演奏との微妙な呼吸に影響が出ている。キーボードだけフィーリングが合わない、といってもいい。

アンはヒビクの歌じゃ弾きづらいとハッキリと言っているが、それは、からかい以前からのことだった。最初に『デンジャー・ゾーン』を演奏させ、合わせて歌ったときからアンは響の歌を拒絶していた。

――参ったな…。

目が合うたびに鋭い睨みをきかしてくるアンに、響は苦笑いを返すしかなかった。

ふとレイに視線を向けると、レイの目はアンに向いていた。その視線に中から溢れている温かさを見て、また時間が巻き戻されていった。

◇

――いけない！バジルが切れてたのすっかり忘れてた！ヒビク、ちょっと買ってきてちょうだい！

さっきまで降っていた粉雪が止んだ11月の夕方。いつものようにサラに言いつけられて、響はメインストリートまで使いに出た。

それも、ちょうど飲み放題の珈琲を淹れ、さて口をつけようか、というタイミングの時にだ。「まあ、サラに拾ってもらわなかったら今頃骨と皮になってただろーからしょーがねーけどさ…。俺の労働時間はまだだっけの、わかってないのかねえ？セットだからって16、17才のしょんべんガキの面倒まで押し付けるし…。珈琲は淹れたばかりだったんだぜ？帰る頃には冷めちゃうだろ。いくら飲み放題だって言ったって、これでもずいぶん遠慮してるってのにさあ…」

ぶつぶつ独り言を言いながら街のマーケットでバジルを買った後、ふと目にした通りのマガジンコーナーにボストンのタウン誌があった。

ずいぶん迷った挙句、手にとって開いてみると、

――墮ちた新星 カザマ・キョウー――

…の見出しが見ついた記事が目に入った。

カザマ・キョウがボストンから消えて20日。依然消息はわからない。
彼の事務所はこの件について沈黙を守ったままである。

カザマ・キョウをよく知る関係者の話によると、彼の恋人H. A嬢が帰国した8月以降、自暴自棄な言動がしばしば見られたという。

奇妙なことに、これは彼がアパートの自室で指を骨折した時期とほぼ一致している。
彼ほどの思慮深い男が、たかがガールフレンドと別れた程度で自棄になったということなのか？
母親を見失った子どものように、泣きじゃくって自室で暴れていたとでもいうのか？
真相は当の本人にしか分らない。

理由はどうあれ「ピアニストとしてあるまじきこと」とは前述の関係者のコメントだ。

いずれにせよ新星は輝く前に墮ちたと言わざるをえない。

ジャック・ベリー隠し子発覚から半年足らず、ニューヨーク芸術祭で光り輝いた『Shine』も流れ星の輝きにすぎなかったということか。

これからのカザマ・キョウを期待していたボストンの音楽人たちは、願いを唱える前に消え去ったこの流れ星に苦い思いをかみしめている。

記事はまだ数ページに渡って書き連ねられてあったが、響はページを閉じた。

書いた記者はおそらくジェームスだ。雑誌はBTM社のものだった。

「俺をよく知る関係者ってのはあんた自身だろ...」

しばらく考えずに忘れたふりをしていた心の淀みが沸々と浮き上がって来た。どこに逃れても自分が残した結果はどこまでもついてくる。捏造記事を書かれること、スキャンダルになることだけですむならまだいいが、己の心に溜まった淀みは一時沈みはしても消えはしない――。

「ジャック...」

何も告げず、ボストンを去った自分を父はどう思っているだろうか。

優しい眼差しの奥に深い失望と哀しみを宿した父の顔が浮かんだ。

――これでいいのかな、キョウ？

ラベンダーが薫る中で父が言った言葉が蘇る。どんなことにも結果はあり、良くも悪くもくもその結果の受け止め方が人生の勝負だと言った父。

――これで....

「……いいのか、俺...？」

雑誌を手にしたまま、ぽつりと呟いた時だ。

「ヒビク！」

背後から声をかけられて響は慌てて雑誌を元のラックに戻した。振り返ったところに立っていたのはレイだった。

「お、おおレイ。今帰りか？」

通りの向こう側にハイスクールのスクールバスが停まっていた。

「うん。ヒビクはこんなところで何してるんだ？」

レイは今響が戻した雑誌に手を伸ばそうとした。その手をさり気なく遮るようにしてレイの肩に手を回し、響はそのままレイを促して歩き始めた。

「サラに頼まれて買い物！」

「ああ...」

響の手にあるマーケットの袋を見てレイは納得したように頷いた。

「大変だね...」

「たまにムカツくんだよな、サラ...」

と、ぼやくとレイは可笑しそうにわかるわかる！と笑った。

「でも、俺はサラのこと好きだよ？ああ見えて俺たちのこと色々わかってくれてるから」

俺だって別に嫌いじゃねーけど...、と響は呟きながら、被っているニットの帽子に耳をスッポリと潜らせた。

「しかし、この町は寒いなあ？一歩越えればカナダだからしょーがねえか...」

「ヒビクはさ...、」

ふと立ち止まり、レイは呟いた。

「ん？」

「いや...、ヒビクはあれに上ったことある？」

ちょうど目の前の展望台をレイは指差した。

「いや？まだない」

「じゃあ上ってみる？今頃の時間は凄くいい眺めだよ」

レイの言うとおりに、住宅街の向こうにうっすらと雪化粧をした田園、その向こうに港の海が視界180度に広がる夕暮れ時の眺めは美しかった。

街のレンガ色から田畑のところどころに白を交えたグリーン、そして薄紫の海へと緩やかに下降しながら淡いグラデーションをつけて変化していく景色。

ふと浮かんだメロディを口ずさむと、

「その曲何？」

すかさずレイが反応した。

「今、頭の中で出来た曲」

「ヒビクは作曲するの？」

「あ、ああ...、まあね」

「凄え...。こんな一瞬で命を作るんだ...」

あまりにも素直なレイの言葉を、響は小さな咳払いで誤魔化す。

「タイトルは？」

「...うーん...。『Fermata』...かな？」

頭に浮かんだ言葉を、響は適当に答えた。

「いいね。ここからの眺めはやっぱりフェルマータ...一休み、って感じだよな。この眺めも空も海もこの町も好きだけど、でも俺たちは...、」

レイは展望台から遠くの海を眺めながら言った。

「俺たちは...？」

「うん...。ヒビクはこの町に来たのは初めてだったよね？」

「ああ」

「そう...だよな。ここは過疎地だからヒビクぐらいの年の大人がほとんどいないんだ。いるのは漁師のおっちゃんやおばちゃんたちと、サラみたく街で店屋をやってる人だけ」

レイはいつかのサラと同じことを言った。

「ものすごく平和なところだよ。犯罪も事故もほとんどない。変化のない毎日がのんびりと過ぎていくんだ」

まあ、そうだろうな、と響は言った。

「この町の人ってさ、人のことに対して無関心なんだ。大人も子どももみんなそう。平和ボケしてるんだ。平和すぎるから人を干渉する必要も無いんだと思う。みんながそうだからそういうことに慣れちゃってる」

「そうか」

「町の人には温厚でいい人たちばかりだけどね...。でも俺は何か違うって気がするんだ。俺たちの年代のヤツはみんなそう感じるんだってサラは言ってた。でも、そのまま大人になってしまって自分も町の空気いつの間にか同化しちゃう。俺たちの親もきっとみんなそうだったってさ」

レイの言うことに思い当たるふしはたくさんあった。『Fermata』で毎夜展開されているロボスターマンたちとバンドたちの世界の隔たりも、干渉し合っていないというよりは無関心故か。

「そう。あのおっちゃんたちは俺たちが何やってようと別に興味ないし、自分たちがあそこで盛り上がっていらればそれでいいんだ」

それはある意味寛大なことだとは思う。

でも...

「寂しいんだよね...。俺たちはもっと大人と関わって大人の意見を聞きたいって思うのにそういう大人がいないっていうのはさ」

レイは展望台の手すりに手をかけて身を乗り出した。それがあまりにも向こう側に行き過ぎて

るために危なっかしい。そして、次の一瞬にレイは手すりの向こう側に飛び出した。

「レイ！」

——と、慌ててレイのブルゾンを掴んだ響に、鉄棒選手のように一回転して戻ってきたレイはニヤリと笑う。

「...はあ...？何やってんだよ、お前...」

レイの奇行に響は呆然とするしかない。

「びっくりした？」

「当たり前だろ？飛び降りたのかと思ったぜ.....」

「ごめん」

と、言いながらもレイは寒さで赤くなった鼻の頭をこすりながら嬉しそうに笑う。

「漁師の子はとーちゃんもかーちゃんも忙しいからガキの頃からほったらかしが当たり前。ご近所さんの年長の子どもが年下の子どもの面倒を見るのが当たり前って感じでこの町のガキは大きくなるんだ。大人と関わる時間がほんとになくなってさ、俺たちはサラに大きくしてもらったって言ってもいいぐらい」

「サラだっておめーらとたいして年齢変わんねえだろ？」

え？とレイは響を見た。

「ヒビク、サラのこといくつだと思ってる？」

「ハタチぐらいじゃねーの？」

「それ、サラが聞いたらビールだけじゃなくてオードブルも出てくるんじゃないかな？サラ、ああ見えて俺たちよりも12才も年上。10才の時に両親亡くしてるマークにとってはねーちゃんというよりはかーちゃんってとこだし、俺たちにとってもそう。二人目のかーちゃんみたいな人」

そうか...、と何気なく呟いてから響は、

「12才年上...?!」

と、繰り返した。

「ってことは俺よりも年上!？」

「確かもうすぐ30才だよ？」

「...はっ.....」

と、言ったまま、二の句が継げない響だ。自分より年下だと思い込んで疑っていなかったが、7才も年上だったとは恐れ入った。

「サラ、可愛いでしょ？昔から変わんないよ、あのケラケラ笑い。30才のオバサンになってもね」

オバサンはあんまりだろ、と響は半ば呆然としたまま呟いたあと、

「まあ...、明るいしサッパリしてるし気をつかわねーでいいってところが楽だよな、サラは...」

とは言いながらも、騙されていたようで妙に悔しい。しかし、そりゃ詐欺だろ...といつまでもぶつぶつ独り言のように言う響だが、レイは、

「.....だから、一番最初にヒビクに言われたこと、ものすごく痛かったけど嬉しかったんだ。俺だけじゃなく、マークやボブもおんなじだよ。あんなふうに真剣に俺たちのこと見て意見してく

れる大人が今までここにはひとりもいなかったから」

と話を戻した。

「サラは俺たちのそういう気持ちがあわかってくれてるから、あの場所を練習場に貸してくれてるんだと思う。唯一話せる大人がサラだよ。今度のフェスティバルはうちのハイスクールの生徒会が郡のハイスクールに呼びかけて四校が合同で行う文化祭なんだ。今まではこんなこともなかったけど、郡内のどの町もここと同じような平和な田舎町で高校生たちは同じようなこと考えてるからって、生徒会やってるボブたちが呼びかけたら、バンドコンテストはどうかって意見が他のハイスクールから出てさ。出場者も審査員も町の大人たちを巻き込んでみんなで盛り上がるのはどうかって」

なるほどねえ...、と響は呟いた。

「俺、何日かヒビクにいろいろ教わって何となくだけど何かが分かりかけた気がする」

響はいつも演奏中にするようにしてレイに視線を送り、ついでにウィンクも飛ばしてみた。レイは嬉しそうにそれをキャッチして返してきた。

「こういうのってフィーリング、だよな？」

「ああ、そうだな」

——フィーリング...

自分の高校時代。

性格も考え方もみんな違うブックキャッスルのメンバーだったが、これだけはピタリと合った。

いつもどこかを真ん中にしてその空気はまあるく流れていた。音を鳴らしている時、それは常に身の周りにあり、手を伸ばせばすぐに捕まえることが出来た。

その真ん中。

常に仲間に気を配り、仲間を見て聴いて空気をまあるくしていたのは...

——田村だったな...

「この町のみんなにあるようでないものがフィーリングなのかもしれない。俺たちのバンドもそう。ガキの頃から一緒にいるのにヒビクに会うまではあのザマだったしさ...。抵抗しているくせに俺たちだっていつの間にか既に互いのことに無関心だったんだ。関心の持ち方がわかんなかったっていうのもあるけど...」

「...お前は最初から仲間たちを気遣ってるさ。そう思ったぜ？」

そうかな、とレイは笑った。

「音楽ってさ、言葉がなくても想いを伝えられるものだよな？」

レイの言葉は響の胸の触れたくない部分を刺激した。伝えたい想いをメロディに込めた音楽をやっていたのはもう遠い昔のような気がする。いつの間にか自分にとっての音楽は苦しみ以外

の何物でもなくなり、それに慣れ、口から出る言葉と同じような嘘ばかりの想いがメロディに変わっていた。想いが音になって伝わるとしたら、それら全てが聴き手に伝わっていたはずだ。苦しみにもがく音符の羅列を聴かされていた客たちが信じていたものは何だったのだろう。

「バンドコンテストは凄くいいアイデアだと思った。音楽が嫌いって人はあんまりいないだろ？みんなすぐにやる気になって凄く盛り上がってたんだ。トムが抜けたのは痛いけど、ヒビクに出会うためだったのかなと...今は思ってる」

「おいおい！俺はそんな立派なもんじゃないぜ？いい加減を絵に描いたような人間だ。これだけは覚えておいてくれよな？」

は！っとレイは笑った。そして、またすぐに真顔になった。

「町を出て行けるヤツはいいけれど、俺やトムみたいに親の後を継ぐヤツはずっとここにいなきゃならない。こんな思いをしたまま無関心な大人になりたくないし、大人たちにもっと俺たちを見てもらいたい。みんなが楽しめるような音楽を響かせてやろうぜってトムやアンたちと盛り上がってさ...」

「それで『ビクトリー』ってわけか...」

うん、とレイは頷いた。

「...そうか」

戦っていると言ったサラの言葉も『ビクトリー』というバンド名に込められた想いも、今レイの話を聞いて理解はできた。高校生たちのエネルギーと想いはわかる。もしも自分が今高校生ならきっと同調するだろう。無関心に抵抗する少年たちの、皆に音楽を響かせて音楽で惹きつけてやろうという無謀な挑戦も決してキライなノリではない。

だが、世間から不必要なほどの干渉を受けてきた自分は今、この町の無関心さにどこかで癒されている。

「俺はこの町のそういう雰囲気は悪くはないと思うけど、ま、お前らの気持ちはわかったよ。俺なりに出来ることでフェスティバルと一緒に盛り上げてやるさ...」

と、響は言った。

景色の色はもう薄闇に包まれていた。

「やべっ！バジル！」

使いの途中だったことを思い出し、響とレイは慌てて『Fermata』に戻った。

もう既に数人のロブスターマンが酔っ払う準備に入っている中で、いったい何処まで買い物に行ってたのよ！とサラには怒られた。

「悪い！サラが30才だってレイから聞いて、今までずっと固まっていた！」

響はバジルをサラに渡しながら言った。

「な...っ！？」

サラは言ったまま次の言葉がなかなか出てこない。

「し、し、失礼ね！女性の年を話題にするなんて！それにあたし...、」

サラは両腰に手を当てて仁王立ちして、

「まだ、29才だから！！」
と、大声で叫んだ。

日曜の朝。

しんと、どこか神秘的な空気が身に迫る感覚で、響はいつもよりも早く目が覚めた。

カーテンを開くと窓の外は白銀。道も家々も何もかもが白一色に埋まり、昨夜から降りだした雪は一晩で外の世界を別のものに変えていた。

目覚めきっていない頭のまま積もった雪を見た時、心に引っかかっている何かが浮かび上がってきた。再びベッドの温もりに潜り込み、響はその何かを探るために昨夜のことをぼんやりと思い返す。

昨日、日が落ちた頃から本格的に降り始めた雪に客足も遠のいたのか、ここに来てから初めての`暇、を経験した昨夜の『Fermata』だった。それでもレイたちバンドメンバーはいつもと同じ時間に集合し、いよいよ5日後に迫ったコンテストの本番に向けての練習に精を出したかったところだろう。皆が揃っているのにアンだけがいつまで経っても来ず、連絡もつかないまま時間が過ぎていったことに、レイをはじめメンバーたちは心配する中で練習を続けていた。

そして、夜もずいぶん遅くなった頃、アンを送ってきたのはトムだった。

トムは、かつての己のポジションでマイクを持つ響に一瞬目を止めたが、それがいつか自分が誤って殴った男だとまでは気がつかなかったようだ。

『今さら何の用だよ、トム！』

勢いをつけて飛び出そうとするマークにトムは、

『お前らには別に用はないよ。俺はただアンを連れてきただけ』

と、アンの背中をバンドが集まる中に押しながら冷静に言った。アンの目は真っ赤に腫れていて今まで泣いていたということは明確だった。

『うちのアンに何かしたんじゃないかーだろーなあ！？』

マークが怒鳴ったのも無理は無い。

『トム、お前...』

レイも鋭い目でトムを睨み、一瞬の間一触即発な緊張が流れた。

『俺はただアンを連れて来ただけ。コイツ、ずっと俺たちのバンドの練習所にいたんだぜ？』

トムはうんざりしたように言った。

『お前らの練習所にアンがいたってどういうことだ？』

『言葉のままだよ。夕方アンが突然やって来て俺に『ビクトリー』に戻れなんて言いやがって』

『アン、本当なのか...？』

レイがアンに確認すると、アンはこくりと頷いた。

『戻らねーって言うてるのにしつこいから放っておいたらずっといやがって。雪もひどくなってきたし、いくらなんでもこんな時間にひとりで追い返すわけにもいかないから送ってきた。ただ、それだけだから』

トムはそのまま店を出て行った。レイが後を追って行った。

『今さらトムを呼び戻そうなんて、俺たちに相談もしないで勝手なことしてるんじゃないかよ！俺』

たちにはヒビクがいるし、もうヤツのことは忘れろよ！』

と、アンを責めたマーク。

『忘れられないよっ！』

アンは叫んで、涙を一粒零した。

『あたしだけがみんなと合わないってことわかってるもん。あたしはやっぱり...』

アンはそこで黙り込んだ。しばらく外でトムと話をしていたレイが店に戻ったあとも、アンがとった行動は皆から集中力を奪ったようだ。アンはフロアの片隅でひとりふてくされていたし、マークはカリカリ怒ってたし、ボブはどちらにもつかずにひたすらリズムを刻んでいたし、レイは...

『どうした、レイ？』

ギターを持ったままだぼんやりと佇むレイに声をかけてみたが、レイは首をふっただけで何も言い返してこなかった。

響がいくら号令をかけても皆の士気は回復しないようだったので昨夜の練習はそこまですらなかった。雪は大降りになり、店のドアも開きにくくなるほど積もっていた。

『明日の時間外労働はこの雪かきだな...』

と、降り積もっていく雪を見つめながら思わず口に出たことを覚えている。

――雪かき...

店のドアはもう開かなくなるぐらいに軒先にも雪が積もっているはずだから当然やらなきゃならない仕事だろう。引っかかっている何かはこれか、と思ったがもっと別の何かがあったような気がする。

気にかかることを思い出すために気持ちは起き上がろうとしても、体は寒さに負けて毛布を頭から被りなおす、という矛盾した行動をとる。ということは、別にどうでもいいことのような気もしてきた。考えるのも面倒になってまた眠ろうと思った時、外から車のエンジンがかかる音がした。

――こんな日に出かけるのか...？

何気なく思って、次の瞬間に跳ね起きた。

「サラ、出かけるのかよ?!」

引っかかっていた何かはこれだ。響は部屋を飛び出し、そのまま店の裏口から車庫に躍り出た。

「ヒビク、早いよね。そんな恰好で風邪ひいちゃうよ？」

エンジンを暖機している間に、車庫の前に積もった雪をどかしていたサラが、寝起きのままの

Tシャツで飛び出してきた響に目を丸くしている。

「やっぱ出かける気？」

響は雪の上で足踏みをしながら言った。

「お店をお願いね。今日もお客さんは少ないと思うから」

と、サラはどこか思いつめたように言う。

「それはかまわないけど、こんな日に出かけるのはやめとけば？」

ここまで見事にどこもかしこも真っ白な、車の通った跡すらもない世界を見たのは初めてだ。ボストンも雪は多いがここまでにはならない。だが、今朝のこの状態は昨夜のうちから予想が出来ていた。

・
・

いつもなら午前の時報が鳴るまで賑わっている『Fermata』だが、22時を過ぎた頃には客もなくなり早じまいをした昨夜、響もずいぶん早く自室に上がった。

夜も更けた頃、階下で物音がしたために下りていくと、明かりも暖房も落としたフロアをサラがひとりで歩き回っていた。響が下りてきたことにも気づかずに、心をどこかに飛ばしてしまったように、手に何かを握り締め、時々それを見つめながら同じ場所の行ったり来たりを繰り返すサラを、響はずいぶんの間静観していた。それが、何をどうしたらいいかわからなくなっている子どものように、歩くことで己の気持ちを落ち着けている行為だとしばらくしてから気づいた時

、

『サラ、どうかしたのか？』

やっと声をかけた。

サラはきっと心臓が止まるほど驚いたのだろう。ヒツといううめき声を上げ、肩を上げた格好でしばらく凍りついたあとにゆっくりと響を振り返った。

『なに...やってんだ...？』

『ヒビクこそ、どうしたの...』

サラは握っていた紙のようなものを慌ててポケットに突っ込みながら動揺を隠すようにして言った。

『こんな時間にどうしたんだよ？』

『あ...あたしの店で何時に何をしていたっていいじゃないの』

『そりゃそうだけど...』

明らかにいつものサラとは違った。慌ててもいるし動転もしていた。

『何かあった...、』

...のか？と問う前に、

『あたし、明日ちょっと朝から出かけてくる』

サラは唐突に言った。それは、響に詮索を許さない意思から出た言葉のようだった。仕入れは3日前に行ったばかりだったから私用だな、とはわかったが、サラの意思をくんで理由は詮索しなかった。ただ、気になったのは雪だ。

『この雪だぜ？止めといたほうがいいんじゃないか？』

『どうしても行かなきゃならないの。明日はヒビク、店をお願い』

有無を言わせない気持ちの固さを感じて話はそこで終わりにしたが、サラの様子と降り積もる雪が昨夜から潜在意識のどこかに引っかかっていたのだろう。

・
・

「やっぱやめた方がいいと思うぜ？」

今、この雪一色の景色を見ても改めて思う。どんな事情があるにせよ、こんな状態の悪い中に車を出していくというサラがどうしても無謀としか思えない。

「大丈夫。雪道は慣れてるから」

「慣れてるの？こんなの？」

「何年この町で暮らしてると思うの？こんなの毎年のことよ」

なるほど。確かにそうだな、とも思い直した。雪国を見たこともない自分にとっては驚異的な風景も土地の者にしたら当たり前の日常だ。

「夜までには帰るつもりだから」

と、サラは車に乗り込んだ。自分の制止などはなからきく気はないらしいし、サラの私用に自分が口を挟む権利もないことに気がついた響は、

「...じゃ、気をつけて」

と、言うしかなかった。

「うん。ありがとう。行ってくるね」

サラの4WDは雪を両脇に掻き分けるようにしてゆっくりとメインストリートの向こうに消えて行った。思っていたよりも普通に車は走って行く。

サラはここで何年もひとりで店を切り盛りしてきた大人の女性だ。自分の行動には最初から責任を持っているに決まっている。

「...はあ...」

余計な心配をした自分が滑稽に思えて真っ白なため息が出た。やっぱりサラのことよりも、今心に引っかかってふさわしいのは、

「この雪かきだろ...」

と、50センチも積もった雪を見てうんざりしながら響はこれからはじめる雪かきに想いを馳せて呟いた。

◇

雪かきは、雪が凍って固まるとはかどらなくなると聞いていたので午前中の日が差した頃からはじめた。

最初はひとりでもくもくとやっていたが、そのうちに今日は日曜で学校もないしマークがいるはずだと思い当たり、呼び出して手伝わせ店の周りだけを終わらせた。

「お前、ほんと呑気でいいよな...」

呼びに行ったとき、マークはまだベッドの中で熟睡していた。雪かきやるぞ、と言うと、今かいてもどうせまた降るからほっとけよ、という返事が返ってきたのを無理やりベッドから引き摺り下ろして手伝わせた。

「少しはサラの力になってやれば？もう、ガキじゃねーんだから」

「何だよヒビク。いつも俺らのことしょんべんガキだって言うくせに、こういう時だけそんなこと言ってさ」

マークは口を尖らせて不満を言った。目覚めきってないのに寒空の下に引っ張り出されたことが気に入らなかつたらしい。

「それとこれとは話が別...」

と言いながらも、別じゃないよな、と心では思った。大人は時として自分の都合で子どもを大人にも子どもにもする。

「ねーちゃんにはレイがいるからいいの。それでうちらは昔から上手くいってんの」

そばかすだらけの顔を寒さで真っ赤にしながらマークはおちゃめに笑った。細かいことは気にしない、その時がまるく収まればそれでいい、というある意味で楽観主義者なマークらしい。

「お前みたいなヤツ、俺の仲間にもいたぜ？」

「へえ～。どんなヤツだったの？」

「女好きだけど女にもてない、場の空気は読めない、自分よければ全てよし、なトラブルメーカーだったかな」

と、響はかつての仲間を頭に思い描いて答え、ニヤッと笑った。

「俺と全然違うじゃん！！」

と、マークは憤慨し、みんなが来るまでもう一回寝る、と自室に戻って行った。

これからレイたちは練習に集まってくる。コンテストは4日後だ。

10月の初めにここに来てひと月以上が経っていた。ボストン空港でチケットを破り捨て、この町に流れ着いてからのことを思い返すと、今、ここで生きている自分があまりにも不思議だ。

名前も知らない土地勘も無いこのアメリカ最果ての地で、これまで己の人生には何の関わりも無かった人たちと生活している毎日は、以前からの当たり前だったように過ぎていく。

もしもあの時、成田行きの飛行機に乗っていたら今頃自分は何をしていたのだろうか――。

ひと月半経って、今初めてそのことに思いを巡らせた。

自暴自棄――。

先日目にしたジェームスの記事にはそう書かれていた。ここに生きているこの現実が自棄であった己の結果だ。金もなく行く当てもなかったひと月半前、自分はここで何をしようとしていたのか。あの日のままの自分でしたら、サラがこの雪の中を出かけて行ったところの騒ぎではない無謀をしていたのではなかったか。

良くも悪くも結果の受け止め方が人生の勝負であるならば、今の自分ははたして勝っているのかそれとも負け犬のままであるのだろうか。

ひとりだったらいつまでも負けたままだったろう。

ほんの少しでも笑いのある日常が送れているのは、仕方なくでもはじめたバンドによって音楽が常に身近にあるということと、レイやサラたちとの触れ合いがここにあるからだろう。でも、だからと言ってこれで己の人生に勝ったわけじゃない。勝負はまだついていない。それをつけるのは自分しかない。ここで、いくらの時を過ごしてもそれだけは確かに言えること――。

マークが言った通り、たった今雪かきを終わらせたばかりだというのに、また新たな粉雪が降り始めた。春が来るまでこれからはきっと、毎日がこんな風景になるのだろう。

これが、この最果ての町の冬――。

マークは本当に二度寝してしまったようだ。サラもいない店の奥はひっそりと寒々しいぐらいに静まり返っている。

響はそのままアンのキーボードの前に座り、頭の中を流れるメロディを繋ぎながら五線譜に音符を書いた。いつか、展望台からまだうっすらと雪化粧をしたばかりの風景を望んだときに浮かんだメロディだ。楽譜にするほどのものでもないと思っていた、Cから始まるセブンスもディミニッシュも使っていない簡単で単純なコード進行の曲は、まるで中学生が初めて作曲したような飾りも広がりもないシンプルなものに仕上がった。

――これ、お前の曲か！？ずいぶん素直な表現してるじゃん！

と、田村が言いそうなぐらいに。

そのままポロン...と鍵盤を撫でる。昔、田村にこんな台詞を言わせた曲がもう一曲あった。

「ライジングサン...」

演劇部とのコラボレーションで生まれた曲。

朝焼けの湖の風景とスッと心に染み込んだヒカルとの時間がそのままメロディになった曲を、今、包帯を巻いたままの動かない左指は飛ばしてたどたどしく弾く。左指は怪我を忘れるほどいつの間にか痛みはなくなっている。

午後の柔らかな光が射し込む誰もいないフロアに響く過去の自分が作ったメロディ。

明けない夜はありえない 星なく暗く長くても
終わらない物語ありえない せつなく悲しく果てしなくとも
ピリオド打つのはmy mind ハッピーエンドはJust my mind

自分が書いた詞とともに心の中に穏やかに回帰するあの頃の記憶と想い。

浮かんでくる仲間たちの顔と、そしてヒカルの太陽の笑顔の後ろ側に不思議と消滅していくこれまでのさまざまな煩惱たち。

――ヒビク先輩らしく響いて！

「...俺、らしく.....か」

風間響らしく。

カザマ・キョウらしく――。

忘れていたものがゆっくりと浮かび上がってくる感覚を手にしたとき、店の扉が開いて入ってきたのはアンだった。

「よお、アン。早いな」

響が声をかけてもアンは無言のままフロアを見渡し、まだ誰も来ていないことを確認すると再び扉を開けようとした。

「ちょっと待てよ、アン。そんなに俺を嫌わなくたっていいんじゃない？」

響は慌てて立ち上がり、今にも外に出て行こうとしたアンを引き止めた。アンは響を振り返り、

「別に嫌ってるわけじゃないです」

と単調に答えた。昨夜のこともあり、気まずさは隠せない様子だ。

‘ヒビク、’というボーカルを持ちながら、今は別のバンドで活動しているかつてのボーカリストに戻るよう懇願しに行ったアンの行動は、響に対する背信と取れないこともない。

「そうかなあ？何だか俺、ずいぶん拒絶されてるような気がするんだけど？」

さほど気にしてもいないことだったが、わざとそんなことを言ってみた。

「考え違いだと思います」

アンはさらに冷淡に答え、扉からは手を離して自分のキーボードの前にポニーテールを揺らしながらツンツン歩いて来た。その精一杯背伸びしたような態度が可笑しくて響はつい吹き出した。するとアンはつりあがった目を響に向け、

「そこ、どいてください！」

と、きつい口調で言った。

悪い悪い、と響は借りていたキーボードを素直にアンに返した。アンは持ってきた布バックの中からスコアを出し譜面台に並べていく。その様子を響は横に立ってじっと見守った。

「アン」

と、いう響の呼びかけには答えずに、アンはスコアに見入っている。だが、それがこの気まずさをやり過ぎそうとしている‘ふり、’だということは見え見えだ。そういう幼い態度は愛しいとさえ思う。

「俺のボーカルに抵抗があるならレイのギターに合わせて弾けよ」

アンはえ？と響の顔を見上げた。

「安心しろ。俺が歌うのはコンテストまでだ。成り行きでこうなっちゃったけど、あと4日だから我慢しろや」

「別にあたしは...」

「終わったらちゃんとトムのスコアは返すし、書きしまった名前も何とかして消すからさ」

響はアンのおでこをちよんとつつく。

「消えないでしょ...。ヒビク、ペンで書いてたもん...」

と、アンは半ベソをかきながら呟いてから気がついて、

「べ、別に、そんなことどうでもいいことです！」

と、言い直した。

響はニヤリと笑いそうか、と呟いて、

「とにかく、どこまでもレイに合わせてみる？レイについていく努力をしてみることで？アイツのことは信じられるだろ？」

と、訊いた。

「アンはアンで、合わねえってことを気にしてるんだよな？」

アンはやや顔を赤くして唇をかみしめた。そのうちにレイが来て、ボブが来て、ずいぶん遅れて最後に来たのはマーク。自分ちのくせにおせーぞ、とみんながポカスカやった後にやっと練習は始まった。

「アン、その音はFm7じゃねえか？」

「そっちの方がいいの？」

「Fm7はFm7。それしかないの」

「...別にFmでもいいじゃない？たいして音変わんないもん...」

「こないだヒビクに言われたろ？音に命があるんだって。だからそこは間違いなくFm7なんだよ」

「うるさーい！Fm7は指が届かないんだよ」

どこかで聞いたことのある会話が再現される。

アン of 微妙なマチガイを突っ込むマークに開き直るアン。

だが、その微妙な違いをついこの間まではマークも理解できていなかった。調子に乗ったマークに苛められ、このままだとますますイジケそうなアンに助け舟を出そうとしたとき、

「全部をいっぺんに押さえるからだよ。ひとつひとつ低いほうから高い方へ順番に弾けばいいんじゃないか？アレンジができればやってみればいいし、出来なかったらシンプルでかまわないから」

と、響が言おうとしたそのままのことを先にフォローしたのはレイだ。

アンは一瞬、チラリと響を盗み見て、

「...うん、わかった。やってみる」

と、素直に応じた。

ちえっ、レイの言うことは聞いて俺にはうるさーいかよ、とマークはぶつぶつ文句を言う。

「とにかく本番まであと4日なんだし、ヒビクに教わったことひとつひとつ実にしていこうよ？」

というボブの言葉にレイもマークも頷いた。

「俺、何か教えたかなあ...？」

技術指導をしてきたはずなのに、今思い返すとたいした指導はしていないような気がする。ただ、ここで彼らと一緒に音楽をやっていただけだろう。やっている時は純粋に過去の自分になってレイたちに溶け込んで...

「何言ってるの？いろいろ教わったぜ？ひと月前の俺たちのままだったらきっとコンテストじゃ恥かいただけだ」

と、マークが真顔で言った。

「そうか。ひと月前とは違うか」

「全然違うね。音の反響も全然違う。なんていうか...自分の命に戻ってくるような感じ？心の底から楽しいなって実感できるんだよ演奏しててさ」

ずいぶん大げさだな、と響は笑った。

「今なら客たちを惹きつける自信あり、だぜ？ステージから客席から全部まとめて盛り上がってやる。な？」

と、マークが仲間たちに同意を求めると、少年たちは目を輝かしながら「おうっ！」と返す。かつての少年たちの面影がまたそこに見えた。

「ステージの上から客席は見えないぜ？客の反応は空気を伝って肌を感じる」

と、響は言った。そうなのか？とマーク。

「ああ。ライトが当たってるから自分の周りは真っ白だ。傍にいる仲間の顔しか見えない」

「すげーな、ヒビク。やっぱ色んなこと知ってるんだなあ！」

マークは変なところでも感心をする。とにかく、今はもう何をやっても何を言われても楽しくて仕方が無い、といった様子だ。昨夜のことなどすっかり忘れてしまっているあたり、やはり超がつく楽観主義者だ。

「んじゃ、しょんべんガキたちの仲間になってずっとここでおめーらとバンドやっちゃう？」

と、いつの間にか彼らのペースにはまっていること気づいて、

「...なーんてな！」

慌ててブレーキをかけている自分には呆れる。突き刺さる視線を感じてその方向を見ると、ムツとした目をこちらに向けているアンと目が合った。

――やべやべ...

思わず身が縮まる。さっき、あと4日だから我慢しろと言ったばかりの男がここでずっとやる

、なんてまったく違うことを言ってるわけだから当然だろう。アンの頭にはきっと、ヒビクイコール信用できないイヤなヤツ、とインプットされているに違いない。

「え？ずっとやってくれるんだよね？もう今さらコンテストまでの契約だなんて言わないでしょ？」

というマークの言葉には、どうすっかなあ...と曖昧な返事を返すにとどめた。

「ステージでは仲間の顔しか見えない、か...」

ずっと自分とマークを見つめていたレイが呟いた。そして、

「でも、仲間さえ見えてれば十分だよな？音が伝え合うんだからさ。俺たちの間もお客さんたちにも...だよな、ヒビク？」

マークとのじゃれ合いをやめ、響はレイを見つめ返す。

音が全てを伝え合う。

演奏者も客席も。

忘れていたものがまたひとつ――。

「...ああ。その通りだよ、レイ」

そう答えたのは、間違いなく過去じゃない現在の自分だった。

◇

暗くなってもサラは戻らず、響はとりあえず店を開けたが、やはりいつもの常連たちは来ない。バンドの練習も早めに終わりレイたちは帰って行った。

客が来たとしてもビールを出すことぐらいしか出来ない響にとってはありがたいことだが、サラのことはやはり心配だった。降りだした粉雪は再びまとまった雪に変わりつつある。裏口から車庫を覗き車がまだ戻っていないことにため息をつき、再び店に戻ったときに目に入ったのは片隅のサククスだった。

響はそっとサククスを手を取った。暖房の行き届かない場所にあったからなのか、ひんやりとした金属の感触が手のひらに伝ったが、その冷たさと相反するかのよう、心の中に染みこんで来たのは柔らかなイメージだった。

丁寧に磨かれたサククスは、照明の光を受けて鈍く、重く輝く。磨いているのは、もちろんサラだろう。おそらく、店仕舞いをして響が自室に上がったあとにこの場所で。

前にここで働いていた人が吹いていたサククスじゃないかとレイは言っていたが、もしもそうなら、その人物は何故サククスを置いていったのだろう。今は誰も奏でないそれをサラは何故、丁寧に磨いているのだろうか――。

いつか、ここでまた音楽が奏でられればいいとサラは言っていた。また、ということは以前はここに音楽があった、ということだ。

「それが、このサククスなのか...」

サラにとって、その音楽はきっと大切なものだったのだろう。今、手にあるサククスを見てそう思った。

カラカラと、ドアのカウベルが鳴った。やっと客の来店か、と思ったが、入って来たのはみんなと一緒に帰ったはずのレイだった。雪が本降りになったのか、レイの肩に白い粉の粒が積もっている。

「どうした？忘れ物でもしたか？」

「いや...、俺、ヒビクに言っておかなきゃならないことがあるんだ」

みんなの前じゃ言えないから、とレイは付け加えた。響はサククスを元の場所に戻しながら、バンドのことか？と訊いた。

レイは頷いた。そして言おうか言うまいかをずいぶんためらってから言いにくそうに、

「この間、アンがトムのところに行っただろう...？」

と、切り出した。

「.....あの時、トムはアンを追い返して来たけど、俺もやっぱりトムに戻って来て欲しいと思ってる。アイツと一緒にやっていきたいんだ。だから、あの時トムには俺もそう話した」

と、小さく、でもはっきりと言った。響は答えずにレイの次の言葉を待つ。

「アンと同じく、あっさりとは断られちゃったけどね...。いい加減にしろよって怒鳴られたしアイツは心底うんざりして帰って行ったけど、でも、諦めてないんだ、俺...」

「そうか」

「...マークたちはもうトムのことは諦めてるけれど、アンは今でもトムの癖を無意識に意識したキーボードを弾いているのがよくわかる。トムってすごく癖がある歌い方をするヤツでさ、俺たち結構合わせるの大変だったんだ」

ヒビクは俺たちの演奏に歌を合わせるのが大変、みたいなことを言ったけどさ、とレイは笑った。

「でもどっちでも同じ。結局は相手を気遣っていない、呼吸が合っていない俺たちだったんだし。でも、アンだけは違った。完璧にトムの歌に合わせてた」

なるほどね、と響は呟いた。

「でも、その時にそれがわかってたわけじゃない。今それがわかった。ヒビクが歌ってみんなの音を聴いてるとアンの音が言葉みたく聞こえてくるんだ。アイツ、ガキの頃からトムにぞっこんでさ、トムと一緒にやりたくて俺とトムが組んでいたユニットに無理やり入って来たんだぜ？だから、アンは最初からトムの歌に合わせてた。っていうか、トムにしか合わせられないんだよな、アイツ」

いつも、トムのことばかり考えてるから...、とレイは垂れてくる前髪をサッとかきあげながら笑った。ひきつった心を必死に隠すようなレイの仕草と笑顔に、心の鎖がまたひとつほどけたように気がした。

——どこまでアイツに似てるんだか…。

会った頃から感じていたレイの空気は、いつも自分の傍で穏やかに何処までも優しく友を想い、時には厳しい言葉で諫めてくれた親友田村の空気と同じだった。

まとまりのない仲間をさり気なく見渡し、ひとりひとりを無意識の中で気遣っている。それは音楽の中だけじゃなく全てにおいて。そして自分のこととなるとてんで後回し。どこまでも想う相手の心を優先にしていた親友は、自分が愛する人に対しても——。

肩で小さなため息を吐きながら無意味に足を動かしているレイに、体の底から沸いてくる愛しさと懐かしさをおぼえた。変な意味じゃなく、このまま抱きしめてあげたいような想いがつき上がる。

年齢を重ねた今の自分にレイの心は丸見えだ。そして、その中にまだ少年だった頃の自分と仲間たちの姿がオーバーラップする。忘れていたものが蘇ってくる。それが今の自分に教えてくれるものは計り知れないほど大きく、自ら通ってきた道をもう一度歩いているような錯覚さえ起こる。当時のままの気持ちで今現在の自分で。

「お前はアンのためにトムに戻って欲しいってわけね？」

「……それもある」

と、レイは素直に頷いた。

「けどそれだけじゃない。もう一度、あいつとみんなでやり直したい。俺たちのフィーリングを掴み取りたい。俺たち5人で音楽をやっていきたいんだ。それが出来てはじめて俺たちは勝負に勝つことが出来るんじゃないかって、ここ最近ずっと思ってた…」

「…俺はそのためのステップ台ってわけね…」

「ごめん！結果的にそうじゃなく、ヒビクがいなかったら俺はこんなふうに思えなかった！マークたちがヒビクを頼りすぎてることが気になってるだけなんだ！だってヒビクはいつかは……」

——いつかは…。いつかはどうするんだ、俺…。

「ヒビクはいつかは…」

と、レイはもう一度呟いた。

——レイの方がわかってやがるな。

真剣なレイの瞳に親友田村の面影が重なって見える。

——アメリカに行く。親父を超えるピアニストになる。5年は帰らない。

——5年は長いぜ？ヒカルは待っててくれねーだろうな。

——いいさ…。自分で認める俺になれば、その時にかっ攫いに行くからさ！

—人生悟りきった大人みたいなこと言いやがって！

—音楽を磨くことでしか、俺自身を磨くことはできないから。

かつて、田村と交わした言葉がその面影の中から聞こえ、音楽で己を磨こうとしていた幼い自分も見えた。

今は分かる。音楽は砥石にするものではない。

音楽は—。

「レイ、お前に言われなくたってわかってたさ。心配すんな」

「ヒビク…」

「今、俺は俺のためにお前たちとやってる。お前たちを利用させてもらってる、と言ってもいいかもしれない」

「…俺たちを？」

利用価値なんかあるかなあ…、とレイは呟いた。

町のため、仲間のため、好きな女の子のために心を砕くレイや、ドタバタしていても楽しいヤツらと音楽をやる毎日の中で見えてくるもの、取り戻す想いがひとつひとつ心の中の淀（よどみ）を浄化してゆく。

「コンテストまでの仲間ってことで全然オッケーだぜ？その後お前たちがどうするかまでは俺は口出ししねーから」

最初からそういう契約だしな、と響は付け加えた。

「ガキにはいろいろあるよな、レイ？」

—妥協できないこだわりが色々あったな…。

「…大人ほどじゃないだろーけど、ね」

「いや…」

と、響は首を振り、

「大人には…何もねーよ…」

と、呟いた。

「そんなことない…。あるわよ…」

低い、冷めた声がした方に顔を向けると、いつからそこにいたのか扉の前にサラが立っていた。

サラはぼんやりとそこに佇んでいた。

「サラ？帰ってたのか？いつからそこにいたんだ？」

「今さっき...」

憔悴しているように思え、響はドアの前から動こうとしないサラに近寄った。

「どうしたんだ...？ずいぶん濡れてるみたいだ」

髪も服も靴もしっとりとして湿っているように見えるサラは、寒さからなのかカタカタ震えている。

「雪が、かなり降っていたから...」

雪が降っていたとしても車で出かけたサラが濡れるのはおかしい。響はサラの肩を両手で抱き、とりあえずストーブの前まで誘導した。触った感触はやはり濡れていた。

「レイごめん...。話の邪魔しちゃった...ね」

と、サラはレイを見る。レイはサラと響を見比べて、何か変な勘ぐりをしたようだ。

「お、俺もう帰るから...！」

と、慌てて店を出て行こうとする。

「おい、レイ？話はもういいのか？」

「う、うん...！じゃ、また明日！サラ、おやすみ！」

妙な気を使い落ち着きなく出て行ったレイに、響は苦笑するしかない。

「なんだよ、あいつ...」

「ほんとに...、レイって昔からああいう子で...」

言葉ではそう言いながらも、心ここに在らずでどこか歯切れの悪いサラに響は首を傾げる。

「サラ？」

「ヒビク、ちょっと呑まない？付き合ってよ」

「呑まないって...、まだ一応営業中だぜ？」

客はひとりもないけれど、と響は付け加えた。

「閉めちゃっていいよ...」

響はサラの言うとおりの看板の明かりを消し、ドアに鍵をかけて店じまいをした。その間にサラはビールをカウンターに用意していた。

仕草が乱暴なぐらいに投げやりで、ヤケになっているようなサラの態度が気になった。そんなサラから目を離さずに響はカウンターの椅子を引く。グラスになみなみと手酌したビールをサラは一気に飲み干したあと、ビール瓶を響の前にドンと置いた。

「ごめん、先にやらせてもらっちゃった。適当についで飲んで。バイト代から引くなんて言わないから」

じゃ、遠慮なく...、と響は控えめに自分のグラスにビールをついだ。するとすかさずサラはまた瓶を取り戻し、さっきと同じように自分のグラスに琥珀色の液体をつぐ。

ほとんどコップ一杯で顔から首から真っ赤になっているサラに、大丈夫なのか？と思いつつも、

響は何も言わずに付き合った。

ただ呑むだけ。ほとんど会話は無し。

そんな時間がしばらく過ぎて、500mlのビール瓶が二本空になった頃、

「ヒビクがいてくれてよかったわぁ。マークじゃお酒の相手にならないしね～」

サラは突然言い出した。話の相手になるわけでもなく、ただここに一緒にいて呑んでいるだけで自分もさしてサラの役に立っているとは思えないが、

「それはよかった」

とだけ返した。

サラはたぶん....

——これ以上飲んだらヤバイんじゃないかねえか...？

息が上がっているし呼吸が苦しそうだ。普段ここで陽気に呑んでいるロボスターマンたちとは明らかに違うサラの呑み方だ。

新しい瓶を持ち出そうとしたサラを、

「俺はもう十分だぜ？サラもやめとけよ」

と、響は止めた。それでもサラは新しい瓶を開けようとする。その瓶をサラの手からさり気なく取り上げ、

「明日、客に出す分がなくなっちまうぜ？」

と言うと、サラも限界だったのか、そうだねと呟きカウンターに突っ伏した。

「ごめん、ヒビク～。ほんとはあたし、お酒ダメなのよね～。あ～苦しい～」

でれんと両手をカウンターの向こう側に落としてサラは唸った。その指の先までが真っ赤だ。響はカウンターの中に入り、水を飲んで赤く火照ったサラの手に握らせた。

「それ飲んで少し休んでろよ」

「...ここにいてくれる？」

「ああ。いるから」

顔を上げ安心したように微笑んで、サラは水を飲み干してから再びカウンターに突っ伏した。

ずいぶん長い時間サラはカウンターにうつぶせていた。顔をすっぱり隠しているから起きているのか眠っているのかわからない。

響はサラの隣の椅子に座り、ただサラの背中を見つめていた。微かに震えているように見える肩はいつもよりもずいぶん小さく見えた。

夜も更けて気温は一段と下がり、たったふたりしかいない広いフロアは暖房ひとつでは肌寒い。サラの体はまだ湿っているようだし眠ってしまっているとしたら風邪をひく。

「サラ...？」

声をかけると、

「...寒くなってきたね」

顔を上げないままサラは答えた。

「温度上げる？」

サラが頷いたので、響はフロアの真ん中で細々と燃えていた石油ストーブの火力を強く設定しなおした。

部屋が暖まるとサラはようやく顔を上げた。本当にアルコールはダメだったようで、真っ赤だった顔が今は青白く憔悴している。

「お客さんたち、こんなの毎日飲んでよく生きてるわ...」

サラは込み上げる息のカタマリを飲み込み深呼吸を繰り返した。

「それでよく酒場の女将やってるな？」

だってあたしは出すだけだもん、とサラは言い訳する子どものような口調で返す。

何かあったらしいというのは様子を見て分かったが、落ち着いてみると案外普通のサラに響は少し安心した。酒の力を借りて忘れてしまいたいと思う出来事が起こることは誰にだってある。そういうことがサラにあっても別に不思議ではない。たまたまサラはアルコールがダメな体質でそれをやってしまっただけのこと。たまたまその場に自分がいたからそんなサラを見ただけのこと。それは昨夜のことも、雪の中車を走らせて出て行ったことも含めて、ただそれだけのことで別に大事ではない。普通のありふれた日常だろう。

さっき飲んだ三杯ほどのアルコールはすっかり冷めていた。響は再びカウンターに入りサイフォンに火を点けた。

「でも無茶な呑み方したよな、サラ。飲めない酒流し込んで、急性アルコール中毒になったらどーする...、」

コポコポと上がってくる湯をかき混ぜながら、何気なくサラを見て響は息を呑んだ。

「...サラ」

サラの顔はすでに涙でぐちゃぐちゃになっていた。小刻みに震える肩が痛々しいぐらいだ。いつから声を出さずに泣いていたのだろうか。

「何が...、」

...あったんだ、と訊ねたい気持ちが走ったが、昨夜からのサラの態度を思い起こし一瞬の間に躊躇した。

干渉せず無関心を装いだ泣かせておいた方がいいのか...、と響はサラを見つめながら自分のとるべき行動に判断がつけられない。まるで、母を泣かしてしまった子どもがどうしたらいいのかわからなくなっているような自分が情けなかった。

「サラ...」

もう一度名を呟くと、

「ポートランドに行ってきたの...」

鼻にかかった声でサラは言った。

「ポートランド？」

いつもサラが仕入れに行く街よりも、さらに30マイルほど南下した大きな街だ。

「...刑務所に」

「けい...む...しょ？」

思いも寄らなかったサラの答えに響はどう返したらいいのか困惑した。

「5年前までここで働いてくれてた人が服役しているから」

「5年前...」

「あたしの婚約者...」

響の目は、自然にさっきまで手にしていたサククスに向く。何年か前までここで働いてた人が吹いていたとレイが言った...

「あのサククスの持ち主...か...」

サイフォンに珈琲が出来上がっていた。響はふたつのカップにそれを注いでひとつをサラに差し出した。

「...ありがとね、ヒビク」

サラは涙をぬぐった。いや、と呟いて響は自分のカップを手に持ち、カウンターの中からサラの隣に戻った。

「この店はあたしの両親が残してくれたものだけど、彼...ロビンは両親の代からここで働いてたんだ。両親が亡くなってあたしがここをやるようになってからもずっとあたしや小さかったマークを助けてくれてた」

サラの目も片隅のサククスを見つめている。

「あたしたちは自然に想い合い受け入れ合って、結婚したら宿だけをたたんで二階を住まいにして、このフロアをもっと広げて大きくして、生演奏をやったり聴いたりできるようなお店にしたいねって夢を持ってた」

「それが、サラの夢...」

いつか、夢が叶いそうだとはいかんだように笑っていたサラと、今ここで涙に濡れたサラとは別人のようだ。

サラはうん、と頷いた。

「あたしとロビンの夢...。ロビンはずっとジャズをやってたから。サククスを吹いてたの」

持ち主のないあのサククス。

ずっとあの場所に置かれ忘れられているようでもそれはいつも磨かれていた。ロビンの帰りを待つサラが、愛する人と夢を共に胸に抱きながら毎日磨いていたのだ。

強く主張はしてなくても、いぶしたような鈍い輝きを放ち、さり気なく存在感を醸し出し、ここでずっと持ち主の帰りを待つサククス。

一度目にとまれば、その輝きに囚われたのは....

——愛（おもい）が見えたから、なのか....

「サラ...」

「あの場所に小さなステージを作っていつかバンドを入れて自分もここで時々演奏したいって話していた。ふたりでお店を改装するお金を貯めてたの。でも5年前...、ロビンは突然、貯めたお金を全部持っていなくなっちゃった」

「な...?! ふたりの、夢のための金を？」

うん、と頷いてサラは珈琲を一口飲んだ。

「その時はどうしてなのかどこに行ったのかわからなかった。でも、何週間かしてロビンがよその町で逮捕されると連絡が来た」

「彼は何を...」

「彼、お金を騙し取られたの」

「詐欺にでもあったのか」

サラは首を横に振った。

「ロビンを騙したのは彼の友人だった人。投資の話を持ちかけられたらしいけど、詳しくはロビンも話してくれない。ロビンはあたしや小さかったマークのことを考えて早く夢を形にしなきゃと焦っていたのかもしれないし、もしかしたら投資なんて嘘で、ただ友人を信じて貸してしまったのかもしれない。ロビンってそういう人だから」

どっちにしても人が良すぎる、と響は思った。だが、もちろん口には出さなかった。

「ロビンが騙されたと気づいたときには、お金はもう返ってこない状態になってしまって、その友人もそのまま逃げてしまったの。ロビンはその人を追いかけて、追い詰めて...」

無抵抗でいる相手に暴行し大怪我を負わせたらしい。友情、夢、育んできたもの全てが消え去り、怒りの矛先がそれらを奪った相手一筋に向いてしまったわけだ。

「彼は罪を犯したわ。でも、あたしにとってのロビンは変わらない。どんなロビンでも彼を愛してるし彼が必要だってことは全然変わらないから...、」

5年の間、サラは店の定休日に合わせてポートランドのロビンに面会に行っていたらしい。

「このことはマークたちは知らないの。事件が起こったとき、彼らはまだ小さかったからあたしも町の人たちも何も言ってないから」

定休日に仕入れに行く時は決まって帰りが遅いサラは、仕入れの街よりもさらに30マイル先の街にいる恋人に会いに行っていた。たとえそれがつかの間の面会でも、愛する人の顔を見て同じ時間を共有し、そこで活力を得て、だから帰った時はゴキゲンでレイたちにも幸せな気持ちをおすそ分けしていた、ということだろう。そして自分はいつこの間、サラのそんな様子を見たばかりだった。

あの時はもうすぐ叶うはずだった夢。

それが今、なにがこんなにも辛そうにサラを泣かせているのか――。

サラはカウンターに置いたままのバックの中から皺になった手紙を出した。

「先週彼からこれが届いた。もう俺を待つな、忘れて新しい人生を生きろって書いてあった...」

サラはまた涙声になっていく。

「この間会った時はもうすぐ刑期も終わるねって話していたばかりだったのに、考えれば考えるほどこの手紙の意味がわからなくなって、日にちが経つにつれていてもたってもいられなくなって...」

「それで今日...」

サラは頷き、

「...だから行ってきた。彼に会いに行った。けどロビンは...」

突然サラは両手で顔を覆い、そのままカウンターに伏せた。

「ロビンはどうしたんだ...?!」

サラは首を横に激しく振るだけで言葉を返すことが出来ない。

「...まさか、釈放になっていた...のか...?」

うんうん、とサラは何度も頷く。

「5年間彼を待ってたの。彼が帰ってきたらまたふたりでやり直せると信じてた。だからあたし、今までやってこられたのに...! その日がもうすぐそこにあるって信じていたのに...!」

肩をしゃくりあげながら、それでも爆発しそうな感情を必死に抑えるサラ。

「ポートランドの町中を探してきたけど行方はわからない。街も森の中も探し回ったけど何処にもいない...! あたしに何も言わないで消えてしまった。もうロビンは帰って来ないつもりなのよ...! もう...!」

行き場を持たない感情に縛られて、どうすることも出来ない想いに声を上げることも出来ず、髪も肩も全身を大きく震わせているサラを響はただ見つめることしか出来ない。

「サラ...」

愛する人との未来が絶たれた瞬間がどれほどの絶望をもたらすか、痛いほど知っているというのにどんな言葉をかけたらいいいのか、その言葉が探せない。

自暴自棄になり、ギリギリのところにいる自分を救ってくれたのはサラだ。その恩人が、かつての自分と同じ絶望の中でむせび泣いていても、自分には何もできないのか。

ロビンという人物は知らないが、サラの中に染み付いている思いからどんな人間だったかを感じ取ることはできる。

ただ自分が許せないだけだ。

帰ってくれば元通りの生活がここにあり、待っている人がいることも知っていながら、それに甘える自分が許せない。怒りの矛先は、なにもかもを奪った相手にではなく、軽率で甘かった自分自身に向けるべきだったということ、きっと今のロビンは痛感しているはずだ。

だからこそ、友人に怪我を負わせたこと、サラと育んできたものと信頼を裏切ったこと、自分が犯したさまざまな罪、それらの心の淀みは刑期を終えようとも、たとえ無理やり沈めようとしても消えはしない。消せない現実苦から逃げたいと思っている。そして、逃げている。

――俺も同じ...。

自分自身から逃げて今ここにいる。

苦しいのはピアノでも音楽でもボストンでもない、自分自身の中に渦巻くさまざまな闇。その現実から逃げたくてここにいる。理由をこじつけてここにいる。

「サラ...」

今、夢も希望も愛する人も失ったこの人を、心の底から――。

慰めたいと思った。

悲しみ苦しみを癒してあげたいと思った。

サラに触れて震えている身体を包んであげたいと思った。

だが、今、自分がそれをしたところでサラの心が癒えるとは思えなかった。

――音楽を...、ピアノを...。

弾きたい。

今、この人のために。

どんな言葉をかけるよりも、抱きしめるよりも音楽で――。

響は静かに立ち上がりキーボードに向かった。鍵盤にスタンバイした包帯を巻いた左指が哀しかった。こんな時にこの指は動かないのだ。これほどまでに心の底から誰かのために音楽を奏でたいと思っているのに。

今初めて指の怪我を悔やんだ。無茶をしていた己を恥じた。今すぐにでも完治させたいと祈った。

全米デビューのためじゃなく、契約のためでもなく、アイツに勝つためでもなく、たったひとりの人を慰めたいから。

――俺の音楽で...。

ロビンが吹いていたジャズはどんな曲だったのだろう。今までも何度かあのサクスが奏でたであろう音楽を想像したことがある。

スッと目を閉じてみた。そして思い描く。過去の『Fermata』でのサラとロビン。明るいサラと、おそらく無口ではにかみ屋ではなかったかと想像するロビンが過ごしていた優しい時間の数々を。

ジャズをやっていたというロビンが吹いていたであろう音楽は――。

響が弾いたのは『When You Wish Upon A Star』だ。

不自由な左指はただベースをとるだけの、ほとんど右手だけで弾くシンプルな演奏だ。弾きながら浮かんでくるのはこの土地と店と優しく流れる時間の中で、見つめ合い想い合い受け入れ合

っていたというふたりの姿だ。『Fermata』が記憶しているロビンのサクスが自分の弾くピアノの上に重なって聴こえるような気がした。

「ヒビク...」

サラは顔を上げてキーボードの前に座る響を振り返った。

「それロビンが好きでよく吹いてた曲...」

そうか、と響はひとこと呟いた。

今頃ロビンは、今の自分と同じようにどこかの知らない町で自分の居場所を探しているのかもしれない。サラを忘れていてもなければ心が離れているはずもない。一度見た夢を忘れるはずなどない。サラが、毎日ロビンのサクスを磨き続けて来たように、ロビンも自分がここに残したサク스에想いを馳せているはずだ。

サクスだけではなく、サラやマークやこの『Fermata』にある時間そのものに――。

――だから、またいつか...。

今は居場所を求めて彷徨っていても、いつかきっと...。

不器用な『When You Wish Upon A Star』が終わった。

サラは涙を微笑みに戻して拍手をしてくれた。どんな拍手よりも、この拍手と微笑みに満たされる思いがした。ありふれた称賛はなくても、サラの想いが真っ直ぐに胸の深層まで届き響いて包まれて――。

戻ってきた確かな感覚と想いをかみ締め、キーボードから離れサラの傍らに立つと、

「ヒビクはただの旅人じゃないよね...?」

と、サラは響を見上げた。

「...ああ。俺は自分の現実から逃げてきた」

「帰るところはあるの?」

響は再び椅子を引き、カウンターの上の冷たいカップを両手で包みうつむく。

――俺の帰る場所は...。

「――ある」

「そっか。ヒビクのこと、初めて見た時から都会的な人だなんて思ってたよ」

サラはいつものようにケラケラ笑った。もちろん無理をしているに違いない。だが、もうサラも涙は沈めたようだ。

「俺、都会的...か?」

「うん。いい男だしこの辺にはいないタイプよね。でも寂しそうでどこかで無理してる感じに見えたな。放っておけないっていうのかな？見ていてあげなくちゃって思った。この人に余計なこと考えさせちゃうとマズイかもって...」

「なにそれ...？」

「自分を傷つけそうな気がしたの。そういう鋭さと投げやりな空気が漂っていた。違った？」

「いや...、」

しっかり見破られてたのね、と響は笑い、

「...夢をボストンに置き去りにしてきた」

と、呟いた。

「だから。俺が帰るところは...、」

日本じゃなくて...、

「ボストンー」

——俺の夢。あの時、田村に言い切った夢は...、

——親父を越えるピアニストになる。

そしてヒカルが言った言葉は、

——ヒビクはここで夢を叶えて。

その時、自分が胸に刻んだことは、

——ここで一から、まっさらな俺からのスタートを切り出す。

「うん。そうだよ。夢は捨てちゃダメ...」

「でも、俺の見た夢が一番大切な人の夢を壊しただけだった」

夢もヒカルもこの手の中に収め、アイツの目の届かない宝の箱に永遠に隠してしまおうと、強引に行動した結果——。

「...そんなちっぽけな男を、その人は心の底から愛してくれていたというのに...さ...」

「どんなヒビクでも、その人にとってはたったひとりの愛する人だったのよ」

響はうつむく。

——世界中の誰よりも愛してるたったひとりのヒビクだから。

「ヒビクこそ私のShine...」

「え？ Shine？」

「...その人が最後にそう言ってくれた。そいつのこと、俺はずっと俺に輝く光だって思ってたけど...」

「ヒビクこそがその人にとっては光だったってことね。ステキだわ。そんなふうにお互いを想い合えるなんて」

わかっていたつもりだった。つい最近まで、ヒカルの想いは全部わかっていたつもりでいた。

でも、それはきっと頭の中でだけだ。心の底では何も信じていなかった。いつかアイツに奪われてしまうのではないか、アイツが持っている、あのギャラリーで見た輝きに自分が負けてしまうのではないか、そのことだけが一番前にあり、恐れて妬いて、それがヒカルの愛も音楽さえも穢（けが）していた。ジェラシーや焦りや独占欲が醜いわけじゃない。ヒカルや音楽そのものや描いた夢に対して冒瀆的だったことが一番の穢れ。

沈めても消えはしない淀みを浄化してくれたフィルターが、この町でありサラやレイたちであり『Fermata』であり、ここで過ごしてきた時間であり...。

だが、フィルターに残る淀みの屑たちを始末できるのは己のみ――。

「ねえ、ヒビク」

うつむいて、ただカウンターの木目の模様を見ている響にサラは言った。

「レイたちはこの町は人に無関心だって言うけれど、あたしはそうじゃないと思うんだ。町の人たちが毎夜ここに来てくれるのは、ただ野球中継を見て騒ぎに来るんじゃないんだよ。みんなは何も言わないけどあたしを見てくれてる。気にかけてくれてる。お店の維持に協力してくれてる。干渉していないようでロビンが帰ってくるまであたしやマークが困らないように見守ってくれてるの」

響は頷いた。サラの言葉が心に染み渡る。

ライブハウスのマネージャーもそして客たちもきっと、サラが今言ったような想いで見守ってくれていたのだろう。

あの街で、『水曜日の雨人』からずっと。

子どものかげに大人のふりをしてる危なかしいカザマ・キョウを。

羽を傷めて飛び立てずにいるカザマ・キョウを。

まるでわが子を見守るように...

「アメリカの端っこの名前も知られていないようなギリギリの町で、みんなそれぞれギリギリの思いで生きているんだ。だから言葉には出さなくても想いを分かち合ってるの。ゆっくりと時間が流れている町だからレイたちにはまだそれがわからないだけで、いつかあの子たちも自分の肌で感じる時がくるはずよ。そう思えたときに町に漂うフィーリング...っていうのかな？それがわかるんだと思うんだ。その温かさをあたしは彼らに自分自身で感じて欲しい。だから、今は思いのままにいて欲しい。いつかきっとわかる時が来るから」

そうだな、と響は呟いた。

音が全てを伝え合う。
演奏者も客席も。

無関心に見えてそうじゃない。
人の想いが輪になって流れているこの町。

抱きしめて抱きしめられて。
言葉の代わりに伝える想い。

たったひとり、そこにいる人のために奏でる音楽。
たとえそのひとりが愛しい人——ヒカルでなくても、聴いてくれるたったひとりがそこにいる
なら弾く。弾きたい。
響かせる。響かせたい。
その人の心の中に。

——それが、俺の...

カザマ・キョウの音楽——。

「大人にだって...色々あるんだよ、ヒビク」
サラはうつむく響の顔を覗き込むようにして言った。
「...俺は大人じゃなかったから...さ」

——今までは...

「ここは、街自体がそのままで音楽みたいだな...」
響は天井を見上げて言った。熱いものが零れ落ちそうだったから。
「ロビンも昔、そんなこと言ってたな...」
サラは少し寂し気に笑った。

11月28日。

メイン広場の公会堂には郡内四校合同生徒会が催すバンドコンテストのための特設ステージが設置された。

マークやボブは昨夜からこの設営にかかり、さっきリハーサルが始まるとの電話が響のところにいった。

フェスティバルは毎年この町が感謝祭の日に催しているお祭りだが、バンドコンテストは郡内四町のハイスクールが今年初めて催すものだ。そのため、他三町からもフェスティバルのために人々が集まり、いつも閑散としている街は嘘のように活気に満ち溢れている。

今日は街全部が休日で『Fermata』も休み。朝はゆっくりと珈琲を飲み、サラと話をしてから響はコンテスト会場に向かった。

辺りは銀世界。

昨日は一日降り続いていた雪も今日は止み、柔らかな冬の陽射が真っ白な世界に反射している。遠くに見えるレンガの展望塔もクリスタルの衣装を纏ったように光の線を放ちながら今日もそびえ立っている。

振り返り、塔を見上げた。

初めてこの町に来た日、意味もなくあの塔を目指して歩いたことを思い出した。そして、『Fermata』に出会い、サラやレイたちと出会い、今これから――。

再び前を見て歩き出す。公会堂の赤茶けた屋根が通りの向こうに見えてきた。

メイン広場に飾られている、氷で造られたいくつものオブジェの周りには人だかりが出来ていた。

街で営まれているショップの出店がフリーマーケットのように立ち並び、凍えるような冷たい空気の中でも人々は1年に一度のフェスティバルを楽しんでいるようだ。

公会堂はまあい広場の突き当たりにある。どこかの町の出場メンバーたちが横の通用口から、滑るなよ、足元に気をつけろ、と声を掛け合いながら生き生きと楽器を運び入れているのが見えた。

ホールに入ると、バンドたちが順番にリハーサルをやっていた。四町から12バンドが出場するライブコンテストで『ビクトリー』の出番は7番目。今リハーサルをしているのは5番目に出場するバンドで、歌っているのはトムだった。

なるほど。確かに癖のある歌い方だ。若者特有の荒っぽさの中に、力づくで聴衆たちを惹きつけてやろうという自信がみなぎっている。バンドたちの演奏もそうだ。『ビクトリー』とは勢いがまるで違う。

「さすが、ド下手って言葉が出るだけはあるねえ...」

やや、息切れしているようなトムのボーカルを聴きながら、響はステージの袖で自分たちの順番を待っているレイたちと合流した。

そして普通にリハーサルをした。

いつもの練習どおり何も問題なかった。

レイのギターは普段より増して冴えているし、ベースとドラムの息も合ってる。心配だったキーボードもこの4日間のアン（陰でレイ）の頑張りでもう大丈夫。ボーカルには最初から問題など無い。無いはずだったのに...

「ヒ、ヒビク...！？こ、声が出ないって、マ、マジ...っ！？」

「.....マジ...」

響は掠れてほとんど息だけに近い声で答えた。本番寸前になって、突然響の声が出なくなったのだ。

「どーして！？リハじゃバリバリ歌ってたじゃん！？突然声が出なくなるなんてことがあるのかよ！？」

マークは半狂乱になって喚く。

「...んなこと言ったって...出ねーもんは出ねーんだよ...」

掠れた声で喋った後にケホッケホッと響は乾いたような咳をする。

「新種の風邪にやられちゃったのかも.....。この町やたら寒いし、俺ヤワだし...」

「どどどどーすんだよ、俺たち?!ヒビク、飴なめて湿布して声出して!何とかして歌って!」

「ムリ」

響はあっさりと言った。

「こんな声じゃ余計な騒音になっちまう...ぜ...。けほっ...」

「そんなあ〜!ここまで来て俺たち辞退かよ?!」

バックヤードで大騒ぎをしている間に、ステージの方ではトムのバンドが終わり次のバンドが始まっていた。『ビクトリー』の出番はこの次だ。

「辞退なんかしないでいいよ。ボーカル無しで出ればいいさ」

え?!と一同は文字通り固まった。そしてその後は当然、戸惑いを隠せないレイたちはその場でパニックだ。あんまりだ、今までの苦労は何だったんだ、一緒にコンテストを盛り上げるって言ってくせに、そうだそうだ、と彼らは不満を響にぶつけた。

その間にも時間は無情に過ぎ、とうとう前のバンドの演奏が終わってしまった。空になったステージは『ビクトリー』の出番を待つだけになっている。

「ボーカル無しのロックバンドなんて聞いたことねーよっ!!」

と、マーク。

「お前らがその第一号になりゃいいじゃん?案外受けると思うぜ...?けほっ...」

響は無責任に返す。

「ア、ア、アメリカーのいい加減男め！」

と、レイ。

「だから言っただろ？俺はいい加減を絵に描いたような人間だって…。け、けほっ」

「そーゆー問題かよ！？」

「こんな人を信じるからいけないのよ…。これはあたしたちの自業自得だよ…」

アンが冷ややかに言った。

「そりゃねーぜよ、アン…。声が出なくなっちゃったんだからしよーがねえだろ…？」

響はカラカラの声で息をするのも苦しそうにする。

「だって、俺たち…、この日のためにバンド組んで…勉強もそっちのけで練習して…、ガキの頃から遊んできたトムとも大喧嘩して…払ってきたリスクが大きすぎるんだよお…」

ほとんど泣きべそをかきながらマークが訴えるのを、響は大丈夫、大丈夫、と聞き流し、レイたちの背中をポンポンと次々叩き、

「ほーれ、行って来い！」

と、ステージに押し出した。

前のめりに転びそうになりながらレイ、マーク、ボブ、アンはステージに躍り出た。

マーク！レイ！とサラや『Fermata』に集まるロブスターマンたちが客席のほうで大きく手をふり歓声を上げた。

「ドカンと一発決めやがれっ！！」

と、場違いな声援を送る応援団もいる中、レイはおどおどとマイクを持ち、あ、あ〜、と、まるでマイクテストのような声を出した。

「何やってるのよ、あの子…」

と、サラが呆れたような心配したような様子で呟くと、

「ほんと、何やってんだか…」

その隣で響が相槌を打った。

「…ヒビク！？あんたこそ何やってんのよ、こんなとこで！」

思いも寄らない人が横にいてサラは飛び上がった。

「あんた、歌うんじゃないの！？」

「急に声が出なくなっちゃって…」

「出てるじゃないっ！！」

あはは、と頭をかきながらここで笑う響と、ああ〜とマイクテストをするステージのレイを見比べてサラは頭を抱えた。

「えっと…、」

レイはやっと喋り始めた。

「急にボーカルが声が出なくなりステージに上がれなくなりました…。たった今言われたことで僕たちも慌ててしまってるんですが…、ずっと今日のために練習をしてきたので、とりあえず演奏だけします…」

自信なさそうにレイは小さな声で話す。なんだあいつら、大丈夫なのか？と会場からガヤガヤと声がる。

「なっさけねーなあ。本番でこれかよ？トム、抜けて正解だったな！」

と、誰かが大声で言った。

ドラムのスティックが鳴り、『ビクトリー』の演奏が始まった。

曲は響が最初に演奏させた『デンジャー・ゾーン』だった。突然の事態で動揺しているレイたちは、初めての時と同様、音がバラバラでまるで演奏になってないスタートだ。ボーカルがないから余計に聴き辛く会場は白けた。

「...あんまりよ、ヒビク」

サラは恨めしそうに響を睨んだが、響は無言で彼らを見守る。

だが、そのうちにレイたちはステージの上で同じ窮地に立ち、不安を共有している仲間たちとアイコンタクトを取りながら今まで練習してきた感覚と仲間との距離を取り戻したようだ。緊張と不安でコチコチになっていた体も徐々に柔軟を取り戻し、目と目で言葉を交わしあいながら互いの音を気遣うレイたちのボーカルがない演奏に、会場の観客たちが合わせて歌を入れ始めた。

――よし、いいぞ。

ニヤッと笑い、響はサラやロブスターマンたち『ビクトリー』応援団の元から離れ別の場所に移動した。

そして――。

「こんなところで歌ってねーで、あそこ行ってヤツらを助けてやれよ」

舞台袖でリズムを取りながらじっとステージを見つめ、小声で歌っているトムに響は言った。

ああ？と、トムは怪訝な顔を響に向けた。

「ヤツらのレパトリーはわかってるんだろ？」

「あんた、誰...、」

と、言いかけてトムは、いつか自分が殴り倒した金髪男だと気がついたようだ。あ、と間拔けな声を出した。

「行ってやれよ。あいつらお前の仲間だったんだろ？」

「あんなド下手なヤツら仲間なんかじゃねーよ」

「ド下手かどうか、一緒にやって感じてみる。ヤツらの演奏は上手くはねーけど、お前に息切れはさせねーんじゃないかと思うぜ？」

息切れ...、とトムは呟いた。

「まあ、俺も最初は歌っててはあはあしちまったんだけどさ。あいつらういぶん走ってくれちゃったから」

トムは言葉を返さずにステージを見つめる。

「音楽ってのは人を結びつけても違（たが）うものじゃないはずだぜ？」

と、響は真っ直ぐにトムを見つめながら大真面目に言い切った。振り返り、ポカン、と響を見つめるトム。

「……なーんてな！」

響はトムの頭をくしゃっと撫でてニカッと笑う。チッ、しょーがねえっ！と舌打ちをしてトムはステージに飛び出した。

突然のトムの乱入に演奏をしながらレイやマークたちは顔を見合わせた。

「なんだよ、トム！今さら古靴に戻るってのかよ?!」

今のトムのメンバーたちが袖からステージに向かって怒鳴った。

「おいおい、トムはただ音楽仲間の助っ人に行っただけだろう。窮地のあいつらのために今自分ができることを自分の音楽でやってるだけだぜ？」

響の言葉に、文句を言ってた連中は、う…と呻いて黙った。

トムはマイクを取り、演奏の途中からボーカルで加わった。

懐かしい仲間で構成された『ビクトリー』。演奏は徐々に力が蘇り、その演奏に合わせてボーカルにも熱が入り、そして会場からは大きな拍手が沸く。『ビクトリー』のステージは、バンドと会場の大人や子どもたちが一緒になって盛り上がった合唱ライブになっている。

応援団の元に戻り、本来ならステージでやっているはずのノリを、ロボスターマンたちと一緒にここで展開している響に、

「…これを狙ったのね、ヒビク…」

と、サラは呆れる。

「いやあ、ほんと、さっきは声が出なくて…参ったなあ！」

と、響は笑った。

レイがステージの上から客席に向かってガッツポーズを送った。

真っ白な世界の中にいるレイに観客たちの顔は見えないはずだ。それでもレイのガッツポーズはまっすぐに響の元に届いた。

やがて全バンドが終了し、コンテストの結果発表の前に審査員からは、『ビクトリー』の審査対象失格の告知があった。理由は正規の登録メンバーでコンテストに参加しなかったから、ということだった。

レイやマークたちは不平不満を言うこともなくただ唇をかみ締める。そんな元仲間たちの肩を、トムはポンと叩いて慰めた。

その審査員の決定に不平不満の声を上げたのは会場の観客たちだ。大人も子どもも声を揃えて『ビクトリー』の助命を訴えた。それでも審査規定に例外は認めてもらえず、『ビクトリー』は失格のまま優勝は隣町のバンドがさらって行った。

「でもさ、俺たちオーディエンス賞を取ったってことだよな?!」

マークはしょんぼりと肩を落とす仲間たちを見回しながら叫んだ。

「そんな賞ないし...」

アンが、仏頂面で言い返す。が、

「いや、これでいいんだよ！」

大人も子どもも巻き込んでみんなで盛り上がりやろうというレイたちの目標は、観客に支持されたことで十分に達成できたわけだ。

「な? そうだよな、ヒビク? お客さんが俺たちの失格に文句垂れてくれたんだぜ? 『なんちゃってビクトリー』じゃねえ、正真正銘の『ビクトリー』でしょ、これ?!」

「ああそうだ。マークの言うとおりに！」

響がニカッと笑うとレイもやっと、

「そうだな! 俺たち、優勝を狙ってたんじゃないもんな! ハートの勝利だよな！」

と、笑顔になった。

「お前ら変わったな...。驚いた...」

「そう思うかよ？」

「ああ。別のバンドで歌ってるみたいだった」

トムはかつてのド下手な『なんちゃってビクトリー』からは思いもつかないほどのレイたちに、心底驚いたようだった。懐かしそうな穏やかな眼差しでレイたちひとりひとりを見回す。

だが、

「行くぞ、トム」

という、自分のバンドの仲間たちに誘われるまま、彼らと一緒に会場を去って行ってしまった。

「トム、行っちゃうの!？」

アンの切なる声にも振り返らずに。

うつむくアンの肩にレイがそっと手を置いた。

「――さてと。コンテストも無事終了、これで俺の役目は終わったわけだな」

...と、響はそのレイとアンの肩に自分の両手を乗せた。

「...ヒビク？」

レイは息を飲み込んで響を見つめた。

マークとボブも顔を見合わせた。

何かが起こる前触れをみんなが感じ取っている...、そんな空気が流れた。

――フィーリングだな...。

自分自身も彼らに流れる空気を察知して響は思う。昔、いつも感じていた空気だ。まるで、田村たちがそこにいるような――。

「……じゃ、俺は帰るから」

誰も言葉を発しない空気の中に響がひとこと投げ込むと、

「帰るってどこへ...？」

マークが不安気な目を響に向ける。

「ボストンへ...？」

呟いたレイの言葉に、マークとボブは黙って顔を見合わせた。アンは目を大きく見開き、

「ボストンっ...!？」

と、大きな声で叫んでから、飛び出した言葉を戻すように口に手を当てた。

「ボストンって何...? 『Fermata』と一緒に帰るんじゃないのかよ...？」

どうしたことだよ? と、動揺しているマークたちをレイは掌で制す。

――こいつ....

「知ってたのか？」

響はニヤリと笑いながらレイの茶色の前髪を指でパチンと弾いた。レイは、うん...、とうなずき、

「カザマ・キョウ...、それがヒビクの本当の名前だよね...」

と、茶色に澄んだ瞳で響を見上げた。ええっ! ? と叫んだのは後ろにいたサラだ。響が驚いて振り返ると、目を丸くしたサラが、顔からそばかすが飛び出してくるほどの勢いで叫んだ。

「カザマ・キョウって、ジャック・ベリーのあの?!」

「ああ。ジャック・ベリーのあの...。案外顔って知られてねーんだな...？」

うそー、うそー、とほとんどミーハーのように騒ぐサラをよそに、レイは響の真っ直ぐ前に立って言った。

「気になっていつかの...雑誌、見ちゃったんだ...」

あの雑誌ね...、と響は苦笑いで頭をかく。

「ヒビク、ずいぶん苛められてるみたいで言えなかった...。ごめん...」

レイはジェームスの記事を読んではしまったことに罪悪感を感じていたらしい。確かにいいことは書いてない記事だった。だが、

「レイが謝ることはないさ。あの記事はほとんど事実。俺はあまりにもガキすぎた...」

「ヒビクがガキだったら俺たちはどうなの...。ヒビクにはいろんなこと教わって、だからこそ俺たちはここであんなに盛り上がったんだ。トムと一緒にステージに立てたのだってヒビクのおかげだし、俺...」

あんなこと書かれるようなヒビクじゃないよ...、とレイはうつむく。

「いや、やっぱ俺はガキだったぜ？」

でも....

——お前らの中で`大人、やりながら、少しは本当の大人になれた気がするぜ...。

「帰るんだね、ボストンに...」

「ああ、帰る」

「これからもピアノ弾くんだね」

「ああ。弾くさ」

フーッと大きく息を吐いてからレイは笑った。そして、響に自分の右手を差し出した。その手を握り返す代わりに、響はレイを抱きよせた。

「サンキュー、レイ」

——お前に出会えて...。

「お前の想い、いつか必ず報われるときがくるぜ。俺の親友がそうだった」

レイの耳元で響は囁くように言った。

「...うん。トムはきっと戻ってくる。さっきのアイツからそう信じる事が出来た」

「...ばか。トムのことじゃねーよ」

「え...?」

レイを放し響は、どこまでも好きな子のキモチ優先なのね...、とため息を吐く。

「トムのことじゃないって...?」

「いや、そうだな。アイツは戻ってくるさ」

うん、とレイは笑った。

響はもう一度レイを抱き寄せポンと背中を叩き、マーク、ボブにも同じようにした。そしてアンにも同じように手を伸ばしかけて、途中で止めた。

「あ〜...、アン」

やや潤んだ目でアンは響を見上げた。

「お前にはこれをやる」

響がアンに手渡したのは、ただメロディーとコードが書いてあるだけの一枚の楽譜だった。

「セブンスもディミニッシュも使ってねーから簡単だぜ?」

うん...、とアンは楽譜に目を落とした。

「ドラムとベースは夫婦の関係、ギターと鍵盤も夫婦の関係ってのがバンドの基本。知ってたか?」

「知らない...」

そーなのか?とマークやボブも顔を見合わせた。

「ドラムとベースってのは聞いたことあるけど、初めて聞いた...」

と、レイ。

「あれ？知らねーの？！ギターと鍵盤も夫婦なんだぜ？俺の親友はそれでほんとの夫婦になっちゃったんだからな」

と、響はレイにウィンクを飛ばした。言葉の意味が飲み込めずにいるレイは、ただ首をかしげて間が抜けた微笑を響に返すだけだ。

「アン」

アンは、はい、と響に顔を向けた。

「この曲はレイとあの展望塔に上った時、あそこから見た町の色がイメージで出来た曲。

『Fermata』ってタイトルがついてるけど気持ち的には『安らぎの場所』ってところかな」

安らぎの場所ですか...、とアンは呟く。

「レイと一緒に観た風景...ってのがポイントなんだけど、まあ、それは今すぐにわかんなくてもいいさ」

は？と、アンは首を傾げた。

「いや...、とにかく、これをアンに弾いてもらいて一な、俺は。レイと一緒にさ」

「わかりました。練習します...」

響は満足したように頷いて、アンを肩を抱いた。そして思い出したように、

「それからこれ、返さなきゃな。名前消しとく暇なかったけど...」

と、ジーンズの後ろポケットにつっこんであったトムのバンドスコアをアンに渡した。

アンは一度スコアを受け取り、それをまた響の手に戻した。

「これはヒビクにあげる...」

「あれ？いいの？」

うん、とアンは頷いた。

「これは...あたしたちとここでやったことをヒビクが忘れないために...、記念にあげる...」

アンは潤んだ目を誤魔化すように、何もない天井を見上げた。

「...どーしてこんな人入れたのよ、レイ！ってアンに怒鳴られたことは一生忘れねーだろなあ...」

「う...、最後まで意地悪なヒビク...」

「...はっ！高校時代は意地悪なヒビク先輩って、アンみて一な可愛い後輩によく言われたぜ...」

響はそっとアンを撫でた。昔、ヒカルやあかねにやっていたように一一。

◇

いつの間にか粉雪が舞っていた。もう薄闇に包まれ始めた町に明かりがポツポツと灯り出した。

。公会堂の出入り口はバンドコンテストの後片付けをする出場者たちやハイスクールの生徒たちが、忙しそうに行ったり来たりと出入りを繰り返している。

そんな慌しい流れの隅で響は立ち止まった。

「ヒビクが行っちゃうと寂しくなるな」

出口まで響を送ったサラが、そばかすの顔を少しだけ曇らせて響を見上げた。

「あの子たちも...」

「あいつらは大丈夫さ。あいつらのフィーリングってヤツをちゃんと掴んでるし。そこんところは俺、ちゃんと仕込めたと思うぜ？」

と、響は笑った。サラは、それは間違いないよ、と答え、

「ボストンに戻ったらどうするの？」

と訊く。

――ボストンに戻ったら...

「まずは医者に行く」

響は左指の包帯をサラの目の前に上げて笑った。

「コイツを何とかしないと何も始まらないからさ」

「そうだね。悪くなってなきやいいけど...」

「酷使したからなあ...。ペンキ塗りとか油ふきとかくもの巢取りとかさあ...」

「それは右手だけでしょ...？」

サラは心配気に響の左指を触る。響はあはは、と笑い、

「大丈夫。ここに来てからはほんと...左指(こっち)は無茶してない。サラがちゃんと俺を見てくれたおかげ...」

と、サラを安心させた。サラはよかった、と息をついて笑った。

「その後は、恩を仇で返すようなことしちまったライブハウスのマネージャーと客たちに詫びる...」

今、マネージャーからもらった言葉たちが血となり肉となって自分の中に脈打っている。嘘つきなピアニストを見守ってくれていた全ての人たちに真実のピアノを捧げることが、これからのカザマ・キョウがやるべきことだ。

現在（いま）、ピアノを聴いてくれる人たちを大事にしろ、といつかジャックに教えられたことがある。あの時はただ聞いていた言葉が、今、己の中にゆっくりと確実に染み込んでゆく。

芸術祭の日から、毎週欠かさずピアノを聴きに來てくれていた友人。

ニューヨークから3時間半の時間をかけてライブハウスに通ってくれていた、恋人を亡くしたという女性。

前々からチケットを買い求め、それぞれの思いでカザマ・キョウのピアノを聴いてくれていた全ての人たちの、そのひとりひとりの心に届き響き渡る音楽が奏でられるような、これからのカザマ・キョウ、に...

――.....ならないとな。

「お父さんには連絡したの？」

「...まだ。これからする」

「早く安心させてあげなね？」

ああ、と響は頷いた。

「世話になった...。『Fermata』に出会ってなかったらきっと俺はいつまでも迷ってた」

「そっか。そう言ってもらえると嬉しいな。あたしもお店も何もしていないけど、ヒビクのどこかに引っかかれたとしたら、ものすごく光栄」

何たって、ジャックのあのカザマ・キョウだし！とサラは付け足して笑った。

「お父さんによろしく言うておいてね！」

そばかすの中で瞳を輝かせながらちゃっかり言うサラに、響は思わず噴出した。

「サラのこともレイたちのこともみんな話すよ。俺の恩人たちだ」

「違うよ。ヒビクがあたしの恩人よ」

え...？と響はサラを見る。

「あの『When You Wish Upon A Star』、一生忘れないよ。あの時、あたしが一番欲しかったメロディーだった。あたしのため、あたしとロビンのためにヒビクが心の底から弾いてくれてること、ものすごく伝わってきて、ロビンがここにいるように感じた。何もかも信じられたんだ、あの時」

サラ...、と響は呟いた。

「あたしはロビンと一緒に見た夢を諦めない。きっとロビンもそうだと思う。どこにいてもきっと最後はここに帰ってきてくれると思う。だから、今まで通り彼の帰りを待ってる。いつまでも。ロビンが帰って来るまでいつまでも」

「帰るべきところに帰ってくるさ。あのサクソもいつか持ち主と再会できる」

うん...、とサラは頷いて微笑んだ。そして、

「これ」

白い封筒を響の手に握らせた。響が封筒を開けてみると、中には綴りになったシャトルバスの回数券が入っていた。

「サラ...」

「本当はもっと気の利いたものあげたかったのよ？でも、今朝いきなり今夜発つって言われたでしょ？今日は町中のお店が休みだし何も用意できなくてそんなものになっちゃった」

「十分気が利いてるよ、サラ。ありがたい...」

回数券を持つ響の手が震えた。

「それを使ってまた...来てね、ヒビク。いいえ、カザマ・キョウ」

「ああ。必ず来る」

「あたしたちもカザマ・キョウの...、ヒビクのピアノを聴きに行くから」

「その時は最高のもてなしをさせてもらうさ...」

うん、とサラが頷くと、響はステージの上で客にするような丁寧なお辞儀をしてみせた。

サラと『Fermata』とレイたちに心をこめて――。

『...風間先輩...っ！？』

電話の向こうで息も止まるぐらいの驚きの声が発せられた後、それはすぐさま、

『ヒビクか...っ！？』

懐かしい友の声に代わった。ヒビク、と呼ばれる響きがこれほどまでに染みこんでくる相手はこの世の中でヒカルと田村しかいない。

例えようもないほどの想いが込み上げてきて、しばらくの間言葉を繋ぐことが出来なかった。

『おい、何とか言えよ？今どこにいるんだ？こっちではみんな心配してたんだぜ？』

「...心配...？俺のことをか？」

『当たり前だろ？電話は繋がらない、手紙も戻ってきちまうで』

「そうか。悪かった...」

ここに友はいた――、と響は田村の言葉をかみしめた。

「今は田舎町の公衆電話から国際電話をかけている。けど、これからボストンに帰るとこだ」

田舎町？と田村。

「アメリカの一番端っこ。カナダとの国境の小さな町だ」

『.....そんなところで何やってんだ？』

「ちょっと一休みしてたってとこだ...」

しばらくの沈黙のあと、そうか...、と田村は呟いた。その声音はどこまでも優しく、響の胸にまたひとつ大切な感触が戻ってきた。

「ガキは産まれたのか？」

『まだだ。予定は1月の末だから』

そうか、と今度は響が呟く。

『ヒビク、大丈夫か――？』

友の声が全身にしみこんでゆく。

どこにいても、昔のままの想いで見守っていてくれる親友。

「――ああ。大丈夫だ」

曇りもなく、迷いもなく、まっさらな答え――。

『そうか。がんばれよ、ヒビク』

「ああ、がんばるさ」

『たまには連絡よこせよな』

「わかってる。そろそろバスが出る。ボストンに戻ったらまた電話する。あかねに大事にしろと伝えてやって」

『おおサンキュ。待ってるぜ』

受話器を戻し、響は目の前に停車しているバスに乗り込んだ。

バスは一路、ボストンへ――。

車窓に広がる風景は真綿を纏った木々の林と反対側に広がる海――。

この町に来た時に目指して歩いたレンガの塔は、もう遥か遠くで微かなイルミネーションを点滅させている。

偶然に運ばれてきた最果ての町。

何もないこの田舎町で出会ったのは、真実の音楽とそこに込める魂。

「フェルマータ...」

窓に肘をつき、移ろいながらもほとんど変化しないその風景を見つめながら響は呟いた。

‘HIBIKU、と名を書いたバンドスコアと、たった今聞いた友の声をしっかりと握り締めて。

◇

12月――。

真っ暗な窓ガラスに、背筋を伸ばし肩の上で髪を踊らせ歩くヒカルの後姿が映って見えたような気がした。

目を閉じても閉じなくても未だに浮かんでくる最後の後姿は、立ち止まることなく一度も振り返らずにゲートに吸い込まれていく。

もしもあの時、ヒカルが振り返っていたらその顔は――。

――ヒカル...。

振り返り、涙をこらえるヒカルの顔が目には浮かんだ。

成田行きの航空チケットを破り捨てるまでと同じ逡巡が、あの後ろ姿の中にもあったはずだ。

それでもヒカルは振り返らずに行き、そして自分はチケットを破り捨てた。

――ここで俺の音楽を響かせるよ、ヒカル。俺、らしく――。

今、また微かに流れ始めた旋律がある。

まだその全ては捕まえられないけれど。

ありがとう。

心の底から。

君の、愛——。

「キョウ、そろそろスタジオに」

呼びに来たビリーが窓ガラスに映った。

「了解。すぐに行く」

珈琲のカップをダストボックスに投げ入れ、響はレコーディングスタジオへと一歩を踏み出した。

『きみにとどくまで Fermata』 完

『きみにとどくまで Felice』 へつづく

明日から夏休みになるのよね…。

伊藤くんはすぐに合宿に入っちゃうから秋になるまで会えそうもない。

別に寂しいなんて思っていないわよ。私だっていろいろ忙しいし合宿もあるし。

でも、いいかげんこれも渡さないとカビが生えちゃいそうだから持ってきたわよ。高校3年の春に作ったタペストリー。アップリケとパッチワークを施した、かなり手の込んだ代物なのよ。裁縫が苦手なこの私が、一針一針心を込めて刺した剣士のアップリケ…。

「結野、勝負しようぜ！」

高校2年の夏の合宿の時、伊藤くんが言った。

それまで、私たちはよく手合わせをして全戦私が勝利してた。

伊藤くん、目標は私だ、なんて言ってたから私は私で伊藤くんに負けないように磨いたつもりだった。

「面っ！！」

あっと言う間に勝負はついた。

信じられなかったけど、私の負け…。

ずっと剣道やってきてあんなにあっさり負けたのは初めてだった。

悔しかった…。

でも…。

「僕の勝ちだな、結野！ やっとお前に勝てた！」

そう言って笑った伊藤くんの顔、すごく爽やかで、きっと本当に私を目標にして一生懸命に腕を磨いたんだってことが伝わって来たから…。

あの時の伊藤くんをずっと覚えておきたいな、って思いながらチクチクと作ったタペストリー。

私、伊藤くんが好きだ。

今日渡せなかったらきっともう永遠に渡せない。そんな気がする。

伊藤くんは大学に入ってから剣道にしか興味ないみたい。髪型も相変わらずのスポーツ刈りのままだし全然しゃれっ気がない。

でも、彼は気がついてないのよ。彼のことを想っている女の子がけっこういるんだってこと。マジメで面白くて剣道もそこそこ出来る伊藤くん。

難点は鈍感、ってとこだけね。

この麻耶ちゃんが高校の時から想ってあげてるっていうのに、全然気がつかないんだから。確かに私もガサツだけど、でも、一応恋する乙女なのよね、これでも…。

さて、

これどうしよう。いつ渡そう…。

同じ剣道部でも男子と女子は活動も練習も別々。

伊藤くん、今日もきっと遅くまで練習なんだろうな…。

◇

結野が同じ大学を志望してるって知った時は驚いた。

高校3年の芸術鑑賞会。

ガーデンカフェテリアでみんなの進路を言い合ったあの時…。

結野を目標にしてたのは、あいつより強くなりたかったからだ。

好きな女の子に負けてるなんて格好つかないし…。

だから、あいつに勝てた時は飛び上がった。

あの時にもしも自分の気持ちをあいつに伝えていたら、今ごろどうなっていただろう。

あの頃はまだ群竹と水沢もハッキリと付き合ってたわけじゃなかったから、せっかく丸くなってきた仲間の空気を乱しちゃいけないって思ったんだ。付き合えたとしてもふられたとしても、みんなに気を使わせてしまうかな、って思ってさ。

今、思えば全然そんなの気にすることじゃなかったのに、律儀だったんだよな…。その律儀が災いして…。

「麻耶ちゃん、オイラのお嫁さんになってよ！」

あんなこと大久保が言い出して、最初は冗談かと思ったけど、

「白状するとね、1年の時からずっとだよ！麻耶ちゃん一筋3年間！」

大久保は本気だった。本気で結野に惚れてたんだ。

結野も真っ赤な顔してさ、せつなかったぜ…。

大久保は幼稚園の頃からの親友。

そして、奴の苦勞を僕は知りつくしている。黒帯のためにやりたいことも我慢して空手だけをやってきた小学校、中学校時代の久保。その黒帯は`家業、を継ぐための試練…。

参ったよ…。

どうすりゃいいんだ？ってあのあとずっと考えてさ、そして決めた。

親友と恋敵になるなんてたまらない。

そうじゃなくても僕は久保にとっては辛い将来の選択をしてしまったんだ。

だから、潔くあきらめることにした。

かなり時間がかかったけど、今やっと気持ちも落ち着いてきたところだ。明日からの合宿でまた磨くぞ！もう、卒業まで剣道一筋の伊藤祐輔だ！

◇

「伊藤くん、ちょっといい？」

剣道場から外の水道にタオルを濡らしに出てきた伊藤くんを私はつかまえた。

「今日も遅くまで練習なの？」

「明日から合宿だから、今日はもうそろそろ終わると思うよ。と言ってもそのあと先輩たちに連れていかれるだろうけど...」

伊藤くんは、コップでクイツと飲む真似をした。

「ちょっと渡したいものがあるんだ。待ってていいかな？」

かなり勇気を出して言った言葉。これでもう後にはひけない。

「え...？」

と言って、伊藤くんは少しだけ躊躇したみたいだった。ちょっと心が痛んだ。

「あ、うん。あんまり時間が取れないかもしれないけど、いいか？」

時間は取れなくて結構。さっさと渡してスッキリさせたいし！

「うん。いいよ。じゃあ、あとでね！」

私はくるっと回れ右をして剣道場から離れた。

伊藤くんはしばらく動かなかったみたい。後ろでずっと気配を感じていたから...

◇

練習が終わって外に出ると、もう薄暗くなった庭の水飲み場の前で結野が立っていた。

竹刀を握っている時の結野は凜とした剣士だけど、こうやって普通に立っていると可憐な乙女だ。それは高校の時からずっと変わらない。

「お待たせ！渡したいものってなに？」

後ろから声をかけると、結野はビクッと肩を震わせた。

「ごめん、驚かせたか？」

「いえ、あの...」

何だかいつもの結野と違う。急にそわそわして落ち着きがなくなったりして、どうしたんだろう？

「あのね、これ！」

そう言って、結野は大きな紙袋を渡して寄越した。

「なに？これ？」

「中見て！」

結野は怒ったように言った。

丁寧に封をされていた口をあけて中を見ると、`布、が入っている。

「出していいの？」

「いい！」

結野はまた怒ったような口調で言う。それからくるっと回れ右をして後ろを向いてしまった。

袋の中に手を突っ込んで、布を取り出して広げて見ると...

「うわっ！凄いねこれっ！！」

それは感動ものだった。

タペストリーって言うんだらうか？大きな剣士のアップリケがしてある。しかも、どうやらそれは僕らしい。『伊藤』という名前がタレに刺繍してあった。

「どうしたの、これ！カッコいいじゃないかー！」

後ろを向いていた結野が恐る恐るといったように振り返って僕を見た。

◇

伊藤くんは素直に感動しているみたいだった。

口から飛び出して来そうな心臓を押さえながら恐る恐る振り向いてみた。

「どうしたの、これ！カッコいいじゃないかー！」

伊藤くんは目を輝かせてタペストリーに見入ってる。その顔は嘘じゃない。本当に感動している顔だった。

「作ったの」

そう言う自分の声が裏返ってた。

「誰が？」

誰が...？

「私だよ...」

「結野が作ったの！？凄いじゃないか！」

凄いじゃないか、って、伊藤くん...？

「それ、あげるんだけど...」

「僕に？くれるの？サンキュー！」

伊藤くんは確かに喜んでくれている。けど...

「伊藤くんさ、私がそれをあなたにあげる意味がわかってる...？」

私は思わず言っていた。

◇

結野の様子がおかしい。

なんか本当に怒っているみたいだ。

「意味...って？」

そうか。

このタペストリーを結野が作って僕にくれた意味...

誕生日はまだ先だし、試合で勝ったわけでもないし...、そういえばどうしてだろう？確かにこんな手のこんだ手作りのタペストリーを結野から貰う理由がないよな...。彼女だってんなら話は別だけど...

までよ...

まさか、結野は...

「もう、鈍感っ！」

突然結野が叫んだ。

「あんたが好きだからに決まってるでしょう！」

タペストリーを持ったまま、僕はしばらく凍結してた。

何が起こったのかわからなくなった。ずいぶんたってから我に返った時、結野はまた後ろを向いてしまっていた。

そうだったのか、結野...

ほんと、鈍感だな。

こんなことなら、あの高校2年の合宿の時に言っとけばよかったよ...

でも大久保の気持ちを知ってる今はダメだ...。あいつを裏切ることはできない。

大久保のこと、結野がどう思っているかはわからないけど、結野が付き合う男は伊藤祐輔じゃダメだ。僕だけはダメなんだ...

「大久保は...」

思わず口から出てしまった。

◇

「大久保くん...？」

「あいつ、本気だぜ...」

伊藤くんは苦しそうにうつむいていた。

わかるよ、わかる。大久保くんと伊藤くんは親友同士だもんね。

だけど私の気持ちに関係ある？私が好きなのは大久保くんじゃなくて伊藤くんなんだよ...！

「ごめん、結野…。あいつを裏切れない…」

伊藤くんは言った。

「わかった！今日のことは忘れていいよ！それも返して…！」

私は伊藤くんの手からタペストリーを取り返そうとした。伊藤くんの手元に私の想いが形になって残るのが嫌だったから。

握り締めている伊藤くんの手から無理に引っ張ろうとした時、手が滑ってタペストリーは水飲み場の水受けの中に落ちた。

「あっ！」

伊藤くんがすぐさまそれを拾った。

けれど私はもう、この場にいるのが耐えられなかった。

「明日からの合宿、頑張ってね！」

伊藤くんの顔を見ないで言って、私は駆け出した。

バカ伊藤！

麻耶ちゃんの愛を受け入れないなんていい度胸してるよ！

私がどんなに…、どんな思いで…。高校の時からどんなに…！

もう、言葉が浮かんでこない。失恋ってこんなに苦しいものなの？痛くて苦しくて胸が潰れそうだよ…！

結野麻耶。

初めての失恋に傷つきました。

明日から夏休みっていうのがせめてもの救い。

こうなったら卒業まで剣道一筋で行くわよっ！

「大久保のばかやろ～～～っ！」

八つ当たりしても仕方ないけど、腹が立ってしょうがなかったの！

◇

結野は行ってしまった。

水受けから拾ったタペストリーを広げると、ちょうど剣士の顔のところだけが濡れて滲んでいた。まるで滂沱の涙を流しているように…。

なんでこうなるかな…。

嫌いじゃないのに。

それどころか、ずっと好きだったのに。その想いをやっと封じ込めたところだったのに…。

タペストリーの剣士の涙は今の僕を象徴している。

乾いたあともきっと、ここだけ染みになって残るだろう…。

ちきしょう！

やっぱり卒業まで剣道一筋だっ！磨いて磨いて強くなって強くなって…。

「大久保のあほたれ~~~~っ！！」

思わず叫んでしまった。

八つ当たりしたところで仕方ないことだけど、無性に腹が立ったんだ。

了

一陣の湿った風が僕と結野の前を飛んで行った。

群竹を追いかけてった大久保は、もう見えなくなっていた。

僕と結野は、横断歩道の前に取り残され、互いに顔を見合わせて、そらしてまた見合わせて、それはほんの一瞬なんだろうけれど、果てしなく長い時間のように感じた。

「あ...、で、これからどうする？」

水沢と田村先輩の結婚パーティーのあと、浅倉や群竹たちみんなと飲みに行く予定をたてていたのに、突然の風間先輩の登場で浅倉はもちろん辞退、何故か群竹がドタキャン、大久保までが先に帰った群竹を追って行き、このスクランブル交差点の前には、僕と結野だけが残ったわけだ。

2年前の夏に結野に手作りのタペストリーをもらった時以来、僕と結野は同じ大学に通いながらもどこかで避け合うような感じで今日まで来たから、今のこの展開は正直言ってちょっと辛い。それは、結野も同じようで、みんながいた時と違い、どこか強張っているように見えた。僕の場合、結野のことは諦めて忘れたいと思いつつも、大学に行けば姿を見かけてしまうし、時には喋ったりもするし、完全に結野を自分の中からなくすことなんてできないこの2年間だった。

「...私はどうでもいいよ。伊藤くんにまかせる」

結野は言った。

◇

こんなふうになつたりきりになっちゃうなんて、思ってもいなかった。

あれはもう2年も前のことだけど、こうやって向かい合っていると、あの時のせつない思いがこみあげてきてしまう。

何度も忘れようと思った。

だけど、同じ大学にいるんだもん。姿を見ちゃったらやっぱりダメ。なるべく会わないようにはしていたけれど、その一方でまだ伊藤くんの姿を目で探している自分にどうしようもないくらいに腹が立ったりして。

パーティー会場ではずっと隣りに座っていた伊藤くんを意識しないようにしていたけれど、あかねのあんな幸せそうな顔を見たら、知らない間に伊藤くんの横顔を見つめちゃったりして、まだ、やっぱり私は好きなんだ...

これからふたりでどうしようなんて、私には決められないよ。

だから、伊藤くんが決めて。

このまま別れて帰るっていうのなら、それでもいいから。

でも、せっかくのこの時間、出来れば大事にしたい。ヒカルちゃんと風間先輩のような、甘い時間じゃなくてもいいから、ふたりでいたい...

「じゃあ...、」

と、伊藤くんは考えながら言った。

◇

どうでもいいってことは、このまま僕とふたりでもいいってことだよな？帰りたいなら結野のことだからハッキリそう言うだろうし。

大久保には悪いけど、あいつもさっき、『麻耶ちゃんとゆっくりして行ってよ』って自分で言ってたし、僕が結野を誘ったっていいんだよな？

「じゃあ...、行こう」

どこに行こうかとっさに思いつかず、僕は中途半端に言った。

「どこへ...？」

と、結野は訊く。

「う〜ん...、とりあえず歩こう」

としか答えられずに、僕は歩き出し、結野は僕のうしろを黙ってついてきた。

◇

姿勢のいい伊藤くんの堂々とした後ろ姿を見つめながら、その後をついて歩いた。

帰ろう、って言わなかった伊藤くんが嬉しかった。『行こう』だもん。私と一緒にどこかに行こうとしてくれている伊藤くん。どこでもいいよ、伊藤くんと一緒なら。本当は、半歩後ろじゃなくて横に並んで、出来れば腕なんか組んじやいたいけど、フラレたっていう現実があるし、そこまでは望まないわ。

伊藤くんは、私を気にしながらゆっくりと歩いてくれる。それとも、さっき、ヒールで踏んづけた足がまだ痛むのかも...。でも、あれだって、伊藤くんにはつま先、大久保くんにはカカト、って、区別したつもりなのよ。

ちょっと罪悪感。

でも、あの時は恋する人に対して鈍感すぎる伊藤くんと大久保くんに、本当に腹が立ったんだ。私がヒカルちゃんだったら、絶対にふたりきりになりたいって思ったし、風間先輩だってあかねの結婚式より、ヒカルちゃんに会いに帰って来たっていうのが本当のところだと思うし。

ヒカルちゃんたちは、3年振りの再会だったというのにまるで自然に当たり前に横に並んで見つめ合ってた。きっと今ごろは腕を組んで歩いているね。

私は、伊藤くんの背中を見ながらしか歩けないけれど、でも、こうやって一緒にいられる時間に感謝したい。ふられてもやっぱり、伊藤くんが好きだから。

なんて、女の子らしいことを思いながらぼうっとしちゃって、前を歩く伊藤くんと距離が時々あいてしまう。でも、伊藤くんの歩調もさっきよりもずいぶんゆっくりになっている。

足、やっぱり痛いのかな...？

「伊藤くん、ちょっと待って」

私は気になって伊藤くんの腕を取って立ち止まった。

◇

上野でもこの時間になると、カップルが多いんだな。

すれ違っていくカップルたちは、皆幸せそうに身体を寄り添わせて歩いている。こんな蒸し暑い夏の夜にもかかわらず、だ。

僕と結野の間は50センチはあいている。しかも、結野は半歩下がった位置を歩いてて、時々距離が遠くなる。僕の歩き方が早いのだろうか？結野、確かハイヒールを履いていたし、もしかしたら足が痛くなったりするのかも？大学で見る結野はいつもジーンズに運動靴って格好だし、ハイヒールなんてたぶん履きなれてないだろう。ドラマでもよくあるよな？慣れない靴履いて足が痛くなって歩けなくなって...っていう女の子の話。だぶん、結野もその口だろうから、僕はできるだけゆっくりと歩く努力をした。本当は、腕に捕まってもらってもいいって思ったけど、結野の性格からしてそんなことは絶対にしないだろう。

僕たちは、ほんとうなら2年前に寄り添い歩ける仲になっていたはずだった。あの時にももらったタペストリーは、今、クロゼットの中にかけてある。堂々と部屋に飾るには胸が痛すぎるし、かと言って、しまいこんでしまうなんてできない。

僕は未だにこんなにも結野に惚れてるわけで、きっと、これからもずっとそうなんだと思う。結野の方はもう、僕を想ってくれてた気持ちに整理をつけてしまっただろう。女の子って案外あっさりしてるって聞いたことがあるし、結野ほどの美人を他の男が放っておくはずもない。大久保は、なんだかんだいいながら高校3年のあの時以来、自分の行動は起こしてないらしいし、結局2年前のあの時、僕はただ結野を傷つけただけだった。

相変わらず、50センチの距離がある僕と結野の間。この距離が縮まることなんて、きっとないだろう。

大久保さあ...

何で帰ったんだよ。

『麻耶ちゃんとゆっくりして行って』なんて言葉残してさ。あんまりだぜ、それ。

なんてことを思っていた時、

「伊藤くん、ちょっと待って」

と、結野が僕の腕にしがみついてきた。

◇

伊藤くんが、私の目を見つめた。驚いたような、それでいて優しい目だった。

足、痛いのと聞こうとして呟いた言葉が思わず、

「足...痛い...」

と、中途半端に止まってしまった。伊藤くんの目がなんだかとってもせつなくて。

伊藤くんは、私の腕を自分の腕にしっかりと絡ませた。私は何が何だかわからなかった。

「大丈夫...」

伊藤くんはそう言って、まるで私を支えてくれるかのように優しく優しく歩く。

これって...どう取ったらいいの？

どうして私、伊藤くんと腕組んで歩いているの？

伊藤くんは何故、急にこんなことするの？私、期待しちゃっていいの？

いろんなことが頭の中を駆け巡って、ふわふわしてどきどきして、自分の足が自分のものじゃないみたいで...

足がもつれて転びそうになった。

◇

「足、痛い...」

結野は僕の目を見つめて呟いた。

やっぱり無理して歩いてたんだな。僕に訴えるくらいだから、相当痛いんだろう。きっと、足はマメだらけになってるんじゃないだろうか。とりあえず歩こうなんて誘って痛い思いをさせて悪かったな...

僕の腕に止まっていた結野の手を取り、僕はしっかりと自分の腕に絡ませた。こうやって僕に体重を預ければ少しは楽になるだろう。

こんな形で縮まった50センチの距離。なんだかずるい気がしないでもない。

「大丈夫...?」

って訊く言葉も、声が喉に詰まってすんなりと出てこなかった。

結野はふらふらしながら、かなり辛そうに歩く。僕は結野の足に負担がかからないように、彼女の身体を支えながらゆっくりと歩いた。

それでも、結野は辛そうだ。結野の身体が突然揺れてバランスを崩した。僕はとっさに彼女を抱きかかえた。

◇

伊藤くんに抱きしめられてるよ、私...

こんな、公衆の面前なのに、伊藤くん、そんなこと全く気にしてないみたいに、私の身体をしっかり抱いてる。

あかねの幸せ、分けてもらったのかな？

涙が溢れて止まらないよ。

「伊藤くん、大好きだよ...」

自然に口に出た。

もう、二度と言わないって思ってた言葉だけど、やっぱり言っちゃった。
だって、大好きなんだもん。

◇

聞き間違いじゃないよな...？

「伊藤くん、大好きだよ」

って、今、結野は言ったよな？

結野を見ると、僕にしっかり抱きついて泣いているようだった。

痛む足を無理して僕についてきてくれたのは、ずっと僕を...

2回も同じ言葉を言わせてしまうなんて、僕はなんて情けない男なんだ。本当なら、高校2年のあの合宿の時に、僕の方から言ってなくちゃならない言葉だったのに。変なところに律儀で鈍感で大切な人を傷つけて...

「僕も、結野が好きだ！！」

悪いな。

言っちゃったぜ、大久保。

こんな結野見たら、これ以上僕は自分の気持ちを偽ることはできないよ。足をマメだらけにしてまでも、僕についてきてくれた結野なんだぜ？大久保の気持ちも大事だけど、結野の気持ちの方がやっぱり大事だ。

たとえ大久保に絶縁されても、僕はもう、自分の気持ちに正直に生きることにした。

50センチの距離はこのまま縮めることにした。

◇

うえ〜〜ん。

って、思いっきり泣いちゃったよ。

鈍感、なんて言っちゃってごめんね。こんなにも紳士で優しくて情熱的だった伊藤くん。今夜の伊藤くんのごことは絶対に一生忘れない。この素敵な夜は一生忘れない。

「もう、泣くなよ」

って、伊藤くんは笑った。なんだか私たち、恋人同士って感じがした。

「なんか、食べに行く...？」

伊藤くんは照れ臭そうに頭をかきながら言った。

私は大きく頷いた。パーティーでは隣りの伊藤くんが気になってあんまり食べられなかったし、今、思い切り泣いたからそれでお腹もすいてきちゃったし。

ちょっと先を行ったところに、居酒屋の看板が見えた。

「あそこでいい？」

って伊藤くん。

もちろん！伊藤くんと一緒ならどこでもいい！

伊藤くんと私は居酒屋に向かって歩きだした。もう、ふわふわなんてしていない。足はしっかりと地についている。

「...結野？足、大丈夫なのか？」

伊藤くんが驚いたような顔をして私を見た。

「え？足？」

なんのことかな？

「うん...、大丈夫だけど...。伊藤くんこそ大丈夫？もう、痛くない？」

伊藤くんは、へ？という顔をしてしばらくその場に固まっていた。けれど、すぐに笑顔になって、

「大丈夫ならいいさ！」

と、私の手を引いてくれた。

繋いだ手と手。

伊藤くんのあったかくて優しい手。

夢みたいだけど、夢じゃない！！

あかねの結婚パーティーの日に、ヒカルちゃんは風間先輩に再会し、私は4年越しの恋が実った！

あたしたちってほんとに仲よし三人娘だ！

やったね、私たち！って、心でVサインをふたりに送っちゃった。

◇

さーて...。

大久保にはなんて言おう...かな。

やっぱ空手...出るかな。

腕一本ぐらいですむだろーか...。

了

恋人宣言

あかねの結婚式から1週間が過ぎて、あたしと伊藤くんが付き合いはじめて1週間が経って、今日もあたしたちは大学の部活動。

来月伊藤くんもあたしも関東学生剣道大会に出場するから練習は欠かせない。

だから、夏休みの間も毎日大学に行って剣道やってる。

2年前の夏に伊藤くんにふられてから1週間前までは、そりゃあたしたちはただの仲間だったし、気まずい関係でもあったんで避け合うとまではいかななくても、お互いによそよそしい態度で過ごしてた。どうしておんなじ大学に来ちゃったんだろ...って、伊藤くんを見かけるたびにせつない想いをしてた時もある。

でも、1週間前からあたしたちは恋人同士のはず。

あたしは伊藤くんに二度目の`好き、を告白して、伊藤くんも`好きだっ!、って叫んで抱きしめてくれた。

だからあたしたち、もう恋人でしょ？

恋人なんだよね？

「結野は今日のコンパ、参加？不参加？」

――って、伊藤くん。

練習の後に今までとおんなじ呼び方で、おんなじよそよそしさで訊いて来た。

「...参加するよ？」

だって、伊藤くん行くでしょ？

伊藤くんの行くところならあたしはどこだって.....。

「...じゃあ、会費3000円いい？」

――って、掌見せちゃって、何それ？

伊藤くんが幹事だっていうのは知ってる。みんなに参加不参加を訊いて会費集めてるのも知ってる。

もちろん会費は払うわよ。

でも、あたしもみんなとおんなじように、こんな更衣室を出た場所で簡潔に訊かれるの？

この1週間、ずっとこんな感じ。

相変わらず`結野、だし、必要以上のこと話しかけてくれないし。

ちょっとムツとしたまま伊藤くんの掌に千円札を3枚乗せた時、

「あ、あのさ...、」

って、伊藤くんは何かを言いかけたけど、4年の先輩に呼ばれ、

「...あ、じゃ、あとで！」

って、そのまま手を上げて行っちゃった。

まるで今までとおんなじ――。

あたしたち、恋人だよな？

恋人...なんだよな...？

◇

「麻耶ちゃん」

「麻耶先輩」

「結野先輩」

――って、剣道部のむさ苦しい先輩後輩たちが結野の傍にかわるがわるやってきてはしばらくその場を陣取って動かずにいる。

僕は自分の席を持たずに呼ばれるところに移動しては、先輩たちに酌をしたり後輩の面倒を見たりいろいろ。

この居酒屋に来て結野とは一言も喋ってないどころか傍にも行けない。

でも、しょうがない。

結野と付き合ってるってことがバレたら大変なことになる。

何たって結野は我がN大剣道部1年生から4年生まですべての部員の憧れの的で、特に4年の先輩たちの中じゃ女神的扱いだ。

結野と同じ高校だったってだけで、今までだってさんざん妬かれて来た。

それが、恋人になりました、なんてことが知れたら部活が100倍やりにくくなるのは必至。

――ああ、哀しき体育会系。

来月は僕も結野も大事な大会があるから今は練習に力を入れなきゃならない時だし、そういうことだけじゃなく、大久保のこととか高校の時から思いとか、傷つけたり傷ついたりして多くのリスクを払って、今やっと互いを思い合う恋人になれた僕と結野。

もう誰にも邪魔されずに静かに、大事に付き合っていきたいんだ。だから、ここでは今までの僕と結野のスタイルを崩すわけにはいかない。

これも、`絶対的憧れの君、を恋人に持った男の運命（さだめ）。

――そう思って、みんなの前では悟られないように努めてるけど、何であいつらが結野を軽々しく麻耶ちゃんって呼び、その隣りに当たり前のように座ってるんだろう？

女神の君を、ここぞとばかりに独占しようと群がる先輩たちと、遠目から憧れの眼差しを向けている後輩たち。

つい1週間前までは僕も後者の中のひとりだった。

けど、今は、

結野は僕の――。

僕たちは――。

1週間前までの毎度の光景が、今はこんなにも許せない。

こんなにも、悔しい。

◇

伊藤、伊藤、伊藤って、さっきから伊藤くんは先輩たちに呼ばれて動きっぱなし。

幹事だから仕方ないけれど、3年生になってまで1年生より動く人もあんまりいないわよね...

。

でもそれは、伊藤くんの信頼が厚い証拠。みんな伊藤くんの誠実な人柄に絶対的な信頼を寄せている。

先輩には忠実で、後輩たちの面倒見はとってもよくて、優しくて頼りがいがあるからN大剣道部では一番人気の伊藤くん。本気で伊藤くんを想ってる女子部員がいることもあたしは知っている

。

伊藤くんの立場はよくわかってるつもり。

やっぱりここでは恋人よりも仲間や先輩を立てるべきっていうのも当然。

それが体育会系の常識っていうことも重々承知。

でも本当はあたし、みんなの前で恋人宣言して欲しいよ。

あたしは伊藤くんの恋人で、伊藤くんはあたしの恋人なんだってみんなに知ってもらいたいよ

。

もう、いつでもどこでも誰にも気兼ねしないで伊藤くんと一緒にいたい。

それが、高校の時から願いだったから。

ねえ――。

――こんなあたしがあなたの恋人でいいの？

こんなにわがままで人を思いやれないあたしで.....。

◇

ずっと結野の隣を占領してた先輩が席を立ててトイレに行った。ぽっかり空いたそのスペースに僕はさり気なく座った。

「今日は伊藤さんと喋れないのかと思った」

結野は僕を見ず、真っ直ぐ前を向いたまま言った。

結野もきっと、ここでの僕たちがどう振舞えばベストかってことわかってるのだろう。

でも、声は怒ってるようで寂しそうで。

この1週間、毎日部活で会ってたけれど、ろくに話もせず、デートにも誘えず、今までとまったく変わらない僕たちだったよな。

結野は決して自分から何かをねだったり求めてきたりしない女の子だ。

凜と背筋を伸ばして、顔を上に上げて凜々しくて。

それは間違った結野じゃない。

けど、1週間前の夜、僕の腕の中で泣いた結野だって真実の結野。

――ごめん。

言いたいことはたくさんあるけど、言葉で言うと全部安っぽくなりそうだったから、テーブルの下に隠れていた結野の手をぎゅっと握り締めた。

――結野は僕の...!

想いだけを心の中でめいっぱい叫んで。

結野は一瞬僕を見て、直ぐに顔をあっちに向けてうつむいた。けれど、握った手はしっかりと握り返してくれた。

席を立てた先輩が戻ってきて、`そこ、俺の席、と、僕に文句を言った。それから、テーブルの下で繋がってる僕たちの手と手に気がついて、

「あ、あれ？伊藤？な、な、な何やってんだ？そ、その手はあ!？」

と、叫んだ。

「...伊藤くん」

結野が顔をあっちに向けたまま、不安気な小さな声で呟いた。

「いいんだ」

僕も顔をこっちに向けたまま言った。

さすがにここで見つめ合うのはとっても照れるから。

でも、これは僕意思表示。

——結野麻耶は僕の恋人です。

了

1994年3月15日。

卒業式が終わり、にぎやか組一同は揃って本城高校生として最後の校門を出た。記念写真は撮ったし、後はもう左右に分かれてそれぞれの帰路につくだけだ。だが、なんとなくこの場を去りがたく、誰もその一步を踏み出さない、そんな時だった。

「はやとくーん！」

歩道の向こうから手を振って駆けて来る少女と、その後ろからゆっくりと歩いてくる老婆の姿があった。ふたりはそれぞれの手には大きな花束を抱え、校門の前までやって来た。

「卒業おめでとう！はやとくん！」

少女は自分が隠れてしまうぐらいの花束を勇斗に押し付けた。そして後からえっさえっさと歩いてきた老婆の方は、花束を颯土に手渡した。勇斗と颯土は、思わぬ人たちからの祝いの花に、目を丸くして立ち尽くした。

「今日が卒業式だって聞いていたもんだから、ひとことお祝いに来ただよ。ふたりとも、その節は世話になったね」

トメはカクシャクと喋り、その隣で孫娘の美香がにこにこ笑っている。

「ありがとう、おばあちゃん、美香ちゃん！」

「ありがとうございます...」

以前、学校裏の横断歩道を渡るトメを助けた縁で、ふたりは一度だけ稲葉家に招待をされたことがある。

だがそれはもう、6月のこと。勇斗と颯土がふたりに会うのはそれ以来だった。

「美香ちゃん、前に会ったときに比べて、ずいぶん背が伸びたねー」

勇斗は、美香の頭をよしよしと撫でた。その子ども扱いが美香には不服だったようだ。美香はやや顔を膨らませ、

「あたしだって、4月からもう中学生なんだよー」

と、口を尖らせた。その横で、トメは勇斗と颯土をしみじみと見比べて言った。

「ふたりとも、立派にご卒業されて、さぞや親御さんたちも安心して喜んでいることだろうね。大学に進学するのかい？」

颯土ははい、と答えたが、勇斗の方は――。

「実はさ、大学に合格しちゃったから、オイラ、これから勘当されちゃうの。明日から住むところ探さなくちゃならないんだー。タイムリミットは今月いっぱい」

へへ、と笑いながら言う勇斗の言葉に目を丸くしたトメは、颯土と、そして傍で見守っているヒカルたち仲間に、本当なのかい？と訊いた。祐輔が、勇斗の状況をトメに簡単に説明をした。

「...それはまた...、えらい環境で大きくなったんだねえ...」

トメはさらに目を丸くし、美香が『二代目シュウメイってなに?』と無邪気に勇斗に訊いている。

「よくぞ、こんな心の優しいいい子に育ったもんだ...」

いやあ、それほどでもお～、と勇斗はおちゃらけて鼻の下を伸ばすが、トメは本気で感心しているようだ。

そして、トメは言った。

「ウチでよかったら、こないだちょうど一部屋空いたところだから入れるよ? どうだい?」

「おばあちゃん、ほんと! ?」

勇斗は、鼻の下が伸びたままのこっけいな顔で叫んだ。美香が、変な顔～、とケラケラ笑っている。

トメはときわ荘というアパートを営んでおり、それは牛乳屋の前の横断歩道を渡ってすぐのところにある。

「明日にでも部屋を見においで。古いけど、風呂も便所もついてるよ」

オバケは出ない? と勇斗が訊くと、出るもんかい、とトメは呆れたように笑った。

◇

翌日、勇斗はさっそくトメのときわ荘を訪ねた。

6月に一度、本家の方にはお邪魔したことがあるが、狭い道を挟んだ向かい側にあるアパートの敷地に入るのは初めてだ。

ときわ荘はトタン張りの古い二階建で、一階に3部屋ずつ6部屋のアパートだった。

トメに案内されたのは一階の階段側の部屋だった。玄関を開けたところはすぐ台所。そしてその奥に六帖間。それだけだった。つい先週空いたばかりというその部屋は、全体的にずいぶんと汚れていて、換気扇は油まみれだったし、畳も擦り切れた状態。おまけに、汗臭い、むさくるしい臭いが漂っている。

—うう...

「前の人も大学生でねえ。4年ここに住んで卒業と同時に出て行ったんだよ。男の一人暮らしだったから細かいところの掃除は行き届かなかったみたいだけど、まあまあ綺麗に使ってくれた方だよ」

—これでかよ...

「前に住んでた人、スポーツマンかなんかだったの?」

「そういや、相撲部だって言ってたねえ...」

—うへえ...っ。

勇斗は思わず鼻を摘むようにして触った。

「で、おばあちゃん。この部屋は家賃いくらなの？」

六帖一間でもボロくても、風呂もトイレも部屋についていて、そしてここは一応都内、駅にも近いから、5万は下らないだろうと予想しているが...

「5万5千円」

—やっぱり...

勇斗は気落ちした。

決してこの部屋自体が気に入ったわけではないが、駅に近いしヒカルや颯土の家も近くにある。出来ればここに住みたいと思うが、予算が合わない。これからバイトをしながら夜学に通う勇斗にとって、5万以上の家賃はギリギリにも届かない範疇外だったのだ。

「おばあちゃん、残念だけど...、」

「家賃のことは気にせんでいいよ」

勇斗の言葉にトメの声が重なった。

「あんたがこれからどんな状況で生きていくかって話は昨日聞いたからね。家賃は出世払いでいいよ。あたしは最初からそのつもりで声をかけたんだから」

「出世払いって...？」

「だから、あんたが立派な社会人になってから返してもらえばいいってこと」

「そんなの、ダメだよお〜！いくらオイラでも、そこまでおばあちゃんに甘えられないよ。第一、もしも出世しなかったらどーするのさ」

「そんな時は、美香の婿にでも来てもらおうかねえ〜」

うえ？と、勇斗は言葉に詰まった。その時だ。

「はやとくーん！」

向こう側の母屋の方から、学校帰りでランドセルを背負ったままの美香が走ってきた。

「や、やあ。美香ちゃん。お帰り。いつも元気だねえ〜」

—...おばあちゃんも無茶言うよ...。婿ってさあ....。

赤いランドセルに黄色い帽子を被った美香は、まだぼっちらりと下膨れの顔をしている小学6

年生だ。

「はやとくん、ウチのアパートに入るんでしょ?! ねえねえ、お部屋は気に入った?!」

美香は、まるでみかんのような下膨れの顔でめいっばい笑って言った。

「へ、部屋はまあ気に入ったんだけど...、条件がね...」

出世払いでいいという厚意にはやっぱり甘えられない、と勇斗は思う。

「なんでー? 家賃高いんだったら、ちょっと安くしてあげればいいよ、おばあちゃん! はやとくんにはお世話になったし、もしかしたらこれからだってお世話になるかもしれないし、オマケしてあげなよー!」

美香がトメに詰め寄ると、トメは、そうか、と呟いて手を打ち鳴らした。

「タダっていうんじゃ、かえって気が退けるものなんだね? だったら...、」

これでどうだい? とトメは右手の指を3本立てた。

「いいの?!」

「ああ。その代わりに、部屋はこの状態のままにするから、掃除なんかは自分でやっておくれよ?」

「そんなの、当たり前だよ! ありがとう、おばあちゃん!! ありがとう、美香ちゃん!!」

美香はトメの手から部屋の鍵をとり、それを勇斗の手のひらに乗せた。

「はい、はやとくん! 掃除するときはあたしも手伝ってあげるからね」

勇斗は、101号室と書かれたタグがぶら下がっている鍵をしっかりと握り締めた。

「ありがとね、美香ちゃん。そういえば、もうすぐ小学校も卒業式でしょ?」

「うん。あさってなの」

「じゃあ、何かお祝いをしなきゃね。でも、明後日はオイラ、ちょっと用事があって来られないからこれからプレゼント買いに行こうよ」

「わーい!!」

美香は顔を赤くして飛び上がり、10年後には本当に婿に来てくれていいよ、とトメは笑った。

ふたりが手を繋いで行ったのは、本城高校裏の牛乳屋だ。

「こんな所でごめんよ、美香ちゃん...。オイラ、金欠だった...」

頭をかく勇斗に、美香は、いいよいいよ、と笑う。

ここで何でも好きなの買っていいよ、という勇斗に、笑顔でうなづいた美香は、早速店の中に飛び込んで、菓子棚を物色しはじめた。そして選んだのは、

「これ?」

ビニールの袋に入った、黄緑色のメロンパンだった

「うん! メロンパン大好き」

そっか、と笑って勇斗はメロンパンとイチゴ牛乳と珈琲牛乳を買い、ふたりはそのまま歩道のベンチに座った。

美香は足をぶらぶら揺らしながら丸いメロンパンにかぶりつこうとして、珈琲牛乳を飲んでい

るだけの勇斗に、半分食べる？と訊いた。

「オイラはいいよ」

勇斗は、メロンパンと同じぐらい丸い美香の顔を見つめて笑った。

「あの部屋にはやとくんが来てくれるって決まって、うれしいなー。仲良くしようね？」

「そ、そうだね…。はは…」

婿にでも来てもらおうかねえ～、というトメの言葉がよみがえり、勇斗は思わず苦笑して、ポケットからさっき美香に手渡されたアパートの鍵を取り出した。そして、タグを持って鍵をゆらゆら揺らす。何人もの手に渡り幾年もを経た鍵は、まったく輝きを失ってはいるが――、

――これが、新しい大久保勇斗の第一歩。

これからのことを考えるともちろん不安だらけだが、優しいトメや美香の傍で、貧乏学生をやっていくのは悪くないかなと、ふと思った。

了

優しいトメや美香の傍で貧乏学生をやっていくのは悪くないかな、と思った日から2年半の月日が流れ、大学3年の夏を過ごしている大久保勇斗21才――。

バイト優先で勉強の方を適当にしてきたツケが回り、今年は単位習得のために猛勉強をしなければ進級が危ぶまれるという窮地に追い込まれている。

いるのだが、バイトの手を抜くとそれはそのまま生命維持が危ぶまれる問題に発展してしまうのだ。

だから学業と仕事を上手く両立させなくてはならないのだが、それが出来ていれば今、こんな苦労はしていない。

昼夜のバイトを終え帰宅してから2時間課題に取り組んで、ただ今の時刻は午前2時。

勇斗の部屋にはエアコンなんてもちろんないから扇風機が稼働中だが、電気代を考えて風力ダイヤルを強にするのはシャワーのあとの5分間だけ。通常は「そよ風、とうちわと窓から入る天然のそよ風でがまんしているのだ。

だが、今夜はどうやら熱帯夜。そよ風三拍子がひとつ欠けてしまっているため、汗は流れ放題で引く気配なし。

こんな時はのどごしまるやかなビールでスカッと爽やかになりたい気分だが、そんな贅沢品はストックしているはずもない。冷蔵庫で冷やされているのは、今日もキャベツとわさびとソースのみ。おかげで開けた瞬間は、キンキンに冷えた空気がサーッと頬を撫でてくれる。だが、冷蔵庫はそんな用途のためにあるものではないから、

「冷蔵庫のコンセントも抜いておこうかな...」

勇斗は深いため息をひとつ吐き、生ぬるい水道水で渴きをしのいだ。課題の提出日が迫っているため今夜はまだまだ寝られない。

「暑い、温い、マズイー！ビールが飲みてえ〜っ」

夏の水道水など飲めたものじゃない。

勇斗は台所の床に、まるでダダっ子のように寝転がった。

1週間前、あかねの結婚パーティーで飲んだ麦酒の味を思い出し自然と喉がごくり、と鳴る。

あの日はビールは飲み放題だったし、血や肉になるメニューが並んでいたし、おまけにスイーツのデザートまで出てきたし、何ヶ月、いや何年がぶりの幸せに浸れた。

勇斗はむくりと起き上がり、自分の鞆を引き寄せた。

「財布の中身は千円札が1枚と500円玉1枚、1円玉が3枚なり...」

だが、そのパーティーがあったがために、祝い金その他の出費がかさみ再来週の給料日まで1503円で過ごさなくてはならない。1日約110円しか使えない計算だ。

「ビールなんてとんでもないっす...」

勇斗は財布を鞆の中にそっとしまい、再び深いため息を吐いてから机に向かった。

その時。

「あれ？みかんちゃんてば、こんな時間にどこに行く気だあ？」

開け放った窓の外をトメの孫娘、美香がてくてく歩いていく。勇斗は時計を確認した。

「2時10分だよ...？ヤバイでしょう」

出逢った時は小学生だった美香も、今では中学3年生の女子だ。真夏のこんな時間のひとり歩きは危険だろう。いったいどこへ行くつもりなのだ。

「まさか男と密会なんてことは...」

...ないだろうとは思いますが、いくら下ぶくれ顔のぼっちゃりオカメでも女子は女子だ。最近はあるヤツも多いから何が起こるか分からない。

「お兄さんとしては、見ちゃったからには放っておけないでしょ...」

勇斗はすぐさま部屋を出て美香を追いかけた。

が。

なんてことはない。美香はすぐ捕まった。

「はやとくん、こんな時間に血相を変えてどうしたの？」

ポカンとした顔で訊いてきた美香は、アパート前の道にある自動販売機でジュースを買っていただけだった。

「みかんちゃんこそ、何でこんな時間にジュースなんか買ってるの？」

「あした模擬テストがあるから勉強してたら喉が渴いちゃったの。うちの冷蔵庫には牛乳しか入ってないんだもん」

生水なんて温くて不味くて飲めないし、と無邪気に言う美香に勇斗は色々な意味で一気に脱力した。

「はやとくんもずいぶん夜更かししてるんだねー？」

「ボクも課題をちょっとね...」

「はやとくんも勉強してたんだー。私と一緒にだね」

まあね、と勇斗は苦笑する。

夜中まで勉強して喉が渴いたところまでは同じだが、その後は全然違っている。問題なくジュースを買える美香に対して、温くてマズイ生水で我慢の勇斗。麦酒の魅力には届かないが、それでも美香の手にあるサイダーが輝いて見えた。

「じゃ、帰ろうか...」

「あれ？はやとくんまだジュース買ってないよ？」

「ボクはいいんだ、喉は渴いてないからさ」

「じゃあ、どうして自動販売機に...」

ほら行くよー、と勇斗は先を歩き出す。

その背中を見つめながら、勇斗がここにいる訳を考えていた美香はひとつの答えに行き着いた

。すると、頬がみるみる赤く染まり、胸が勝手にドキドキし始めた。

「美香ちゃんどうしたの？もう夜中はとっくに過ぎてるんだよー？」

だからきっと勇斗は心配してきてくれたのだ。

「はやとくんってば、何気なく優しい...」

美香は自動販売機からもう一本サイダーを買い勇斗を追う。

そして、あっという間に家の前――。

「ねえねえ、はやとくん」

「ん？」

「私が無事に高校に入ったら、またお祝いくれる？」

勇斗は、また？と首をかしげたが、すぐに「また、の意味に思い当たった。

「またメロンパンでいい？」

「ええー？今度はディズニーランドがいいー」

「はあ？」

1503円であと2週間を生きなければならない勇斗は、少々心がやさぐれているため、マジかよいくらかかると思ってるんだ、と声を出さずに文句を垂れる。

「ボクが無事に4年生になれば、みかんちゃんも何かくれるー？」

「ええー？4年生になるのって何も特別じゃないじゃないのー」

そんなの普通普通、と美香。

「じゃあ、高校入学祝いもメロンパンね」

普通じゃないから早いところ部屋に戻って課題の続きをやりたい勇斗の返答はそっけなくあっけない。

美香は口を尖らせて、しょうがないなーと勇斗の条件を飲んだ。

「だからディズニーランドね？」

今度は、はいはい、分かりました、と勇斗がやる気なさげに返事をする。

すると美香はスッと右手の小指を立てた。

「じゃ、指きりして？」

「指きりー？」

何が悲しくてこんな真夜中過ぎに中学生の女子と指きりをしなければならないのだ。

「やだよー。めんどくさい。もう遅いし...」

だが、美香は文句を聞かずに勇斗の小指に自分の指を絡ませる。

「ちょっとちょっと、美香ちゃんてばー？」

「ゆーびきりーりげーんまん！」

右手をぶるんぶるん上下に振られ、勇斗はますます呆気にとられ、そしてあまりにも滑稽な自分と美香を客観的に見て妙に恥ずかしくもなった。

「ゆーび切ったーっ！」

じゃあねおやすみ、と美香は自宅のドアに手をかけてから、ふいに振り返り、これあげる、と今買ったもう一本のサイダーを勇斗に押し付けた。

「え？なんで？」

「一応、心配してくれたお礼...みたいなもん？」

呆ける勇斗をその場に残して美香は自宅に入っていった。

「えっと...」

とりあえず勇斗も部屋に戻る。

そして、ちゃぶ台の上に美香から貰ったサイダーをポンと置いて眺めた。

ただ今の時刻は午前2時30分。

「こんな夜中に指きりして、サイダーまで貰っちゃったよ...」

へんなの、とひとりつぶやいて勇斗は缶を開けた。

ぷしゅっと清々しく響いた音が心地よく、キンキンに冷えたサイダーは爽やかに渴いた喉を潤おしてくれた。

なんとなくビールよりも美味しく感じる。

なんとなく顔が赤くなる――。

「けどディズニーランドかよお...。やっぱバイトの手は抜けないじゃん...」

そして勉強がおろそかになり単位を落として留年、即ち4年になれない。

「それじゃダメでしょ...」

うーん...、と勇斗は妙な約束をさせられたものだ、とひとり唸った。

「.....ボクが4年になれたら美香ちゃんは何をくれるんだろう？」

メロンパン10個とかなら嬉しいかなあ...、と、お腹がいっぱいになる夢を頭の中で描きながら、勇斗は再び課題と向かい合うのだった。

了

<1>

ジージーと蝉の鳴く声を濡れた白いTシャツの背中で受け止め、額には大粒の汗を浮き上がらせ、そして今にも倒れそうなくらいにふらふらになってアパートの前まで戻ってきた勇斗は、
「腹へった……」

と、ペチャンコにへこんだ腹に手を当てた。

給料日まであと1週間。

財布の中身は千円札がたったの1枚。

駅前のコンビニの前で、なけなしの千円札を使い切ってしまいたい衝動と闘い、とりあえずそれに打ち勝ち、やっとの思いでたどり着いた我が家ではあるが、ドアを開けたところで今の自分の欲求を満たすものは部屋の中には何ひとつないことはわかっている。

「はあ…。今日の晩飯もキャベツか…」

ドアノブに手をかけながら思わずため息を吐いた時、

「は一やとくんっ！」

聞き覚えのある元気な声が後ろから響き、

「なーあに？」

と、勇斗はいつものように振り向いた。

「みかんちゃん」

「みかんじゃなーい！みか！何回言ったらちゃんと名前を言ってくれるのお～？」

大家の稲葉トメの孫娘で今年中学3年の美香とは、出会った頃から「みかんくん」、「みかんちゃん」と呼び合ってる。

「…だって、キミの顔を見るとどうも「みかん」を連想しちゃってさあ。おいしそうだなあ…って」

と、言いながら勇斗はゴクリと生唾を飲み込んだ。

「それ、あんまりだよお…」

美香が少し下ぶくれの頬を両手で押さえながらうつむくと、髪にさしてあるジャスミンの白い花が揺れて落ちそうになった。

「ほら、落ちるよ」

勇斗は髪の花を手で押さえながら言う。

「ありがとう。ねえ、これ、素敵でしょ～？」

美香は髪の花を指さして、その場でくるっと回ってみせた。

「…………ボクちゃん忙しいんだけど、なんか用事？」

食べられないみかんを目の前にしているよりも、今はとにかく早く部屋の中に入って冷蔵庫の中のキャベツに会いたい勇斗だ。

グーーーーッ

と、腹の虫が鳴る。

「別に用事はないけど...、会ったから声かけたただだよお...」

あまりにも大きな腹時計に、美香は少し目を丸くしながら言った。

「あっそう。じゃあまたね」

勇斗は面倒くさそうに言い、再びドアノブに手をかけてから思い出したように振り返った。

「みかんちゃん夏休みの宿題あるんだろ？しっかり勉強するんだよ～」

「お母さんみたいなこと言わないでよ。たまには息抜きしたりデートしたりしたっていいじゃない。もう、勇斗くんなんて大っキライ！」

突然怒り出した美香は、くるっと回れ右をして通りを挟んだ向こう側の自分の家に走っていく。さっきせっかくさし直したジャスミンが、今度ははらりと地面に落ちた。

「...息抜きはともかくデートってさあ...？」

落ちた白いジャスミンを拾いながら勇斗は呟いた。

ランドセルを下ろしたばかりの、真新しいセーラー服を着ていた印象が強い美香の口からデートなどという言葉が飛び出して勇斗は少し面食らっている。

「デートの相手なんかいるのかよ？みかんちゃんって今いくつだったっけか...？」

勇斗は、手に持ったままのジャスミンに語りかけるようにして言った。

ふわっと、甘い香りが風に乗って漂った。

ときわ荘一一。

このアパートで一人暮らしを始めて2年半が経った。

夜学に通いながら昼は校正、夜は居酒屋でアルバイトをする毎日。

高校3年の夏、大家のトメを横断歩道で助けたことが縁になって、部屋代は出世払いでいいと言われて入ったアパートだけど、毎月3万円の家賃は欠かさず払っている勇斗だ。

給料日前の1週間は勇斗にとっては地獄の試練だ。財布の中身は底をつき、ほとんどキャベツにソースをかけて食いつなぐ。

「あと1週間だ、頑張れボクッ！」

気合を入れて部屋に入り、そのまま冷蔵庫を開けると、4分の1のキャベツがたったひとつ庫内で天下を取っていた。

ひとつのため息を落とし、キャベツを手に取り包丁を当てる。

居酒屋でのアルバイトが効果をきたし、キャベツの千切りだけは得意な勇斗だ。細かく細かく刻み、少しでもふわっと大量に見せて視覚効果で飢えを和らげることも、この2年半の生活の中から学んだ知恵だ。ソースだけはめいっぱいかけたキャベツの皿を、勇斗は六畳ひと間のちゃぶ台に運んだ。

明日はまたキャベツ買ってこなきゃなあ...、と思いながら箸をつけようとした時、

「大久保、いるかあ？」

ドアを叩く音と声がして、

「うん。開いてるよ～」

ドアに顔を向けて返事をする、両手に一杯のスーパーの袋を抱えて入ってきたのは祐輔だった。

<2>

「それ、ボクに！？」

勇斗は祐輔が持ってきた袋の中身を次々と出しながら言った。

キャベツはもちろんのこと、トマトにきゅうり、缶づめにレトルト食品やインスタントコーヒーまで、1週間分の食料を買いだめしたような品揃えだ。

「ああ。そろそろ食料も尽きて死にかけてるんじゃないかと思ってさ...」

「サンキュウ～！！やっぱ、持つべきものは親友だよなあ！」

勇斗は一杯の食料と祐輔と一緒に抱きしめた。

「...親友、か」

祐輔は少しバツがわるそうに言葉を繰り返してから、

「今日はさ、お前に話したいことがあって来たんだ...」

と、ためらいがちに言った。

「なに？」

トマトにかぶりつきながら、どんぐりのような目で自分を見る勇斗に、祐輔の次の言葉はまたためらう。

「ゆうちゃんらしくないよ？何でも言ってよ」

「.....、実はさ」

そう言って、まだためらう祐輔に勇斗言った。

「どうしたんだよ？まさか麻耶ちゃんと付き合ってるんだ、なんて言う訳でもないだろ～？」

う。

と、絶句して固まった祐輔。

「...ゆうちゃん？」

トマトを持つ手が口の前で止まる。

「...まさか、凶星...？」

勇斗の手から、ぽろっとトマトが滑り落ち畳を赤く汚した。

「...悪い。そういうことなんだ...」

祐輔は頷いた。

「水沢の結婚パーティーのあと、僕たちそういうことになった。お前の気持ち知ってて、それでもやっぱり結野と...」

じっと黙り込み、しばらくの間祐輔を見ていた勇斗だったが、ふう、と息をひとつ吐いてから

「ゆうちゃんも...ずっと麻耶ちゃんのことを好きだったんだよな...」

と、呟いた。

「...はっ!？」

首を垂れていた祐輔はハッとして顔を上げた。

「...わかってたよ。けど、ゆうちゃん、言わないからさあ...」

勇斗は少し遠くのティッシュ箱を、身体を伸ばして手元に引き寄せ汚れた畳を拭った。

「...だから、ボクもいまひとつ麻耶ちゃんに踏み込んでいけなかった...」

「なんだよ、それ!？お前がぐずぐずしてた理由はそれなのか!？」

「...なーんてね。正直言って、生活するのに精一杯でさ、恋愛どころじゃないって」

勇斗はアハハと笑って、赤く色づいたティッシュを祐輔の胸に向かって投げた。

「ボクに遠慮することないじゃん。麻耶ちゃんはゆうちゃんのことを好きなんだろ？そりゃ、麻耶ちゃんをお嫁にしたいなんて本気で思ってたこともあったけど、あれももう高校の頃の話だしね。ふたりの気持ちがまとまってるのにボクの出る幕なんかないでしょ？」

「...それはそうだけど...」

と、祐輔は投げつけられたティッシュを側のゴミ箱に入れる。

「ゆうちゃん、律儀すぎっ！そんなんじゃこの先、麻耶ちゃんを苦しめちゃうかもしれないよ。もっと気楽になれよ！麻耶ちゃんを泣かしたら...、」

――許さねえ...。

と、祐輔を睨みつけた勇斗の目は鋭く光り真剣だった。

「...大久保」

背筋に冷たいものが走り、思わず生唾を飲み込んだ祐輔だ。

「...ゆうちゃんたら...、こんなに食料買い込んでさあ...。そんなに気を使わなくてよかったのに...」

勇斗は呟いた。

<3>

――麻耶ちゃん、オイラのお嫁さんになってよ！

――ええ!？

――だって、オイラはかわいいお嫁さんが欲しくて麻耶ちゃんはかわいいお嫁さんになりたい

んでしょ？ちょうどいいじゃない？

――だからって相手が誰でもいいなんて言ってないでしょうが！私もあんたも！

――誰でもよくないよ。オイラは麻耶ちゃんがいいんだ。

――麻耶ちゃんがいいんだ……。

麻耶がよかった。

あの頃は本当にそう思っていた。

普通のサラリーマンをやって、普通の女の子と結婚して、普通の家庭を持つのが小学生の時から思い描いていた夢だった。自分の横でエプロンをかけて笑う可愛い妻に麻耶を重ね始めたのは高校1年の時。けれど、そういう自分が照れくさくて色々な女の子に目移りしてちょっかい出しているように見せかけていた。

高校3年の秋。

上野のガーデンカフェにみんなが集まり、あの爆弾発言をしてしまった時、祐輔の顔が一瞬引きつったのを勇斗は見逃していなかった。幼稚園の頃から見ている祐輔の、困った時にする顔。それまではもちろん、祐輔の想いには気がつかなかったけれど……。

――…ボクもゆうちゃんと同じさ。

わかってしまった祐輔の秘めた想いを気遣って、麻耶にはあの時限りあれ以上のことは言えなかった。

だから、麻耶と祐輔が付き合っていると聞いてもたいして驚きはしなかった。もう、随分前からどこかで覚悟をしていたから。

――麻耶ちゃん、オイラのお嫁さんになってよ！

もうあれは過去の話。

今は本当に…、毎日を生きていくのが精一杯。

本当、に…。

「…ゆうちゃんさ、マジで律儀すぎだよ。麻耶ちゃんを2年半も待たせちゃったなんてさあ…」

でも、爆弾発言だけしてその後何もしなかったボクに責任あるよな。

ごめんな、ふたり…。

祐輔が持ってきた食料のほとんどを勢いで食べつくし、勇斗は畳に大の字になって転がった。窓は全開だと言うのに微風すら入ってこない蒸し暑い夜。

今夜はきっと熱帯夜だろう。

ふと目を閉じたとき、どこからか甘い香りが漂ってくることに勇斗は気がついた。起き上がって周りを見ると、さっき美香の髪を飾っていたジャスミンがちゃぶ台の上に無造作に置かれたままだった。

みかんのような下ぶくれの美香が、白い花を髪にさしてくるっと回ってみせた姿を思い出し、勇斗は思わず笑いが込み上げてきた。

「何なんだよなあいつ。子どものくせにませたこと言っちゃってさ。勇斗くんなんて大っキライときたもんだ。ついこの間までは勇斗くんのお嫁さんになってあげてもいいよなんて可愛いこと言ってたくせにさあ」

勇斗は花に語りかけながらガラスのコップに水を入れ、白いジャスミンを挿して窓辺の机に飾る。

「こーやって飾ると、なーんもないこの部屋もちっとはよく見えるねえ？」

部屋に花なんて飾ったのは初めてだ。

勇斗はいつまでも窓辺の白いジャスミンを見つめながら、心のどこかで吹く隙間風を感じていた。

< 4 >

思ったとおり、その夜は熱帯夜だった。扇風機を回していても汗はジトジトと全身を濡らす。身体は疲労の極致にいるのに、なかなか寝付けずに勇斗は何度も寝返りを繰り返した。

半分朦朧とした意識の中に浮かんでくるのは高校時代の麻耶、ヒカル、あかねに颯土、祐輔と自分の顔。

あかねを自転車の後ろに乗せて駅まで送っていた颯土、`ヒビク先輩、を想っていたヒカル、剣道に夢中だった祐輔と麻耶、そして女の子を追いかけてながらいつも麻耶を見ていた自分――。

あかねは田村と結婚し、ヒカルは響と3年半ぶりの再会を果たした後ボストンに発ち、颯土は...、そして祐輔と麻耶は...

2年半も経てばみんな変わって当たり前だが、時々想うのは、

あの頃のままの自分たちに会いたい――。

わいわい騒いでふざけて怒られて、それでも充実した毎日が過ぎていた頃の自分たち。

家を出て今の生き方を選んだことを悔やんでいるわけじゃないけれど、生きていくことの重さ

に埋もれて、ふと我に返った時に無性に人を恋しく思う。

そんな時は、ひとりであることがたまらなくなる――。

ひとりであることが――。

「ん...」

もう一度寝返りをうった時だった。

――リン...。

どこか遠くでガラスがぶつかり合うような微かな音が聞こえた。

いや、微かな音だとわかっているのに、耳の中では大きく響いた音。

眠りの向こう側に行こうとしていた意識が途中で引き戻されたのを自分で感じた勇斗だ。

その途端、得体の知れない寒気が全身を襲った。

――なにか、いる――。

全開の窓の側に気配を感じる。

身体は反対の壁側に向いているのに、そこにいるモノが、白い服を着た何か、だということがわかる。

――うわわわ...、

神さま、仏さま、閻魔さま...、どうかどうか助けてください！

ボクはオカルト、オバケ、ミステリー関係はダメダメダメなんだぁ...！

心の中で呪文のように唱えながら、勇斗は恐る恐る顔を窓の方に向けた。

「.....ひっ！」

思わず声が出た。

窓の側には確かに白い服を着たモノが佇んでいた。

勇斗が出したうめき声に気がついたのか、白い服のモノはゆっくりゆっくり顔をこちら側に向ける。

「ちょっと待って、勘弁して！ストップ、ストップ！」

わざと大きな声を出し、白い服のモノが完全にこっちを向く前に、勇斗はアパートを飛び出していた。

真夜中の道を夢中で走り、気がついてみると颯土の家まで来ていた。見上げた颯土の部屋の窓にはまだ明かりがついている。

「群竹ちゃん、群竹ちゃん...っ！」

なるべく小さな声で囁くように窓に向かって声を出すと、

「...誰だ？」

窓が開き、顔を出した颯土が暗闇の中を探るようにして見下ろした。

「ボク、ボク」

勇斗は大きく手を振る。

「大久保？こんな夜中にどうしたんだよ...？」

「助けてくれよ、群竹ちゃん...。ボクの部屋に出たんだよお」

「出た？ゴキブリでも出たのか？」

「...こんな時にボケないでくれよお」

「ま、とりあえず上がれよ。今、下開けるから」

颯土は一旦窓から消え、すぐに玄関のドアが開いた。

「...それ、寝ぼけてたんじゃねえの...？」

勇斗の話聞いた颯土は呆れたように言った。

「違う違う。間違いないんだよ。だってボク寝てないもん。暑くて眠れなかったから」

勇斗は必死に訴える。

「ボクの部屋になんかが憑りついてるんだよお...」

「まさか...」

颯土は呟いた。

「今まで何でもなかったんだろ？」

「そうだけどさあ...。とにかく、今夜はここに泊めてくれ～」

そう言って、勇斗は座布団を頭から被った。

「...しょうがねえなあ。まあ、お前には借りがあるから、な...」

「ボク、なんか貸したっけ？」

頭に座布団を乗せたまま、へ？と自分を見つめる勇斗に、

「...いや」

と、颯土は苦笑し、

「と、とにかく今夜はここに泊まって明日トメさんに訊いてみるよ」

と、開いていたカーテンを閉めた。その時に、一瞬だけ向かいあっている向こう側の真っ暗な窓を見つめて。

「うん。そうする...」

勇斗もようやく落ち着いて、座布団を頭から下ろした。

部屋の時計は午前1時を回っていた。

明日は勇斗も颯土も通常の仕事が待っている。

「群竹ちゃんも随分な夜更かしだな。まあ、そのおかげでボクは助かったけど」

「.....」

颯土は下から持ってきた缶ビールの本を勇斗に渡した。

「...さんきゅ。はあ...、ビールはあかねちゃんの結婚式以来だあ」

勇斗はありがたいものを拝むようにして缶を開けた。

「あのあとさ、やっぱり麻耶ちゃんとゆうちゃん、まとまったらしい...」

「...そうか」

ビールを開けながら颯土は答えた。

「別にいいんだけど、さ」

「...よくないくせに、無理すんなよ」

と、颯土は笑う。

同じ台詞をついこの間、自分は颯土に言ったばかりだった。

——群竹ちゃんさ、無理すんなよな。

——俺が何を無理してるんだよ...

「...しょーがないじゃん。無理してでも何でも諦めるしかないだろ？」

と、勇斗は答えた。

颯土は手の中の缶ビールをじっと見つめながら、

「...そう。諦めるしかないんだよ」

と、呟く。

「実際その時を目の前にすると、なかなか...だけどね」

「...確かに、な」

前髪の間から覗く颯土の真っ黒な瞳が、どこか、迷子になった子どものようだ。

「...ヒカルちゃん、行っちゃったな」

勇斗はカーテンの向こうのヒカルの部屋を透かして見るようにして呟いた。

颯土はひと呼吸を置いてから、

「...ああ」

と、答えて煙草に火をつけた。

——あの時の群竹ちゃんの気持ちがよくわかる。きっとボクも今、同じ目をしてるだろうな...

。

「痛いねえ...」

勇斗は自分の胸をキューッと押さえて呟いた。

「痛いなあ...」

颯土も同じポーズで呟いてから苦い笑いを浮かべる。

「群竹ちゃんはどうやって諦める...?」

「...わからない。諦められるのかもわからない。けど...、」

「けど...?」

泣いた。

「これでもかってぐらい」

そう言って颯土は少し困惑したように微笑んだ。

「群竹ちゃんが...泣いたか」

「ああ。泣いた」

颯土は短く言うと、ぐびぐびとビールを喉の奥に流し込み、

「そろそろ寝るぞ。明日も仕事あるし」

と、空いた缶をゴミ箱に投げて明かりを消す。

「ああ、そうだね」

——...ボクは涙と本音を笑いの下に隠すしかないんだよな。いつか、勝手に癒える日がくるまで、さ...

「この部屋、涼しくて気持ちいいなあ...。久々に熟睡できそう。オバケに感謝した方がいいみたいだ！おやすみ」

勇斗はベッドの下の床に座布団を敷いて転がり、颯土が投げしてくれたタオルケットにくるまった。

< 6 >

翌朝勇斗は颯土の部屋を早く出て、そのまま大家のトメの家に向かった。稲葉家はちょうど朝食の最中で、トメが、

「あんたも一緒に食べていきなっせ！」

と、言うものだから、その言葉に甘えて勇斗は食卓についた。

「だからさあ、ほんとなんだってば...」

昨夜見たものを勇斗がトメに訴えると、

「そんなバカな話しがあるものかい。あの部屋に亡霊が憑りついてるなんて」

と、簡単に一蹴された。

「昔なんかなかったあ？自殺とか他殺とかさあ」

「ないない」

「じゃあ、アパートが建つ前のあの土地がお墓だったとか」

「あそこはずっと畑だった土地。戦争中も戦後も」

「じゃあ...、」

「勇斗くん、寝ぼけてたんだよきっと」

朝食が終わり、セーラー服のリボンを襟に通しながらの美香が言った。

「それはないんだってば...」

「昨夜は暑かったから頭が変になってたとか」

「頭が変って...、みかんちゃん、そりゃキツイでしょ」

勇斗が苦情を言うと、美香は、ふんっ と顔を背けた。

「あれ、まだ何か怒ってる...？」

「べつに」

残しておいた牛乳をゴクゴクと飲み干した美香は、

「じゃ、行ってきまーす！」

と、身を翻して玄関に向かう。

「そういや、夏休みじゃないの？」

「夏期講習」

「やべっ、ボクも時間だよ。じゃ、途中まで一緒に行こうよ、ね？朝ごはんごちそうさま！」

勇斗は最後に玉子焼きをひとつ口の中に放り込んでから立ち上がり、美香を追いかけた。

「べつにいいけど...」

「じゃ、ボクちょっと支度するから部屋の前で待っててよ」

勇斗は美香を連れて自室に戻り、身を縮ませながら恐る恐るドアを開けた。

「勇斗くん、何やってるの？」

後ろから美香に声をかけられ、

「ひゃっ！」

と、飛び上がる。

「わかった。怖いんだあ...。コドモだなあ...」

「ボクはオカルト関係ダメなの！」

「ひとりで部屋に戻れないから私...ってわけだあ？」

——う...、凶星。

勇斗はつまり、

「そ、そんなことはないさ...」

と、頭をかいた。

「どーだか...？私が先に入ってあげるよ！」

美香は勇斗を押し分け、先に部屋の中に入った。

けれど、すぐに凍りつき、

「ち...、血だあああっ！！」

と、叫んで勇斗にしがみついた。

「ち、血いいいいい！？」

勇斗は飛び上がり、玄関先でふたりは抱き合いながら大騒ぎ。

「血、どこ、血い？！」

「あ、あそこ！」

美香が指差す場所を慄きながら見た勇斗は、

「あ...、ありゃトマトだよ...」

と、胸をなでおろした。昨夜、手から滑り落ちたトマトで汚した畳が赤く染みになっていた。

「へ？トマトなの...？」

勇斗にしがみついたままの美香が放心したまま言う。

「うん。だからそろそろ離して？これじゃボクちゃん動けないから」

木登りをする子どものように、足までを勇斗に絡ませていた美香は、

「ご、ごめーん...」

と、真っ赤になって勇斗を解放した。

「いえいえ～。みかんちゃんも案外怖がりなのね」

勇斗は笑い、やっと支度に取り掛かる。

「...やっぱり部屋の中は変なことは何もないよ。勇斗くん、絶対に寝ぼけてただけだよ」

美香は殺風景な部屋を見回しながら言った。

「...そうだなあ。考えてみれば今どき白い服のオバケっていうのも現実的じゃないしなあ...」

と、勇斗も納得するしかなかった。

「あれ？あのジャスミン...」

窓辺の机の上で、ガラスのコップに挿された白い花を指差して美香は呟いた。

「ああ、これ昨日みかんちゃんが落としたやつ」

勇斗はコップを手に取りながら言った。

「挿してくれたんだ...」

「いい匂いだしね。返そうか？」

「...ううん、いいよ。ずっとそこに挿しててあげて」

何故か頬を赤く染めて美香は言う。

「そう？じゃあこのままらっとくね」

勇斗がコップの水を取替えるのを待ってから、

「それじゃ出発！」

と、美香は先に部屋を出た。勇斗が窓辺を振り返ると、コップの中のジャスミンが生を取り戻したかのように膨らんで見えた。

<7>

熱帯夜――。

――リン…。

昨夜と同じ、ガラスがぶつかるような微かな音が耳の中で響き勇斗は両目をカッと見開いた。冷たい汗が首筋から背中をツーツと伝う。音がした直後から、もう窓辺には昨日と同じ白い服のモノが存在しているのがわかる。

――ちょっと待って、ちょっと待って。

この部屋で死んだ人はいないって、ここは墓場でもなかったってトメさんは言ってたぞ。

だから、あの白いモノはオバケなんかじゃないはずだ。

ボクが寝ぼけてるだけなんだ。

勇斗は自分の頬をぎゅっつつねった。

――痛いしい……っ！

思いっきり痛いじゃないかっ！

ってことは、アレはなんなんだよおおお。

あまりの暑さにタオルケットなんてかけていなかった。

畳の上にただ転がり素をさらけ出してしまっている自分。

何かに潜り込んで隠れたくても隠れるところがない。身体を出来る限り丸くして膝を抱え、ただ震えるしかない。

スーッと風が通った時、ふんわりとした甘い匂いに鼻をくすぐられた。

窓辺の机のジャスミンの香りだ。

ふと、顔を上げてゆっくりと窓辺を振り向くと…、

「…麻耶ちゃん？」

勇斗は目をこすってもう一度見直した。

白い服のモノは開いた窓辺に佇み勇斗を見つめていた。

顔はぼんやりと霞んでいるけれど、微かな風に揺れる黒髪が麻耶に似ていた。

何も言わず、動こうともせず、ただじっと勇斗を見つめて微笑んでいる、ように感じる。

恐怖が消えていった。

ジャスミンの妖精――。

勇斗は心の中で呟いた。

――これはきっと、オレの本音が投影されているんだ。高1の頃から思い描いていた未来の形が今――。

――麻耶ちゃん、オイラのお嫁さんになってよ！

冗談で言ったわけじゃないあの言葉。

――麻耶ちゃんがいいんだ。

本気で言ったあの言葉。

――けど、さ。しょーがないじゃん。こればかりはどーにもなんないじゃん。喉から手が出るほど欲しくたって、手にいれることはできないじゃん…。

だから、おちゃらけるしかないだろ…？涙を笑いの下に隠すしかないじゃないか。

――ジャスミン…みたいだよな、麻耶ちゃんは。色白で可憐で優美で、さ。甘い香りとキリッとした凛々しさがあってさ…。

――……オバケでも妖精でも何でもいい。そうやってそこにいてくれれば。オレをひとりにしないでくれれば…。

つーっと涙が頬を伝った。

一度解禁された感情はもう止まらない。

甘いジャスミンの香りに抱きしめられたまま、声を殺し、丸くなり、肩を震わし泣いた。

これでもか、というぐらいに――。

< 8 >

祐輔が持ってきてくれた食料も既につき財布の中身も底をつき、冷蔵庫の中は.....

「なんで...？」

勇斗は冷蔵庫の扉をあけたまま放心していた。

最後のキャベツを昨夜食べ切ってしまい、今日はもう空っぽになっているはずの冷蔵庫の中でチーズケーキがふたつ皿に乗っていた。

「いつ、買ってきたんだっけ？」

覚えてなかった。

昨夜は泣きに泣いてそのまま眠ってしまい、涙の塊が喉元に詰まったまま今日は一日ぼんやりと仕事をして今帰ったばかり。

買ってきた、給料日までの4日分の食べぶちキャベツを一個、冷蔵庫に収めようとしてびっくり、というわけだ。

「うちの皿だよな、これ...」

と、勇斗はチーズケーキを手にとって見る。

「...うちの冷蔵庫の中にあるうちの皿に乗ったチーズケーキなんだからうちの皿だよなあ？」

勇斗はさっそくひとつにかじりつき、

「うまっ！」

と、満足気に笑った。

今朝は時間がなくて替えられなかったジャスミンの水を替え、再び机に戻すとまた花が膨らんだように見えた。

「そーかそーか。キミも腹ペコだったんだな」

花に向かって独り言を言っている自分が少しせつない。けれど、どこかで癒されているのも確かだ。

「昨夜のあれは、いやその前のも、キミ...？」

そう言葉に出してその瞬間に我に返り、

「ボク、頭がおかしくなっちゃったみたいだ...」

と、首を振る。

けれど、その夜も次の夜もジャスミンの妖精はただそこで微笑むために現れ、冷蔵庫の中では毎日違ったケーキがふたつずつ皿に乗っていた。

3日目の夜一一。

その日も熱帯夜だった。

いつものように窓を開け放ち、畳の上に転がりながらもう少しで眠りに落ちそうになった時、

――リン…。

音がして勇斗は起き上がった。

もう、怖いとは思わない。

それどころか心が躍る。

自分の想いが投影された幻であることは重々承知している。

現実でないことは最初からわかっている。

けれど、ケーキは本物で、お腹も心も満たされ癒されている。

幻想ならそれでいい。そうじゃなかったとしたらそれもいい。

けれど、今夜は――。

勇斗は薄暗い部屋の中を、ゆっくりと窓辺に近付いた。

うすぼんやりとした白い光の中で自分を見つめて微笑むジャスミンの妖精の顔を見たい。

今夜は熱帯夜には変わりがないが風がある。

窓の外からちょうどいい風が部屋の中に流れこみ、ふんわりとした甘い香りがいつになくずっと漂っている。

「……キミは？」

勇斗が声を出すと、ジャスミンの妖精は勇斗に顔を向けた。

はじめて見る妖精の顔――。

麻耶に似ているようで麻耶じゃない。

知っているようで知らない顔。

知らないようで、よく知っている顔…。

どれが正しいのかわからない。

ただ、寂しそうに優しく微笑んで勇斗を見つめていた。

麻耶のようでそうじゃなくて知っているようで知らないジャスミンの妖精を、今はとにかく両手で抱きしめたかった。

どうしてだかわからないけれど、力いっぱい抱きしめたいと思った。

ゆっくりと手を伸ばし、指の先が白い影に触れようとした時、金縛りにあったようにそこから

動けなくなった。

風が運ぶ甘い香りの中で意識の限界を感じる。

ふと、気がついた時にはもう、窓の外は明るくなり妖精の姿も消えていた――。

< 9 >

やっと手にした今月分の給料。

これでしばらくキャベツともおさらばだ。

この1週間、まともに食べていない眠っていないで、さすがの勇斗もふわふわ宙に浮いたような感覚に襲われ、街の雑踏に酔ってしまいそうだった。

陽射しは相変わらずだが、今日はいつもよりは暑さも和らぎ、今夜は久しぶりに熱帯夜から開放されそうだ。給料も入ったことだし、美味しいものを食べてゆっくり寝よう、と思いながら、勇斗は次のバイト先の居酒屋に向かって街の中を歩いていた。

――リン…。

聞き覚えのある音が、街のざわめきの中でもはっきりと聞こえ、勇斗は立ち止まった。道の真ん中で立ち止まる勇斗の横を、急ぎ足の人々が次々と追い越していく。

勇斗はあたりを見回した。

けれど、いない――。

「…いるわけじゃないか。あれはボクの幻想…」

首を激しく振りながら呟いた時だ。

サーーーッと空気と空間が迫ってくる感覚に陥り、その衝撃から身を守るために腕を前に出して遮った時だ。

少し遠くの目の前に、白い服のジャスミンの妖精が立っていた。

――……なんで？

勇斗は眼をこすってもう一度見る。

静止画のようにして止まっていた周囲が動き出しても、妖精は消えずにそこにいた。

じっと佇み微笑みやがて右手を小さく上げてゆっくりと手を振る。
まるでさよならの時のように。

――なんで？

もう一度同じ言葉を繰り返した時、勇斗は気がついた。

――.....もしかして！？

バイトはいい。
それよりも確かめなきゃ...！

歩く方向を転換して駅に向かう。
アパートに帰る。

――ジャスミンの花が...っ。

部屋に飛び込んだ時、まさきに目に入れたのは窓辺のジャスミンだ。
思ったとおり、花は萎れ真っ白だったその姿は薄い灰色に変わっていた。
「ああ...やっぱり...！」

今朝はちゃんと水を替えたはずなのに...！
勇斗は萎れた花を手のひらに乗せた。
さっき街で見たモノはやっぱりジャスミンの妖精だったのか。
いや、今までのも全て幻想なんかじゃなく――。

ケーキも彼女が――。
腹ペコで心もペチャンコで全部が潰れかけてたボクを癒すためだけに現れてくれたボクの妖
精――。

ジャスミンの....
ジャスミンの.....。

カチャカチャと、ドアの鍵が回る音がして勇斗はギクリとして振り返った。
鍵を回してる人物は一旦ドアを引き、閉めてしまったことに気がついてもう一度鍵を回してか
らドアを開けた。

目を見開いてドアを見つめている勇斗と、鍵を開けて入ってきた美香の目が空中でぶつかり、

ふたりは互いにしばらく息を呑んで固まっていた。

「みかんちゃん、どうした...の？」

ずいぶんたってから口を開いたのは勇斗だ。

「.....勇斗くん、何でいるの？バイトの日...だよな？」

美香は勇斗の言葉には答えずに言った。

「...ちょっと、ね...」

と、勇斗は手のひらのジャスミンに視線を落とす。

「それ...」

「萎れちゃってさ...」

と、勇斗はため息を吐いた。

美香は勇斗の横に膝をつき、手のひらのジャスミンを覗き込み、

「よくもったね、このジャスミン。本当ならもっと早く萎れちゃうはずなのに」

と、言った。

「...そうなのか」

「きっと、勇斗くんが毎日いっぱい話しかけてあげてたんだね。だから、いっぱい咲きたかったんだよこの子」

「.....」

勇斗は肩を落とす。

「...花は枯れるものだよ？そんなにガッカリしないでよ」

「.....」

勇斗はまたため息を吐く。

「...出来るかどうかわからないけど、押し花にしてみようか？」

「え？本当に？」

「だから出来るかどうかわからないよ？やったことないもん。でも、捨てちゃうの可哀想だし...」

「捨てらんないよっ！」

今にも泣きそうな声で勇斗は叫んだ。

「はあ...」

と、今度は美香がため息を吐き、

「...勇斗くんこんなに愛されて幸せだな、この子。羨ましいよ...」

と呟いて笑った。

その横顔が、昨日見たジャスミンの妖精の顔と重なり、勇斗は息を呑んだ。

「みかん...ちゃん？」

思わず口に出して名を呼ぶと、

「ん？なに？」

と、顔を上げた美香はいつものちょっと下ぶくれの顔。

でも、色白でぽっちゃりしたあどけない顔も、大人になったらきっと……。

ふと、美香がさっきから持っているものに目をやった勇斗は、

「それ...？もしかして...？」

と、その駅前のケーキ屋の箱包みを手に取った。

「いつもケーキを冷蔵庫に入れてくれてたのはみかん...ちゃん？」

「え？あ、うん...」

美香は真っ赤になってうつむいた。

「どうして...？」

「...だって勇斗くん、毎日キャベツ食べてるっておばあちゃんから聞いたから...。この間お腹がぐーって鳴ってたし、本当なんだって思ったから...」

ほわっと心の中が温かく満たされた気がした。

真っ赤な顔をした美香は、それこそみかんのようだけれど。

「...ありがとう」

勇斗はそう言いながらケーキの箱を開けた。いつかと同じチーズケーキがふたつ入っていた。

「これ、うまかったなあ...」

「本当？」

「うん。最高だった」

「よかった。お小遣いはたいたかいがあったよ」

抱きしめたくて抱きしめられなかったジャスミンの妖精。

それはきっと……、

「美香...ちゃん」

「...はい？」

——5年後のキミを予約しておいてもいいかなあ？

そう言おうとして勇斗は言葉を飲み込んだ。

「今からお茶淹れるから一緒にこれ食べよう？」

「...うんっ！」

こんなに近くにいたジャスミンの妖精——。

あれはきっと、未来の美香の姿だったのかもしれない——。

「ねえ、勇斗くん？」

「ん？」

「ジャスミンの花ことば知ってる？」

「いや？」

「ユウビでカンノウテキ、っていうんだって」

「え！？ユウビでカンノウ...って...」

「フェロモン、びしばし出てたでしょ？」

「み、み、美香ちゃあ～ん.....、そんな言葉キミにはまだ似合わないよお」

――でも、確かに優美で官能的なジャスミンの妖精だったかも.....。

と、勇斗は赤面した。

未来のキミにまた会いたい。

今度は幻想じゃなくて現実で。

待ってるから。

その時はしっかり抱きしめるから。

ボクの妖精を――。

了

兄の傍で芝居が出来ればそれでいいと思っていた。

『上手だなあ、海！よくできたな！』

まだ「お兄ちゃん」と呼び、「海」と呼んでくれていた幼い頃、画用紙に描いた似顔絵を褒めてくれた声、そして笑顔が、離れ離れになってしまった兄の大切な思い出だったから、いつかもう一度、同じ笑顔で同じ言葉をかけてもらうことを自分の夢にしてきた。

『最高だ、海！上出来だったぞ！』

再会以来、ずっと「石渡」としか呼んでくれなかった兄が、ニューヨーク芸術祭での公演の後には再び「海」と呼ぶようになり、劇団員の皆がいないところでは優しい笑顔も向けてくれるようになった。役者としても妹としても最高だと、兄に認めてもらいたいと願い続けていた夢が叶ったのだ。

実の兄妹でも兄に対する想いは恋い慕うそれと変わりなかったかもしれない。兄が自分に笑ってくれれば、海と名前と呼んでくれれば、他に望むものなどないと思っていたのに――。

「ああもう！いったい何だっていうんだ、ちくしょう！」

「何って...、だからヒカルちゃんからこんなエアメールが来て、俺ショックでさ...」

目の前でへたれているこの男は中川亮太。

ヒカルから届いたボストンからのエアメールをテーブルの上に投げ出して、さっきからは一はため息ばかりついている。

同じ敷地内の短大と大学に通い始めたことが縁で出会ってからもうすぐ3年になるが、亮太の心の中は出会った当初からヒカルでいっぱいだった。だがヒカルの方は別の人を一途に想っていたため、亮太がどんなに後を追いかけても結果はフラレるだけ。それでもめげることを知らずにひたすら求愛を繰り返す亮太をからかったりたしなめたりするのが自分の役目、というのは今も昔も変わらないのだが――。

「そうじゃない！」

亮太が稽古場に遊びに来るのは珍しいことではない。今日もふらりとやってきて、ヒカルから届いたというエアメールを見せてよこした。ヒカルは夏休みを利用して海外旅行に出かけたらしく、数日前に同じものが自分のところにも届いていた。その行き先がボストンであったということが亮太を落ち込ませている原因であるらしい。

「じゃあ、`何だっていうんだちくしょう、は何なんだよ？」

亮太は紙コップの珈琲をずずずと音を立てながらすすり、再びため息をついた。

「分からない！けどイライラすんだよ」

「まさか海ちゃん...、俺と同じってわけ？ヒカルちゃんからのエアメールを見て...」

「ばかか、お前」

「ばかって...」

ひどいな海ちゃん...、と亮太はますますしょぼくれた。

ヒカルはオレの女一。

そう公言しているとおり、ヒカルのことはもちろん友人として愛している。ヒカルの幸せを心から願ってもいるから、ボストンからのエアメールが届いたときは、`やったな、ヒカル！、と、ハガキに向かって言葉が出てしまったぐらいだ。だから、このイライラは亮太と同じ理由から来るものではないはずだ。

「海、煙草持ってたら一本くれないか？」

かちゃり、と休憩室のドアが開き、兄の鮫島がツカツカと入ってきた。

「お、中川くん来てたの？」

「お邪魔してます」

海は兄に煙草を箱ごと無言で手渡し、鮫島は抜き取った一本に火をつけてから亮太に言った。

「ヒカルさんは元気？最近はあるここにも来てくれなくて寂しいよ」

「ヒカルちゃんは俺の手の届かないところに行っちゃいました...」

「え？中川くんの？」

鮫島が煙草の箱を海に返しながらかける。

「はい...。とおーいところへ...」

ふたりのやりとりを聞きながら、鮫島の手からやや乱暴に煙草の箱を取り返した海は、

「最初からお前の手なんかぜんっぜん届いてないだろ！いいかげんにしろよ、亮太！」

いきなり大声を上げて立ち上がった。

「う、海ちゃん...？」

「海...？」

同じように目玉を丸くした亮太と鮫島が、額に青い筋を浮き上がらせている海の顔をそっとのぞきこんだ。

怒鳴ってしまってからマズイとは思ったが、目の前にあるふたりの顔を見比べると、海はさらに自分でもわけが分からないイライラが増し、

「ああもう！何だっていうんだ、ちくしょう！」

以前の兄がよく目の前でやっていたようにパイプ椅子を蹴飛ばした。兄よりはずいぶんと控えめに、だが。

「機嫌悪いなあ、海」

鮫島はひっくり返った椅子に目を向け、人がやってるのを見るのは気分いいもんじゃないな、と小声で呟いた。そして心なしか急いで一本を吸い終え、亮太にはごゆっくり、と愛想のいい言葉をかけて休憩室を出て行ってしまった。

「ああー、びっくりした…。どうしたの海ちゃん？鮫島センセイの前であんな態度やって大丈夫なのかい？」

椅子をもとの位置に戻す亮太を見つめながら、さすがに蹴飛ばしたのはまずかったな、と海は思っていた。兄はきっと呆れただろうし、後で戒められるだろうとも思う。

だが、そのことを心配する以上に、今もまだ胸の中でこねまわっている感情が不快でたまらないのだ。

――これはいったい何なんだ？！

分からないから腹が立つ。

自分自身にイラつく。

「けど、さっきはひどかったよ？最初から全然届いてないってさあ」

「ほんとのことだろーが」

そうだけどさあ、と膨れる亮太を見て海は言った。

「亮太、おまえ、ほんとヒカルのこと好きなわけ？」

「え？好きだよ？」

「なんで？」

「元気だし明るいし真っ直ぐだし」

言って亮太はニッコリと笑った。海は思わずふきだした。

「それ…、ヒカルがきいても苦笑すると思うぜ？」

「え？あ！もちろん、可愛いしさ！」

慌てて付け加える亮太に、海はまたさらにふきだした。

凜と立った向日葵のようなヒカルの真っ直ぐな元気と明るさには何度も助けられてきた。だから、亮太がヒカルを想う気持ちはよく分かる。分かるからこそ短大時代はそんなヒカルを独占していたのかもしれない。

――独占…？

前触れも無く、心の中で響いた小さな不協和音を意識の下に沈め、

「けどさ。ヒカルはもう、ヒビクセンパイのもんだ。諦めろよ、亮太」

海はテーブルに放り出されているハガキを手に取り、亮太の胸に突きつけた。

「分かってるよ。颯にも同じこと言われたし、海ちゃんがさっき言った、最初から手が届いてないってのも当たってるし…。たださ、なんていうのか…、」

亮太は頭の中で言葉を捜すように視線を天井に向けながら、ヒカルちゃんはいつまでもヒロインなんだよね…、と呟いた。

「なるほどね。分かるよそれ。オレにとってもそうかな」

「でしょ？」

さっきまでへたれてしょぼくれていた亮太だが、今はいつもの爽やかな笑顔を浮かべている。

――似てんな、ふたり…。

身の中に持っているもの、その中から感じるものが似ているヒカルと亮太。

海にとってそれは憧れに近い輝きであり、兄に抱いていた感情とは別のところにある `夢、の` ような――。

「まあね。俺はもうとっくに諦めているんだよ？いきなりハガキが届いてビックリしたのは本当だけとさ」

「はは。そのうち亮太だけのヒロインが現われるって！」

「俺だけのヒロインってどんな子だろう？」

「例えばオレとかさ」

海が言葉を発した後、数秒の場に似合わない静寂が流れた。

――え…？

まったく無意識に発してしまった言葉だった。が、心の中でカチッと何かはまる感触があった。

「海…ちゃんが…ヒロ…イン？」

呆然としたまま固まっていた亮太の顔に、突如ぼわっと火がついた。

「な、何バカみたいに赤くなってんだよ、亮太…！」

「な、なんでだろ？え？ほんと、なんでだろ？！」

落ち着きを失くした亮太は、休憩室の中を無意味におろおろ歩き回る。

――マ、マジ…？

まさか自分がこいつを…、亮太を……？

亮太の前でヒカルを独占しようとしていたのも、公演の座席をわざと端と端に取ったことも、ヒカルをしつこい亮太から守るためじゃなく…、

――嫉妬ってやつだった...とか？

今日のこのわけの分からないイライラは、いつまでもヒカルヒカル言っている亮太に対して爆発してしまった想いの集約...だとでもいうのか。

兄への想いにも勝るほど、この自分が亮太を？

石渡海が中川亮太を？

「ありえない！！」

「...え?!何がどうしたの、海ちゃん?!」

「こんなのは...」

――一生の不覚だ...っ！

気づいてしまった自分の想いに、頭を抱えるしかない海だった。

了

きみにとどくまで 5 Gracile & Fermata

<http://p.booklog.jp/book/79058>

著者：笹竹颯夜

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/souya610/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/79058>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/79058>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ